

图97 大溝1出土磨製石器(1)

東側のI区と違って大がかりな印象は感じられない。

検出された部分は、最大で延長約40m、幅1～5m、深さ0.4～0.8mを測る。肩部から底にかけては、黄褐色粘質シルトを主体とする層であり、底付近には礫を含む。その上は、褐灰色砂混じりシルトや暗オリーブ褐色砂まじり粘土層で、径5cm以下の小礫を含む。上層は、黄褐色粘質シルトが主体で、にぶい黄褐色シルトが混じる。人為的に埋められた層であり、礫や土器を多く含んでいる。底部付近で主に

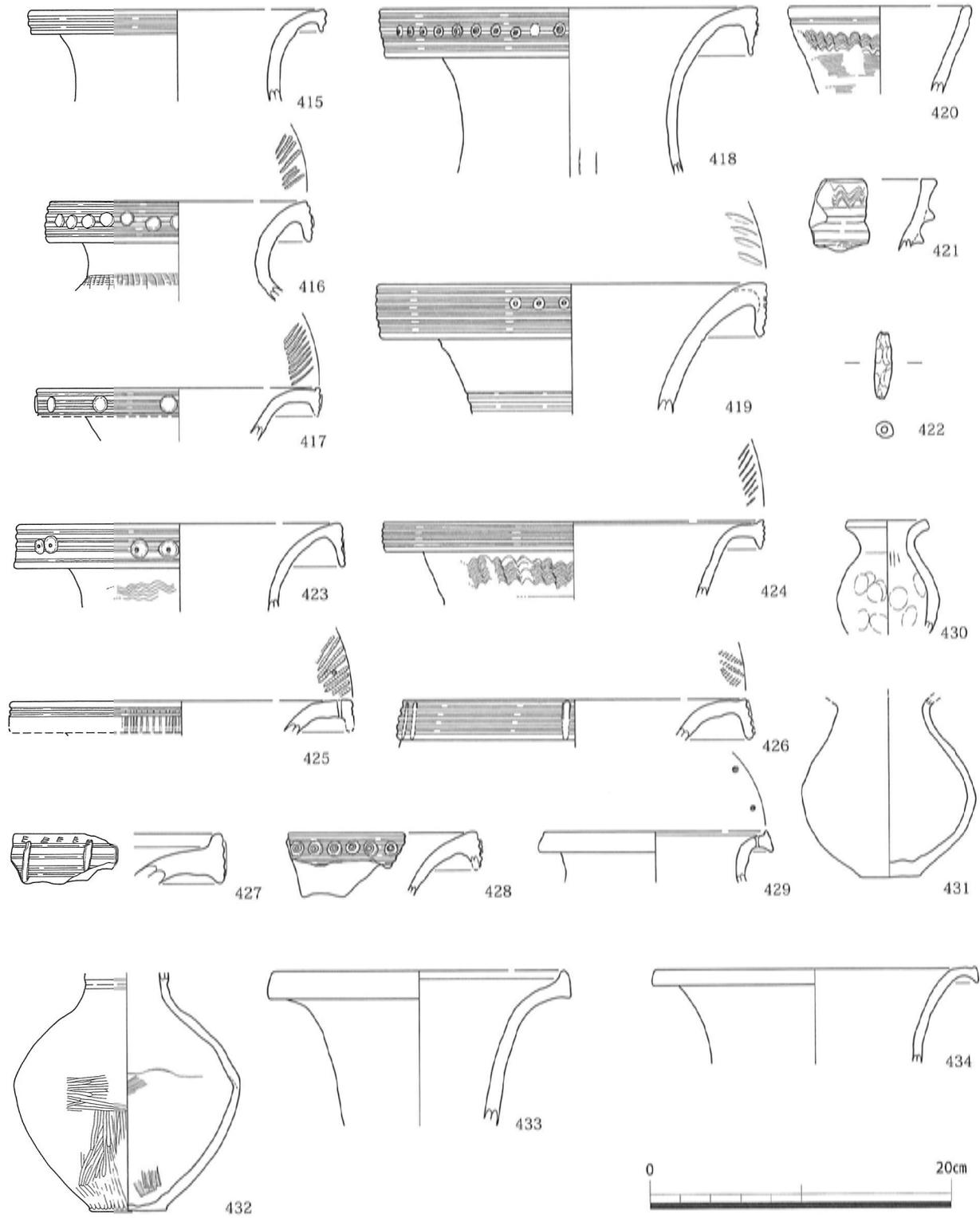


図98 大溝1出土土器(5)

粘土が堆積しており、当初は流れの弱い水たまり状態であったといえる。砂を含む層も見られることから、ある程度の流れがあった時期も存在したといえる。このため、この部分での土層観察でも、G区南端部やI区の見解と同様に、大溝1は当初流れの弱い状況であったが、その後ある程度の流れをもった流路であったといえる。

上層から、多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。ここでも、遺物量のわりには、完形になるものが少ない。この部分で出土した弥生土器を図98～100に示す。主に中・下層から出土したものであるが、上層には後世の整地がおよんでいる部分があるため、ここからは除外している。

図98-415は、壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は肥厚しており、外面に凹線が巡る。416は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、円形浮文が連続して付けられている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部には簾状文が巡っている。417は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、円形浮文が間隔をあけて連続して付けられている。口縁部内面には、斜

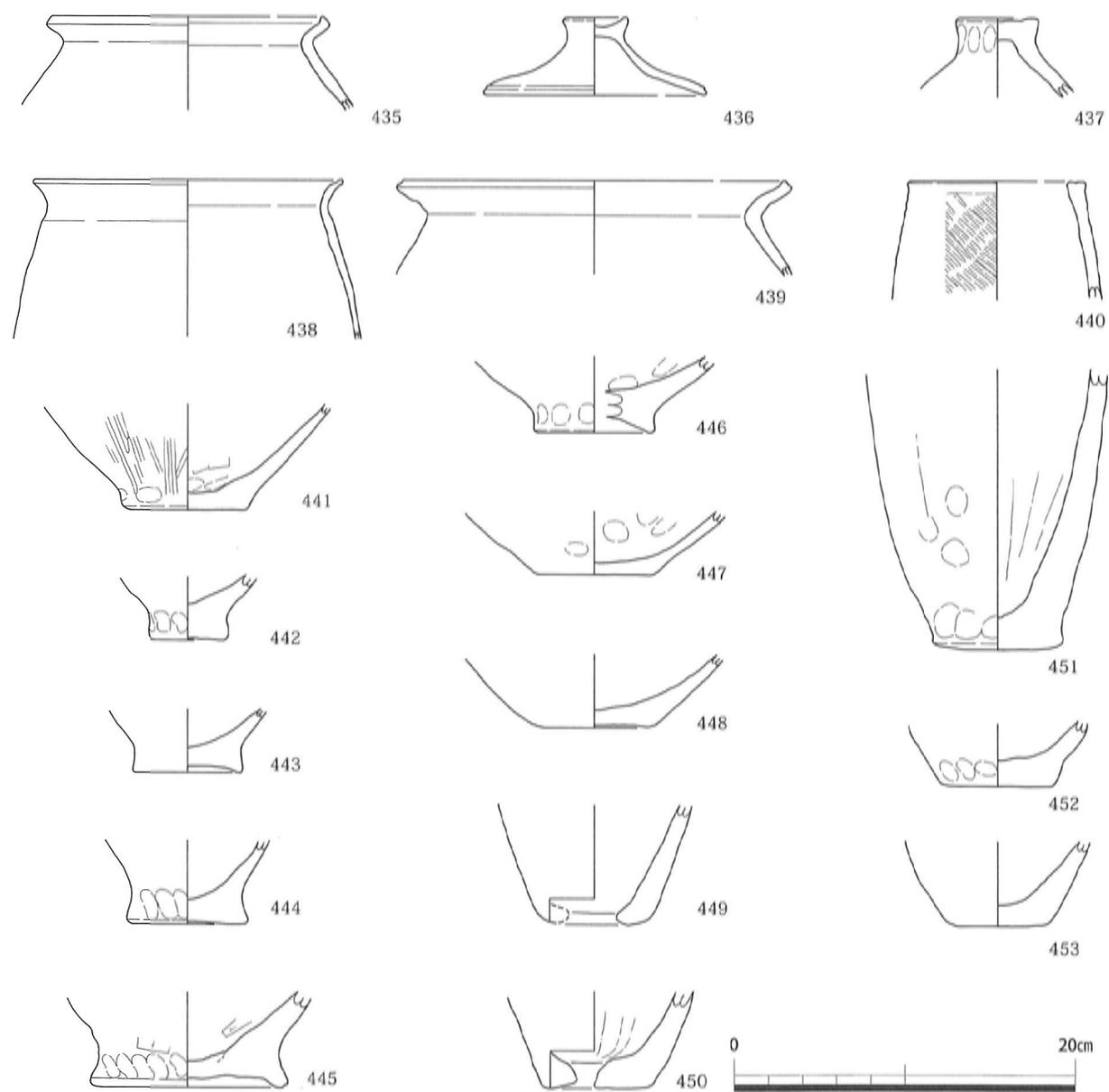


図99 大溝1出土土器(6)

め方向の刺突文が施されている。418は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文が連続して付けられている。419は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文が3点1組で付けられている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部には、凹線が巡る。420は、壺の口縁部である。口縁部外面の上部には、凹線が巡っている。その下には波状文と直線文が交互に巡っている。421は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が2条巡っている。口縁部上端には波状文が巡る。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。422は、管状土錘である。確実に弥生時代のものとは断定できないが、出土遺物の中に後世の混入品は見られないため、弥生時代の遺物と考える。423は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文が2点1組で付けられている。頸部には波状文が巡る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。424は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。口縁部の下には、波状文が巡る。425は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付けられている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されているほか、紐孔があげられている。426は、壺の口縁部である。口縁端部を開き気味に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、棒状浮文が付けられている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。427は、壺の口縁部である。口縁端部は断面T字状につまみあげており、外面に凹線が巡る。

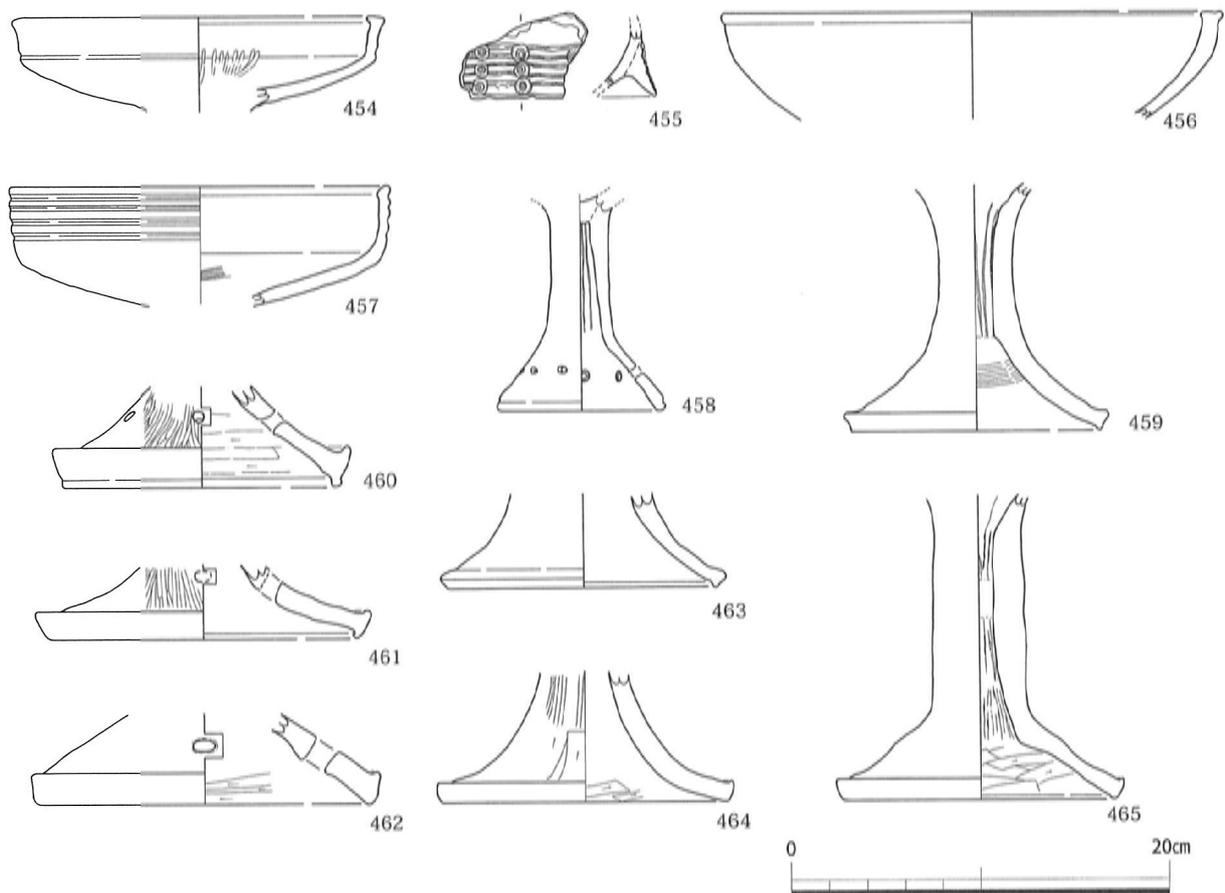


図100 大溝1出土土器(7)

凹線の上には、棒状浮文が付けられている。428は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文が連続して付けられている。429は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げており、口縁部内面には紐孔があげられている。430は、ミニチュア土器の壺で、底部を欠損している。体部の内外面に指頭圧痕が見られる。431は、小型の壺で、口縁部を欠損している。432は、壺で、口縁部を欠損している。頸部に凹線が巡っている。胴部最大径付近の外面には、横方向のヘラミガキ調整が施されている。さらに下半部には、縦方向の密なヘラミガキ調整が見られる。内面の下半部には、縦方向のハケ調整が見られる。433は、壺の口縁部である。口縁端部をやや上方方向に広げている。434は、壺の口縁部である。口縁端部をやや下方方向に広げている。

図99-435は、甕の口縁部である。口縁部は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部は肥厚しており、上方につまみあげられている。436は、甕の蓋である。口縁端部のすぐ上の外面に凹線が巡る。つまみ部の上端はへこんでいる。437は、甕の蓋である。つまみ部のみ残存しており、外面には指頭圧痕が見られる。438は、甕の上半部である。口縁部はゆるく外反しており、口縁端部は丸くおさまられている。外面に煤が付着している。一部、熱を受けて赤く変色している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。439は、甕の口縁部である。くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。440は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁は内湾しており、口縁端部は面をなしている。外面には斜め方向のタタキ調整が見られる。441は、壺の底部である。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が見られる。442は、甕の底部と考えられる。外面には指頭圧痕が見られる。内面は黒く焼けている。443は、壺の底部である。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。444は、甕の底部と考えられる。外面には指頭圧痕が見られる。外面に煤が付着しているほか、一部、熱を受けて赤く変色している。445は、甕の底部と考えられる。外面には指頭圧痕が見られる。底部内面に粘土を継ぎ足している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。446は、甕の底部と考えられる。内外面には指頭圧痕が見られる。447は、壺の底部である。内外面には指頭圧痕が見られる。448は、壺の底部である。表面が剥離しているため、調整は不明である。449は、甕の底部である。底部の中心部を焼成後に穿孔している。450は、甕の底部である。底部の中心部を焼成前に穿孔している。451は、真蛸壺形土器の下半部である。外面には指頭圧痕が見られる。452は、真蛸壺形土器の底部である。外面には指頭圧痕が見られる。外面の一部に煤が付着している。453は、真蛸壺形土器の底部である。表面が剥離しているため、調整は不明である。

図100-454は、高杯杯部である。脚部が欠損しており、杯部の底も失われている。受け口状の口縁部であり、外面の下端に凹線が巡る。口縁端部を肥厚させており、やや内面につまみあげられている。455は、複合鉢の鉢部である。鉢部の端部分にあたり、外面に水平方向の凹線が巡っている上に、竹管文を付した円形浮文が縦に3点一組で付けられている。456は、高杯杯部である。脚部が欠損しており、杯部の底も失われている。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、やや外側につまみあげられている。457は、高杯杯部である。受け口状の口縁部であり、口縁部の外面に凹線が施されている。一部、熱を受けて赤く変色している。胎土の特徴から、紀伊産に類似するが、片岩は含まれていない。458は、高杯脚部である。脚部はまっすぐ立ち上がっており、脚台部で屈曲して広がっている。脚台部には、透かし孔が一行に巡っている。459は、高杯脚部である。端部が大きく外反する。外面の一部に煤が付着している。熱を受けたためか、表面が荒れており、調整は不明である。460は、高杯脚台部である。端部を上方と下方に広げており、面を形成している。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されており、透かし孔を持つ。欠損後、蓋に転用されたものと考えられ、内面に煤が付着している。461は、高杯脚

台部である。端部を上方に広げており、面を形成している。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されており、透かし孔を持つ。462は、高杯脚台部である。端部を上方に広げており、面を形成している。透かし孔を持つ。463は、高杯脚台部である。端部をやや丸くおさめている。464は、高杯脚台部である。口縁端部を肥厚させて面を形成している。外面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。465は、高杯脚部である。脚部はまっすぐ立ち上がっており、脚台部で屈曲して広がっている。口縁端部を肥厚させて面を形成している。外面の一部に煤が付着しているほか、熱を受けて赤く変色している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

このほかに、石器類も出土している。図126-874は、スクレーパーである。刃部の一部が欠損しているほか、エッジの一部が摩滅している。875は、石槍である。石剣の可能性もある。先端部を欠損しており、基部の両側縁をすり落としている。基底部に自然面が残る。876は、凸基Ⅱ式の石鏃である。下部を欠損しており、先端部の両側縁が摩滅している。

K区南半部（図92、101～111、114、115、図版17、43～51、77）

K区南半部では、調査区を横断するかたちで大溝1を検出することができた。大溝1が東に回りこんでいく部分にあたり、南西から北東方向にのびている。I・J区で重複していた、近世から続く現代の水路は、約12m離れた部分につくられており、ここでは重複はなかった。このため、制約なく大溝1を横断するかたちで調査することができ、他の地区でなかなか全容がつかめなかったのに対し、ある程度のまとまった成果を上げることができた。

また、検出時には判別できなかったが、断面の土層観察により、南東部で大溝1の上部から掘り込んでいる別の遺構の存在が認められた。全体の形状ははっきりしないが、土層観察で確実に存在することがわかるため、大溝2と呼称することとする。部分的に中層まで掘り込んでいるが、大溝1の下層まで影響を及ぼすものではない。詳細は後述する。

J区と同様に削平や攪乱が著しく、I区に比べて遺構面のレベルが約1m低い状態で、J区とほぼ同じレベルである。ここでも、整地に伴う削平の規模が大きく、大溝1の上部はかなり失われているものといえる。検出面までの遺物包含層の堆積は比較的薄く、中世以降に大掛かりな整地がおこなわれたことがわかる。この部分では、締まった礫層の地山であることから、両肩部は比較的容易に検出することができた。検出状況からは、自然流路の形状をある程度残したまま、両肩部付近で人為的な成形をおこなない、つくられたものと考えられる。肩部は急な傾斜をつくっており、G区やI区の形状に似ている。攪乱や未調査部分がないため、横断面で埋土の堆積状況を観察することができた。大溝内から見ると、両側の検出面のレベルが下がっているため、比高差はあまり感じられず、東側のI区と違ってあまり大がかりな印象は感じられない。

K区の成果から見ると、弥生集落の遺構密集部と大溝1の間に約18mの距離があり、その部分では遺構が検出されていない。また、大溝1をはさんで北側には遺構の密集はなく、様相が異なっている。ただし、竪穴住居1がみられることから、完全に集落を区切るものとはいえない。大溝1の全体形状は不明であるが、集落を南北方向に調査したなかで、調査区を横切ることがないため、平面形が環状で集落を囲うことはないといえる。このため、大溝1を集落の環濠と考えることはできない。

K区で検出された部分は、最大で延長約13m、幅約8m、深さ0.7mを測る。肩部から底にかけては、にぶい褐色粘質シルトで、砂が混じる。中央部の底部は、褐灰色細砂を主体とする層であり、明黄褐色砂混じりシルトが部分的に堆積している。この砂層の上には、にぶい黄褐色砂混じりシルト層が厚く堆

積している。人為的に埋められた層であり、径8cm程度の礫や土器を多く含んでいる。ここでは、G区やI・J区で検出されている、底部付近の粘土層はあまり確認されていない。中央部の底部付近で、砂を主体とする層が厚く堆積していることから、ある程度の流れがあり、粘土層をえぐったものと考えられる。このため、この部分での土層観察でも、G区やI・J区の見解と同様に、大溝1は当初流れの弱い状況であったが、その後ある程度の流れをもった流路であったとすることができる。

中層から下層にかけて、多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。大溝1でもっとも遺物の出土量が多い部分であり、器種も多岐にわたることから、遺物の傾向を示しているといえる。遺物量のわりには、完形になるものが少ない。遺物は雑多に埋まっている状況であり、日常生活で単純に廃棄された土器群とは考えられない。大溝1を埋める際に意識的に土器の破片を埋土に多く混ぜて、固めた様相を呈している。土器をそのまま埋めたというよりは、あえて破片を小さくしていることが推定される。下層で、遺物の出土量が比較的少ない層が厚くないことから、大溝1の存続時期はあまり長くはなかったものと考えられる。廃絶時に土器の破片を入れて埋めていることから、完全に大溝1の機能をなくし、平地をつくろうとしたことがうかがわれる。大溝1を埋めた部分が軟弱で、沈下することを防ぐ目的があったといえる。調査の過程で、北半と南半を分割して掘削したが、特に遺物の中で偏った出土状況を示すものはなく、全体を一気に埋めたものと考えることができる。

大溝1北半で出土した弥生土器を、図101～103に示す。図101-466は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、断面は逆「く」の字状を呈しており、口縁は内湾する。口縁部外面には波状文が巡っている。頸部上半部では、外面に縦方向のハケ調整が見られる。467は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は弱く、口縁はやや広がる。口縁部外面には波状文が巡っており、内面には横方向のハケ調整が見られる。頸部上半部では、外面に縦方向のハケ調整が見られる。468は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が2条巡っている。突帯の上には刻み目が付けられている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾している。頸部に簾状文が巡る。469は、細頸壺の口縁部である。口縁部外面の上部には凹線が巡っている。その下には波状文と直線文が交互に巡っている。口縁端部は、やや内湾している。470は、細頸壺の口縁部である。口縁部外面の上端と下端には凹線が、その間には波状文が巡る。口縁端部は、やや内湾している。頸部から肩部には簾状文が巡っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。471は、壺の口縁部である。口縁部が大きく外反しており、口縁端部内面には、斜め方向の刺突文が施されている。口縁端部を肥厚させており、下方向にやや広げている。472は、壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は肥厚しており、外面に凹線が巡る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。473は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に簾状文が巡る。その上に凹線が1条巡っている。口縁端部内面には、端部に円形浮文が連続して付けられている。

474は、高杯杯部である。脚部が欠損しており、杯部の底も失われている。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、やや内側につまみあげられている。口縁端部外面には、端部に円形浮文が連続して付けられている。475は、高杯杯部である。脚部が欠損しており、杯部の底も失われている。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、やや内側につまみあげられている。口縁部外面の上端と下端に凹線が巡っている。476・477は、複合鉢の鉢部である。鉢部の端部分にあたり、外面に水平方向の凹線が巡っている。477は、外面に煤が付着しており、熱を受けて赤く変色している。478は、壺の蓋である。上部のつまみ部分を欠損している。479は、台形土器の上部である。台部の上面は平坦で、丁寧に調整されている。

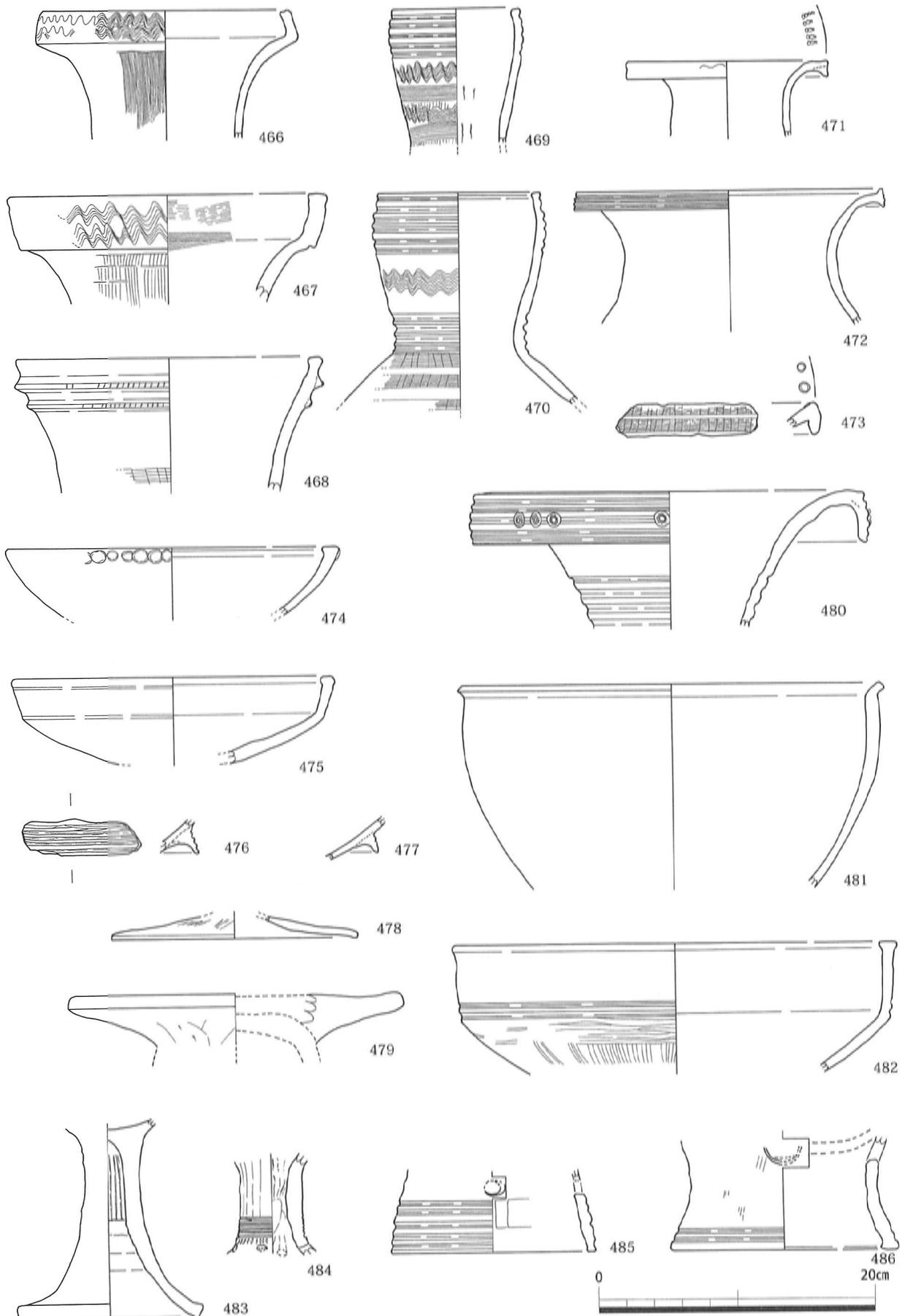


图101 大满1出土土器(8)

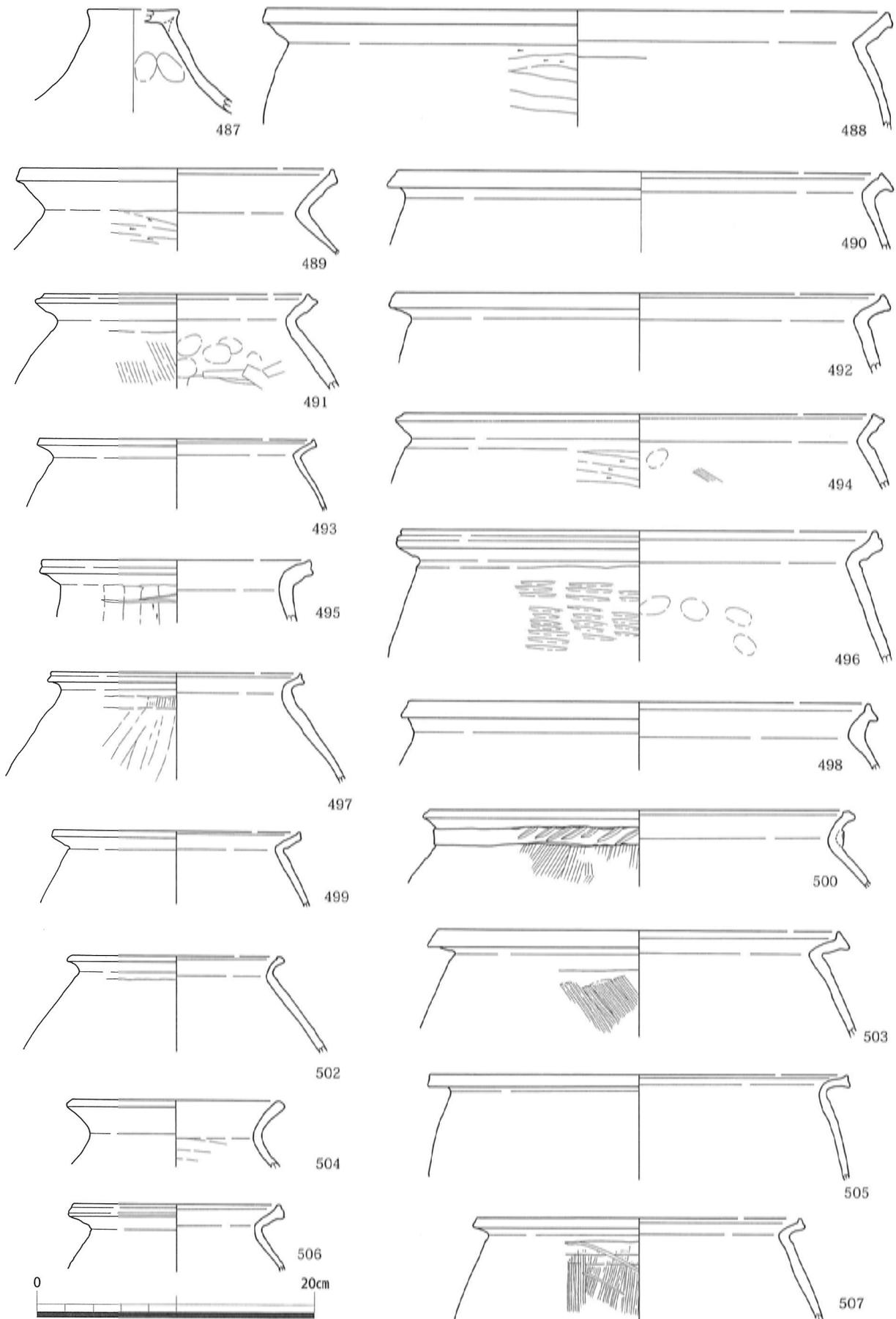


图102 大溝1出土土器(9)

480は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文が3点1組で付けられている。頸部には、凹線が数条巡る。一部、熱を受けている。481は鉢で、底部を欠損している。口縁端部をやや広げている。482は鉢で、底部を欠損している。口縁部はほぼ直立しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。口縁部外面下端には、凹線が巡っている。その下の体部上半には横方向、体部下半には縦方向のヘラミガキ調整が見られる。483は、高杯脚部である。端部を肥厚させて面を形成している。484は、高杯脚部である。脚部下半に擬凹線を巡らしている。485は、台付鉢の脚部である。下半部の外面には凹線が巡っている。中央部に円孔があげられている。486は、台付鉢の脚部である。端部は広がっており、肥厚させて面を形成している。下半部の外面には凹線が巡っている。中央部に円孔があげられている。

図102-487は、甕の蓋である。内面に指頭圧痕が残る。488は、大型甕の口縁部である。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。489～507は、甕の口縁部である。489は口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。490は、やや大型品である。口縁端部が肥厚しており、やや下方に広げている。491は口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。体部の上半部の外面には、縦方向のハケ調整が施されている。内面は指頭圧痕がみられ、その下部には横方向のヘラケズリ調整が施されている。外面に煤の痕跡が残る。492は、やや大型品である。口縁が強く外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。493は、薄手で口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部の内側がへこんでいる。494は、やや大型品である。口縁の外反は比較的弱い。口縁端部を肥厚させて面を形成している。495は、口縁が強く外反する。口縁端部に面を形成しており、凹線気味のへこみが巡る。体部外面の上部には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。外面に煤が付着している。496は、やや大型品である。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線を巡らしている。口縁部の下端にも凹線を巡らしている。体部外面には、横方向のタタキ目が残っている。内面には指頭圧痕がみられる。497は、胴部の張りが強いものである。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線を巡らしている。体部外面の上部には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。498は、やや大型品である。口縁の外反は比較的弱い。口縁端部を肥厚させて面を形成している。499は、薄手で口縁が強く外反する。くの字状にほぼ直角に外反する。500は、やや大型品である。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。頸部に押捺突帯をもつ。体部外面の上部には、縦方向のハケ調整が施されている。502は、胴部の張りが強いものである。口縁は、くの字状にゆるく外反する。熱を受けて赤く変色している。503は、やや大型品である。口縁は、くの字状にほぼ直角に強く外反する。口縁端部を肥厚させて、やや上方につまみあげられている。体部外面の上部には、斜め方向のハケ調整が施されている。外面に煤が付着している。504は、やや小型品である。口縁は大きく広がる。505は、やや大型品である。口縁が強く外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。506は、やや小型品である。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線を巡らしている。外面の一部に煤が付着しているほか、熱を受けて赤く変色している。507は、胴部の張りがやや強いものである。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。体部外面の上部には、縦方向のハケ調整が見られる。

図103-508～517は、飯蛸壺である。いずれも完形品であり、出土位置も近いとため、まとめて廃棄

された可能性もある。今回の調査では、飯蛸壺は随所に見られるが、いずれも単発であり、飯蛸壺がまとまって出土した例はない。大溝1の出土遺物の中で完形品が多いことは珍しく、他の遺物のように雑多に埋められたものとは様相が異なっている。やや形状に違いはあるものの、ほぼ同様の大きさである。いずれも口縁からやや下がった位置に、外側から1孔があげられている。手づくねで成形されており、指頭によるナデ調整や圧痕が全面に見られる。510・511・513・514・517などのように、口縁から下がった孔の位置付近をへこませているものも見られる。紐ずれの痕跡は確認できなかった。518は、真蛸壺形土器の下半部である。底部は厚くつくられている。外面に煤の痕跡が残る。

519～526は、甕の口縁部である。519は、口縁の外反が弱く、薄手のものである。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。520も、口縁の外反が弱いもので、熱を受けて赤く変色している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。521は、薄手で口縁が強く外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。522は、口縁が強く外反する。523は、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。524は、薄手で口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線を巡らしている。外面に煤が付着している。525は、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。526は、口縁が強く外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。527は、薄手で口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁部すぐ下の肩部に、横方向のタタキ調整が残る。外面に煤が付着している。

このほかに、石器類も出土している。図114-730～733は、上層から出土したもので、緑色片岩製の石庖丁である。730は、1/3程度欠損している。片刃で、紐孔が1ヶ所残存している。紐孔の間隔が広いので、大型品の可能性がある。731は、1/3程度欠損している。片刃で、紐孔が2ヶ所残存している。紐擦れ痕が認められ、光沢がある。732は、大型品であるが、両端を欠損しており、紐孔は認められない。両刃で表裏面共に研磨痕が残っている。火を受けた可能性もある。733は、大型品であるが、両端を欠

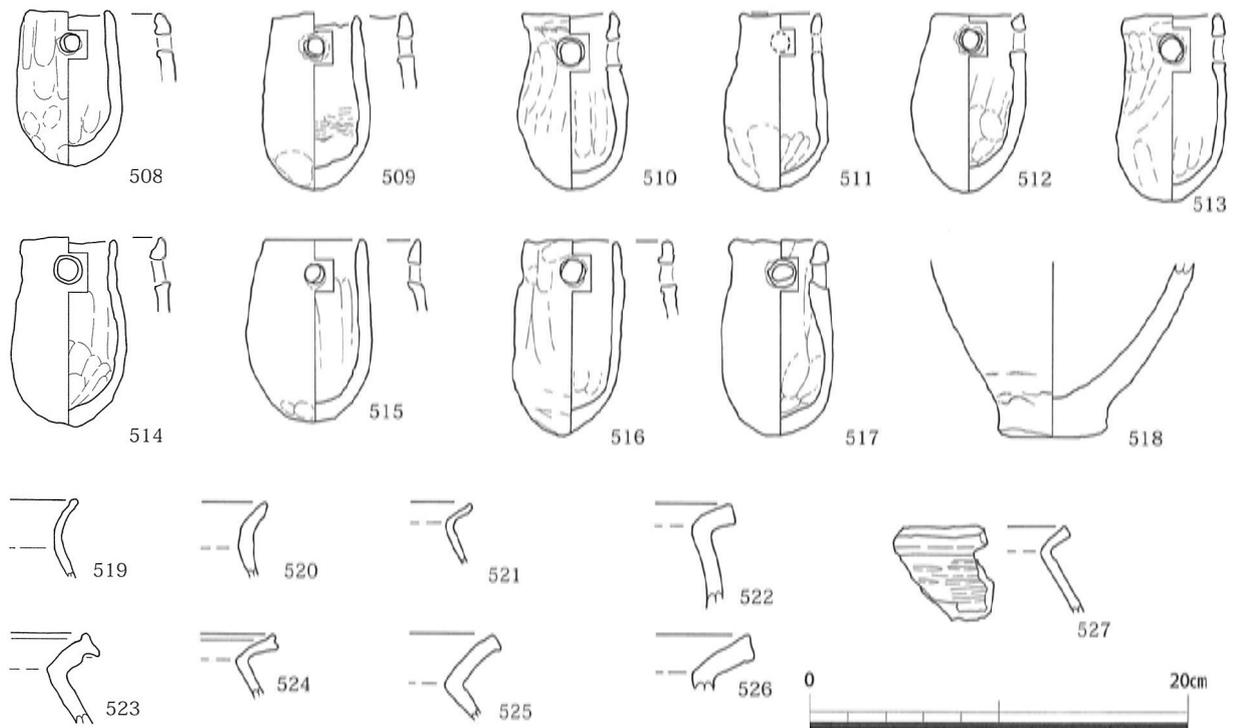


図103 大溝1出土土器(10)

損している。刃部が欠損しており、裏面が剥落している。火を受けた可能性もある。

一方、大溝1南半で出土した弥生土器を図104～111に示す。図104～528は、いわゆる日明山型壺の口縁部である。大型の土器であり、口縁部がゆるやかに外反する。529は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に波状文が巡る。波状文の上には、円形浮文が連続して付けられている。頸部には、縦方向のハケ調整が見られる。530は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文が連続して付けられている。531は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に凹線が

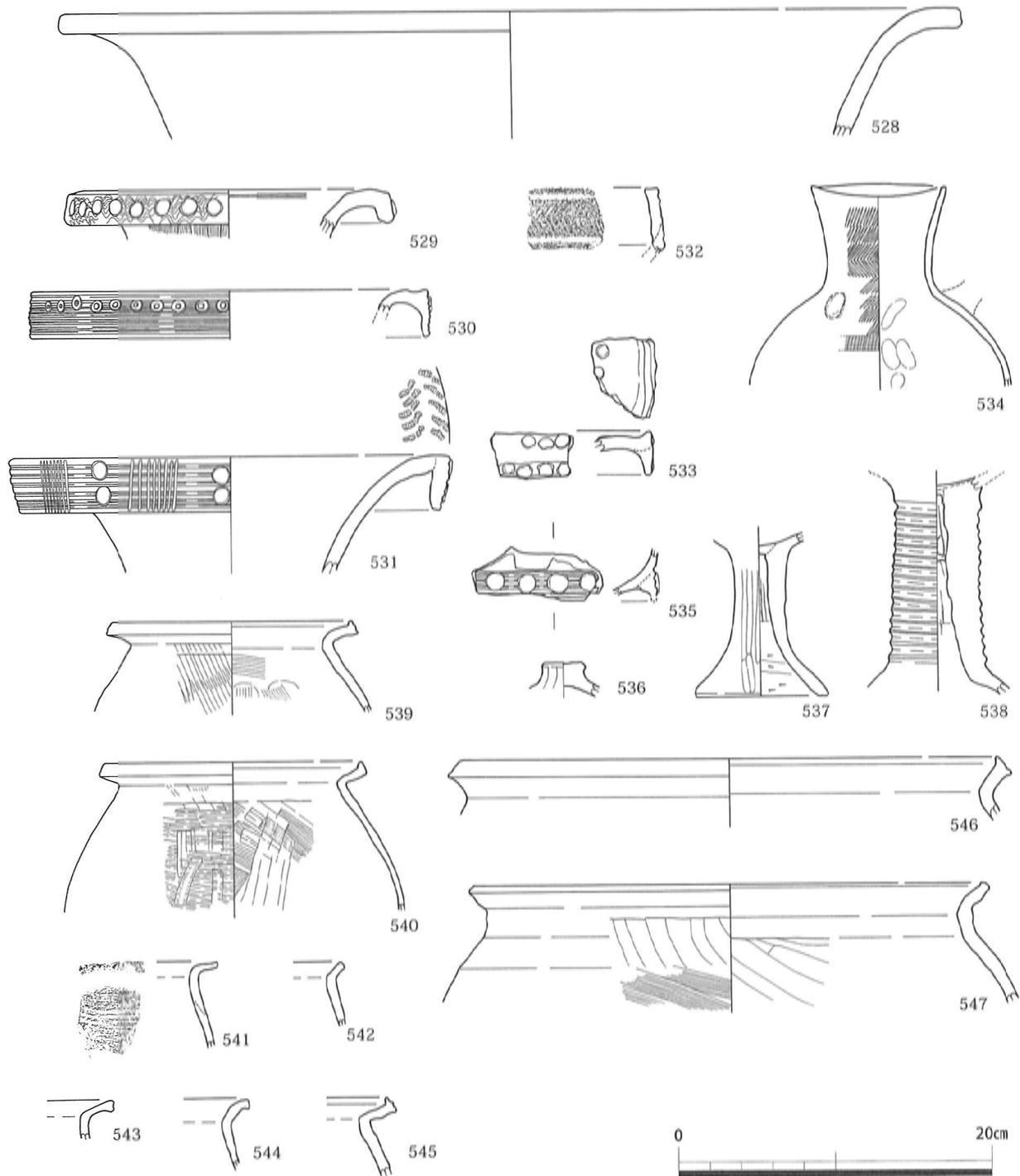


図104 大溝1出土土器(11)

巡る。凹線の上には、縦に2点1組の円形浮文と8本1組の縦方向のヘラ描き沈線が交互に付けられている。口縁部内面には、斜め方向の刺突文が綾杉状に施されている。532は、壺の口縁部である。外面の上端と下端に凹線が巡っており、その間に斜め方向の刺突文が綾杉状に2列に配置されている。533は、壺の口縁部である。全体に磨耗が著しく、細かい調整や文様は不明である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に2列の円形浮文が連続して付けられている。口縁部内面にも、円形浮文が並んでいる。熱を受けて赤く変色している。534は、水差形土器の上半部である。把手は欠損している。全体に磨耗が著しく、細かい調整や文様ははっきりしないが、口縁部から肩部外面には、細かい斜め方向の櫛描列点文が巡っており、一部綾杉状を呈している。その下には簾状文が巡る。内面には、指頭圧痕が見られる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。535は、複合鉢の鉢部である。鉢部の端部分にあたり、外面に水平方向の凹線が巡っている上に円形浮文が連続して付けられている。536は、壺の蓋のつまみ部である。537は、高杯脚部である。外面に縦方向のヘラミガキ調整が施されている。内面には、横方向のケズリ調整が見られる。538は、高杯脚部である。脚柱部のみであり、脚台部も欠損している。外面に凹線が密に施されている。

539は、甕の上半部である。口縁が強く外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。肩部外面には、斜め方向のハケ調整が施されている。内面は、口縁部のすぐ下は横方向、その下は縦方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。540は、甕の上半部である。口縁が、

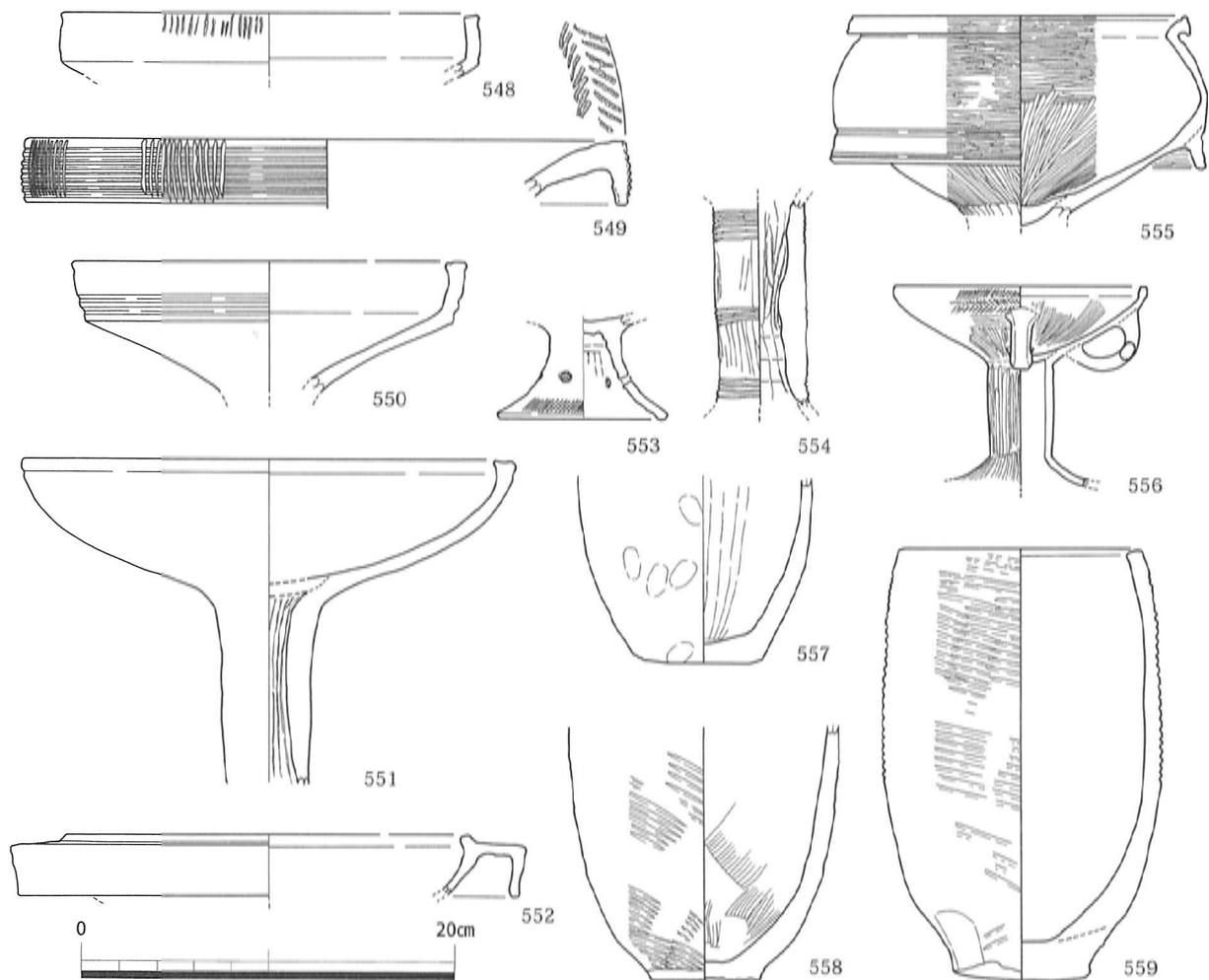


図105 大溝1出土土器(12)

くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。肩部外面には、横方向のタタキ調整が施された後、縦方向のナデ調整をおこなっているが、タタキ目が明瞭に残っている。内面は、斜め方向のハケ調整が施されている。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。541～547は、甕の口縁部である。541は、口縁の外反が強く、薄手のものである。体部外面にタタキ目が明瞭に残っている。外面に煤が付着している。542は、口縁の外反が弱く、薄手のものである。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。543は、口縁の外反が強く、薄手のものである。外面に煤が付着している。544は、口縁の外反が弱く、薄手のものである。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。545は、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。546は、やや大型品である。口縁の外反は比較的弱い。口縁端部を肥厚させて面を形成している。547は、やや大型品である。口縁の外反は比較的弱い。外面の頸部は斜め方向、体部は横方向のハケ調整が施されている。

調査の過程で、下層のうち土層の確定している遺物を別にまとめて表示することとする。南半部のうち、礫層上面である、大溝3層からの出土遺物を図105・106に示す。

図105-548は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、口縁はほぼ直立する。全体に磨耗が著しく、細かい調整や文様ははっきりしないが、口縁部外面上半には縦方向の刺突文が連続して見られる。簾状文の可能性もある。549は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が綾杉状に施されている。550は、高杯杯部である。口縁はほぼ直立する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、やや内側につまみあげられている。口縁部外面の上端と下端に凹線が巡っている。口縁部に煤が付着している。551は、高杯で、脚部下半を欠損している。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、やや内側につまみあげられている。552は、高杯杯部の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。553は、台付鉢の脚部である。全体に表面の剥離が著しく、細かい調整や文様ははっきりしないが、端部に細かい斜め方向の櫛描列点文が巡っている。中央部に5点円孔があげられている。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。554は、高杯脚部である。台付鉢の脚部の可能性もある。脚柱部のみであり、脚台部も欠損している。3ヶ所に擬凹線が巡っている。555は、複合鉢で、脚部以下を欠損している。口縁の外反が強く、口縁端部を肥厚させて面を形成している。口縁部から体部にかけての外面は横方向、底部外面は縦方向のヘラミガキ調整が丁寧に施されている。内面は、体部上半は横方向、下半は縦方向のヘラミガキ調整が密に施されている。556は、把手付鉢で、脚台縁辺部を欠損している。口縁部外面には、細かい斜め方向の櫛描列点文が巡っており、一部綾杉状を呈している。外面には、体部中央部は横方向、下半部は縦方向のヘラミガキ調整が密に施されている。把手は1ヶ所残存しているが、複数付くものかどうかは不明である。脚部から脚台部までは、縦方向のヘラミガキ調整が丁寧に施されている。557は、真蛸壺形土器の下半部である。外面には指頭圧痕が残る。熱を受けて赤く変色している。558は、真蛸壺形土器の下半部である。外面には、斜め方向のタタキ調整が残る。内面には、ヘラ状工具による調整痕が見られる。外面に煤が付着している。559は、真蛸壺形土器である。外面には、斜め方向のタタキ調整が明瞭に残る。底は厚くつくられている。外面に煤が付着している。

図106は、甕の口縁部付近を集めたものである。560は、下半部を欠損しているが、口縁の外反が強い。外面に煤が付着している。561は、やや大型品である。口縁の外反は比較的弱い。口縁端部を肥厚させ

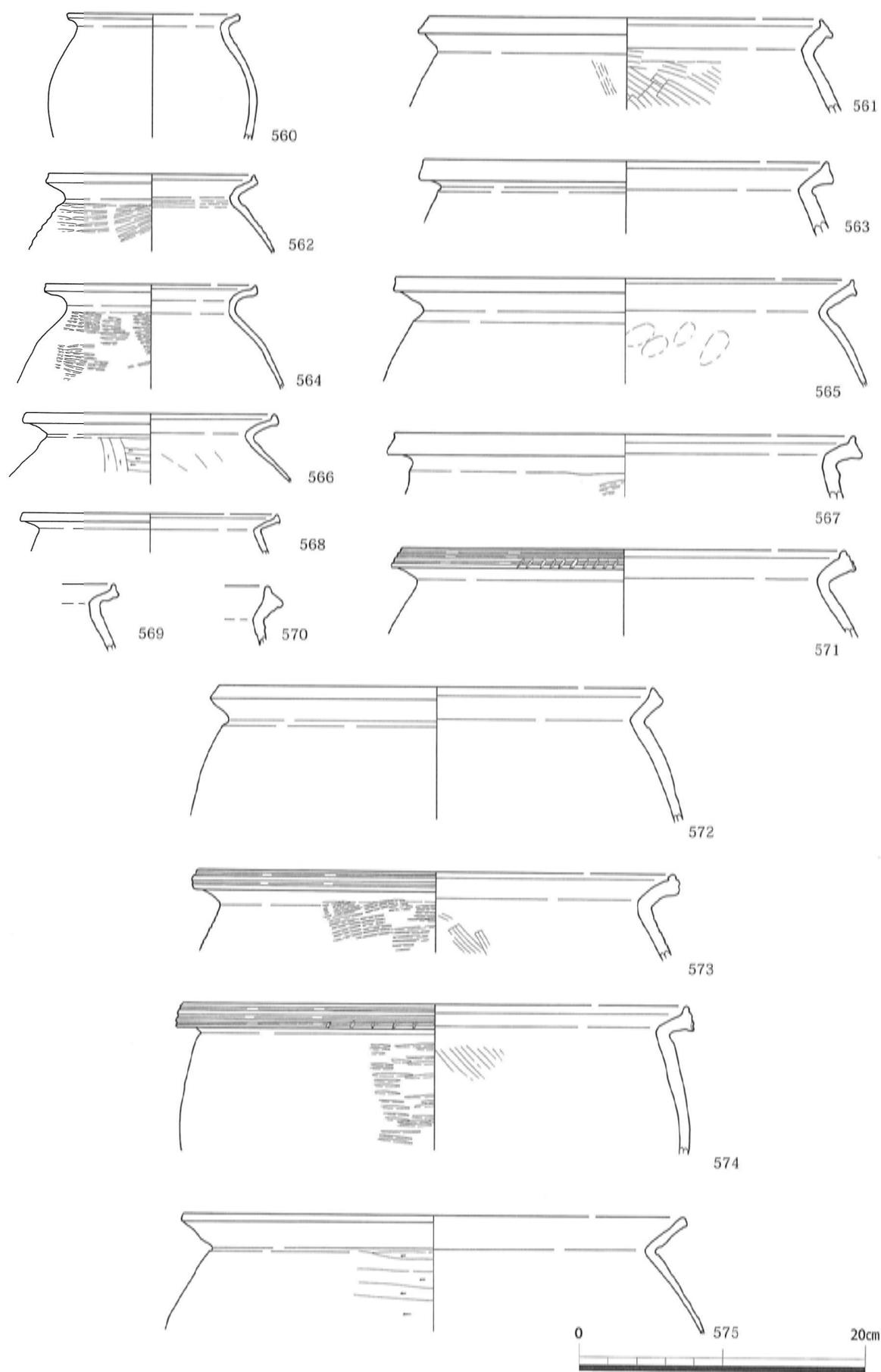


图106 大溝 1 出土土器(13)

て面を形成している。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。562は、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。肩部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。563は、やや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。外面に煤が付着している。564は、口縁が、やや丸みを帯びて外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。肩部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。565は、薄手でやや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。内面には指頭圧痕が残る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。566は、口縁が、くの字状に強く外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。567は、やや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。568は、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。569は、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。570は、口縁の外反は比較的弱い。口縁端部を肥厚させて面を形成している。571は、やや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線がめぐる。口縁部下半には、斜め方向の刻目が巡っている。572は、やや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。573は、やや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線がめぐる。肩部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。574は、やや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部を肥厚させて面を形成しており、外面に凹線がめぐる。肩部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。575は、薄手でやや大型品である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。全体に磨耗が著しく、細かい調整や文様は不明である。胎土の特徴から、紀伊産と考えられるが、岩出町などの紀ノ川流域の出土土器の胎土に類似するとの教示を得ている。

大溝1南半のうち、土器の多く含まれる礫層である、大溝4層からの出土遺物を図107～111に示す。

図107-576は、甕の口縁部である。壺の可能性もある。口縁端部外面に刻目を施している。577は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、断面は逆「く」の字状を呈しており、口縁は内湾する。口縁部外面には波状文が巡っている。内面には指頭圧痕が残る。578は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、断面は逆「く」の字状を呈しており、口縁は内湾する。口縁部外面には波状文が巡っている。内面には横方向のハケ調整が見られる。頸部外面には、直線文が巡っており、内面には指頭圧痕が残る。579・580は、いわゆる日明山型壺の口縁部である。大型の土器であり、口縁部がゆるやかに外反する。581は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に波状文が巡る。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。582は、無頸壺の上半部である。口縁端部を肥厚させており、内湾している。口縁端部のすぐ下の外面には、斜め方向の櫛描列点文が巡り、その上に竹管文を付した円形浮文が連続して付けられている。その下には、簾状文が巡る。口縁端部には、縦2列、横2列で1組となる円形浮文が複数組付けられている。583は、壺の口縁部である。口縁部が大きく外反している。口縁端部を肥厚させており、下方向にやや広げている。口縁部内側には、2点1組の孔がつけられている。口縁部下端に煤が付着している。584は、短頸壺で、底部を欠損している。

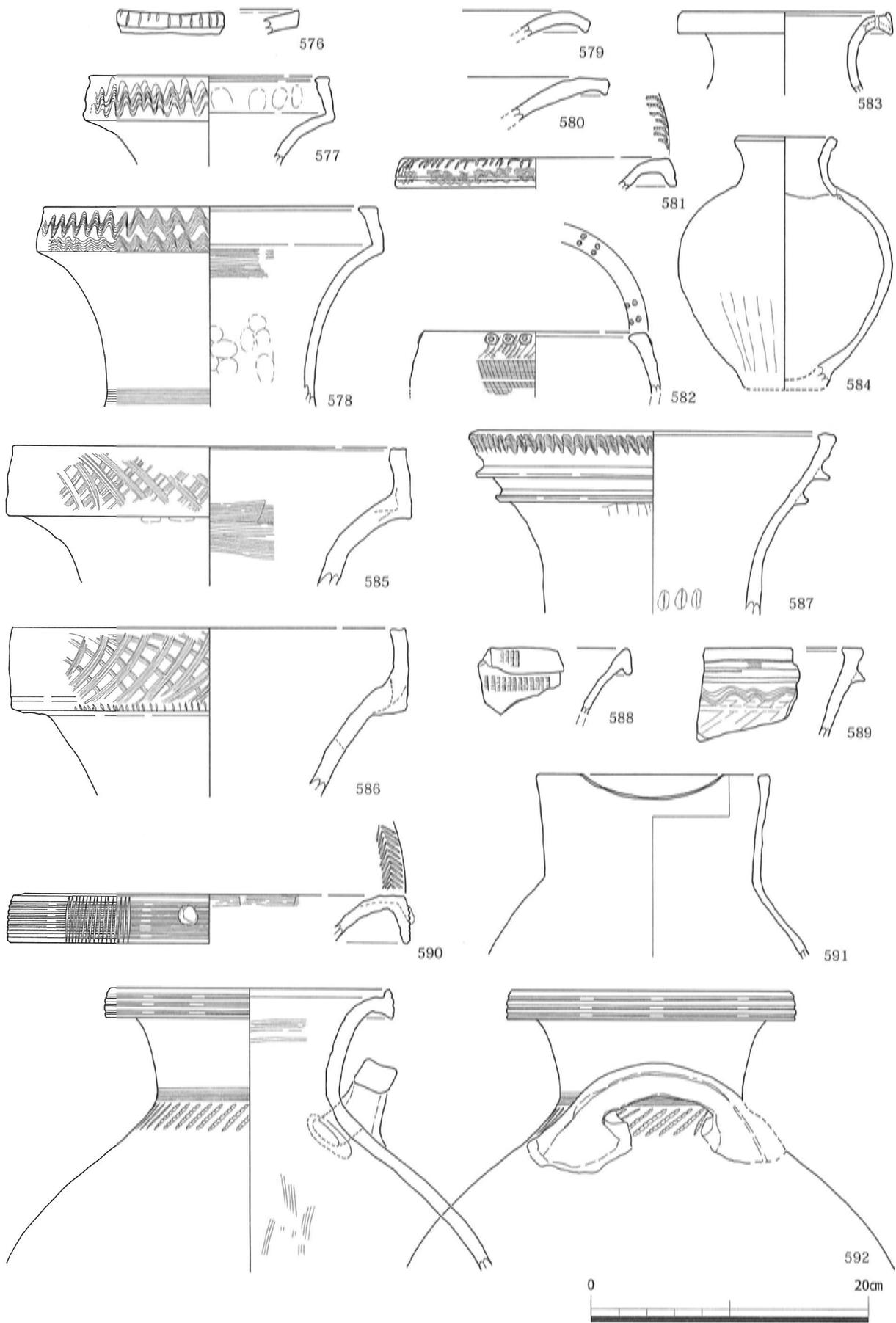


图107 大溝1出土土器(14)

口縁の外反は弱い。585・586は、受け口状口縁壺の口縁部である。いずれも、受け口部の屈曲は強く、口縁はやや内湾する。口縁部外面には格子文が巡っており、586は、さらに下端に刻目を入れている。585の内面には、横方向のハケ調整が見られる。587は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が2条巡っている。口縁部上端には波状文が巡る。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。588は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に簾状文が巡る。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。589は、鉢の口縁部である。直口壺の口縁部の可能性もある。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が巡っている。突帯より上には凹線、下には波状文が巡っている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。590は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりと円形浮文が付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が綾杉状に施されている。591は、短頸壺の口縁部である。口縁はやや開き気味である。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。焼成後に口縁部を打ち欠いている。592は、把手付壺の上半部である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は肥厚しており、外面に凹線が巡る。頸部に直線文、その下には斜め方向の櫛描き列点文が巡る。肩の上端部に、把手を挿入法で取り付けている。

図108-593は、無頸壺の口縁部である。口縁部外面の上端に突帯が4条巡っており、その上に3点1組の棒状浮文が付けられている。突帯の下側には、直線文や波状文が巡るが、全体に表面の剥離が著しく、細かい調整や文様ははっきりしない。594は、鉢の口縁部である。口縁端部を折り曲げて玉縁状に成形している。調査区内では、他に類例がなく、朝鮮系無文土器の可能性も考えられる。595は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状に外反する。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。頸部に押捺突帯をもつ。596は、鉢の上半部である。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。597は、高杯杯部である。口縁端部を水平に広げた後に、下方向に広げている。598は、台付鉢の把手状の張り出しである。2点1組の紐孔をもっており、口縁部に4ヶ所つけられているものである。599は、把手付鉢の口縁部である。把手の貼り付け痕跡が残る。口縁端部が肥厚しており、やや上方につまみあげられている。端部は面をなしており、凹線が巡る。やや内湾気味である。600は、把手付鉢の口縁部である。口縁部外面には、細かい斜め方向の櫛描き列点文が巡っており、一部綾杉状を呈している。把手は1ヶ所残存しているが、複数付くものかどうかは不明である。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。

601は、高杯脚部である。外面は、縦方向の丁寧なヘラミガキ調整が施されている。端部は肥厚しており、面をなしている。602は、高杯で、脚台部を欠損している。杯部外面には、凹線が巡っている。内面に煤が付着しており、甕の蓋として再利用されていたことが考えられる。603は、台付鉢の脚柱部である。高杯の可能性もある。脚柱部のみであり、脚台部も欠損している。3ヶ所に擬凹線が巡っている。604は、高杯杯部である。底部は欠損している。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。605は、高杯杯部である。底部は欠損している。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。外面に凹線が巡っており、口縁端部には刻目が付けられている。606は、高杯脚部である。外面は、縦方向の丁寧なヘラミガキ調整が施されている。端部は肥厚しており、面をなしている。2段の円孔があげられている。607は、把手付鉢の脚部である。全体に表面の剥離が著しく、細かい調整や文様ははっきりしない。把手の貼り付け痕跡が残る。608は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。内面には指頭圧痕が残る。外面に煤が付着している。609は、甕の蓋であ

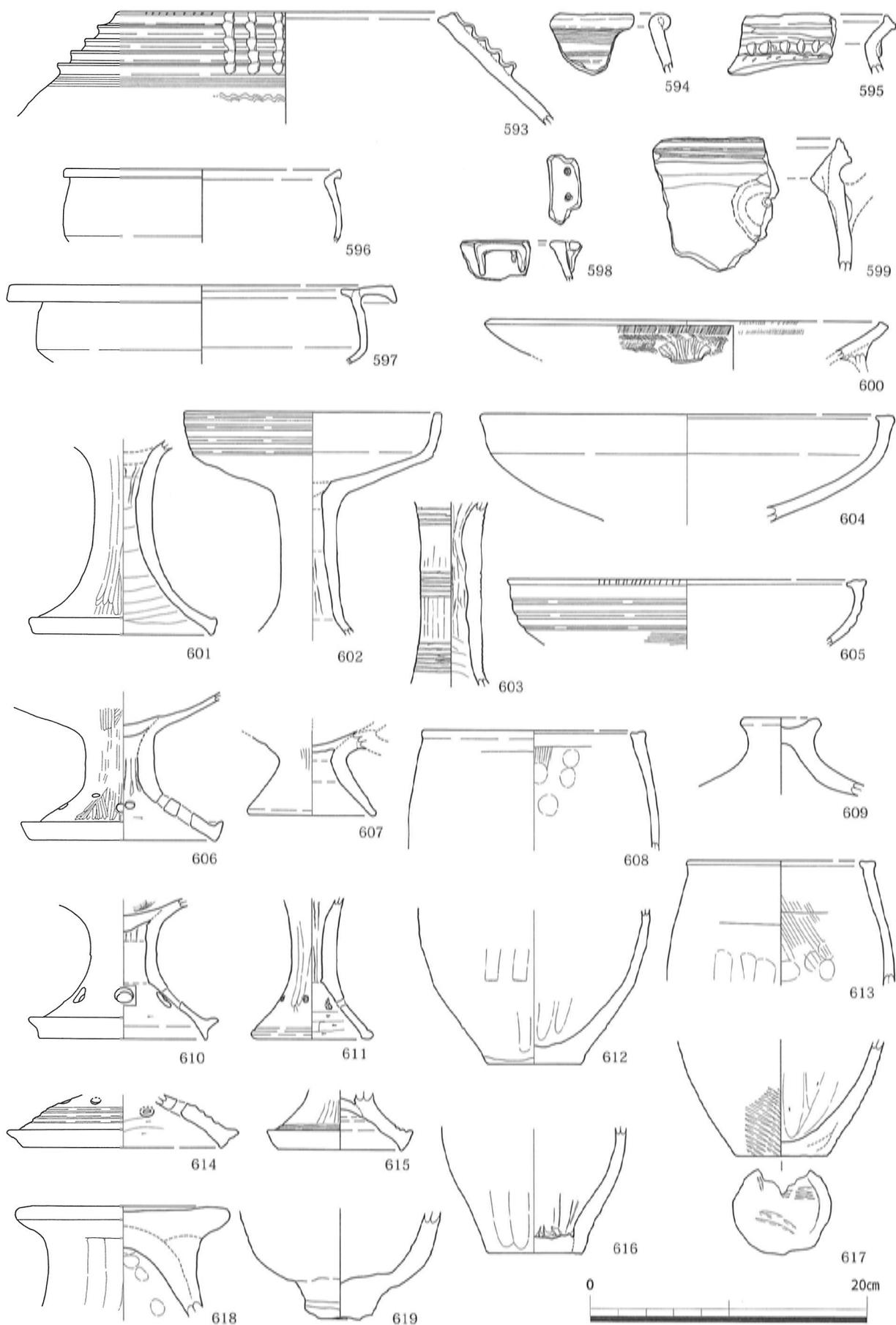


图108 大沟1出土土器(15)

る。つまみ部のみで、端部は欠損している。610は、高杯脚部である。端部は肥厚しており、面をなしている。脚台部に円孔があげられている。611は、高杯脚部である。外面は、縦方向の丁寧なヘラミガキ調整が施されている。脚台部に円孔があげられている。612は、真蛸壺形土器の下半部である。外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。内面には縦方向のナデ調整が見られる。613は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。外面は、縦方向のナデ調整が施されている。内面には指頭圧痕が残っており、斜め方向のハケ調整がみられる。外面に煤が付着している。614は、高杯脚台部である。端部は肥厚しており、面をなしている。外面には凹線が複数巡っており、円孔があげられている。615は、高杯脚台部である。端部は肥厚しており、面をなしている。外面には凹線が複数巡っている。616は、真蛸壺形土器の下半部である。底部付近の外面には、縦方向のナデ調整が見られる。内面には、ヘラ状工具による調整痕が残る。熱を受けて赤く変色している。外面に煤が付着している。617は、真蛸壺形土器の下半部である。外面に斜め方向のタタキ調整が残っており、底部にまで及ぶ。内面には、縦方向のナデ調整が見られる。618は、台形土器の上部である。台部の上面は、丁寧に調整されている。外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。内面には指頭圧痕が残っている。619は、真蛸壺形土器の底部である。底部は厚く仕上げられている。トリべの可能性もあるが、金属生産に関する遺物はほとんど出土していない。

図109—620～640は、隰の口縁部付近を集めたものである。620は、口縁端部を下方向に広げている。621は、やや大型品である。口縁端部の面に凹線を巡らしている。体部内面には、横方向のハケ調整が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられるが、結晶片岩を多く含んでおり、和歌山市太田黒田遺跡などの出土土器の胎土に類似するとの教示を得ている。622は、口縁端部を上方向につまみあげている。肩部外面にはヘラケズリ調整が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。外面に煤が付着している。623は、口縁端部をあまり肥厚させていない。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。624は、やや大型品である。口縁端部を上方向につまみあげている。肩部外面には上部で縦方向、その下で斜め方向のハケ調整が施されている。体部内面には、横方向のハケ調整が見られる。625は、口縁端部をあまり肥厚させておらず、口縁の外反が弱い。626は、やや大型品である。口縁端部を上方向につまみあげており、面に凹線を巡らしている。体部内面に指頭圧痕が残る。627は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面に縦方向のヘラケズリ調整が施されているが、斜め方向のタタキ目が残っている。628は、やや大型品である。口縁端部の肥厚の偏りは見られない。外面に煤が付着している。629は、薄手のもので、口縁端部をやや下方向に広げている。体部外面に横方向のヘラケズリ調整が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。630は、やや大型品である。口縁端部をやや上方向につまみあげている。肩部外面には、横方向のハケ調整が見られる。体部内面に指頭圧痕が残る。631は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面に縦方向のハケ調整が見られる。632は、やや大型品である。口縁端部を両側に広げており。断面T字形を呈している。口縁端部の下端には、刻目が付けられている。体部外面に縦方向のハケ調整が施されているが、横方向のタタキ目が残っている。633は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。口縁端部の面に凹線を巡らしている。体部外面に縦方向のヘラケズリ調整が施されている。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。634は、やや大型品である。口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面に縦方向のヘラケズリ調整が施されており、体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。635は、口縁部の外反が丸みを帯びている。口縁端部をやや上方向につまみあげている。636は、やや大型品である。口縁端部の肥厚の偏りは見られな

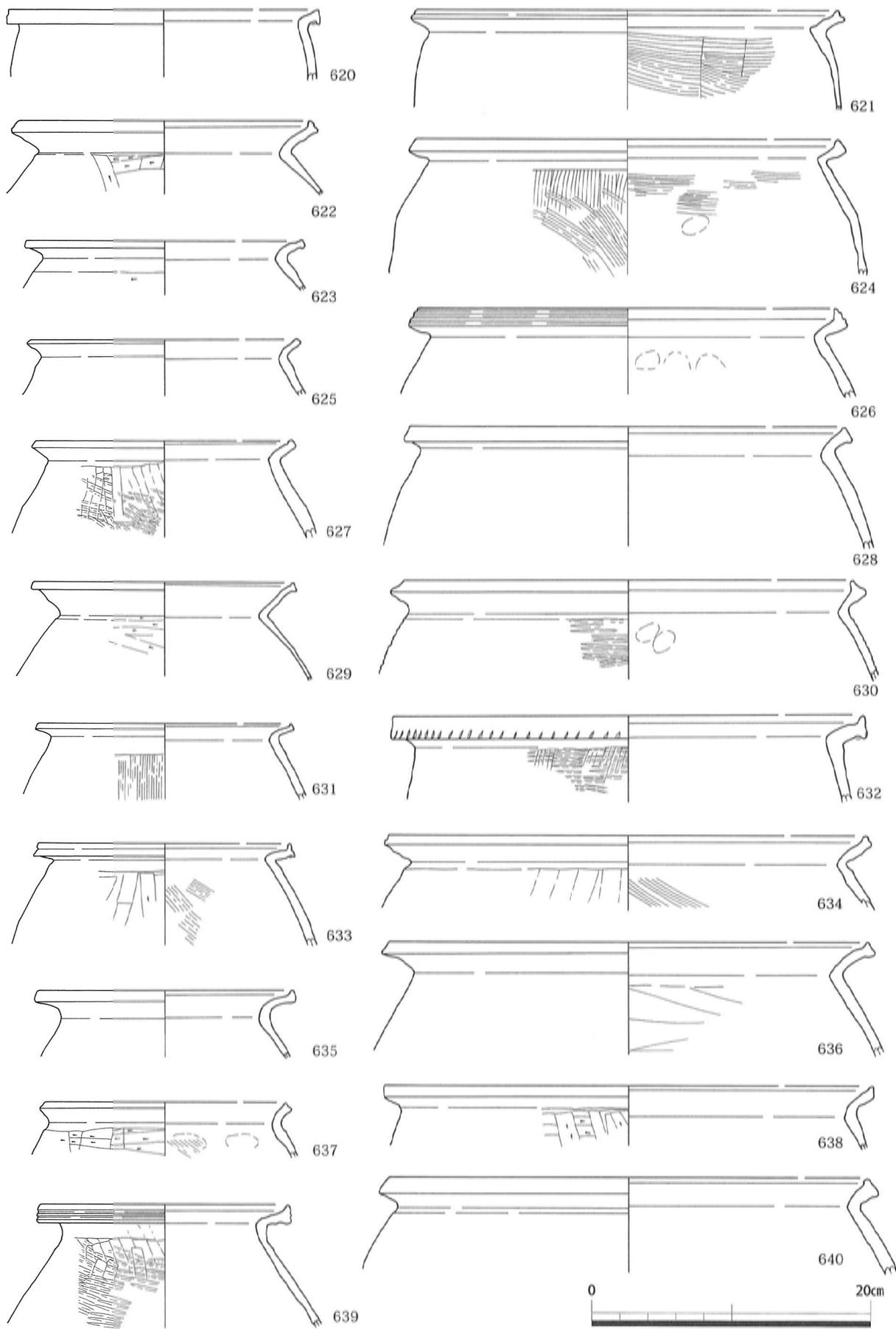


图109 大沟1出土土器(16)

い。体部内面に横方向のナデ調整が見られる。637は、口縁部の外反が弱い。口縁端部の肥厚の偏りは見られない。体部外面に横方向のヘラケズリ調整が施されている。体部内面には、斜め方向のハケ調整や指頭圧痕が見られる。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。638は、やや大型品である。口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。639は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。口縁端部の面に凹線を巡らしている。体部外面に縦方向のナデ調整が施されているが、横方向のタタキ目が残っている。640は、やや大型品である。口縁端部をやや上方向につまみあげている。

図110-641は、やや大型品の甕で底部を欠損している。口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面の上半部に縦方向のハケ調整が見られ、下半部には縦方向のヘラケズリ調整が施されている。体部内面には、縦方向のハケ調整が見られる。642～647は、甕の口縁部付近を集めたものである。いずれも口縁が、くの字状に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成するものが多い。口縁端部の仕上げの違いが見られる。642は、口縁端部をあまり肥厚させていない。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。643は、口縁端部を両側に広げて面を形成している。644は、口縁端部をあまり肥厚させていない。口縁端部に、刻目が付けられている。645は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。646は、口縁端部を上方向につまみあげている。体部外面に、横方向のタタキ目が残っている。体部内面には、指頭圧痕が見られる。647は、口縁端部をあまり肥厚させていない。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。648は、鉢の上半部である。口縁端部の仕上げが甕と類似しており、口縁端部を上方向につまみあげている。

649～660は、再度、甕の口縁部付近を集めたものである。いずれも口縁が、くの字状に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成するものが多い。口縁端部の仕上げの違いが見られる。649は、口縁端部を両側に広げており、やや断面T字形を呈している。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。650は、やや大型品である。口縁端部を両側に広げており。断面T字形を呈している。体部外面に、横方向のタタキ目が残っている。651は、口縁端部をあまり肥厚させておらず、丸くおさめている。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。652は、受け口状の口縁をもつもので、口縁端部を丸くおさめている。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。653は、口縁端部を上方向につまみあげている。体部内面には、指頭圧痕が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。654は、やや大型品である。口縁端部を両側に広げており。断面T字形を呈している。体部外面に縦方向のハケ調整が施されているが、横方向のタタキ目が残っている。体部内面に横方向のヘラケズリ調整が見られる。655は、口縁端部をあまり肥厚させていない。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。656は、口縁の外反が弱いもので、口縁端部を丸くおさめている。体部外面にヘラケズリ調整が施されている。外面に煤が付着している。657は、やや大型品である。口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。658は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。659は、口縁の外反が弱いもので、厚手である。口縁端部を両側に広げて面を形成している。体部外面に縦方向のハケ調整が施されているが、横方向のタタキ目が残っている。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。660は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。外面に煤が付着した痕跡が認められる。

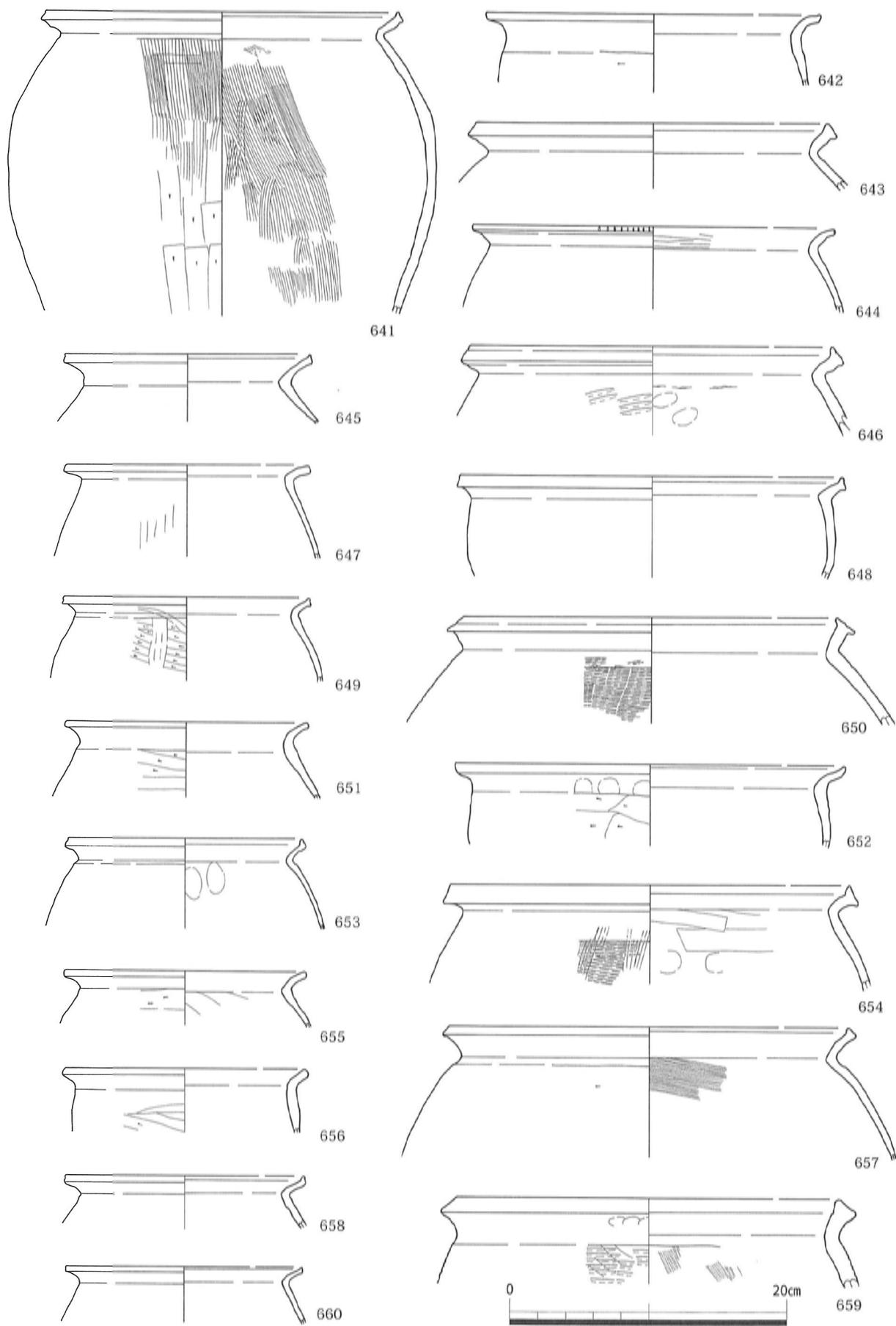


图110 大沟1出土土器(17)

図111-661は、やや大型品の甕で底部を欠損している。口縁の外反が弱いもので、厚手である。口縁端部を両側に広げて面を形成している。体部外面は、上部に縦方向のハケ調整、中央に斜め方向のハケ調整、下部に縦方向のヘラズリ調整が施されている。体部内面は、斜め方向のハケ調整が見られる。662は、甕の上半部である。口縁端部を上方向につまみあげている。体部外面に、斜め方向のタタキ目が残っている。663～672は、甕の口縁部付近を集めたものである。いずれも口縁が、くの字状に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成するものが多い。口縁端部の仕上げの違いが見られる。663は、口縁の外反が弱いもので、厚手である。口縁端部をやや上方向につまみあげており、面に凹線を巡らしている。664は、やや長胴のもので、口縁の外反が弱い。口縁端部を丸くおさめている。体部外面

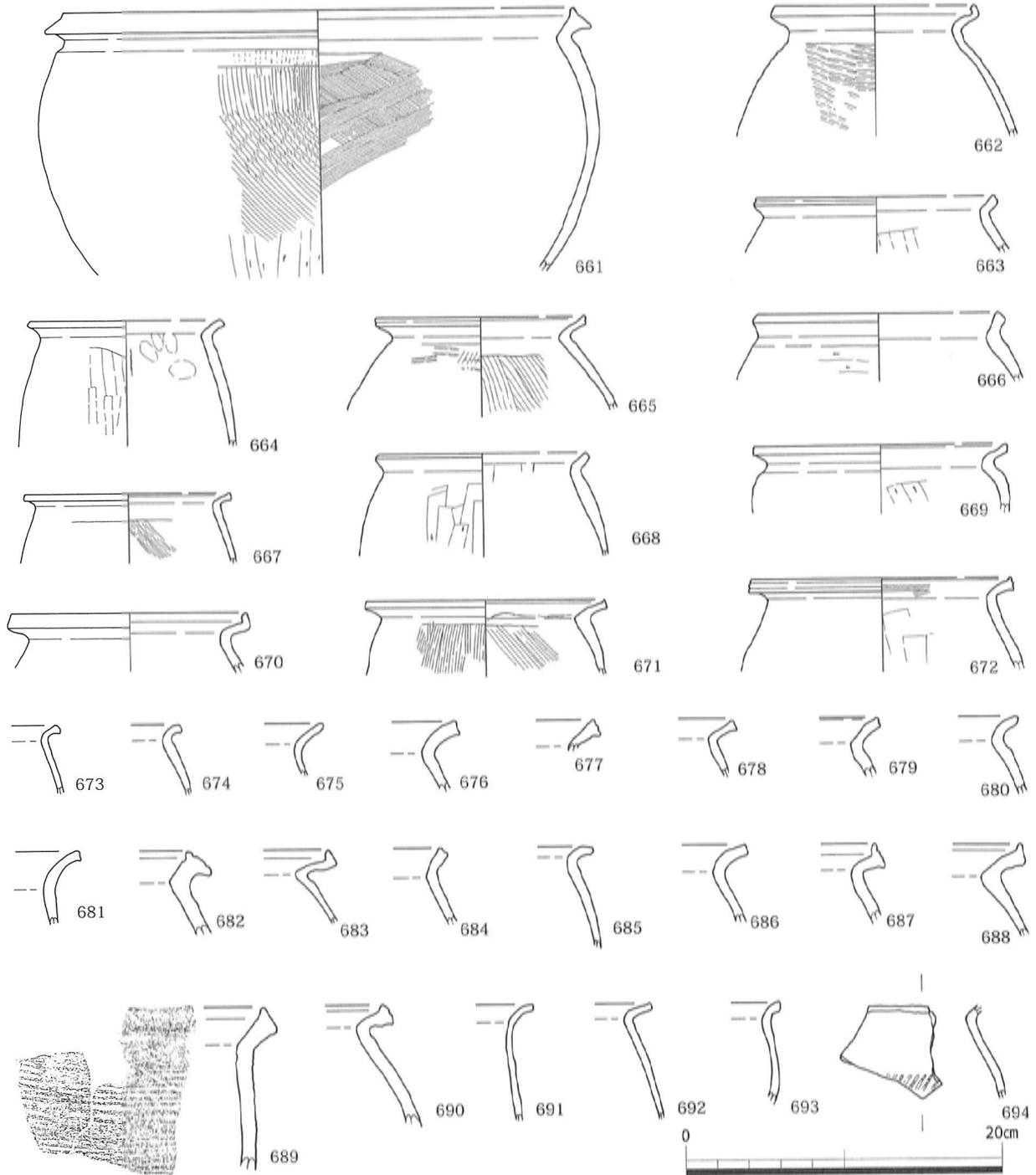


図111 大溝1出土土器(18)

は、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。体部内面には、指頭圧痕が見られる。665は、口縁端部をやや上方向につまみあげており、面に凹線を巡らしている。体部外面に、横方向のタタキ目が残っている。体部内面は、斜め方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。666は、口縁の外反が弱いもので、厚手である。口縁端部はあまり肥厚していない。体部外面は、横方向のヘラケズリ調整が施されている。667は、やや長胴のもので、口縁の外反が弱い。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。668は、口縁の外反が弱いもので、厚手である。口縁端部はあまり肥厚していない。体部外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。669は、頸部の挟りが強いもので、口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部内面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。外面に煤が付着している。670は、受け口状口縁のものである。口縁端部を上方向につまみあげている。熱を受けて赤く変色しているほか、外面に煤が付着している。671は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面は、縦方向のハケ調整が施されている。体部内面は、斜め方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。672は、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。口縁部内面には、横方向のハケ調整が見られる。体部内面は、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。外面に煤が付着している。673は、甕の口縁部である。口縁の外反は弱い。口縁端部をやや肥厚させている。外面に煤が付着している。674は、鉢の口縁部である。口縁の外反は弱い。口縁のすぐ下の外面には、簾状文が巡っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

675～693は、甕の口縁部破片を集めたものである。口縁が、くの字状に外反するものが多い。口縁端部の仕上げの違いが見られる。675は、口縁端部を丸くおさめている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。676は、口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。677は、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。外面に煤が付着している。678は、口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。679は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。680は、口縁端部を丸くおさめている。681は、口縁の外反は弱い。口縁端部をやや肥厚させている。682は、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。683は、口縁端部を上方向につまみあげている。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。684は、口縁の外反は弱い。口縁端部をやや肥厚させている。685は、口縁端部を丸くおさめている。外面に煤が付着している。686は、口縁端部はあまり肥厚していない。687は、口縁端部を上方向につまみあげている。688は、口縁端部を上方向につまみあげている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられるが、結晶片岩が含まれていない。689は、口縁の外反は弱い。口縁端部を両側に広げて面を形成している。体部外面に、横方向のタタキ目が残っている。690は、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。691は、薄手で、口縁の外反は弱い。口縁端部はあまり肥厚していない。外面に煤の痕跡が残る。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。692は、口縁端部はあまり肥厚していない。693は、薄手で、口縁の外反は弱い。口縁端部はあまり肥厚していない。694は、甕の頸部である。斜め方向の列点文が巡っており、瀬戸内系の影響をうけたものと考えられる。

大溝 2 (図92、112、113、115、図版17、52、53)

検出時には判別できなかったが、K区において断面の土層観察により、南東部で大溝1の上部から掘り込んでいる別の遺構の存在が認められた。平面形状ははっきりしないが、確認された埋土の広がりから推定すると、東方向からのびる溝状を呈しており、調査区の中央部で途切れている。調査区西壁の土層観察では確認されていないことから、調査区の西側まではのびないようである。全体の形状は不明であるが、土層観察で確実に存在することがわかるため、大溝2と呼称することとする。

K区の東側のL区では、大溝に関わるような遺構や遺物の集中も検出しておらず、東側の状況も不明である。ただ、I区とL区の間未調査部分があり、現在の水路が流れていることから、東側からのびてくる自然流路の存在が想定され、この部分に大溝がつけられていたことも考えられる。

K区の東壁断面の土層観察では、大溝1の南半部の肩部にかかる位置で、上から掘り込まれている大溝を確認することができた。調査区中央部で大溝1を横断するかたちで土層観察用畦を残したが、ここでも大溝2を確認することができた。調査区西壁断面の土層観察では、確認できていない。これらの確認された部分を総合すると、東西方向の延長が約8m、南北方向の幅約7m、検出面からの深さ10～40cmを測る。上部はかなり削平をうけており、底部付近の1層が残存するのみである。にぶい黄褐色礫混じりシルトを主体とする層である。径5～10cmの礫を多く含んでおり、遺物も多い。大溝1と同様に、廃絶時に人為的に埋められたものと考えられ、遺物は雑多に埋められている状況である。底付近には、大溝1と異なり、粘土層や砂層などの自然堆積層は認められない。水路として使われていたかどうかははっきりしないが、存続期間はあまり長くなかったものと考えられる。また、大溝1の廃絶後につくられたものであるが、同様の埋め方をしていることや、遺物の時期差がほとんどないことから、あまり時期差なく廃絶したものといえる。

掘削時の初期段階では、大溝2の存在を認識していなかったため、出土遺物を明確に選別していなかった。このため、一部の遺物は大溝1と混同したかたちになっており、大溝1の遺物としている。大溝2の認識後は、選別して取り上げており、明確に分けているが、全体に時期差はあまり認められない。大溝1と同様に大型の破片は多いものの、完形に復元できるものはほとんどなく、日常生活における不要品を廃棄したという状況ではない。埋める際に土器片を多く混ぜて、地盤が沈まないように固めた状況である。

多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。大溝2から出土した弥生土器を図112・113に示す。図112-695は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に簾状文が巡る。簾状文の上には、3点1組の円形浮文が連続して付けられている。頸部には凹線が巡る。696は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のへら描き沈線のまとまりが付けられている。この沈線は、半裁竹管を使用した可能性がある。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が綾杉状に施されている。697は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部とやや下がった位置に突帯が2条巡っている。突帯には刻目が付いている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。頸部には、へら状工具による刺突文が巡る。698は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は弱く、口縁はやや広がる。口縁部外面には凹線が巡っている。体部内面には指頭圧痕が見られる。699は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部には凹線が巡る。700は、鉢で、底部を欠損している。口縁部はほぼ直立しており、口縁端部を肥

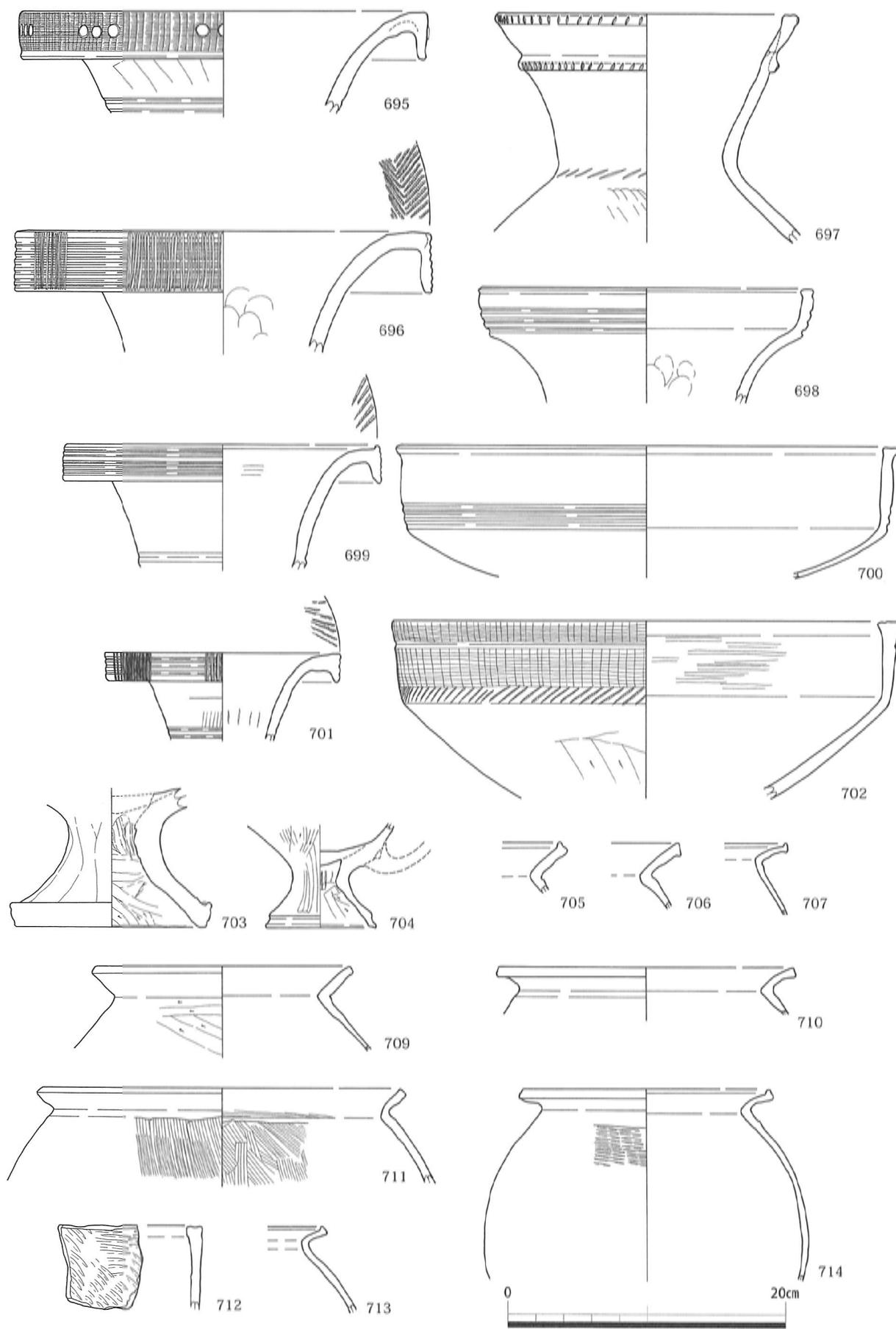


图112 大沟2出土土器(1)

厚らせて面を形成している。口縁部外面下端には、凹線が巡っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。701は、壺の口縁部である。口縁端部を下方に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部には凹線が巡る。702は、鉢で、底部を欠損している。口縁部はほぼ直立しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。口縁部外面には、簾状文が巡っている。体部の屈曲部には、斜め方向の刺突文が巡る。体部下半の外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施される。口縁部内面には、横方向のヘラミガキ調整が見える。703は、台付鉢の脚部である。厚手であり、端部は広がっており、肥厚させて面を形成している。704は、把手付鉢の脚部である。把手は欠損している。脚台の端部付近に突帯が2条巡っている。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

705～707は、甕の口縁部である。いずれも口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。口縁端部の仕上げの違いが見られる。705は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。706は、口縁端部をやや下方向に広げている。707は、薄手のもので、口縁端部を肥厚させて面を形成している。外面に煤が付着している。709は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反している。薄手のもので、口縁端部をあまり肥厚させていない。体部外面に横方向のヘラケズリ調整が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。710は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反している。口縁端部を肥厚させて面を形成している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。711は、やや大型の甕の口縁部である。口縁端部をあまり肥厚させていない。体部外面の上半部に縦方向のハケ調整が施されている。体部内面には、縦方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。712は、真蛸壺形土器の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。外面には、斜め方向のタタキ調整が明瞭に残る。713は、小型壺の口縁部付近である。口縁は強く外反する。口縁端部をやや上方向につまみあげている。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。714は、甕の上半部である。口縁は強く外反する。口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面の上半部には、斜め方向のタタキ調整が残る。

図113は、甕の口縁部付近を集めたものである。いずれも口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。715は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。体部外面の上部には、横方向のタタキ調整が残る。その下にヘラ状工具による刺突文が巡る。瀬戸内系の影響をうけたものと考えられる。716は、口縁端部を上方向につまみあげている。外面に煤が付着している。717は、口縁端部を上方向につまみあげて面を形成しており、凹線を巡らしている。体部内面には指頭圧痕が見られる。外面に煤が付着している。718は、口縁端部を肥厚させて面を形成している。体部外面の上部には、横方向のタタキ調整が残る。719は、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。体部外面には、横方向のタタキ調整が残る。体部内面には、横方向のハケ調整が見られる。720は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。口縁は強く外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられるが、結晶片岩が含まれていない。721は、口縁端部を肥厚させて面を形成している。体部外面の上半部に縦方向のハケ調整が施されている。722は、口縁端部を上方向につまみあげて面を形成しており、凹線を巡らしている。体部外面には、横方向のタタキ調整が残る。723は、大型品である。口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。体部外面の上半部に斜め方向のハケ

調整が施されている。体部内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。724は、口縁端部を上方向につまみあげて面を形成しており、凹線を巡らしている。体部外面の上半部に斜め方向のハケ調整が施されている。725は、口縁端部を肥厚させて面を形成している。体部外面には、横方向のタタキ調整が残る。726は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。外面に煤が付着している。727は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。外面に煤が付着している。728は、口縁端部をやや上方向につまみあげている。口縁は強く外反する。口縁部に熱を受けて赤く変色している。

大溝1出土のものも含めて、K区南半部で出土した石器を、図115に示す。734は、大溝1の中層から出土したもので、緑色片岩製の石庖丁である。半分以上欠損しており、かろうじて紐孔が確認できるほどである。刃部と背部に打撃痕がわずかに残っている。735は、大溝1の4層から出土したもので、緑色片岩製の大型石庖丁である。刃部全体に光沢がある。かなり欠損しており、紐孔も確認できない。火を受けた可能性がある。736は、大溝2から出土したものであるが、大溝1の可能性もある。緑色片岩製の石庖丁である。縁辺部が欠損しており、両刃と裏面が剥落している。737は、大溝2から出土したもので、砂岩製の砥石であるが、台石の可能性もある。直方体の礫を利用している。表面のみに打撃

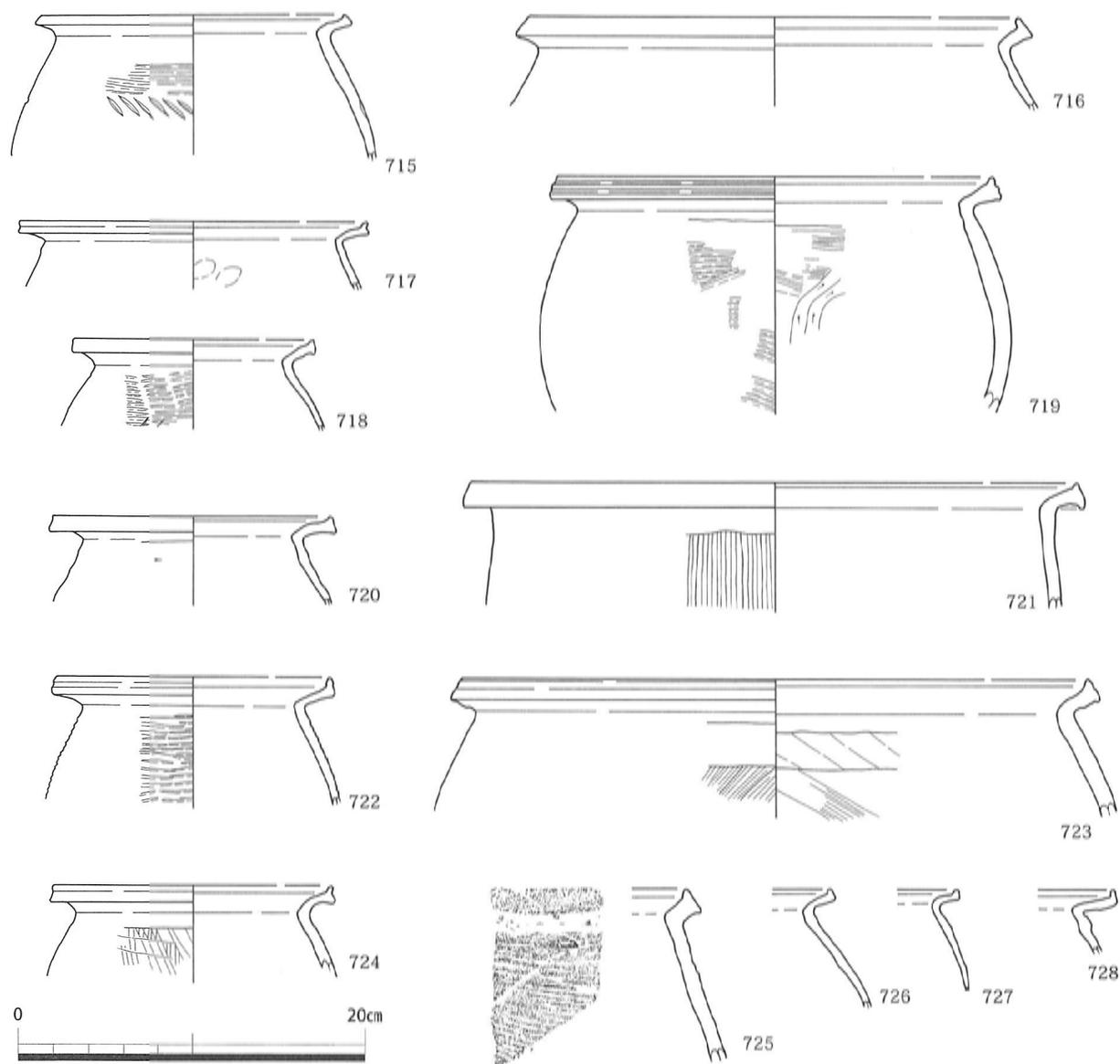


図113 大溝2出土土器(2)

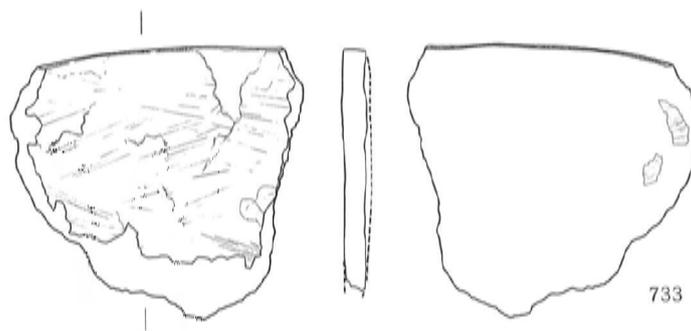
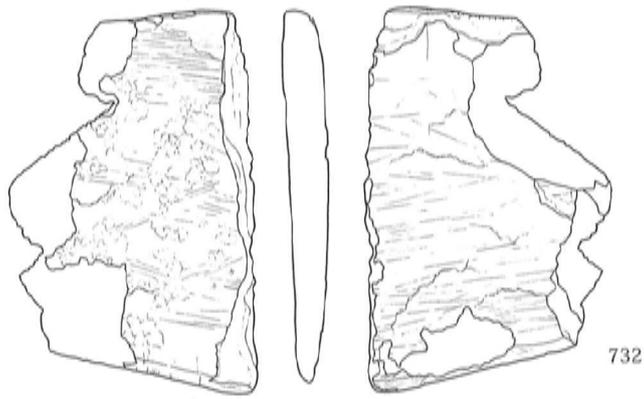
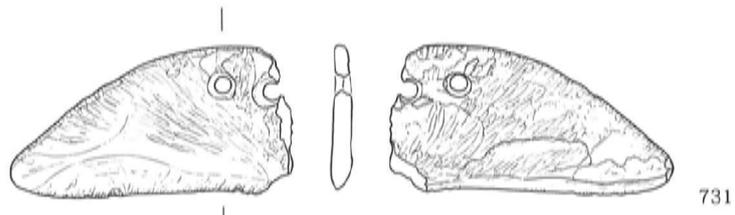
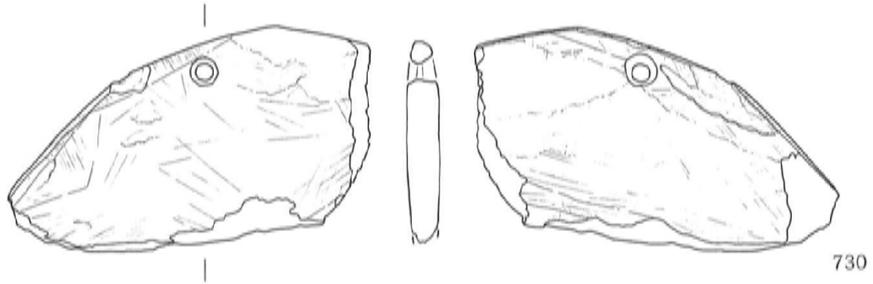
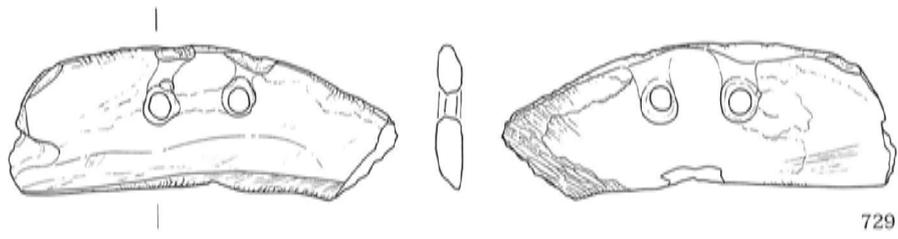


图114 大沟1出土磨製石器(2)

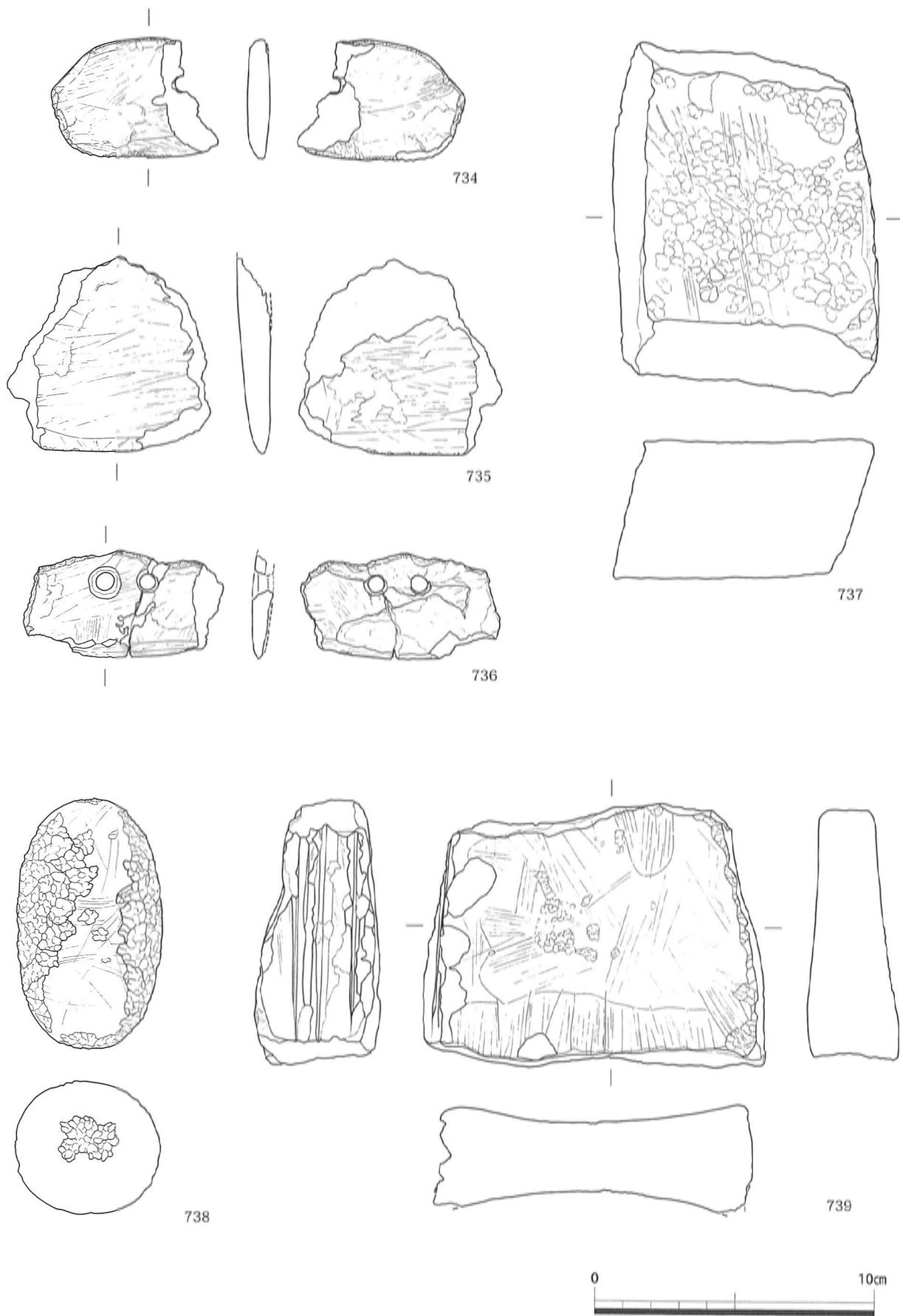


图115 大溝1出土磨製石器(3)

痕や線条痕が見られる。全体に火を受けている。738は、大溝1の4層から出土したもので、砂岩製の叩き石である。両側面と上下両端部に叩打痕が見られる。中央部を一部研磨している。739は、大溝1の3層から出土したもので、砂岩製の砥石である。表裏面共に浅く窪んでいる。1側面に断面V字状の溝がみられる。矢柄を研磨したものと考えられる。

○区西端部（図116、図版51）

K区南半部でほぼ東西方向にのびる大溝1は、調査区の西側でほぼ直角に屈曲し、南方向に向かうものと考えられる。○区の北側縁辺部に沿って通るかたちであり、○区の西端部で調査区の西側に下がる落ち込みを検出している。ちょうど大溝1の東肩部分を検出したことになり、形状ははっきりしないが、大溝1が調査区の外側を通っていることがわかる。地形から見ても、調査区の境界に水路が流れていることや区画の境界となっていることから、この位置に流路が存在したといえる。調査時には、大溝1の存在を認識していなかったが、弥生土器をはじめとする遺物が多く出土している。

検出された部分は、最大で延長約8m、幅約3m、深さ約40cmを測る。肩部のみの検出で、底の状況は不明であるが、埋土の状況を観察することができた。自然流路を利用したものと考えられるが、肩部の落ち目はゆるやかであり、他の地区で見られるような急な斜面ではない。肩部から底にかけては、暗オリーブ褐色粘質シルトを主体とする層で、炭化物を含む。人為的に埋められた層であり、遺物を多量に含む。上層は、にぶい黄褐色粘質シルト層である。地山は粘質シルト層であり、この調査区の竪穴住居がつくられていた部分での締まった礫層は見られない。この部分では、大溝1の底部までは調査が及んでいないため、存続していた時期の状況は不明である。

ここでも、遺物量のわりには、完形になるものは少ない。この部分で出土した弥生土器を図116に示す。740は、壺の口縁部である。口縁は強く外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。熱を受けて赤く変色している。741は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、円形浮文が3点1組で付けられているほか、縦方向のヘラ描き沈線も見られる。742は、壺の口縁部である。口縁端部をやや肥厚させて面を形成しており、外面に凹線が巡る。743は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は弱く、口縁はやや広がる。口縁端部には刻目が付けられている。頸部には押捺突帯が巡っている。744は、壺の口縁部である。口縁の外反は弱い。口縁端部は肥厚させていないが、面を形成している。745は、甕の口縁部である。口縁端部を強く外反させており、やや肥厚させて面を形成している。746は、台付鉢の脚部である。端部付近に凹線を2条巡らす。中央部に円孔を連続してあけている。747は、甕の口縁部である。口縁の外反は弱い。口縁端部は丸くおさめている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。748は、底部であるが、甕か壺の判別はできない。底は平坦である。749は、高杯の脚台部である。端部は広がっており、肥厚させて面を形成している。中央部に円孔をあけている。750は、甕の蓋のつまみ部である。砂岩の円礫を含む。751は、甕の底部である。底は平坦である。752は、壺の底部である。体部と底部外面にヘラケズリ調整が見られる。破損部を一部擦って再加工している可能性がある。753は、甕の底部である。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。754は、真蛸壺形土器の底部である。体部外面には、横方向のタタキ調整が残る。755は、壺の底部である。底は平坦である。756は、壺の底部である。底は平坦である。757は、甕の底部である。底部の貼付け部外面に指頭圧痕が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。758は、真蛸壺形土器の底部である。雑なつくりで、底部外面中央がへこんでいる。759は、壺の底部である。底は平坦である。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。760は、壺の底部である。底は平坦である。761は、

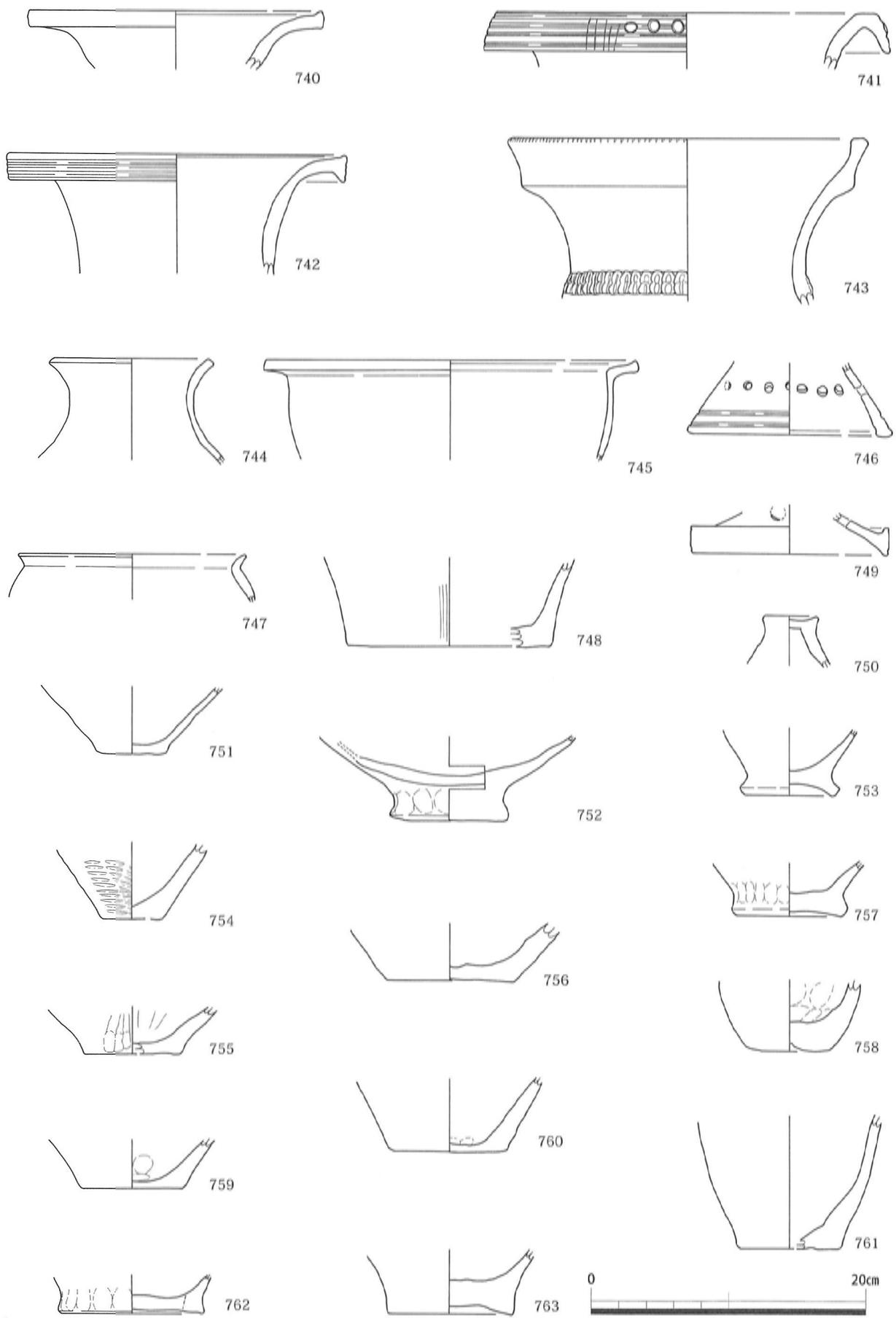


图116 大溝1出土土器(19)

真蛸壺形土器の底部である。底は平坦である。762は、壺の底部である。底は平坦である。底部の貼付け部外面に指頭圧痕が見られる。763は、甕の底部である。一部、熱を受けて赤く変色している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

S区 (図117、118、図版51、69)

S区は、市道の付け替え部分にあたる調査区である。地山面が、地表面より2m以上下がることから、全体の掘削をそこで止め、中央部に幅3mのトレンチをいれたのみで、調査を終了している。この調査区では、ピットや竪穴住居などの遺構は検出されていない。厚い盛土層の下に中世以降の耕作土層が堆積しており、遺物包含層が見られるのみである。具体的な遺構を示す土層は見られないが、下部で粘土層や砂層が確認されており、土器などの遺物が多く含まれる層も見られる。また、大溝1がO区の西端部で南方向にのびることが想定されることから、ちょうどS区部分が大溝1が通っているといえる。土層の観察からも追認することができる。地形的に見ても、この方向は旧河道に沿っており、現在の水路もほぼこの部分を流れており、区画の境界にもなっている。まとめると、S区で検出された粘土層や砂層、遺物の集中する包含層などは、大溝1の内部ということができ、大溝1がこの部分を流れているものと考えられる。トレンチ調査のため、具体的な形状は不明であるが、粘土層のレベルは、K区南半部で検出された大溝1の底部のレベルよりやや高い。全体の地形から見ると、南から北方向へ流れる流路といえることができる。

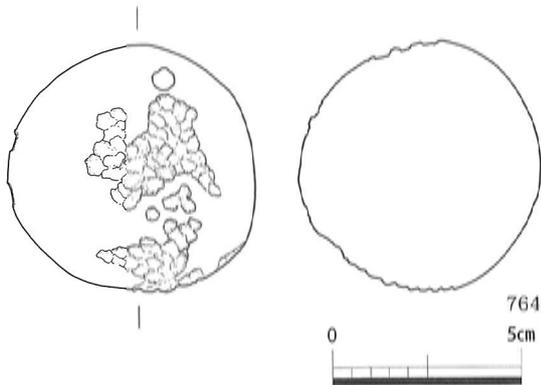


図117 大溝1出土磨製石器(4)

完形になる土器はないが、図化できた弥生土器を図118に示す。765は、壺の口縁部から肩部である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文と4本1組の縦方向のヘラ描き沈線が交互に付けられている。口縁部内側には、斜め方向の扇状文が施されている。頸部には凹線が巡る。肩部には、直線文と波状文が巡っている。外面に煤が付着している。766は、受

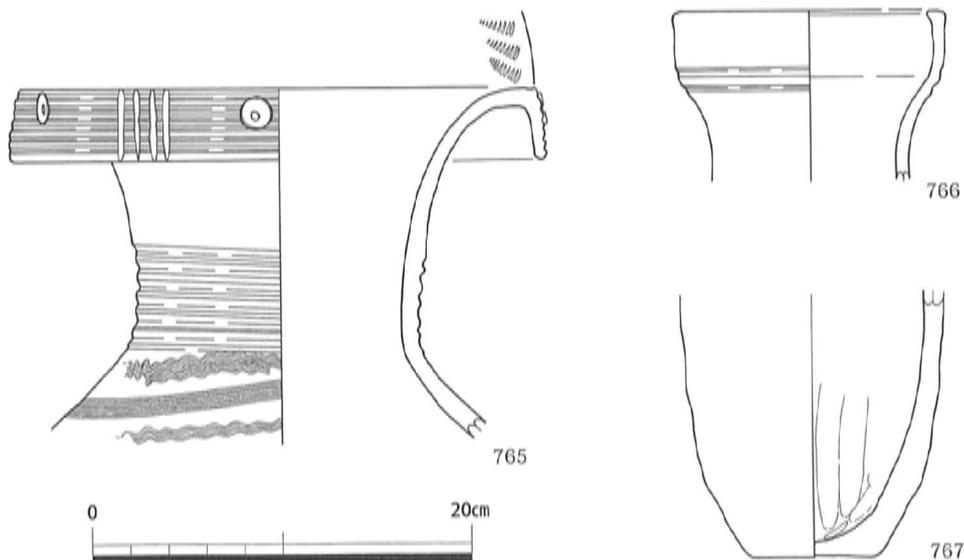


図118 大溝1出土土器(20)

け口状口縁壺の口縁部である。いずれも、受け口部の屈曲は弱い、口縁はやや内湾する。口縁部の下端には、凹線が巡る。767は、真蛸壺形土器の底部である。内面には縦方向のナデ調整が見られる。図117-764は、粘土層から出土したもので、砂岩製の叩き石である。投弾の可能性もある。球状の礫を利用して、上下両端と片面に叩打痕が残っている。

小結

大溝1・2の成果は、以上であるが、ここで簡単にまとめておきたい。

まずは、流路の形状および位置についてであるが、繰り返して述べているように、もともとあった自然流路を利用したものと考えられる。ほぼ男里川の旧河道の東端にあたる段丘崖に沿って流れており、地形の制約を受けている。国道26号線との交差点付近から北西方向にほぼまっすぐ流れているが、O区の西端部をかすめながら、東側に屈曲し円弧を描きながら、ふたたび西方向に向かっている。これは、人為的な改変ではなく、自然流路をそのまま利用したものである。特にこの屈曲に関しては、地山の締まった礫層によるものと考えられ、流路が比較的軟らかいシルト層を追った結果、このような形状を呈するようになったものといえる。

大溝1として利用するにあたって、肩部を成形している状況が見られる。自然流路のまま利用しているのではなく、成形によって傾斜を急にしており、大溝1を明確にしている。検出された部分のうち、北半部ではこの傾向が見られ、特に集落側である東肩部でこの傾向が強い。集落との関係を見る上で、意味のある点だと考えられる。埋土の下層で、粘土層や砂層の堆積が確認された部分が多く、流路として流れていた時期やほとんど流れがなく、堀のような状況であった時期も存在したことがわかる。環状を呈していないことから、環濠とはいえないが、推論として、日常生活における不要品の廃棄施設、防衛的な意味も考えることができ、環濠集落における環濠と同様の意味をもっていたことも考えられる。具体的な利用の状況ははっきりしないが、集落にとっては重要なものであったといえる。

埋土には、多量の弥生土器を含んでいる。特に中層から上層にかけては多く出土しており、人為的に一気に埋められた状況である。それもただ埋めているだけではなく、沈下を防ぐために、土器片を入れて固めている。これらの土器は、完形のものほとんどなく、大きな破片でも接合するものは少なかった。集落内からの遺物の出土量は極端に少ないため、大溝の廃絶の際にかき集めてすべて投入したかのようである。K区南半部では、大溝1の上につくられた大溝2の存在も確認されたが、全体形状がはっきりしないため、どのような性格のものかは不明である。また、大溝1の出土遺物との間には時期差はあまり顕著ではなく、あまり存続しないうちに廃絶したものと考えられる。

ここでは、あまり出土遺物については触れないが、大溝1の出土遺物が弥生集落における遺物の大部分を占めることから、ある程度全体の傾向を示しているものといえる。出土遺物の内訳を見ると、甕と壺が大半で、高杯や鉢、真蛸壺形土器などが多い。雑多に埋められていることから、大型品の破片が多く見られ、小型品は小破片のものが多い。表面が摩滅しているものも多い。在地のものと考えている土器は、やや白っぽい胎土で、全体に焼きがあまく、軟質であり、表面が剥離しているものが多い。そのため、表面調整がわからないものも多く、個体数が多いわりには文様構成をあまり確認することはできなかった。その中で、隣接地である紀伊産と考えられる土器が比較的多く見られる。いわゆる結晶片岩を胎土に含むものである。これに対し、生駒西麓産とされる土器は極端に少なく、数えるほどにすぎない。また、瀬戸内系の土器もみつかっており、他地域との交流を見ることができる。

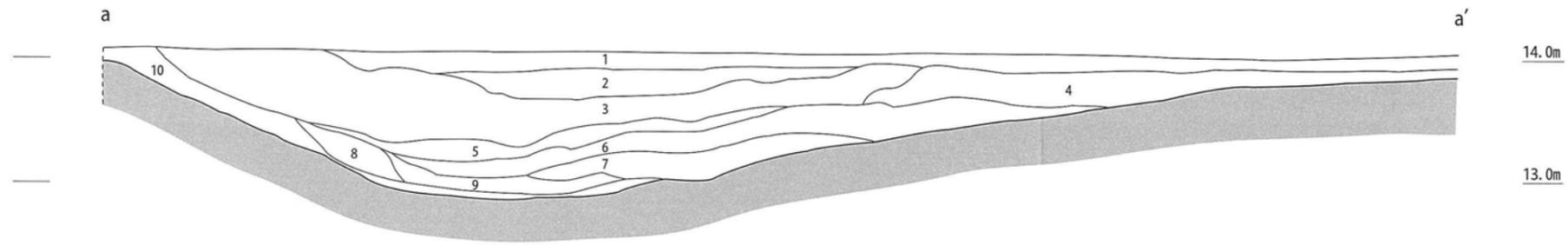
(2) 大溝3

大溝1が東へ回り込む部分の手前(南側)の東側で検出された。東肩から西へ向かう落ち込みが、P区の大部分とN区の一部に及んでいる。調査時には、大溝1も認識していなかったことから、自然流路の一部とされていたものである。その後、大溝1の全容が判明するにつれて、大溝1の流路との認識もされた時期がある。調査終了後の大溝1の流路の検証により、この落ち込みが流路からややずれていることがわかったため、別の大溝と判断し、大溝3と呼称することとした。大溝3は、単に流路がずれているだけではなく、隣接地は未調査であるが、南側の延長部分は存在せず、集落の内部に食い込むかたちを呈しているといえる。最終的な認識としては、調査区からやや離れた西側を走る大溝1に接続する、別の大溝と考えている。ただし、大溝3も新たに人為的に掘削されたものとは考えられず、自然地形を利用したものといえる。

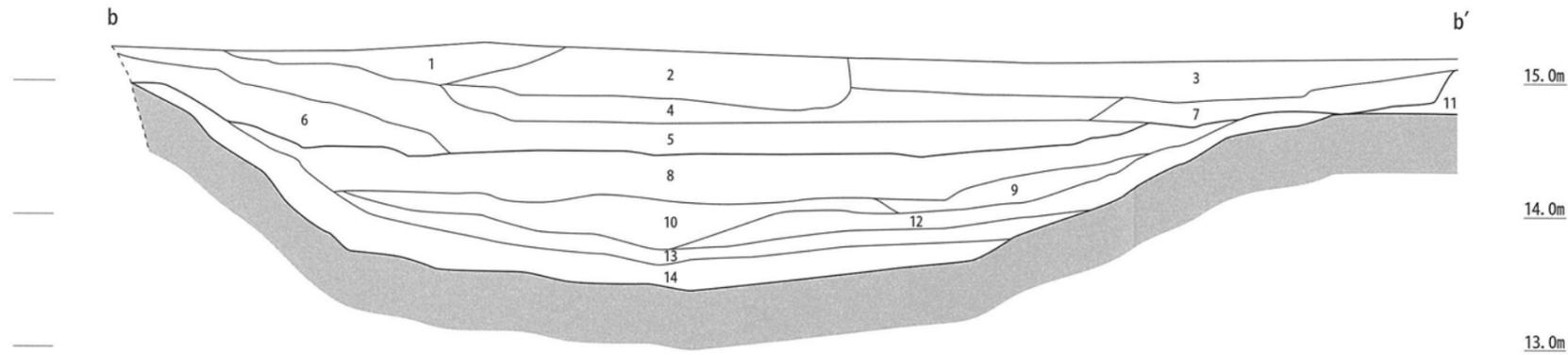
大溝1の様相とは異なり、検出された東肩から底にかけての傾斜はゆるやかである。竪穴住居の節でも述べたが、肩部が、大型の竪穴住居22・23と竪穴住居25のすぐ西側まで及んでおり、広場のように使われていたと推定される空間地に面している。また、竪穴住居20・21や掘立柱建物49も水際近くにつくられており、集落とは密接な関係があるものと考えられる。大溝1のような肩部の急な傾斜はなく、水際は浅くなっている。大溝1との合流部分は、O区の南側と考えられるが、未調査部分であるため、詳細は不明である。また、南側に関しても隣接地が未調査部分であることから、広がりを知ることはできない。肩部の延長線から見ると、そのまま集落内に入りこむが、この先にあたる調査区では検出されていない。このため、南側は、大溝1に合流するか、そのまま途中で途切れる形状といえる。大溝1に合流する形状とすれば、大溝1がこの部分で流路の幅を広げていることになり、それを利用したものと考えられる。また、途切れる形状とすれば、人為的に成形されている可能性があり、集落に隣接する部分で、大溝3をつくるための大規模な土木工事をおこなったものと考えられる。現状では、南側が未調査であるため、確定はできない。いずれにしても、集落に隣接する場所に肩部がゆるい傾斜をもった大溝をつくっていることになるため、集落にとって重要なものであったことが考えられる。

検出された部分は、最大で延長約40m、幅約10m、最深部で深さ約1.2mを測る。肩部から底部にかけての埋土の堆積状況を観察することができる(図119)。検出された部分の落ち込みは大規模なものであるが、底部の形状から、本来の流路は東肩に沿った部分を流れており、一段低くなっている。P区の南端部はやや浅くなっていることから、流路の底部は約3mの幅をもっていることがわかる。肩部から底にかけては、褐色粘質シルトを主体とする層であり、礫を含む。下層には粘土層の堆積は確認できないが、粗砂層が見られる。砂や礫を含む層が堆積していることから、常時ある程度の流れがあったといえる。また、逆に顕著な粘土層が見られないことから、流れの弱い水たまり状態であったとはいえない。大溝1とは異なった状況であったことがわかる。中層と下層は、いずれも褐色粘質シルトを主体とする層であり、多量の弥生土器をはじめとする遺物が出土している。大溝1の埋土と同様に、人為的に埋められたものであり、雑多に放り込まれたかたちで遺物が出土している。大溝1とほぼ同時期に廃絶した可能性があり、集落の廃絶時に一気に大溝を埋めて整地したことも考えられる。上層は、黄褐色シルト層であるが、大溝3廃絶以降の遺物包含層であり、人為的に埋められたものではない。

中・下層から、多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。遺物量のわりには、完形になるものが少ない。この部分で出土した弥生土器を図120～122に示す。図120-768は、壺の口縁部と体部下半であるが、図上で復元できたものである。口縁端部を下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。



- | | | | | |
|--------------------|----------|--------------------|----------|----------|
| 1. 10YR 5/6 黄褐色 | シルト | 6. 10YR 4/4 褐色 | シルト | 小礫含む |
| 2. 2.5Y 5/4 黄褐色 | シルト | 7. 10YR 4/4 褐色 | 粗砂混じりシルト | 小礫含む |
| 3. 10YR 3/2 黒褐色 | 粘土混じりシルト | 8. 10YR 4/3 にぶい黄褐色 | シルト | |
| 4. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 | シルト | 9. 2.5Y 5/1 黄灰色 | シルト | |
| 5. 10YR 3/3 暗褐色 | 粘土混じりシルト | 10. 2.5Y 5/4 黄褐色 | シルト | |
| | | | | 小礫・炭化物含む |



- | | | | | | | |
|--------------------|-----|--------------------|----------|--------|---------------------|----------|
| 1. 10YR 6/4 にぶい黄褐色 | シルト | 6. 10YR 3/3 暗褐色 | シルト | 礫少量含む | 11. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 | シルト |
| 2. 礫層 | | 7. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 | シルト | | 12. 10YR 4/2 灰黄褐色 | 粘土混じりシルト |
| 3. 2.5Y 5/3 黄褐色 | シルト | 8. 10YR 3/3 暗褐色 | 粘土混じりシルト | 礫多量に含む | 13. 10YR 3/2 黒褐色 | 粘土混じりシルト |
| 4. 10YR 4/4 褐色 | シルト | 9. 10YR 3/3 暗褐色 | 粘土混じりシルト | 礫少量含む | 14. 10YR 4/1 褐灰色 | 粘土 |
| 5. 10YR 5/3 にぶい黄褐色 | シルト | 10. 10YR 3/2 黒褐色 | 粘土混じりシルト | 礫少量含む | | |

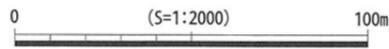
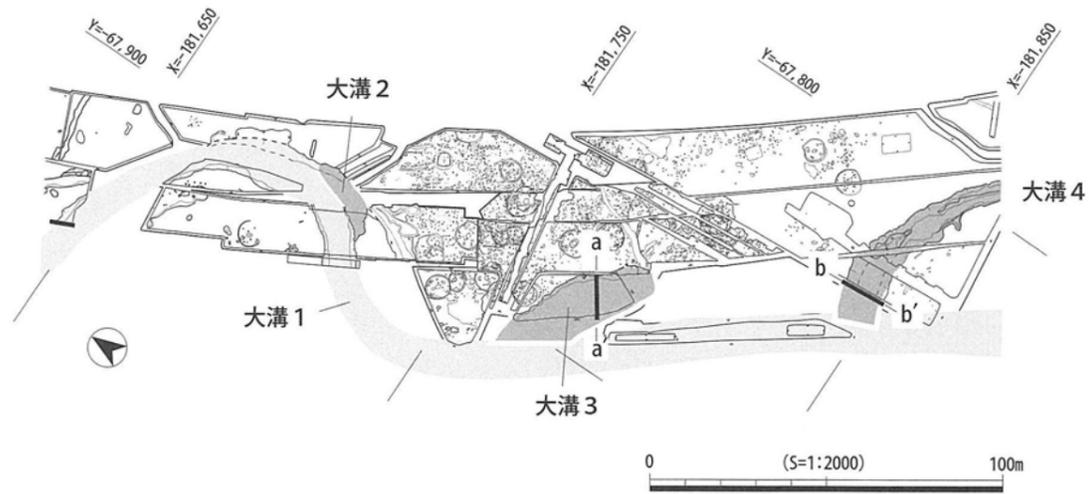
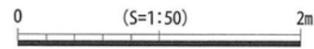


図119 大溝3・4断面図

口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。体部最大径付近には波状文が巡っている。その下の外面には、横方向のヘラミガキ調整、さらにその下の底部にかけては、縦方向のヘラミガキ調整が丁寧に施されている。体部内面には、縦方向のハケ調整が見られる。769は、小型壺の口縁部である。口縁は強く外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成しており、外面に波状文が巡る。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部の外面には波状文が巡っており、その下に直線文が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。770は、壺の口縁部である。厚手で口縁端部を下方向に広げており、外面に波状文が巡る。波状文の上には、円形浮文と縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが交互に付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。口縁部内面には横方向のハケ調整が見られる。771は、壺の口縁部から肩部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、円形浮文が連続して付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部の外面には、縦方向のハケ調整が見られる。頸部から肩部にかけては、簾状文と列点文が巡っている。772は、受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部外面の上半には凹線、下半には波状文が巡っている。773は、壺の口縁部である。厚手で口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。774は、壺の口縁部である。口縁端部をやや肥厚させて面を形成しており、外面に凹線が巡る。口縁部内側には、波状文が巡っている。頸部の外面には波状文が巡っており、その下に直線文が見られる。口縁部内面には横方向のナデ調整が見られる。775は、器台の口縁部であるが、壺の可能性もある。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、円形浮文が連続して付けられている。頸部の外面には、凹線が巡っている。776は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、竹管文を付した円形浮文と縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが交互に付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が綾杉状に施されている。さらに、3点1組の孔があげられている。777は、小型の無頸壺である。口縁部付近が欠損している。内外面ともヘラケズリ調整が施されている。口縁部付近に円孔があげられている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。778は、壺の底部である。体部下方向に焼成後の穿孔が見られる。779は、無頸壺の上半部である。口縁端部の外面には、斜め方向の刺突文が巡っている。その下には、簾状文と斜め方向の刺突文が施されている。口縁部に2点1組の孔があげられている。

図121-780は、小型壺の蓋で、完形品である。781は、壺の蓋で、端部に2点1組の紐孔があげられている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。782は、壺の蓋で、つまみ部がへこんでいる。端部をやや肥厚させて面を形成している。外面には、縦方向のハケ調整が見られる。内面に煤の付着が著しい。783は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、断面は逆「く」の字状を呈しており、口縁は内湾する。口縁部外面には凹線が巡っている。784は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は弱い、口縁はやや内湾する。口縁部の上端と下端には、凹線が巡る。785は、直口壺の口縁部である。受け口状口縁壺の受け口部が退化したような形状で、口縁付近の外面に凹線が巡っている。口縁はやや内湾気味である。786は、広口壺の口縁部である。口縁は外反する。口縁付近の外面に凹線が巡っている。口縁端部は丸くおさめられている。

787は、真蛸壺形土器で、底部を欠損している。体部下半の外面には、斜め方向のナデ調整が顕著に見られる。内面には縦方向のナデ調整が施されている。788は、厚手で、やや大きい飯蛸壺である。体部外面には、斜め方向のナデ調整が顕著に見られる。789は、飯蛸壺である。口縁部からやや下がった部分に円孔をあけている。ナデ調整で成形されている。790は、台形土器の上部である。台部の上面は

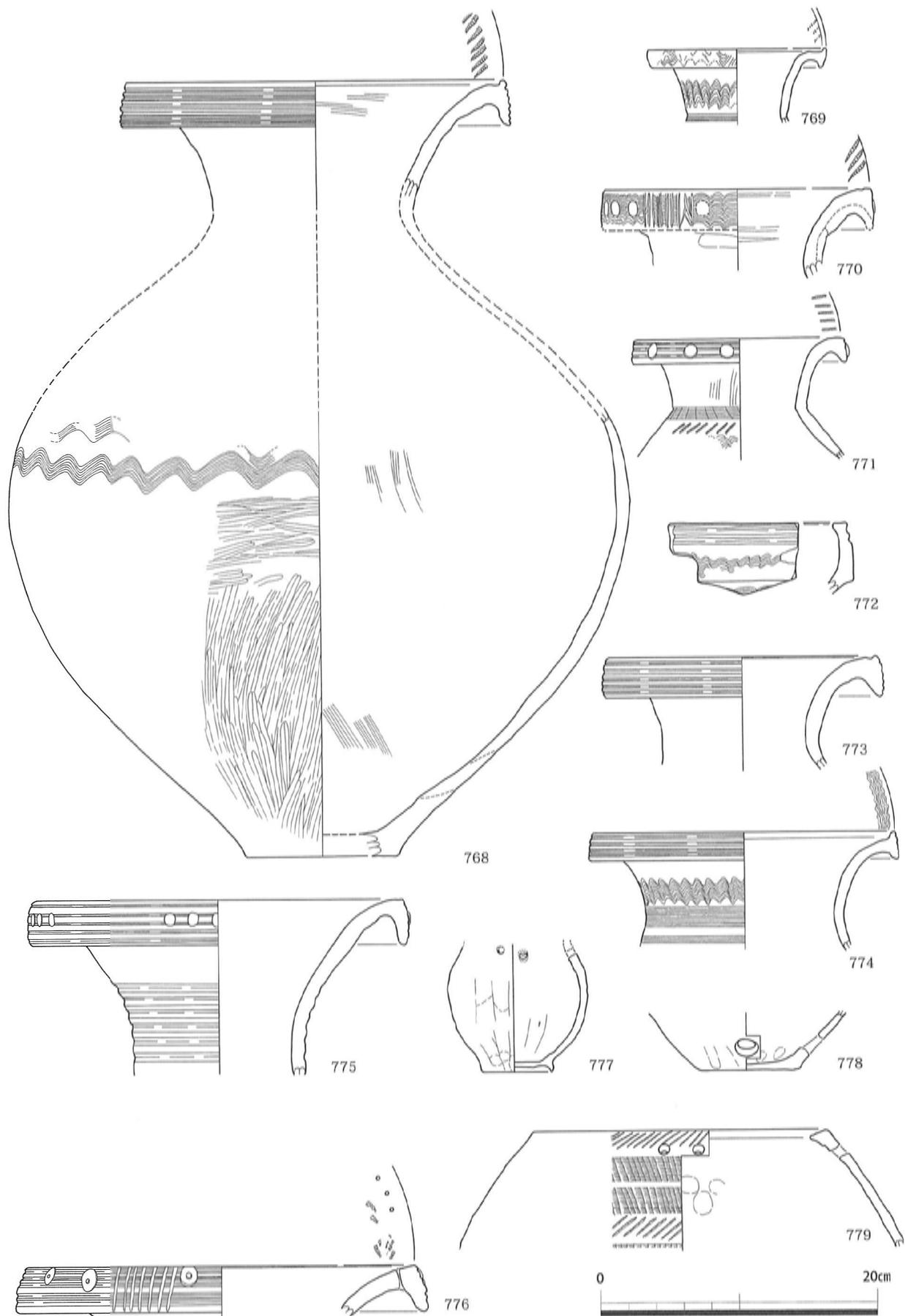


图120 大溝3出土土器(1)

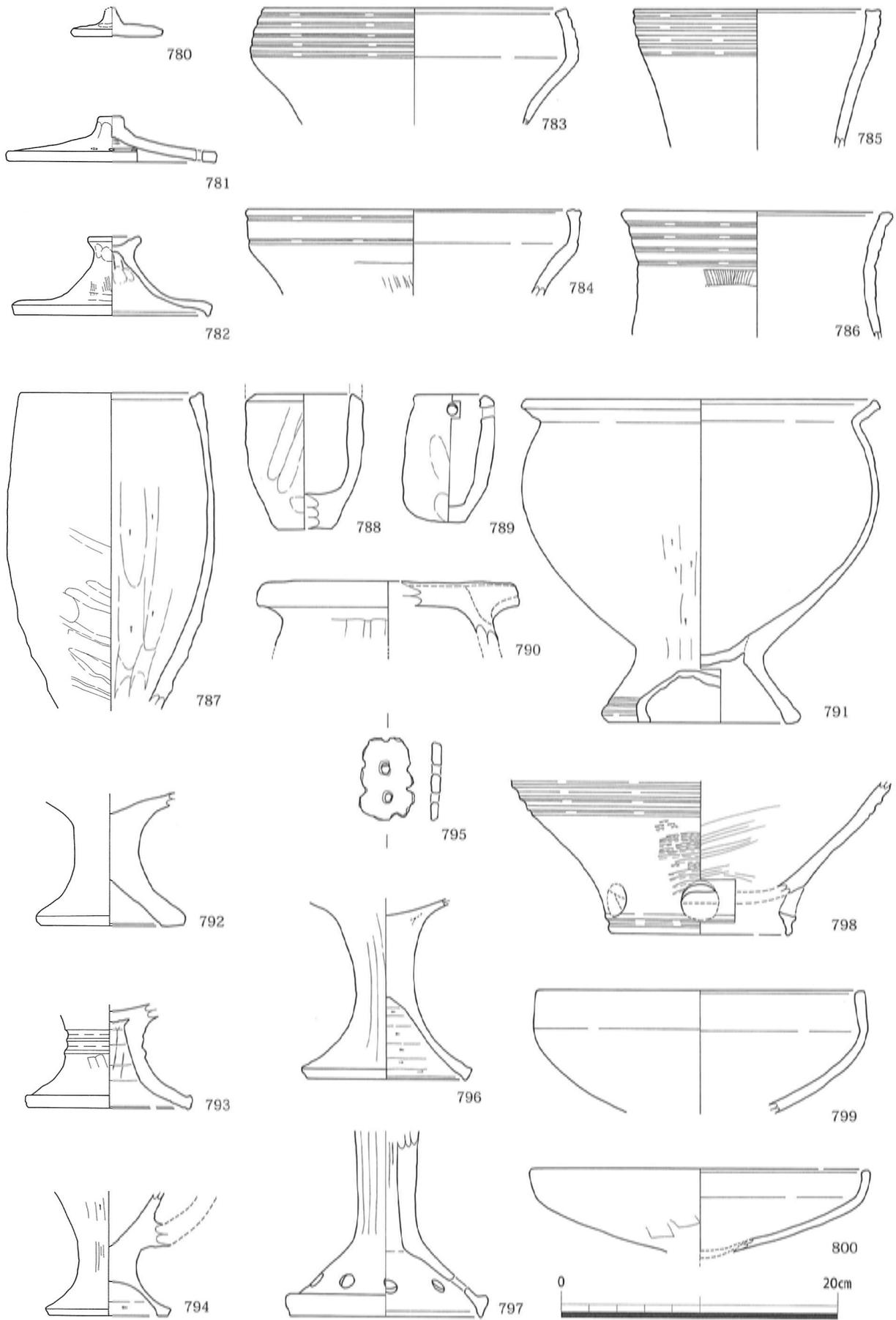


图121 大沟3出土土器(2)

丁寧に調整されている。外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。一部、熱を受けて赤く変色している。791は、台付鉢である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。体部外面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。脚台部の端部付近には、凹線が巡る。脚台部の一部を切り欠いているものと考えられる。792は、高杯脚部である。円板充填が2ヶ所見られる。793は、高杯脚部である。端部を肥厚させて面を形成している。脚部中央には、突帯が巡っている。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。794は、把手付鉢の脚部である。把手は欠損している。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。795は、台付鉢の脚部の破片である。脚部の円孔部分を再加工したものである。796は、高杯脚部である。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。797は、高杯脚部である。脚柱部外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。脚台部には、円孔が巡っている。端部を肥厚させて面を形成している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。798は、台付鉢の下部である。体部上半を欠損している。体部外面の中央部には凹線が巡っている。体部の底部付近には、横方向のタタキ目が残る。台部には円孔があげられている。台部の端には凹線が巡る。外面には煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。799は、高杯杯部で、底部以下を欠損している。杯部は深めである。口縁は内湾しており、断面はやや逆「く」の字状を呈している。口縁端部は、丸くおさめられている。800は、高杯杯部で、底部以下を欠損している。口縁はやや内湾気味である。口縁端部は、丸くおさめられている。外面には、縦方向のヘラケズリ調整が一部見られる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。

図122-801は、壺の上半部である。口縁がやや外反している。頸部以下の体部外面には、斜め方向のヘラケズリ調整が施されている。内面にはナデ調整が見られる。外面に煤が付着している。外面の調整から紀伊産の特徴をもっているが、胎土に角閃石が含まれることから、生駒西麓産の可能性もある。802は、鉢の上半部である。口縁は内湾しており、端部を肥厚させて面を形成している。体部外面には、横方向のヘラケズリ調整が施されている。内面にはナデ調整が見られる。

803は、甕の上半部である。口縁端部を上方向につまみあげて面を形成しており、凹線を巡らしている。体部外面には、上部は横方向、その下は斜め方向のタタキ調整が残る。内面には指頭圧痕が見られる。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。804は、高杯杯部の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方向に広げている。口縁端部に左下がりの鋸歯文が連続して付けられている。口縁上部の突帯に赤味がかかる異種の粘土を使用している。805は、甕の口縁部である。口縁部の外反は弱い。端部を肥厚させて面を形成している。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。806は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を両側に広げて面を形成している。体部外面には縦方向、内面には横方向のハケ調整が見られる。807は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を両側に広げて面を形成している。808は、甕の上半部である。口縁部の外反は弱い。体部外面には、横方向のヘラケズリ調整が施されている。809は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を両側に広げて面を形成している。頸部には押捺突帯が巡っている。半裁竹管状の工具で突帯およびその下部に押圧が見られる。一部、外面に煤が付着している。810は、大型の甕の口縁部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を両側に広げて面を形成している。体部外面に縦方向のハケ調整が施されているが、横方向のタタキ目が残っている。811・812は、甕の口縁部である。いずれも、口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を両側に広げて面を形成している。頸部には押捺突帯が巡っている。811は、

半裁竹管状の工具で突帯に押圧が見られる。

なお、大溝3出土土器の中には、図版58-1417・1418のように、底部に穿孔のあるものも見られる。いずれも、焼成前穿孔であり、底部の中央に位置する。1417は、径約1.1cm、1418は、径約0.7cmを測る。1417は、内部の状況を示している。

また、検出された大溝3のうち、南東端部にあたるN区南端部では、肩部であるが、まとまって遺物が出土している。周囲が未調査であるため、状況ははっきりしないが、特にこの部分になんらかの施設が設けられている可能性はないものと考えられる。肩部でやや大きな破片の遺物が集中して検出されたため、人為的に並べられた可能性も考えたが、完形になるものはなく、雑多に埋められており、他の部分での遺物の出土状況と基本的には変わらない。この部分で出土した弥生土器を図123～125に示す。

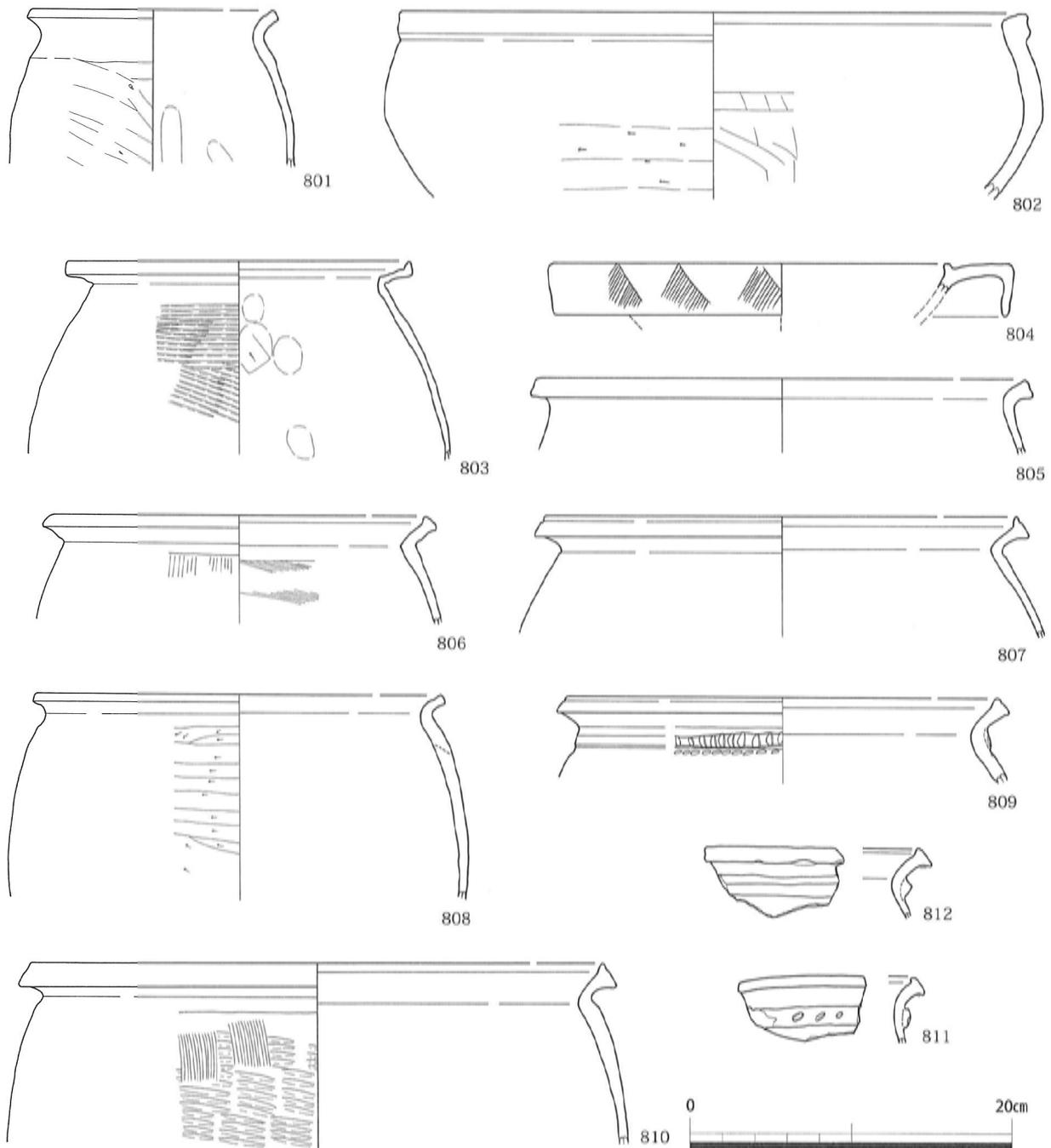


図122 大溝3出土土器(3)

図123-813は、壺の口縁部である。口縁端部をやや肥厚させて面を形成しており、外面に波状文が巡る。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。頸部の外面には直線文が巡っている。814は、壺の口縁部である。口縁端部を両側に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付けられている。口縁部内側には、斜め方向の扇形文が施されている。さらに、2点1組の孔があげられている。815は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が1条巡っている。口縁部上端と突帯の下には波状文が巡る。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。816は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が2条巡っている。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。口縁部外面に凹線が巡る。817は、壺の体部である。外面の上半は直線文が巡るが、文様帯を1条のヘラミガキで区画している。下半は横方向、底部付近は縦方向のヘラミガキ調整が施されている。内面には、縦方向のハケ調整が見られる。底は平坦である。

818は、細頸壺の口縁部である。口縁部外面の上部と下部には凹線が巡っている。その間には波状文が巡っている。口縁端部は、やや内湾している。内面には、指頭圧痕が見られる。819は、細頸壺の口縁部である。口縁部外面の上部には、凹線が巡っている。その下には、摩滅のためはっきりしないが、簾状文が巡るものと考えられる。口縁端部は、やや内湾している。820は、小型の受け口状口縁壺の口縁部である。口縁部外面には、簾状文が巡る。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。821は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が2条巡る。突帯の上には刻目が付けられている。口縁端部をやや内側に肥厚させている。822は、鉢の口縁部である。端部を肥厚させて面を形成している。体部外面には、摩滅のためはっきりしないが、直線文か簾状文が巡るものと考えられる。823は、鉢の口縁部である。端部を肥厚させて面を形成している。外面には、口縁端部からやや下がった位置に直線文が1条巡っている。その下には、波状文が巡る。

824は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は弱い、口縁はやや内湾する。口縁部外面に凹線が巡っている。口縁はやや内湾気味である。頸部外面には、縦方向のハケ調整が見られる。825は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、口縁はやや内湾する。頸部には押捺突帯が巡っている。頸部外面には、縦方向のハケ調整が見られる。826は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部の屈曲は強く、口縁はやや内湾する。摩滅のためはっきりしないが、口縁部外面には波状文が巡っている。肩部には直線文が巡る。827は、壺の口縁部である。口縁は外反しており、頸部はほぼ直立する。熱を受けて赤く変色している。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。828は、無頸壺の上半部である。外面には、口縁端部から直線文と波状文が交互に施されている。内面には指頭圧痕が見られる。熱を受けて赤く変色している。829は、無頸壺の口縁部である。鉢の可能性もある。口縁端部の外面には、凹線が巡る。830は、真蛸壺形土器の口縁部である。口縁はやや内湾する。口縁端部を肥厚させて面を形成している。831は、鉢の上半部である。口縁はやや外反しており、端部を肥厚させて面を形成している。口縁部の外面下端には、凹線が巡る。832は、壺の蓋と考えられるが、甕の蓋の可能性もある。端部を欠損している。833は、有孔円板である。土器片を再加工したもので、小型であるが、紡錘車の可能性がある。834は、有孔円板である。土器片を再加工したものであるが、穿孔の途中で、貫通していない。

図124-835は、台付鉢の脚部である。熱を受けて赤く変色している。836は、高杯脚部である。端部をややつまみあげて面を形成している。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。内面に

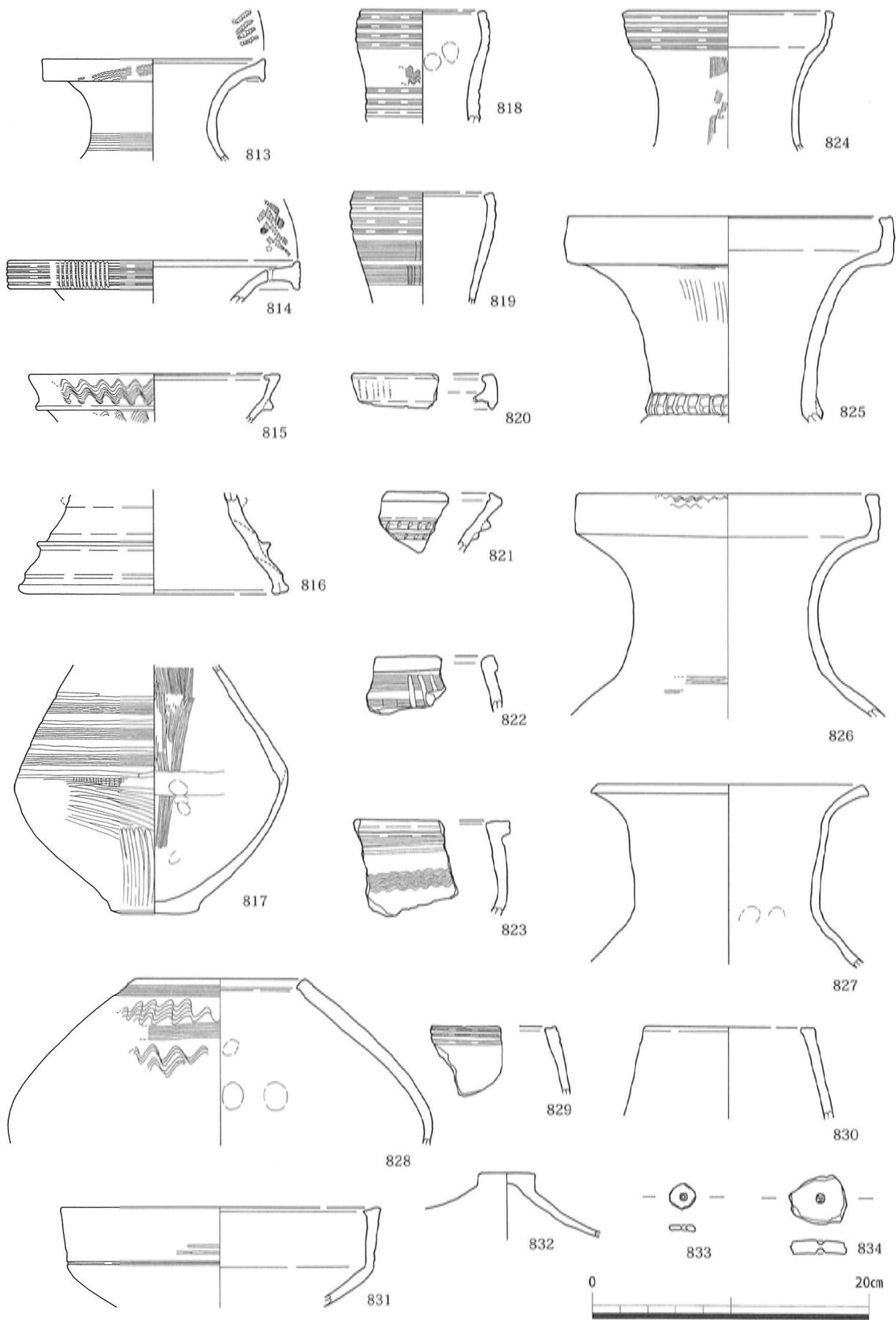


图123 大沟3出土土器(4)

は、ヘラケズリ調整が見られる。837は、高杯の脚部である。端部をややつまみあげて面を形成している。円孔が連続して付けられている。内面には、横方向のヘラケズリ調整が見られる。838は、器台の脚台部である。端部付近には、凹線がめぐる。中央部には、円孔が連続して付けられている。839は、真蛸壺形土器の口縁部である。口縁は内湾しており、口縁端部は面をなしている。外面には、斜め方向のタタキ調整が見られる。内面には、縦方向のハケ調整が見られる。840は、完形に復元することができた真蛸壺形土器である。口縁は内湾しており、口縁端部は面をなしている。外面には斜め方向のナデ調整が施されており、内面には縦方向のハケ調整が見られる。841～844は、真蛸壺形土器の下半部である。841は、外面に指頭圧痕が見られる。内面には、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。熱を受けて変色しているほか、外面に煤が付着している。842は、外面にヘラ状工具の調整痕が残っている。内面には縦方向のハケ調整が見られる。843は、熱を受けて赤く変色している。844は、外面に指頭圧痕が見られる。内面には縦方向のハケ調整が見られる。熱を受けて赤く変色しているほか、外面に煤が付着している。甕の可能性も考えられる。

845～852は、甕の口縁部付近である。いずれも口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。845は、外面に縦方向のタタキ調整が残る。外面に煤が付着している。846は、口縁の外反がやや強い。体部上半部の外面には縦方向のハケ調整が見られる。847は、胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。848は、口縁端部をややつまみあげている。体部上半部の外面には斜め方向のハケ調整が見られる。849は、やや大型品である。口縁の外反が強く、ほぼ水平になっている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。850は、口縁端部をややつまみあげている。体部外面に横方向のタタキ目が残っている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。851は、器壁が薄く、表面が剥落しているため、調整は不明である。852は、口縁端部をややつまみあげている。853は、真蛸壺形土器の底部である。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。底はややへこんでいる。

図125-854～862は、甕の口縁部付近である。いずれも口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。854は、口縁端部を少しつつまみあげている。体部外面には、縦方向の強いハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。855は、口縁端部を少しつつまみあげている。体部外面には、縦方向の強いハケ調整が見られる。内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。外面に煤が付着している。胎土に角閃石を含んでおり、生駒西麓産の可能性もある。856は、口縁端部を少しつつまみあげており、刻目が付けられている。体部外面には、縦方向の強いハケ調整が施されている。体部中央部にヘラ状工具による綾杉文が巡っている。内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。口縁部と体部外面に煤が付着している。胎土に金雲母が多く、角閃石の微粒を含んでいる。他地域産の可能性があり、施文の特徴などから、瀬戸内系と考えられる。857は、口縁部の外半は弱い。体部外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。内面には縦方向のナデ調整が見られる。858は、口縁端部をややつまみあげており、面を形成している。859は、大型品である。口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線を巡らしている。熱を受けて赤く変色している。860は、口縁端部を少しつつまみあげている。内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。861は、口縁端部をややつまみあげており、面を形成している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。862は、口縁端部を両側に広げて面を形成している。体部外面には、斜め方向のヘラケズリ調整が施されている。体部外面に煤が付着している。

863～865は、壺の底部である。863の底部内面には、縦方向のナデ調整が見られる。864・865の底部外面には、縦方向のナデ調整が施されている。866～868は、甕の口縁部である。いずれも口縁が、

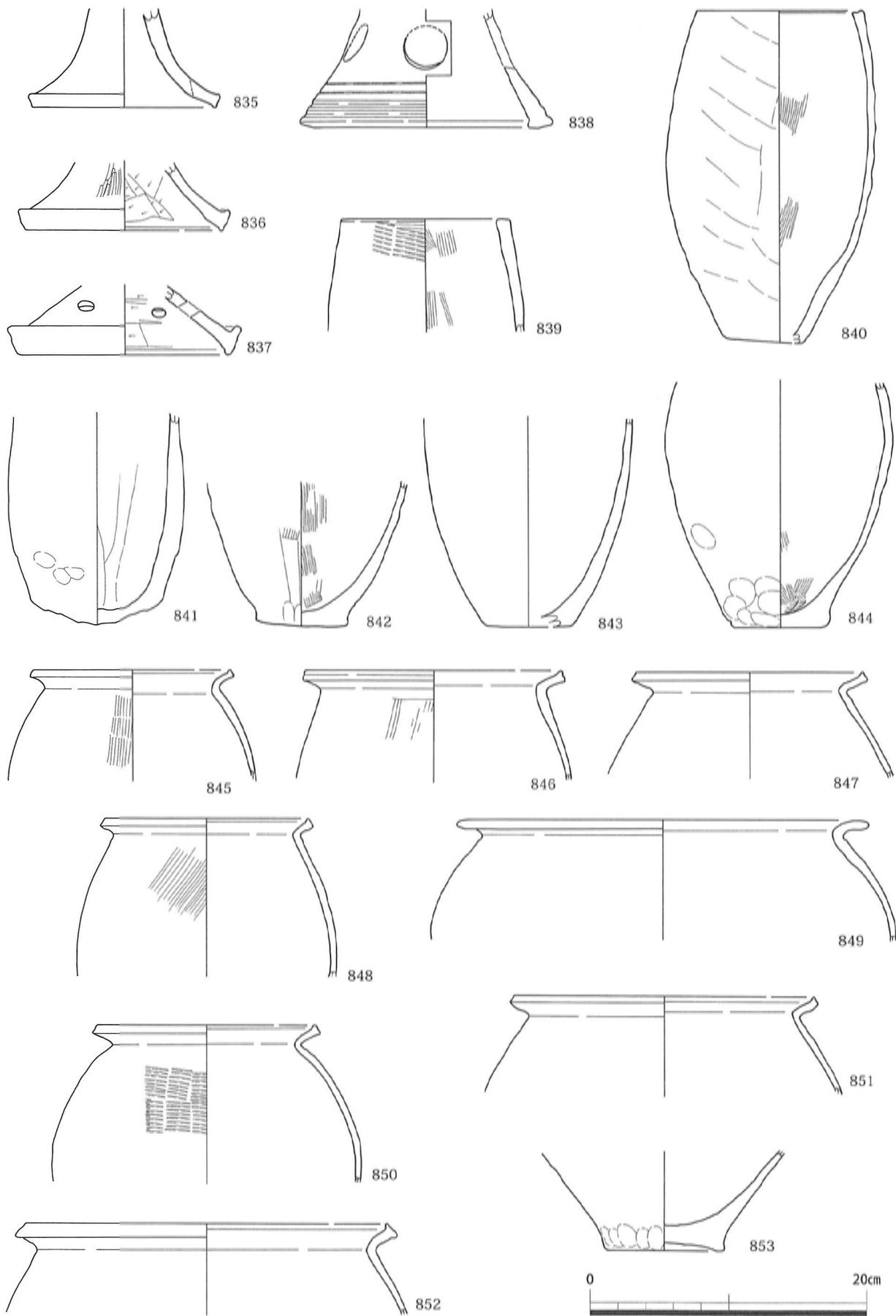


图124 大沟3出土土器(5)

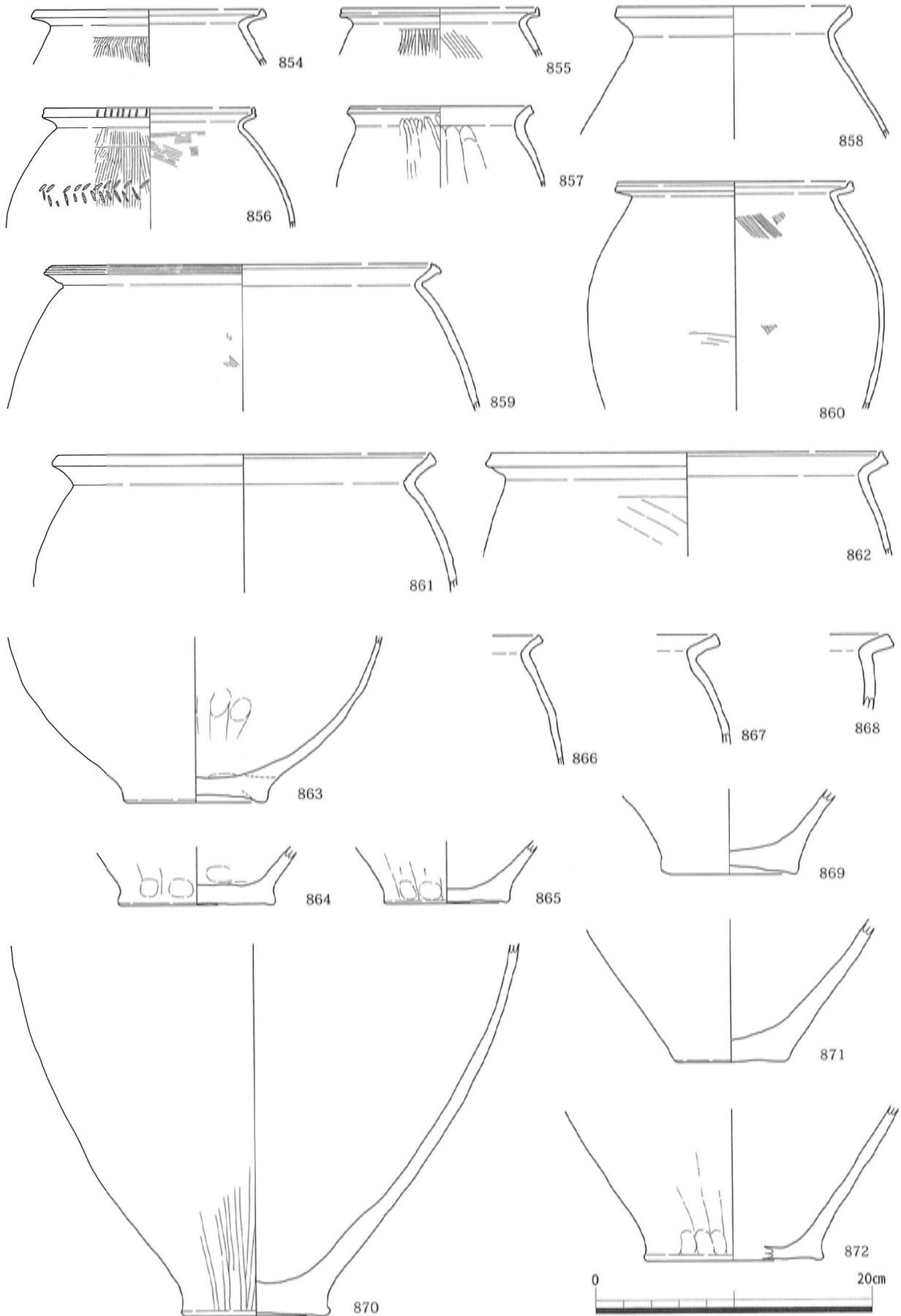


图125 大溝3出土土器(6)

くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。866は、外面に煤が付着している。869は、甕の底部である。底はへこんでいる。870は、甕の下半部である。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。871・872は、底部であるが、甕か壺かははっきりしない。872は、外面に縦方向のナデ調整が施されている。

大溝3からは、弥生土器のほかにも多くの石器が出土している。そのうち、打製石器を図126・127に、磨製石器を図128～132に示す。

図126-877は、細身の有茎式の石鏃である。先端部と茎部を欠損している。878は、凸基Ⅰ式の石鏃である。完形品であり、欠損や摩滅が見られない。879は、有茎式の石鏃である。先端部を欠損している。880は、平基式の石鏃である。一部欠損している。881は、石鏃の未成品である。先端部を欠損している。882は、細身の有茎式の石鏃である。茎部を欠損している。側辺部の仕上げが丁寧におこなわれており、細かい鋸歯状を呈している。883は、細身の有茎式の石鏃を転用した石錐である。上下両端に使用痕が認められる。884は、細身の有茎式の石鏃である。先端部を欠損している。茎部のエッジがわずかに摩滅している。885は、有茎式の石鏃である。先端部を欠損している。茎部のエッジがわずかに摩滅している。886は、Ⅱ類の石錐である。錐部に使用痕が認められる。厚みのある側面に自然面が残る。887は、Ⅱ類の石錐である。錐部に使用痕が顕著に認められる。長軸中央に一部自然面が残る。

図127-888は、石槍である。基部が残存している。左側縁からの剥離を除いて、風化が著しい。裏面の一部に自然面を残している。889は、石槍である。基部が残存している。890は、石鏃の未成品と考えられるが、スクレイパーの可能性もある。先端部を除いて周縁部が薄い。891は、凹基式の石鏃である。基端部の一方が欠損している。小型のもので、重量は1gにも満たない。892は、凸基Ⅱ式の石鏃である。茎部を欠損している。893は、スクレイパーである。背部に自然面が残っている。両面共に大剥離面が大きく残る。894は、細身の有茎式の石鏃である。先端部を欠損している。茎部のエッジがわずかに摩滅している。895は、Ⅱ類の石錐である。錐部に使用痕が認められる。896は、Ⅲ類の石錐である。錐部に使用痕が認められる。頭部のエッジがわずかに摩滅している。897は、石鏃の未成品である。両面共に中央に大剥離面が残る。金山産の可能性がある。898は、凸基Ⅱ式の石鏃を転用した石錐である。茎部に使用痕が認められる。899は、石槍である。基部が残存している。両側縁と基底部のエッジが鋭い。900は、石槍である。先端部が残存している。901は、凹基式の石鏃である。完形品であり、欠損や摩滅が見られない。902は、スクレイパーである。背部に自然面が残っている。903は、石鏃の未成品である。

図128-904・905は、緑色片岩製の柱状片刃石斧である。904は、刃部が欠損しており、破損した下端部に叩打痕が認められる。905は、基部と刃先が欠損している。刃先と破損した上端部に叩打痕が認められる。906は、砂岩製の磨石である。卵形の礫を使用しており、片側面中央に擦った痕跡が見られる。火を受けている。907は、砂岩製の叩き石である。棒状の礫を使用しており、一端が折れて欠損している。他方の端部の叩打痕はわずかである。両側縁に線条痕が認められる。礫錘の可能性もある。908は、緑色片岩製の石庖丁である。内湾刃のタイプで、大きな欠損はない。片刃で、紐擦れ痕が認められる。片刃の裏面の使用痕は顕著である。図129-909～914は、緑色片岩製の石庖丁である。909は、内湾刃のタイプで、一部欠損している。片刃で、両面に背方向の紐擦れ痕が認められる。背部に線条打撃痕が見られる。910は、内湾刃のタイプで、一部欠損している。片刃で、紐擦れ痕が認められる。刃面側に研磨痕が残る。911は、一部欠損している。片刃で、刃面側に背方向の紐擦れ痕が認められる。背部に

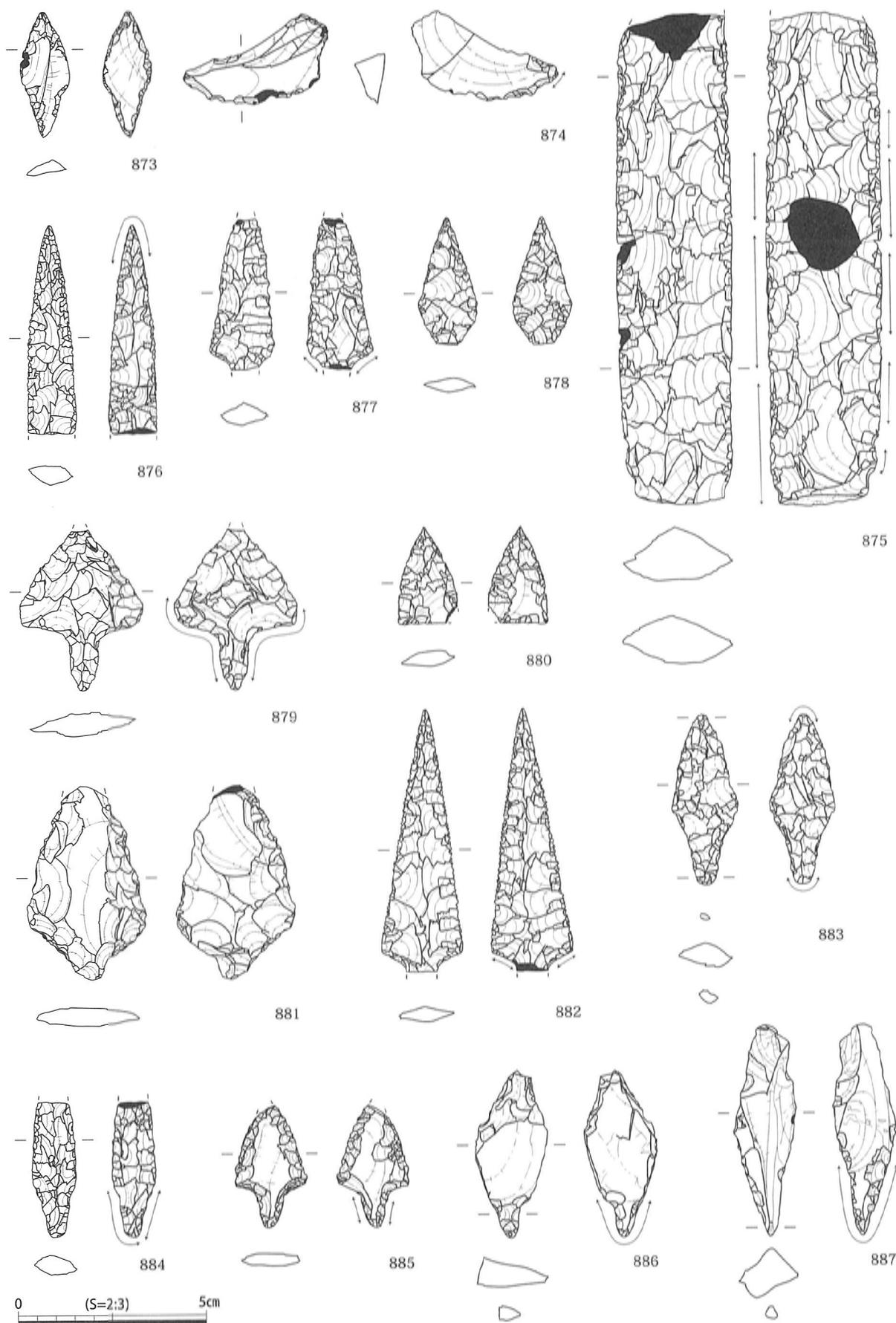


图126 大满1、3出土打製石器(1)

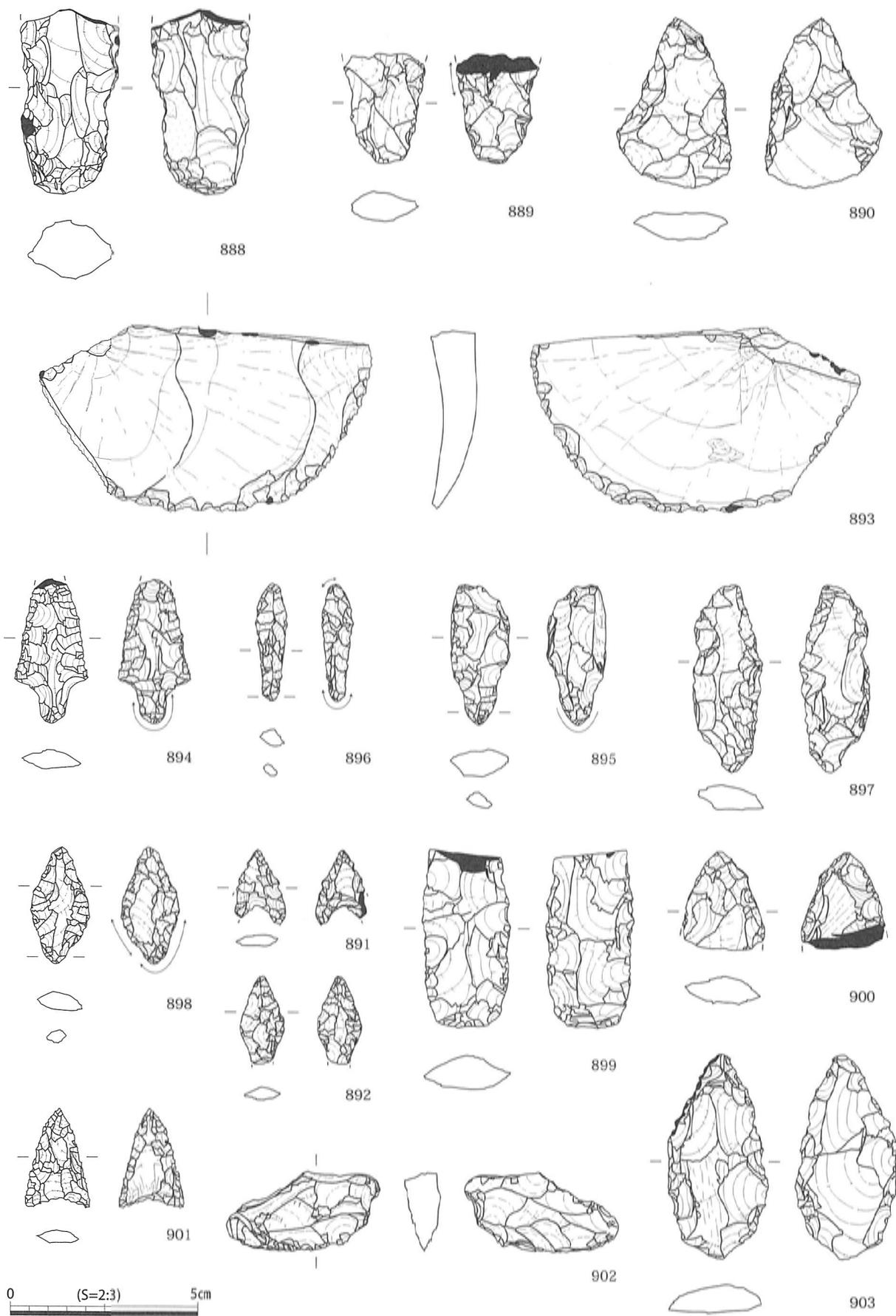


图127 大沟3出土打製石器(2)

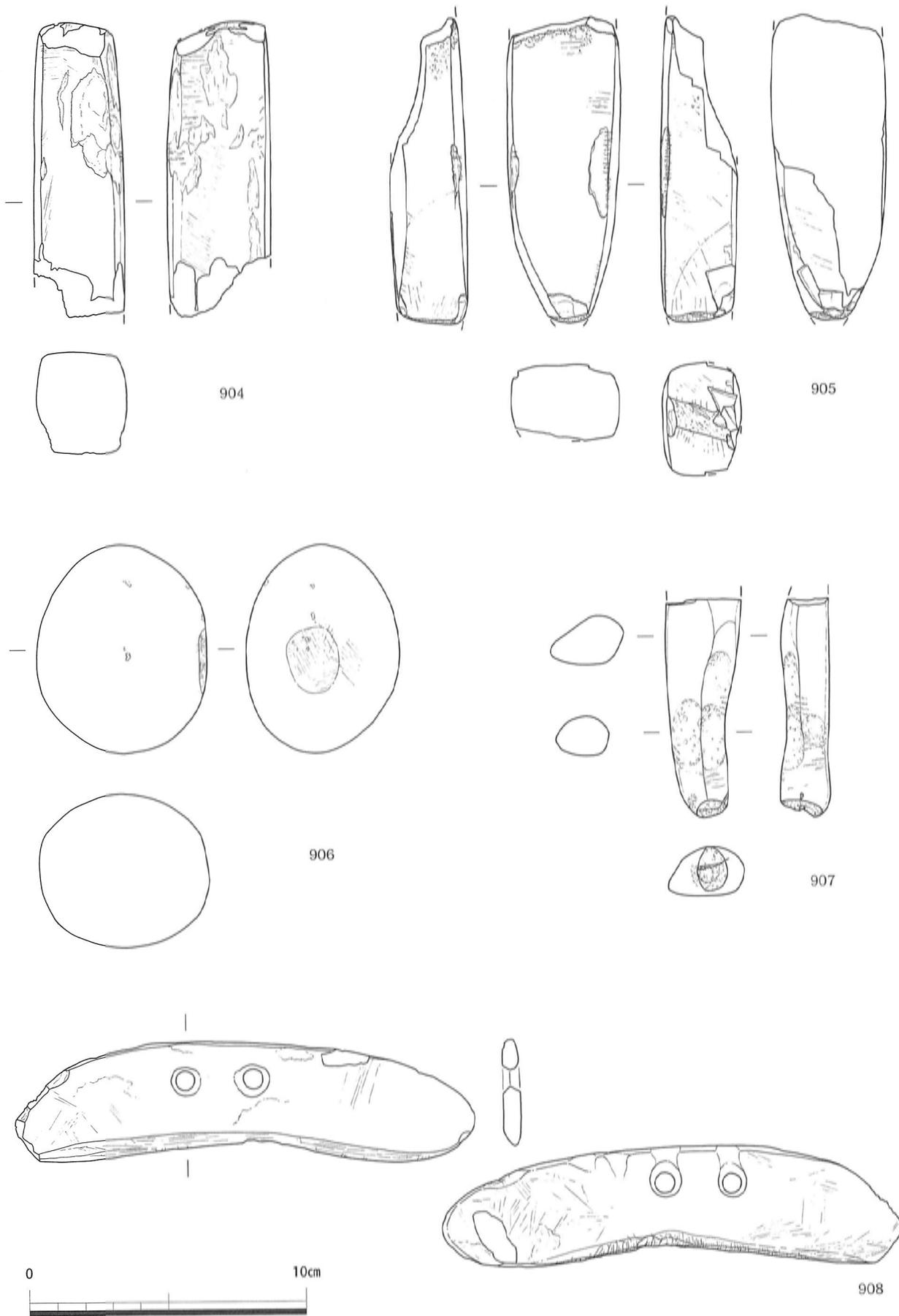


图128 大溝3出土磨製石器(1)

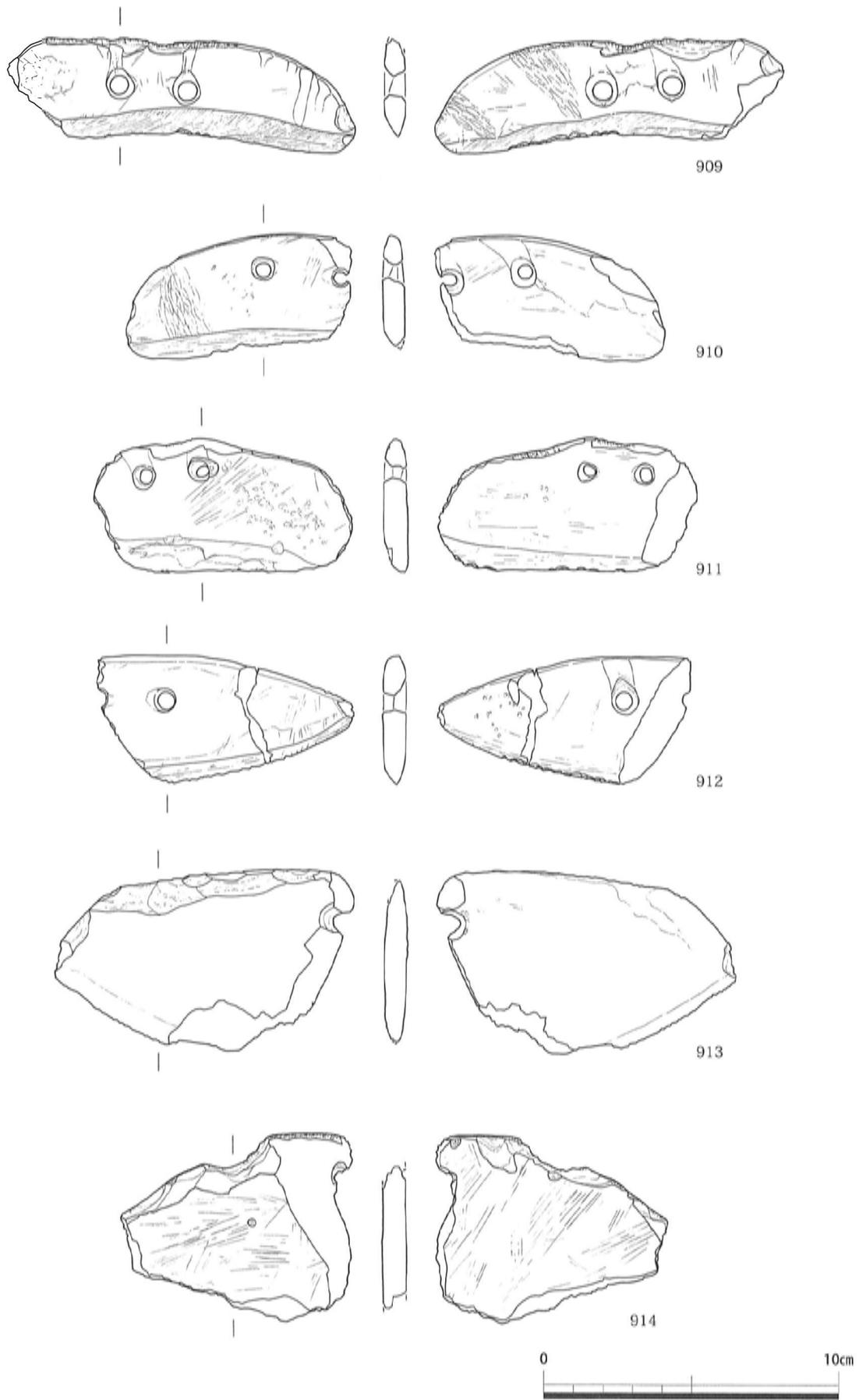


图129 大溝3出土磨製石器(2)

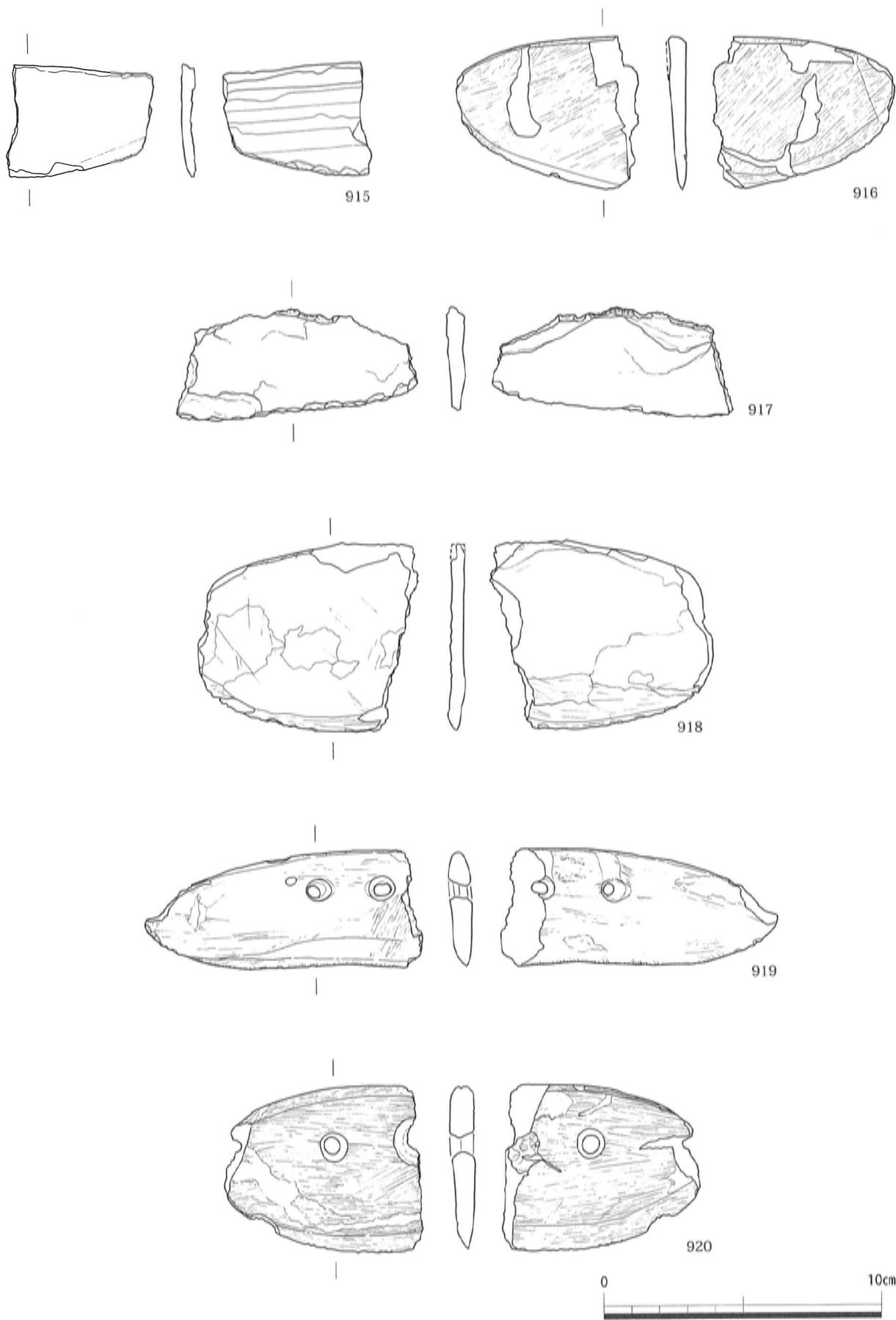
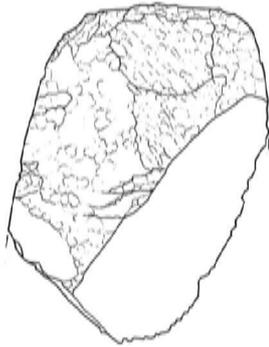
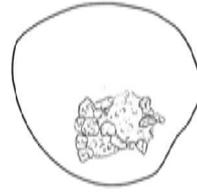
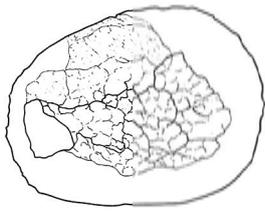
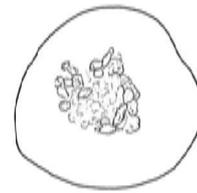
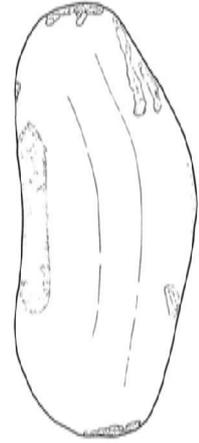
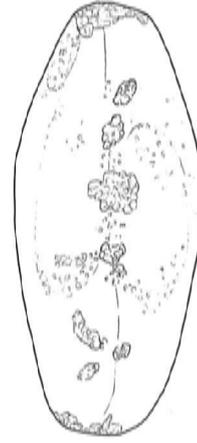


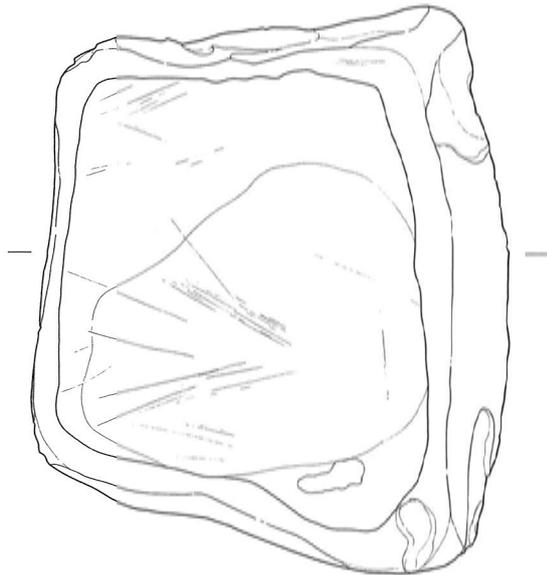
图130 大溝3出土磨製石器(3)



921



922



923



924



图131 大溝3出土磨製石器(4)

線条打撃痕が見られる。912は、外湾刃のタイプで、半分以上欠損している。片刃で、紐擦れ痕が認められる。刃部に線条打撃痕が見られる。913は、外湾刃のタイプで、半分以上欠損している。両刃である。全体に火を受けており、表面が荒れている。一部、赤く変色している。914は、大型品で、背部の一部が残存するのみである。刃部は欠損している。紐孔が1ヶ所、穿孔途中の小孔が3ヶ所認められる。図130-915は、紅簾石片岩製の石庖丁未成品である。一部のみ残存している。片面は自然面が残っており、他方の面は剥離面である。刃先は摩滅している。916は、緑色片岩製の石庖丁である。外湾刃のタイプで、半分以上欠損している。片刃である。紐孔は認められない。917は、緑色片岩製の石庖丁未成品である。一部のみ残存している。両面共剥離面である。背部の一部に打撃痕が残る。918は、緑色片岩製の石庖丁である。外湾刃のタイプで、半分以上欠損している。両刃である。紐孔は認められない。919は、緑色片岩製の石庖丁である。外湾刃のタイプで、半分程度欠損している。使用により、一部内湾刃となっている。片刃で、紐擦れ痕が認められる。920は、緑色片岩製の石庖丁である。外湾刃のタイプで、半分以上欠損している。両刃に近い片刃である。紐孔が大きく、紐孔間が広いことから、大型品の転用品の可能性もある。

図131-921は、ヒン岩製の叩き石である。刃部が折損した石斧を転用している可能性もある。両側

面と、平面に線条打撃痕が見られる。922は、砂岩製の叩き石である。やや細長い礫を使用しており、両端部と片面に打撃痕が見られる。923は、砂岩製の砥石である。台石の可能性もある。表裏面共に平坦で、線条痕と打撃痕がわずかに見られる。924は、砂岩製の叩き石である。細長く扁平である。両面の中央と下部に、打撃痕が見られる。上端寄りの片面と両側面に、わずかに細い線条痕が残る。図132-925は、砂岩製の石皿である。円板状で、片面がわずかに窪む。926は、砂岩製の叩き石である。半分以上欠損している。扁平な礫を使用しており、周縁と表面中央に打撃痕が見られる。裏面は砥石として使用された可能性がある。

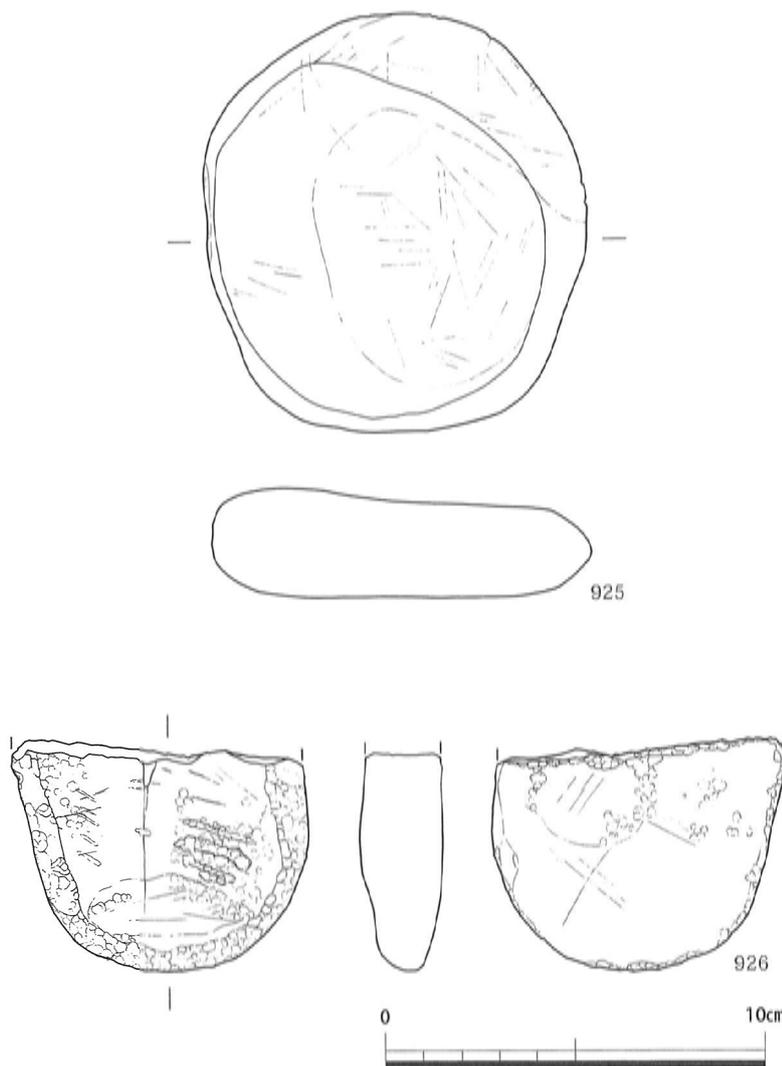


図132 大溝3出土磨製石器(5)

(3) 大溝4

弥生集落の南端部にあたる、T区とU区で検出された。本来は、W区を起点として、T区の南端部を通り、U区を横断して、調査区西側で大溝1に合流するものと考えられる。W区では、上面の削平が著しいことから、かろうじて北端部で痕跡を検出したのみであった。このため、大溝の起点の状況は明らかではない。また、W区では弥生時代の以降や遺物がほとんど検出されておらず、集落の居住域の範囲もこの部分までは及んでいないと考えられることから、人為的な整形などはおこなわれていないものといえる。

T区の南端部では、下流にあたる西側に向かって底のレベルが急激に下がっており、西端部では落ち込み状を呈している。調査時には大溝との認識がなく、この部分のみ自然流路の一部を掘り下げて落ち込み状とし、そこに土器が集中する土器溜まりとの見解をしていた。しかし、その後のU区の調査で、調査区を横断し西側に向かう流路を確認したことから、T区のみでおさまる遺構ではなく、調査区をまたいで延びる大溝との認識となった。ただし、U区では流路の確認はしたものの、調査の工程上、完掘することができず、トレンチ調査による土層断面の観察のみで調査を終了している。また、大溝1との合流部分と考えられる部分は調査区外であり、不明な部分は多い。流路の一部は、S区の南端にかかっているものと考えられるが、前述したようにトレンチ調査のみであることから、ここでも詳細は不明である。大溝3との関係もはっきりしない。

このように、全容ははっきりしないものの、W区を起点として北西方向にほぼまっすぐに向かい、T区の南端部を通り、U区でやや屈曲して西方向へのびる流路を検出することができた。また、T区の南西端からU区にかけて、底のレベルが下がっていることから、この方向に流れがあり、大溝1に合流していることがわかる。

検出された規模は、W区からU区の確認された部分で延長約60mを測る。幅は、起点付近のW区で2.5～3.0m、T区で5.0～10.0m、U区では約12mとなり、下流に向かうほど、広がっている。検出面からの深さは、W区で約10cm、T区で50～80cm、落ち込み部分ではさらに約70cm下がっており、U区では約1.5mを測る。自然流路を利用したものと考えられ、T区の落ち込み部分からU区にかけては、人為的に掘削や整形がおこなわれたものといえる。この部分で特に遺物が集中して出土しており、その上流にあたる部分では、ほとんどみられない。用途は不明であるが、取水のために掘削された可能性が考えられる。

T区の西端における落ち込み部分での土層観察では、下層は灰黄褐色粘土層を主体としており、礫が多く含まれている。砂層はあまりみられないが、地山が締まった礫層であることから、自然流路の流れによって礫が流されているものといえる。粘土層の堆積が確認できることから、あまり強い流れはなく、流れの弱い水たまり状態であったと考えられる。粘土層の上には、にぶい黄褐色シルト層や暗灰黄色シルト層などが見られ、いずれも礫と共に多くの遺物が出土している。人為的に埋められた層と考えられ、大溝1や3と同様に、廃絶時に一気に埋められた様相を示している(図119)。

特にT区西端部の落ち込み部分で、多くの弥生土器をはじめとする遺物が出土している。ここでも、遺物量のわりには、完形になるものが少ない。この部分で出土した弥生土器を図133・134に示す。

図133-927は、壺の口縁部である。口縁端部を両側に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のへら描き沈線のまとまりが付けられている。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。928は、壺の口縁部である。口縁端部を下方向に広げており、摩滅のためはっきりしないが、外面

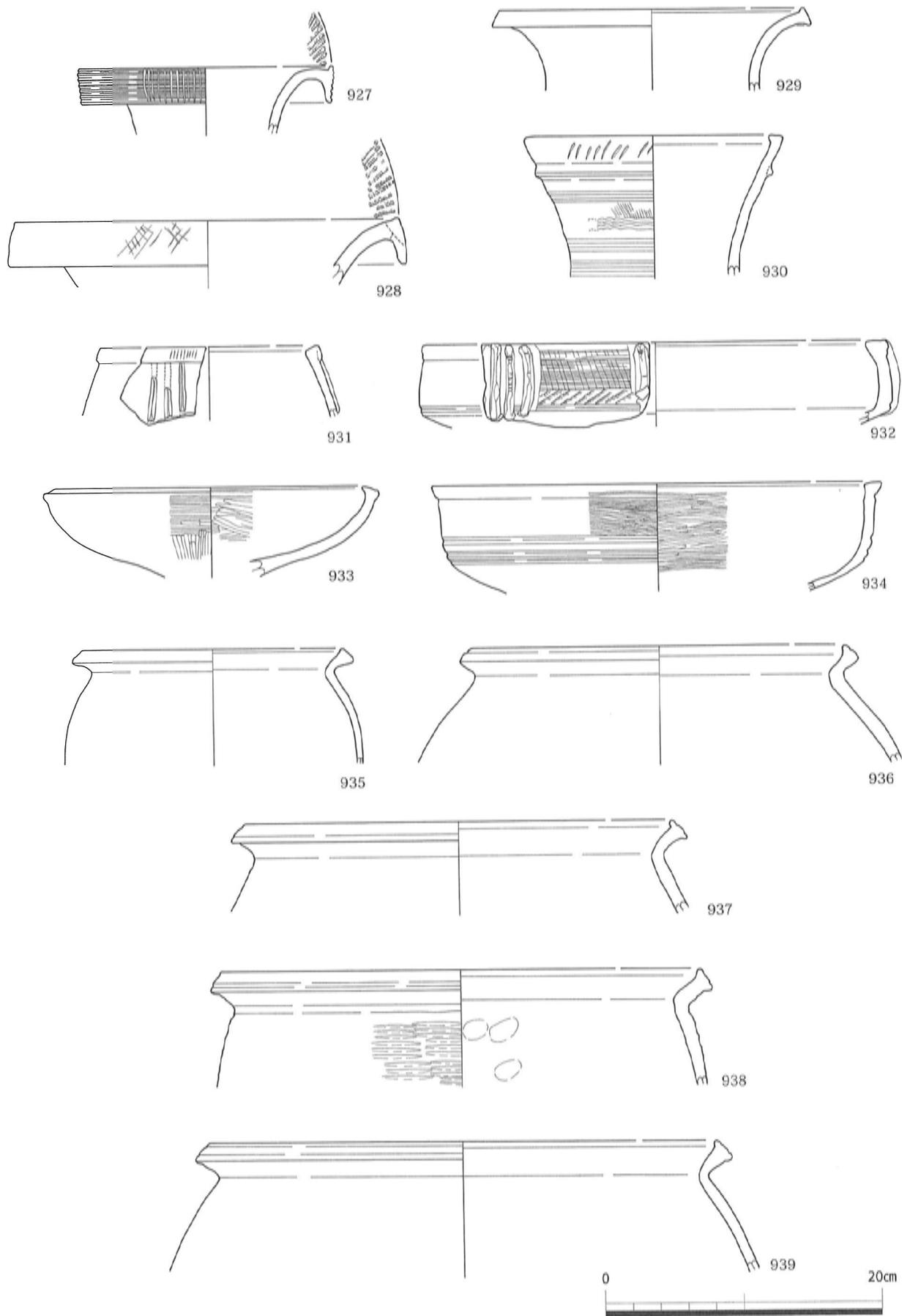


图133 大溝4出土土器(1)

に鋸歯文と考えられる文様が巡る。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が施されている。929は、壺の口縁部である。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。930は、直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が1条巡っている。口縁部上端と突帯の間には、斜め方向の刺突文が巡る。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。突帯の下には、直線文や波状文が見られるが、はっきりしない。931は、台付無頸壺の口縁部である。口縁端部を肥厚させており、内湾する。口縁部外面には、3本一組の棒状浮文が施されている。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。粘土を2種類使用しており、明褐色のものが体部、暗褐色のものが口縁部と棒状浮文である。932は、受け口状口縁壺の口縁部である。受け口部はほぼ直立するが、口縁は肥厚しており、やや内湾する。口縁部には上端と下端に凹線が巡っており、その間の上半には籐状文、下半には斜め方向の刺突文が施されている。さらにその上に、棒状浮文のまとまりが付けられている。933は、高杯杯部である。底部から脚部を欠損している。口縁端部を内側にやや肥厚させており、外面には突帯状の高まりが巡る。外面の上半には横方向、下半には縦方向のヘラミガキ調整が施されている。内面には、横方向のヘラミガキ調整が見られる。外面が黒く、黑色物質を塗布した可能性も考えられる。934は、高杯杯部である。底部から脚部を欠損している。口縁端部をやや肥厚させており、外反気味である。口縁部の上端に1条、下端に2条凹線が巡っており、その間に横方向のハケ調整が施されている。内面には、横方向のハケ調整が見られる。

935～939は、甕の口縁部付近である。いずれも口縁が、くの字状にほぼ直角に外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。935は、口縁端部を両側に広げている。936は、やや大型品で、口縁端部をやや上方向につまみあげている。937は、やや大型品で、口縁端部を両側に広げている。938は、やや大型品で、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線が巡る。体部外面には、横方向のタタキ目が残っている。内面には、指頭圧痕が見られる。939は、やや大型品で、口縁端部を両側に広げて面を形成しており、凹線が巡る。

図134-940は、高杯脚部であるが、脚台部は欠損している。内面には絞り目痕が残る。熱を受けて赤く変色している。941は、高杯脚台部である。端部を上を広げて面を形成している。外面の中央部に凹線が巡る。内面には、指頭圧痕が見られる。942は、高杯脚部である。脚台部は欠損している。内面には絞り目痕が残る。杯部は、円板充填法でつくられている。943は、真蛸壺形土器の底部である。944は、飯蛸壺の底部である。上端の破損部を一部再加工しており、二次利用された可能性がある。945は、真蛸壺形土器の底部である。外面には縦方向のヘラケズリ調整が見られる。内面には、ヘラ状工具による調整痕が残る。946は、真蛸壺形土器の底部である。外面には、指頭圧痕が見られる。947は、真蛸壺形土器の下半部である。全体にナデ調整で仕上げられている。948は、底部であるが、甕か壺か真蛸壺形土器かは、判別できない。全体にナデ調整で仕上げられている。

949～961は底部であり、甕か壺の判別が難しいものである。952・961を除いて、すべて底は平坦である。950の外面には、縦方向の粗いハケ調整が施されており、底部付近ではさらにナデ調整が加わっている。951の外面には、指頭圧痕が見られる。952は、底がへこんでいる。953の内面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。954の外面には、縦方向のナデ調整が施されている。956は、把手が付く可能性がある。957の内面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。外面に熱を受けており、赤く変色している。959は厚手のもので、外面には縦方向のナデ調整が施されている。960は、外面に熱を受けており、赤く変色している。さらに煤も付着する。961は、甕の可能性はある。底がへこんでいる。

胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

大溝4からは、弥生土器のほかにも多くの石器が出土している。そのうち、打製石器を図135に、磨製石器を図136・137に示す。

図135-962は、Ⅲ類の石錐である。完形品で、両端の錐部に使用痕が認められる。963は、Ⅲ類と考えられる石錐である。ほぼ完形品で、両端の錐部に使用痕が認められる。964は、有茎式の石鏃である。茎部を欠損しているが、先端部はほとんど摩滅がない。965は、凹基式の石鏃である。先端部を欠損している。小型のもので、重量は1gにも満たない。縄文時代の混入品と考えられる。966は、Ⅲ類の石錐である。完形品で、使用痕はあまり認められない。967は、スクレイパーである。背部片側に自然面が残っている。片面に自然面が大きく残っており、裏面には剥離面が大きく見られる。968は、Ⅲ類の石錐である。錐部の先端を欠損している。

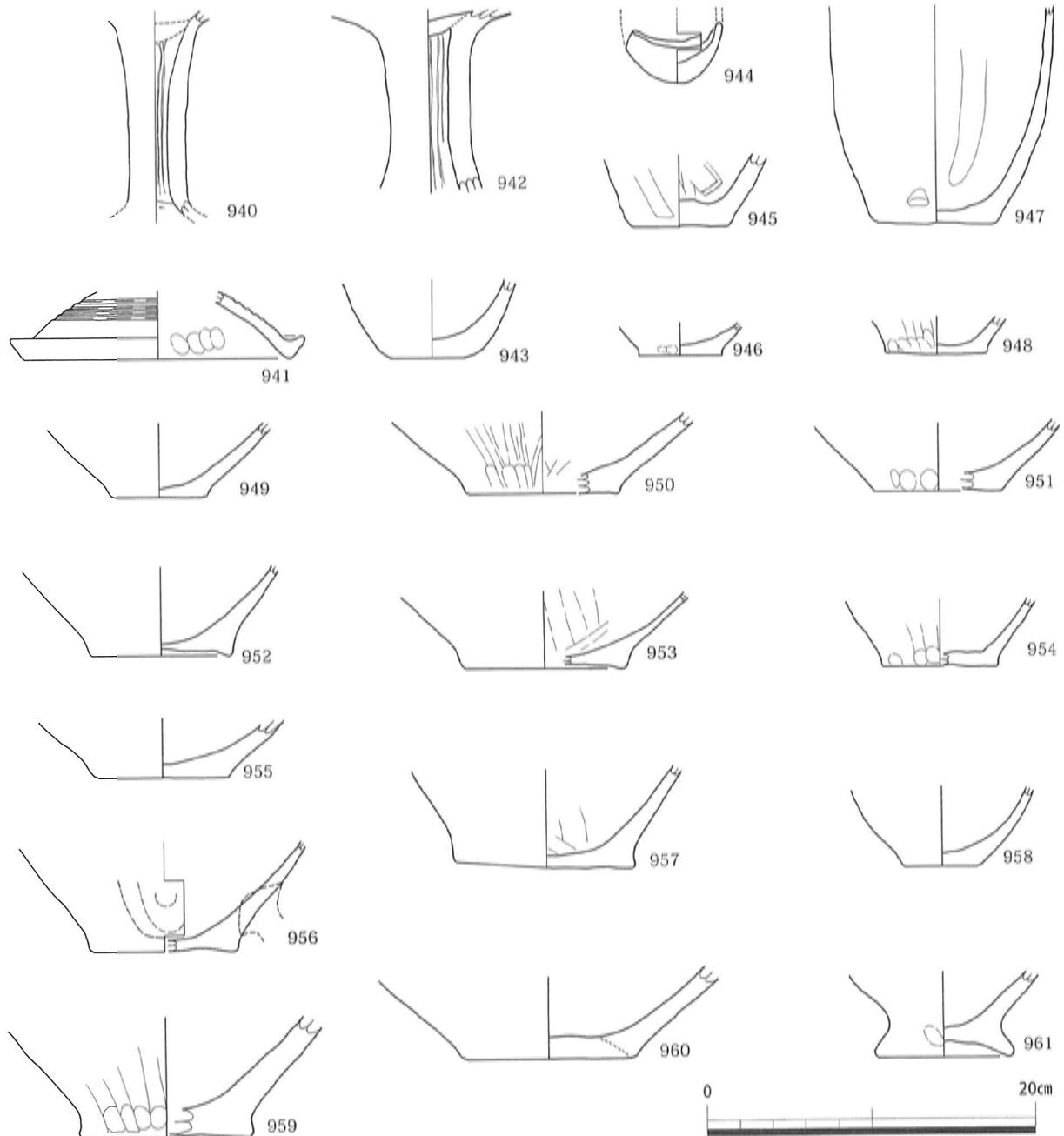


図134 大溝4出土土器(2)

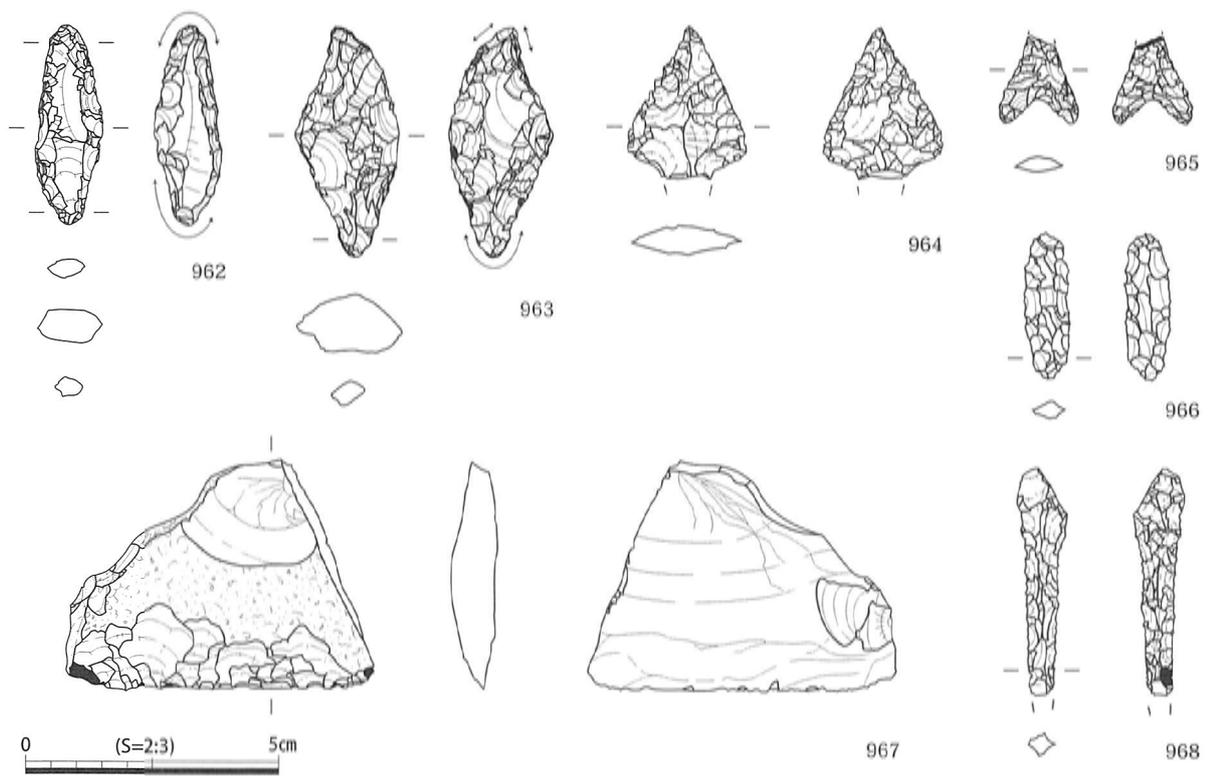


图135 大沟4出土打製石器

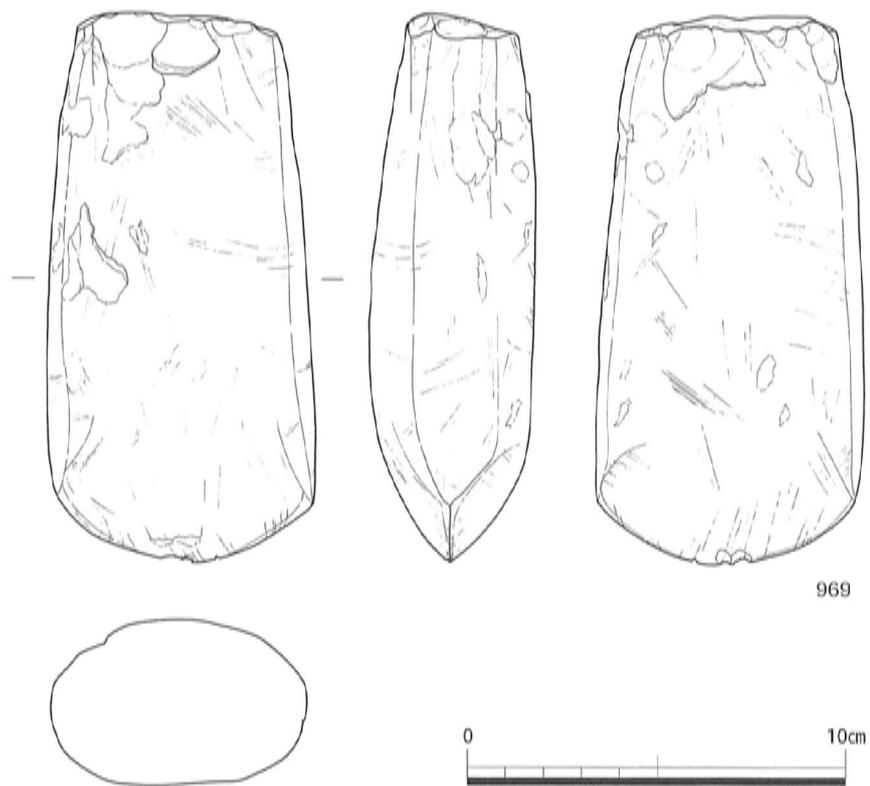


图136 大沟4出土磨製石器(1)



图137 大沟4出土磨製石器(2)

図136-969は、ホルンフェルス製の太型蛤刃石斧である。ほぼ完形品であり、断面は楕円形を呈する。刃部に使用痕が認められる。図137-970・971は、緑色片岩製の石庖丁である。970は、半分以上欠損している。刃部は、内湾気味である。片刃のもので、片面が剥離している。紐孔は1ヶ所確認でき、紐擦れの痕跡が認められる。971は、半分以上欠損しており、直刃である。片刃のもので、紐孔は1ヶ所確認できる。火を受けて、赤く変色している。972は、黒色片岩製の柱状片刃石斧である。小型品であり、片側面の残存部に光沢がある。破損後に上下両端部がつぶれており、表面が滑らかになっている。973は、緑色片岩製の柱状片刃石斧である。ほぼ完形品であり、刃部にわずかな使用痕が認められる。

(4) 大溝1・3出土弥生土器の文様

大溝1・3では、多くの弥生土器が出土しており、そのうち図化できる個体に関しては、前述したようにできるだけ多く掲載するように努めた。しかし、図化できない小破片のうちには、特徴的な文様をもつものもみられるため、その個体をピックアップし、出土土器の文様を紹介することとする。破片のみであり、全容のわかるものはないが、男里弥生集落では、様々な文様をもつ土器が多くつくられ、使われていたことがわかる。代表的な文様を図版60に示す。

1419は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。口縁端部の垂下部分のみであるが、凹線の上に縦方向の棒状浮文が付けられている。これは、棒状浮文が単独のものであるが、このほかに複数の棒状浮文が1組となって配置されているものもある。

1420は、壺の口縁部である。口縁端部を下方方向に広げて面を形成しており、口縁部内側に文様を巡らすものである。ここでは、外側に羽状列点文、内側に扇形文が配されている。口縁端部の垂下部分はほとんど欠損しているが、外面に凹線が一部残存している。口縁部内側の文様には、斜め方向の刺突文や、刺突文を2列に配置して綾杉状を呈するもの、波状文などがみられる。ほかには、円形浮文が付けられたものや、紐孔があげられているものもある。

1421は、甕の口縁部付近である。口縁端部に凹線が巡っている。体部上半に、粗い列点文が斜めに施されている。施文というよりは、表面調整の一部である可能性がある。このような文様は、ここではあまり見られないものである。

1422は、壺の頸部付近である。刺突文が連続して付けられている。破片のため全容は不明であるが、このような施文は、ここではあまり見られない。吉備地方で見られるような、体部に刺突文が連続するものに類似している。胎土に微角閃石を含んでおり、生駒西麓産と考えられる。

1423は、やや大型の壺の頸部である。頸部に太めの突帯を巡らしており、その上に刻目が連続して付けられている。刻目は、縦方向のへら描き沈線で施文されている。幅がやや広く、断面が角張っている突帯は、ここではあまり見られないものである。

1424は、壺の頸部である。頸部に異種の粘土による押捺突帯を巡らしており、指頭押圧は2段である。壺の頸部に押捺突帯を巡らすものは、ここでは珍しくなく、他にも見られる。異種の粘土による押捺突帯も見ることができ、装飾性を増している。

1425は、壺の口縁部から体部にかけての部分である。体部に櫛描文の直線文と波状文が交互に巡る。体部に櫛描文の直線文や波状文が巡るものは、ここでは一般的である。

1426は、壺の肩部である。上から順に、斜め方向の列点文、簾状文、斜め方向の列点文が巡っており、簾状文と列点文の境界部分に、竹管文を付した円形浮文が連続して配されている。簾状文の間隔は非常に細かい。櫛描文が複合している文様は見られるが、このパターンの文様は、ここではあまり見られな

いものである。

1427は、壺の体部である。上から順に、波状文、円形浮文、直線文が巡っている。円形浮文は、主に口縁部付近に付けられているものが多く、体部に付けられているものは少ない。

1428は、壺の体部である。上から順に、簾状文、直線文、斜格子文が巡っている。簾状文は弱い印象を受け、直線文のように見える。斜格子文は、3本の櫛状の施文原体を使用しており、左下がりの直線が描かれた後に、右下がりの直線が描かれている。

1429は、壺の体部である。上から順に、複数の簾状文、扇形文、直線文、逆向き扇形文が巡っている。簾状文はあまりはっきりしておらず、弱い印象を受けるため、直線文のように見える。簾状文に関しては、強弱がはっきりしており、弱いものは直線文のように見えるが、ここではこのような文様はよく見られる。扇形文を逆向きに配しているが、ここではあまり見られない文様形態である。

1430は、壺の肩部から体部にかけての部分である。1本の直線が横方向に描かれており、その下に斜め方向の直線が配されており、斜格子を形成している。斜格子文はヘラ描きで施文されており、櫛状の施文原体を使用しているものとは異なっている。ただし、破片のため全容をつかむことができないため、斜格子文であるかどうかは微妙なところである。不規則な部分もあるため、題材は不明であるが、絵画文と考えることもできる。施文原体の太さなどに違いが見られるため、他の斜格子文とは様相が異なっている。ここではあまり見られない文様形態である。

1431は、壺の体部である。直線文の間に斜格子文が配されている。斜格子文は、5本の櫛状の施文原体を使用しており、左下がりの直線が描かれた後に、右下がりの直線が描かれている。胎土に微角閃石を含んでおり、生駒西麓産と考えられる。

1432は、壺の体部である。上から順に、直線文、波状文、直線文、斜格子文、波状文が巡っている。斜格子文は、3本の櫛状の施文原体を使用しており、今までとは逆に、右下がりの直線が描かれた後に、左下がりの直線が描かれている。下の波状文は、斜格子文の前に施文されており、重複している。

1433は、壺の体部である。上から順に、絵画文と考えられる文様、簾状文、斜格子文が巡っている。絵画文と考えられる文様は、上部を欠損しているため、全容がはっきりしないが、右下がりの鋸歯文の可能性はある。ただし、左側の文様は右下がりではないため、別の意匠の絵画文と考えることもできる。連続する鋸歯文は、他にも見られるが、播磨地方を中心に分布する文様であり、なんらかの影響を受けているものと考えられる。ここでの簾状文は、しっかりと施文されている。斜格子文はヘラ描きで施文されており、櫛状の施文原体を使用しているものとは異なっている。右下がりの直線が描かれた後に、左下がりの直線が描かれている。

1434は、壺の体部である。簾状文の間に、斜格子文が配されている。簾状文の間隔は、比較的細かい。斜格子文は、ヘラ描きで施文されている。左下がりの直線が描かれた後に、右下がりの直線が描かれている。

(5) 大溝1・3出土絵画土器

大溝1・3では、多くの弥生土器が出土しており、前述のように様々な文様をもつ土器片が多く出土している。これらの土器が所属する第IV様式は、弥生時代では土器に最も多く文様が付けられる時期であり、大溝1・3の出土土器もこの傾向を示している。この中で、一般的な施文の他に絵画が描かれている土器片も、全体量からするとわずかであるが、出土している。

大溝1では、全体量では出土土器の大部分を占めているが、線刻による絵画土器が1点のみ、みつまっている(図138-974、カラー図版3、図版61)。K区南半部の大溝1南半の中層から、多くの土器と共に出土したものである。口縁部のみであり、ほかに接合する土器片がみつからないため、全体形状ははっきりしない。破片の接合により、2つのまとまりとなり、さらに口縁部で接合するため、1個体分である。ただし、点での接合であり、両者の間に欠損部分があるため、絵画全体の復元はできない。現在のところ、水差し形土器あるいは台付壺の口縁部を想定しているが、ほかの器種の可能性も考えられる。従来の絵画土器に比べると、このような形状の器形ではあまり類例がなく、しかも頸部外面に描かれている例も非常に少ないといえる。男里遺跡出土土器の中では、焼成や表面の保存状態が良く、最も良好なもののひとつである。表面に朱などを塗った形跡はみられないが、やや赤味がかっており、いわゆる化粧土を表面に塗布しているものと考えられる。一見、やや白っぽい在地の土器とは異なった印象を与える。ただし、破断面を見ると、胎土は在地のものに類似することから、在地の土器である可能性もある。外見だけでは産地は確定できないが、化粧土に関しても非常に精選されたものであり、砂粒がほとんど認められないほど、きめ細かいものである。全体につくりが丁寧であり、表面の保存状態が良好であるため、細かい線刻まで確認することができる。

線刻は、非常に鋭利な工具によって描かれており、線刻の幅は約0.2mm程度である。口縁端部外面に鋸歯文がめぐっており、その下に高床倉庫と考えられる掘立柱建物が少なくとも3棟確認できる。現在のところ、建物以外の意匠は確認されていない。鋸歯文は、口縁端部から1.0～1.6cmの幅の間に連続して描かれており、境界には圏線が1本巡っている。下向きであり、内部には格子状に線が描かれている。格子の間隔はあまり整然としておらず、等間隔ではない。さらに、先端部はあまり揃っておらず、圏線を突き抜けているものもある。鋸歯文はやや雑な描き方といえるほど、圏線のつなぎ目がずれていたり、曲がったりしている。施文工具は同一と考えられるが、明らかに同一の人による線刻とはいえないほど、技術的な差が認められる。

鋸歯文が施文される土器は、特に西播磨地域を中心として分布しているものであることから、この地域の影響を受けているものと考えられる。鋸歯文の方向は、上向きのものがほとんどであり、下向きのものは少数である。大溝からは、他の器種で鋸歯文が施文されている土器が若干みつまっているが、すべて上向きのものである。また、内部の平行線の方向は、左下がりのものが右下がりのものに比べて圧倒的に多く、両者を混ぜるものは、さらに少ない。このことから、鋸歯文に関しては、類例の少ないものであり、一般的なものではないと考えられる。

一方、鋸歯文のやや雑な描き方とは対比的に、建物はかなり丁寧に描かれている。描画前に器面が丁寧に整形されており、粗い砂粒などはみられない。線刻の幅には、ほとんど差がないことから、施文工具は同様のものを使用していると考えられる。直線で表現されている部分は、曲がっておらず、つなぎ目もしっかりしており、突き抜けているものはほとんど見られない。定規のような工具を使用したか、非常に鋭利なへら状工具の縁で線刻したのものと考えられる。ただし、線刻の幅が非常に細いことから、

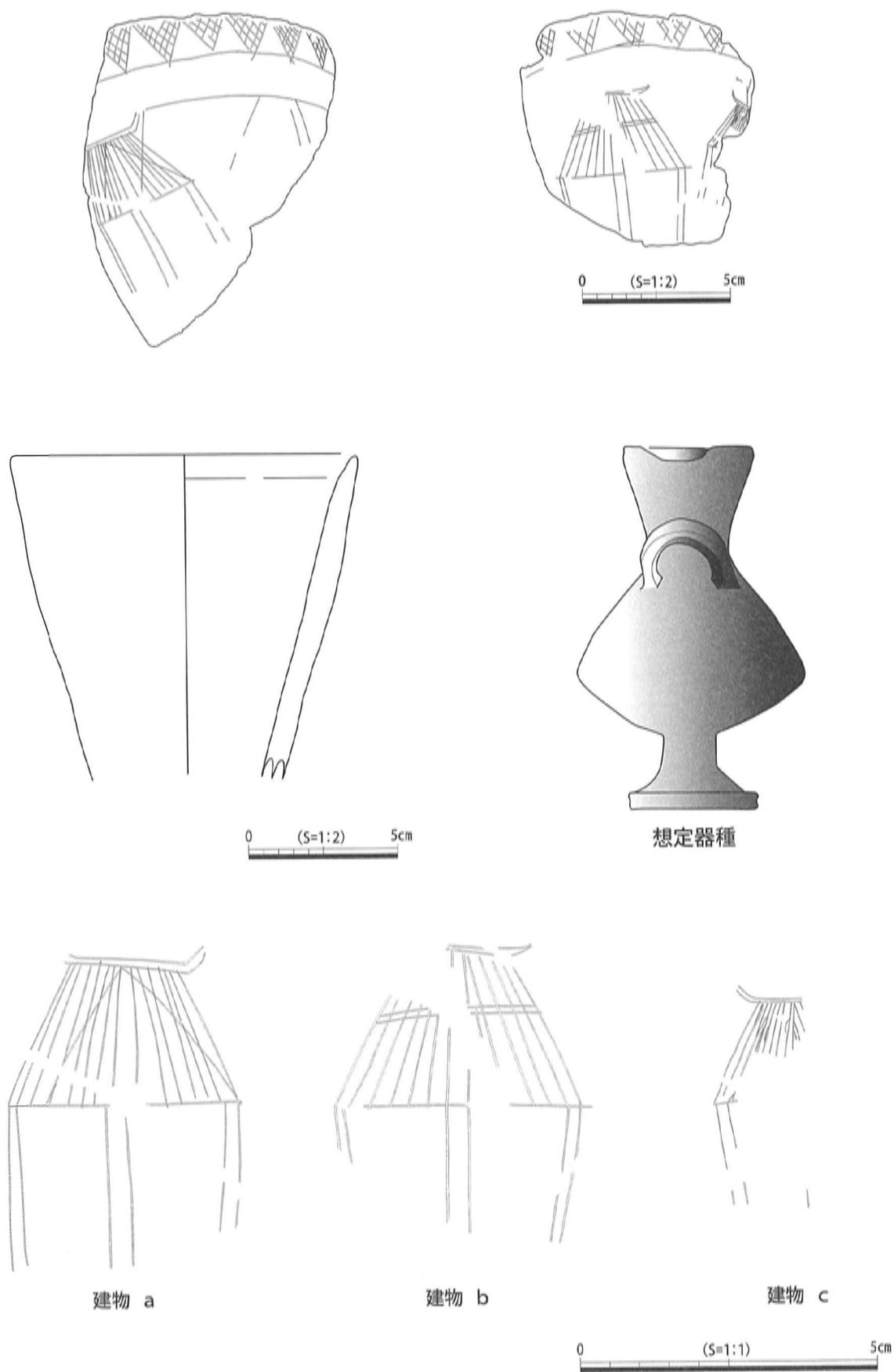


图138 大溝1 出土绘画土器

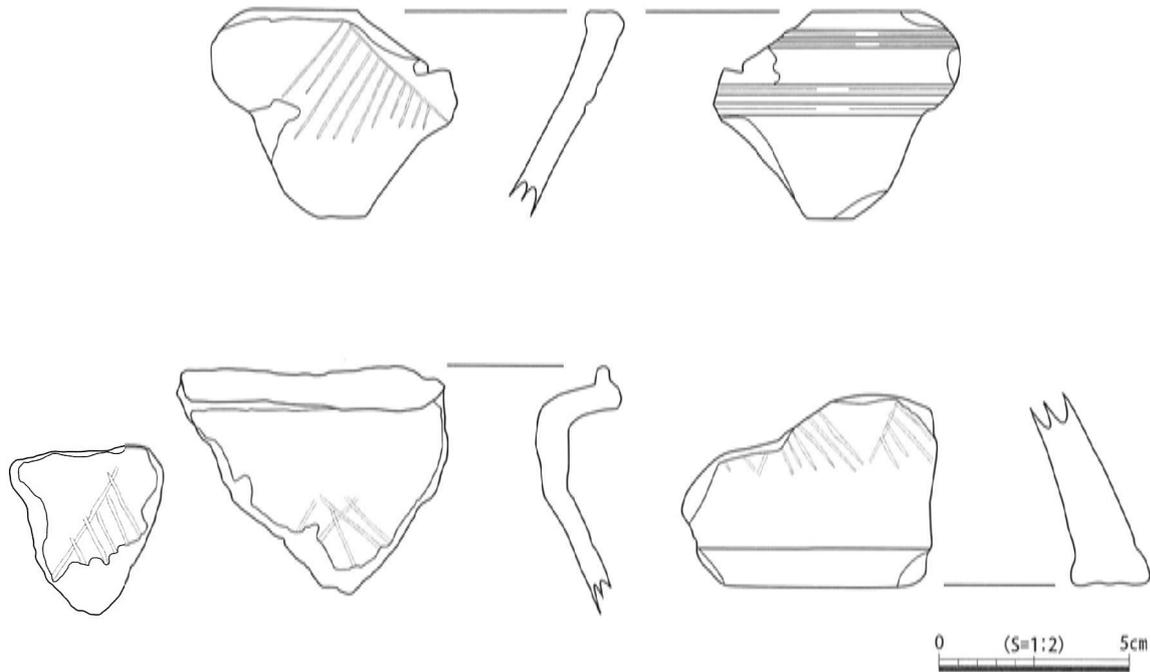


図139 大溝 1、3 出土絵画土器

通常使用されている工具とは異なる、特殊な施文工具が使われた可能性がある。使用例は確認できないが、サヌカイト剥片などの鋭利な工具の可能性も考えられる。

左側の破片の左半部（建物 a）に 1 棟、右側の破片の中央部（建物 b）と右端部（建物 c）に各 1 棟、計 3 棟の掘立柱建物が配置されている。建物の屋根はすべて寄棟である。いずれも、3 本の柱と屋根、屋根に取り付く装飾が付いていることなど、特徴は似ており、同じような建物が複数存在していたことを表している。ただし、建物 b と建物 c では、建物の大きさが異なっており、大小の表現か遠近の表現を示している可能性がある。

屋根の表現に関しては、一般的に見られる斜格子ではないことが特徴的である。また、屋根の中心線に沿って左右に斜線が描き分けられているほか、屋根の装飾は共通している。ただし、屋根の表現には微妙に異なる点がみられる。建物 a の屋根には、縦方向の萱か藁の表現以外に三角形を表現した線刻が認められるのに対し、建物 b には、中央部をまっすぐに横切る表現がみられる。この表現に関しては、外見を示しているものか、建物内部の様子を描いている可能性がある。外見であれば、屋根を葺いている縦方向の萱か藁を、上からロープ状のもので押さえている状況を表現しているものといえる。一方、建物内部の様子とすれば、屋根を支える内部を表現したものと考えられ、屋根の中心線が内部の柱ともいえる。なお、建物 a の三角形の線刻は、屋根の右下端でそろっているのに対し、左端は屋根の端まで及んでおらず、途中で完結している。ただ、上の頂点も含めて三角形の角は、屋根の外郭線を突き抜けておらず、建物 a の屋根に関わるものであることは確かである。

柱は、すべて 2 本線で表現されており、中央の柱はやや太めに描かれている。柱は、屋根と別に描かれており、建物 a や、建物 c では、屋根の縦方向の線刻と柱の線刻が突き抜けることなく、ずれている。建物 b では、屋根の縦方向の線刻と柱の線刻がつながっているが、屋根と柱の境界部分で、傾斜が変わっており、明らかに区別して描いていることがわかる。はしごなどの表現はみられない。

また、建物 a と建物 b の間の空白部分にも、建物の屋根を表現したと考えられる線刻が確認できるが、

形状ははっきりしない。建物の屋根の表現とすると、3棟の掘立柱建物より規模が大きいものであり、まったく構造が異なるものといえる。この部分に関しては、線刻がはっきりしないことから、未完成のものか、描いた後に擦り消したものであるということが出来る。建物aと一部重複している。多くの建物を表現しようとした可能性があり、建物が重複して見える状況を示そうとした意識がうかがわれる。

建物aは、ほぼ全容がわかるもので、右側の屋根の装飾が一部欠損するのみである。各地で建物を描いた絵画土器の例は多いが、ほとんどが大半を欠損したものであり、推定復元されたものである。今回の例は、数少ない建物表現の全容がわかるもので、貴重なものといえる。

残念ながら、この絵画土器の意匠部分は完形ではないため、絵画全体の表現を知ることはできない。ただ、検出部分からの想定で、この間隔で建物が配置されているとすれば、全体で約6棟の建物が描かれていることになるものと考えられる。検出されている建物は、いずれも倉庫と考えられ、いわゆる首長の居館とはいえない。未検出部分に別の建物が描かれており、集落の中心部分を表している可能性もあるが、従来の建物が描かれた絵画土器の中にもそのような例はみつかっていないため、現在のところ不明である。

これが、男里の集落を表現していたのかどうかは、はっきりしない。また、男里集落の中でこのような建物群が存在していたのかも確定できないが、ピットが多く検出されており、竪穴住居と立地が異なっている部分も見られることから、可能性はあるものといえる。鋸歯文などの文様の特徴から、他地域から来た土器ということもできる。泉南地域でも、弥生中期末の絵画土器が出土したことは、注目に値することといえよう。

このほかに、大溝3では、絵画土器として、3個体分4点の土器片がみつまっている。いずれも鋸歯文の一部と考えられ、厳密に言うと、絵画文とは異なるものということが出来る。線刻は、鋭利な工具によって描かれているが、大溝1出土のものとは異なり、線刻の幅は1mm程度である。

図138-975は、直接接合しないが、同一個体と考えられるものである。壺の口縁部で、肩部に上向きの鋸歯文状の文様が付けられている。連続するものかどうかは不明である。ただ、小型の破片の文様は、内部の平行線の方向が右下がりなのに対し、大型の破片の文様は、重複しているように見えることから、単純な鋸歯文が巡る文様ではない可能性がある。976は、直口壺の口縁部で、口縁部内面に上向きの鋸歯文状の文様が付けられている。連続するものかどうかは不明である。内部の平行線の方向は、左下がりである。外面には凹線が巡っている。977は、直口壺の口縁部と考えられるが、鉢の可能性もある。つくりを見ると、高杯脚台部の端部に似るが、端部を肥厚させて面を形成しており、この面に凹線が巡ることから、口縁部と認識している。外面に下向きの鋸歯文状の文様が連続して付けられている。内部の平行線の方向は、右下がりである。

3. 墓域

男里弥生集落の居住域は、前述のように中央南区に広がっているが、L区とT区の間と、やや離れた南区のX区からY区にかけての調査区西側に墓域をもつ。ここでは、L区とT区の間部分を北墓域、南区の部分を南墓域と呼ぶこととする。今回の調査で明らかとなった部分は、弥生集落のうち西端部分と考えられる。南北方向にトレンチをいれたかたちとなったため、居住域の規模は、南北約200mと推定することができた。これに南墓域を含めると、集落全体の規模は、南北約350mとなる。現在のところ、調査区の東側や西側では調査がほとんどおこなわれていないため、集落の東西方向の分布状況は不明である。

(1) 北墓域

弥生集落の居住域と重複する部分であるが、L区とT区の間にあたる市道部分で、土坑墓がまとめて検出されている。今回の調査開始以前の昭和58(1983)年に、大阪府教育委員会が道路下水管敷設工事に伴う調査をおこない、検出されたものである。それによると、弥生中期の木棺直葬の土坑墓が、約150㎡の調査区の中から6基みつかっている。

今回の調査では、この調査区に隣接するL区やM区、T区で、土坑墓と断定できるものは検出されおらず、墓域のひろがりやを明確にすることはできなかった。土坑260005や土坑260030などのように、土坑墓に似た形状をしたものも見られるが、土坑墓とは断定できなかった。ただし、土坑920439のような土器棺が検出されており、墓がつくられていたことが明らかとなった。このため、あまり規模は広くないものの、この部分が墓域として使われていた時期があったということが出来る。

全容がはっきりしないため、墓域の性格は不明であるが、土坑墓や土器棺墓を主体としていることから、規模は小さいものといえる。狭い範囲で営まれている墓域であり、数も少ないことから、存続時期もあまり長くはなかったものと考えられる。狭い範囲といえども、居住域の中であり、竪穴住居やピット群が密集する部分にあたるため、両者が並存することは考えにくい。また、重複関係がはっきりしないため、墓との新旧を判断することはできないが、集落の最盛期には墓域としては利用されていなかったものと推定される。出土遺物の詳細な検討をおこなっていないため、詳しい分析はできていないが、

土坑墓の時期は、集落よりやや先行するとされている。このため、弥生集落の初期段階に営まれた墓と考えることができる。居住域に近い場所に墓域を設定していたものが、その後の集落の発展に伴い、規模も大きくなったことから、墓域を新たな場所（南墓域）に移したことも考えられる。

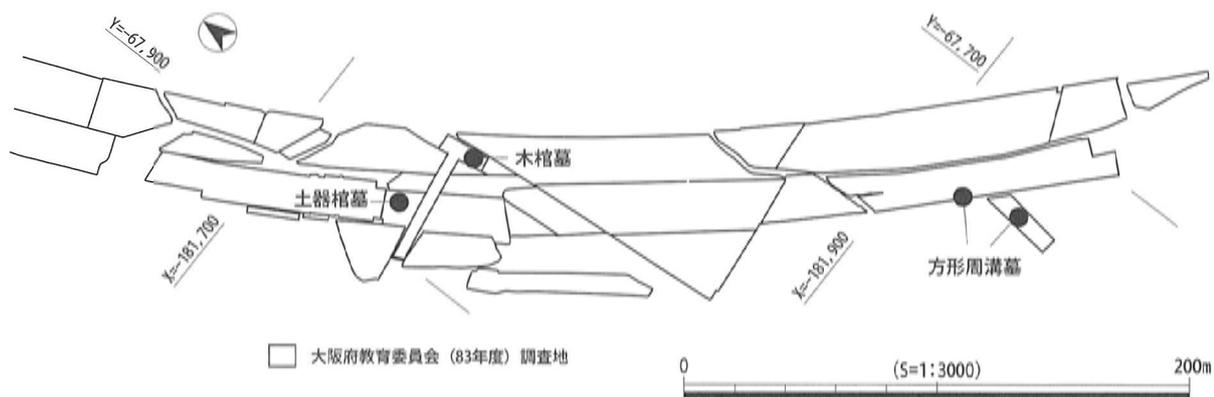


図140 弥生時代墓域分布図

(2) 南墓域

弥生集落の居住域から、南東へ約300m離れた地点のY区とX区西端部で、方形周溝墓2基が検出されている。男里遺跡では、はじめてみつかったものである。また、複数の方形周溝墓が検出されている遺跡は、泉南地域では、泉佐野市三軒屋遺跡しかなく、貴重な成果といえることができる。

全体に、近世以降の大規模な削平を受けており、上部は失われていることから、周溝を確認したのみで、主体部などは検出されていない。Y区で検出された方形周溝墓を方形周溝墓1、X区西端部のものを方形周溝墓2と呼称することとする。これ以外は、調査区内で方形周溝墓はみつかっていない。調査の途中段階において、居住域の北側で方形周溝墓の周溝に類似する溝が検出されたが、出土遺物の検討などにより、弥生時代の遺構とは考えにくくなった。南墓域は、方形周溝墓群を主体とする墓域と考えられるが、大部分は調査区西側に広がることから、全容はつかむことができず、墓域の規模も不明である。居住域と墓域の間には、遺構の検出されない部分があり、直接は接していないといえる。

方形周溝墓1 (図142、143、図版19、62)

南区の中央部にあたり、地下横断道の進入口として本線からのびるY区のほぼ中央で検出された。Y区は狭い調査区であり、長さ約50m、幅約15mの規模である。単独で検出されており、調査区内で明確に隣接する方形周溝墓はみつかっていない。大規模な削平をうけているほか、中世前期にこの部分で集落が営まれていたことから、この時期に整地がおこなわれており、上部は失われている。周溝付近がかるうじて残存しているのみである。

東側の約半分が検出されており、さらに調査区の西側に広がる。規模は、現状で一辺約12m、周溝の幅1~2m、深さ30~60cmで、盛土はほとんど削平されている。周溝の埋土は3層に分けられ、上層は、黒褐色シルトが主体で、粗砂や粘土、礫を含む。中層は、にぶい黄褐色シルト、下層は褐色シルトが主体であり、いずれも礫を含む。南東隅に近い周溝内から、ほぼ完形の把手付壺と甕が、斜面部分で

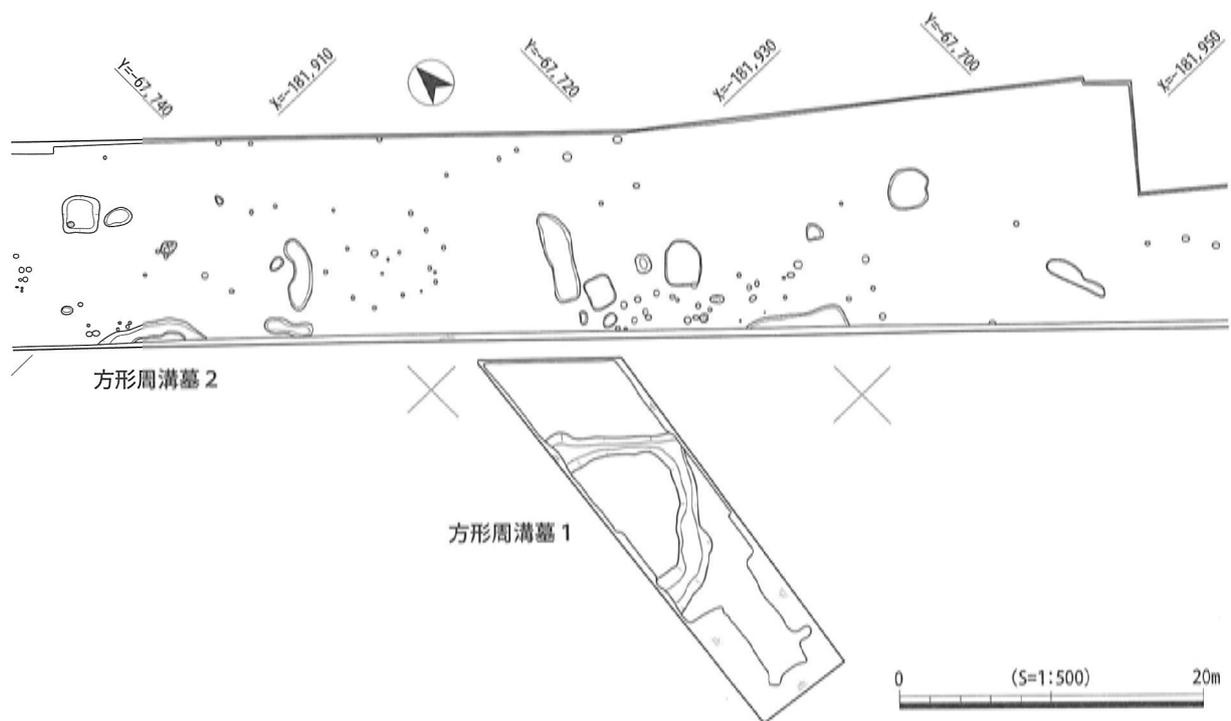
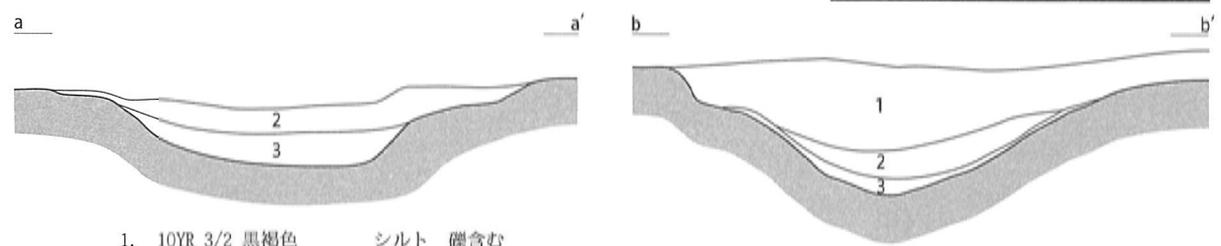


図141 南部墓域平面図

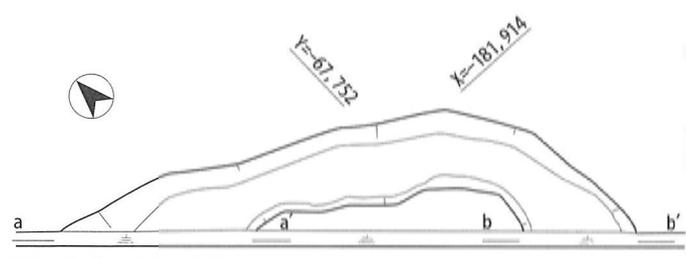


※レベル値 = T. P. +17.3m

方形周溝墓1

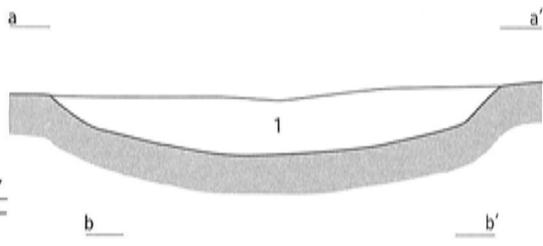
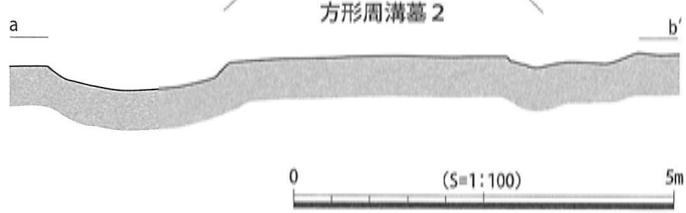


- 1. 10YR 3/2 黒褐色 シルト 礫含む
- 2. 10YR 5/4 にぶい黄褐色 シルト
- 3. 10YR 4/4 褐色 シルト 礫含む



※レベル値 = T. P. +16.9m

方形周溝墓2



- 1. 7.5YR 2/2 黒褐色 粘土 粗砂・礫含む

図142 方形周溝墓平・断面図

口縁部を下にした状態で検出された。盛土の上に置かれていた供献土器が、周溝に転げ落ちたような様相を呈している。さらに北西隅でも壺が検出されているが、前の2点の土器とはやや様相が異なっており、周溝の底付近に位置している。周溝内からは他に遺物は出土しておらず、弥生時代中期の遺物包含層も認められなかった。周溝は、ちょうど調査区内で巡っているが、方形の角の部分が調査区の東壁部分に接しており、この部分で土器が検出されている。層序の観察から、さらに新たな方形周溝墓が、隣接して調査区の東側に存在する可能性もある。

図化できた土器は、上で述べた3点である。図143-978は、周溝の北西隅でみつかったもので、壺である。やや頸部が広い。口縁部は大きく外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。頸部には、2～3条の簾状文が巡っている。体部の外面は、磨耗が著しく、調整や文様はあまり見えないが、最大径付近には、波状文が巡っているのがわかる。さらに下半部には、斜め方向のヘラミガキ調整が施されている。外面に橙色の化粧土を薄く塗布しており、全体に赤っぽい印象を与えている。979は、南東隅に近い周溝内から出土したもので、把手付壺である。肩部に把手が挿入法で付けられている。口縁部は大きく外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。体部の外面は、磨耗が著しく、調整や文様はあまり見えないが、頸部に簾状文に似たハケ調整が施されている。体部外面には、縦方向のハケ調整が見られる。体部下半の底部に近いところに、焼成後の穿孔が見られる。外面に橙色の化粧土を薄く塗布しており、全体に赤っぽい印象を与えている。980は、979と共に出土したもので、甕である。口縁は、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。体部の外面は、磨耗が著しく、調整や文様はあまり見えないが、体部上半に斜め方向のタタキ目が見られる。下半の底部付近には縦方向のヘラケズリ調整が施されている。ほぼ完形に復元できたものであるが、欠損した部分も多いことから、底部付近の穿孔は確認できなかった。

方形周溝墓2 (図142、144、図版19、62)

南区の中央部にあたり、本線からのびるY区に分岐点から、やや北側のX区西端部で検出された。調査区の端部で周溝の一部を検出したもので、当初は溝と考えられていたものである。その後、方形周溝墓1が確認されたため、再検討した結果、方形周溝墓の周溝と考えるに至った。ここでも、大規模な削平をうけており、上部は失われている。地山まで及ぶ削平のため、遺物包含層もほとんど失われている状況で、周溝付近がかろうじて残存しているのみである。

北東側の周溝部分を検出したのみで、大部分は調査区外の西側に広がる。規模は、現状で一辺約7m、周溝の幅約1m、深さ約20cmで、盛土は削平されている。周溝は底部付近のみ残存しており、埋土は、黒褐色粘土が主体で、粗砂や礫を含む。検出された溝の規模は小さいものの、方形周溝墓1の周溝とほぼ同じ方向である。周溝内から、ほぼ完形の台付水差形土器や焼成後の穿孔をもつ把手付壺などが出土している。これらのことから、全容ははっきりしないものの、方形周溝墓の周溝と判断した。

図化できた土器は3点である。図144-981は台付水差形土器で、ほぼ完形品である。溝内から出土したものであるが、他の図化できた土器と共に検出されており、特徴的な出土状況ではなかった。出土地点に供献されたものかどうかははっきりしないが、破片の接合によりほぼ完形品に復元できたほか、磨耗も少ないことから、あまり原位置からは動いていないものと考えられる。口縁部の扱いは、施文後にヘラ状の工具で弧状に切り取っている。口縁端部には、凹線が巡っており、そのすぐ下の外面には1条の斜め方向の刺突文が連続して巡る。その下の口縁部下半から体部上半までは、簾状文が平行して巡っている。その下の体部最大径部分には、1条の斜め方向の刺突文が連続して巡る。簾状文や刺突文は、

非常に細かく、丁寧に施文されており、男里弥生集落で出土した多くの土器の施文のなかでも秀逸の出来である。体部下半には、縦方向の細かいヘラミガキ調整が施されており、その後、体部最大径部分に横方向のヘラミガキ調整が見られる。製作時において、上下のパーツのつなぎ部分の表面調整を丁寧におこなったものと考えられる。体部下半の内面には、斜め方向のハケ調整が見られる。肩部には、施文後に把手が付けられている。脚柱部から脚台部にかけては、外面に文様は見られない。脚台部の端部は肥厚させており、面をなしている。面の上には、凹線が2条巡る。体部と脚柱部のつなぎ部分と脚柱部と脚台部のつなぎ部分には、円板充填がなされている。また、外面の施文後に橙色の化粧土を薄く塗布しており、全体に赤っぽい印象を与えている。胎土分析などはおこなっていないため、現状でははっきりしないが、在地の土器とはまったく印象が違っており、他地域からの搬入品の可能性がある。ただし、あえて化粧土を施すことによって、在地土器の白っぽい部分を隠していることも考えられるため、在地土器でありながら、非常に丁寧なつくりをしたものということもできる。

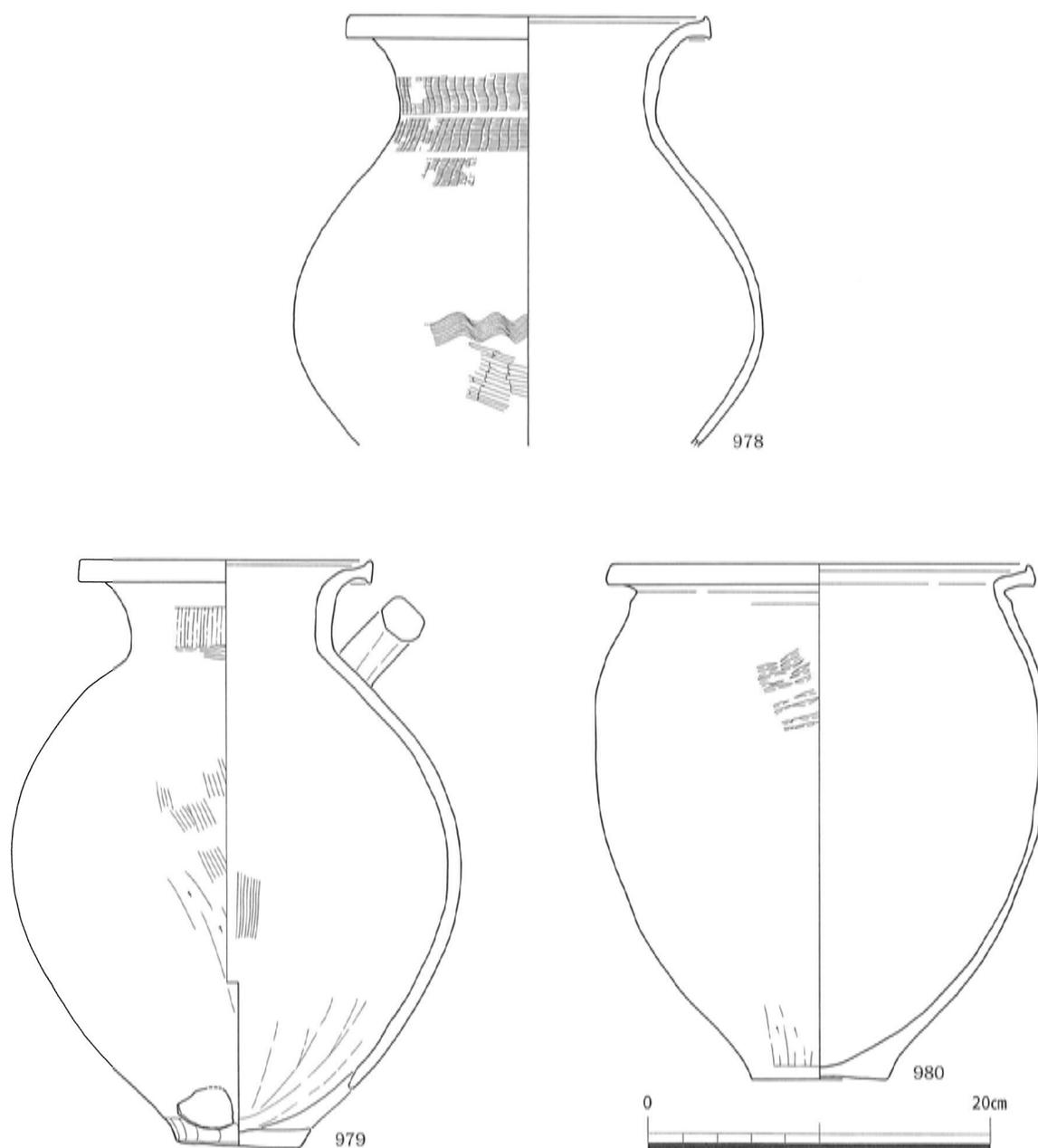


図143 方形周溝墓1出土土器

982は、把手付壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。頸部から体部上半にかけての外面には、縦方向のハケ調整が見られる。肩部には、調整後に把手が付けられた痕跡が残る。体部下半の外面には、上半からのハケ調整の上から斜め方向のヘラケズリ調整が施されている。さらに底部付近には、縦方向の細かいヘラミガキ調整が見られる。体部下半に、焼成後にあけられたものと考えられる穿孔が見られる。体部の内面は、磨耗が著しく、調整は見えない。外面に橙色の化粧土を薄く塗布しており、全体に赤っぽい印象を与えている。983は、細頸壺の口縁部である。体部以下は、検出されていない。口縁部外面の上半と下端には凹線が、その間には簾状文が2条巡る。口縁端部は、やや内湾している。

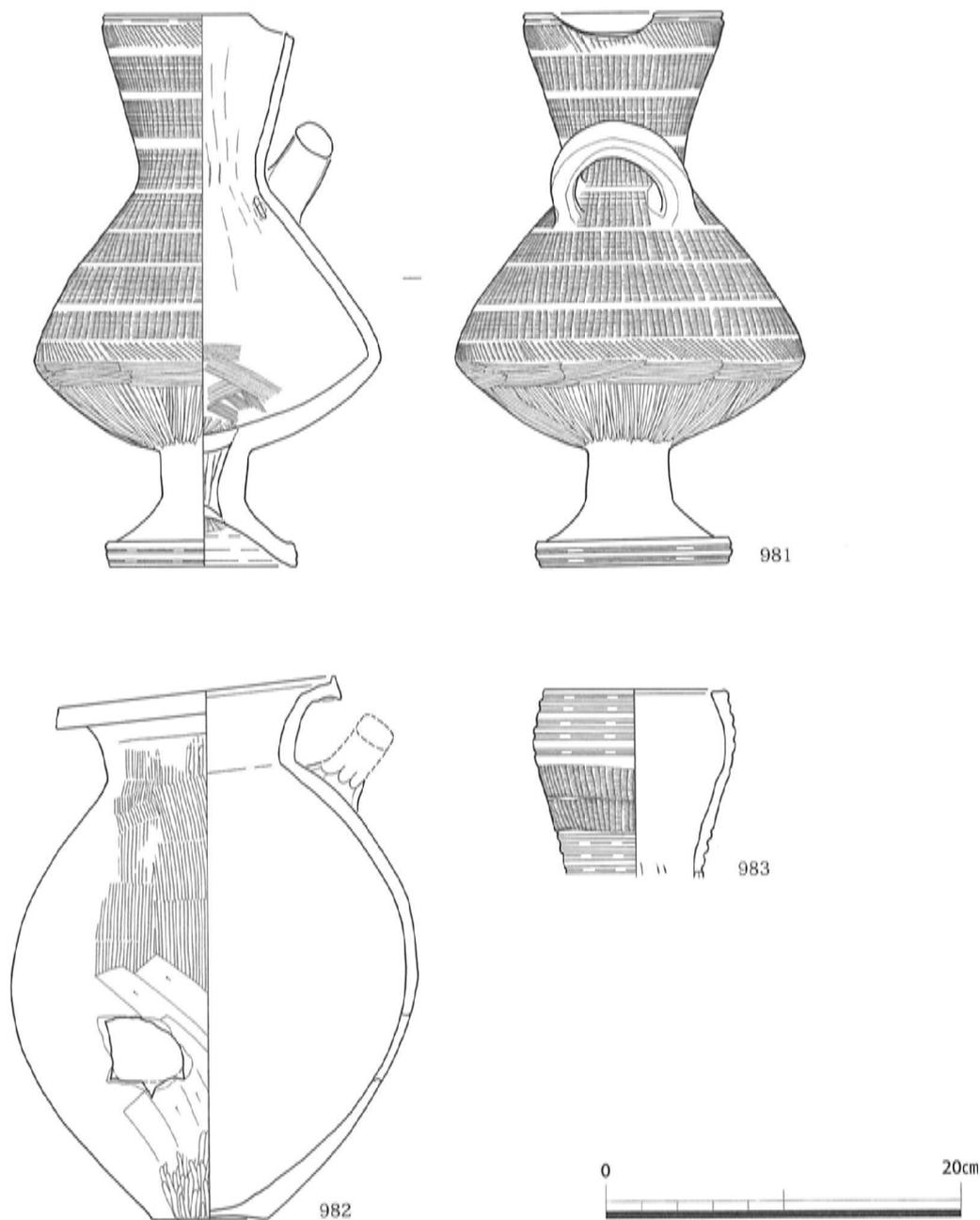


図 144 方形周溝墓 2 出土土器

4. 周辺部および包含層出土遺物

男里弥生集落の居住域・大溝・墓域に関しては、前述のように、中央南区から南区にかけて広がっており、遺構や遺物もほとんどこの区域で検出されている。この区域以外では、弥生時代の遺物包含層は検出されていない。調査区の北方向に向かうにつれて、遺物包含層がやや良好に残存している部分が多いが、この部分でも弥生時代の遺物包含層はみつかっていない。遺物の出土量も極端に減っている。

調査の過程で、弥生集落の範囲外において、掘削中に突然、1個体分の弥生土器が出土することがあった。当初は、検出もれの弥生時代の遺構を掘り当てたものと考えていたが、周囲の状況や埋土の観察をおこなった結果、弥生時代の遺構とはいえないことが判明した。平面形は確定しにくいものも多く、埋土も弥生時代の包含層のものとは異なっている。また、分布状況には規則性がなく、弥生時代の遺構の検出もれとはいえない状況であった。出土土器は完形に近いものも多く、単独で検出されている。あまり多種の土器が混在しているものは少ない。

これらについては、遺構にはならず、検出場所が上面のものが多いことから、後世に弥生土器を再埋納したものと考えた。特に、新しい時期の遺物が共伴することはないため、確定はできないが、検出面や埋土の状況などを見ると、中世か近世頃に再び埋められた様相を呈している。想像の域を出ないが、耕作地の整地などの際に、偶然掘り出した弥生土器を、耕作で使わない場所などに埋め戻したものと考えることができる。従って、ここでは、このようなかたちで出土した土器を、後世の遺物包含層から出土する混入品と同様のものとして扱うこととする。

また、これ以外でも、弥生集落の範囲内で、遺物包含層から出土した遺物も多く見られる。遺構出土のものは、ほぼ前述したが、遺構に所属せず、包含層から出土した遺物に関しては、ここで扱うこととする。さらに、大溝1の調査では、掘削当初に、上層の遺物包含層と大溝埋土の区別がつかなかったこともあり、包含層扱いで取り上げた遺物も多い。図化できるものを主体として、取り上げた。

(1) 北区・中央北区出土土器

ここでは、単純に出土地点ごとにまとめて報告することとする。北区では、遺物はほとんど出土していないのに対し、中央北区では、出土地点はほぼ全区に点在している。弥生時代の遺構も、居住域の北側にあたる、G区南西端部で大溝1の一部が検出されているのみで、ほとんどみつかっていない。

図145-984は、F区南端部から出土したもので、後世に埋め戻されている。大型の壺であるが、体部下半に欠損部分があり、図上復元したものである。推定で高さ56.85cmを測り、今回の調査では、最も背の高い遺物である。破片は大きいですが、外面はあまり磨耗を受けておらず、残存状況は比較的良好である。ただし、内面は剥離が著しいことから、調整などは不明である。口縁端部を下方方向に広げており、外面に波状文が巡る。口縁部内側には、2条の文様帯が見られ、外側に扇形文、内側に斜め方向の刺突文が施されている。口縁部外面の中央には、直線文と波状文が交互に巡っている。頸部の付け根付近には、突帯が4条巡っている。さらに体部外面の上半には、口縁部外面の文様帯と同様の直線文と波状文が交互に巡っている。底部付近の外面は、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。985は、北区のC区南半部の遺物包含層から出土しており、後世に埋め戻されたものではないが、混入品である。大型の壺であるが、体部下半を欠損している。頸部が細く、体部がかなり張った形状である。口縁端部を下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしないが、内外面共に、縦方向のハケ調整が見られる。986は、F区南半部から出土したもので、後世の遺構から検出された混入品である。細頸壺で、口縁部と体部下半を欠損している。頸部が細く、体部がかなり張っ

た形状である。頸部は、直立気味で外面に凹線が巡っている。肩部から体部上半の外面には、簾状文が4条巡っており、その下の最大径付近に波状文が1条配されている。その下には、簾状文と波状文が交互に巡る。内面には、指頭圧痕が見られる。987は、E区北半部の遺物包含層から出土しており、後世に埋め戻されたものではないが、混入品である。真蛸壺形土器で、図上復元できたものである。表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。口縁端部は肥厚させており、やや内湾している

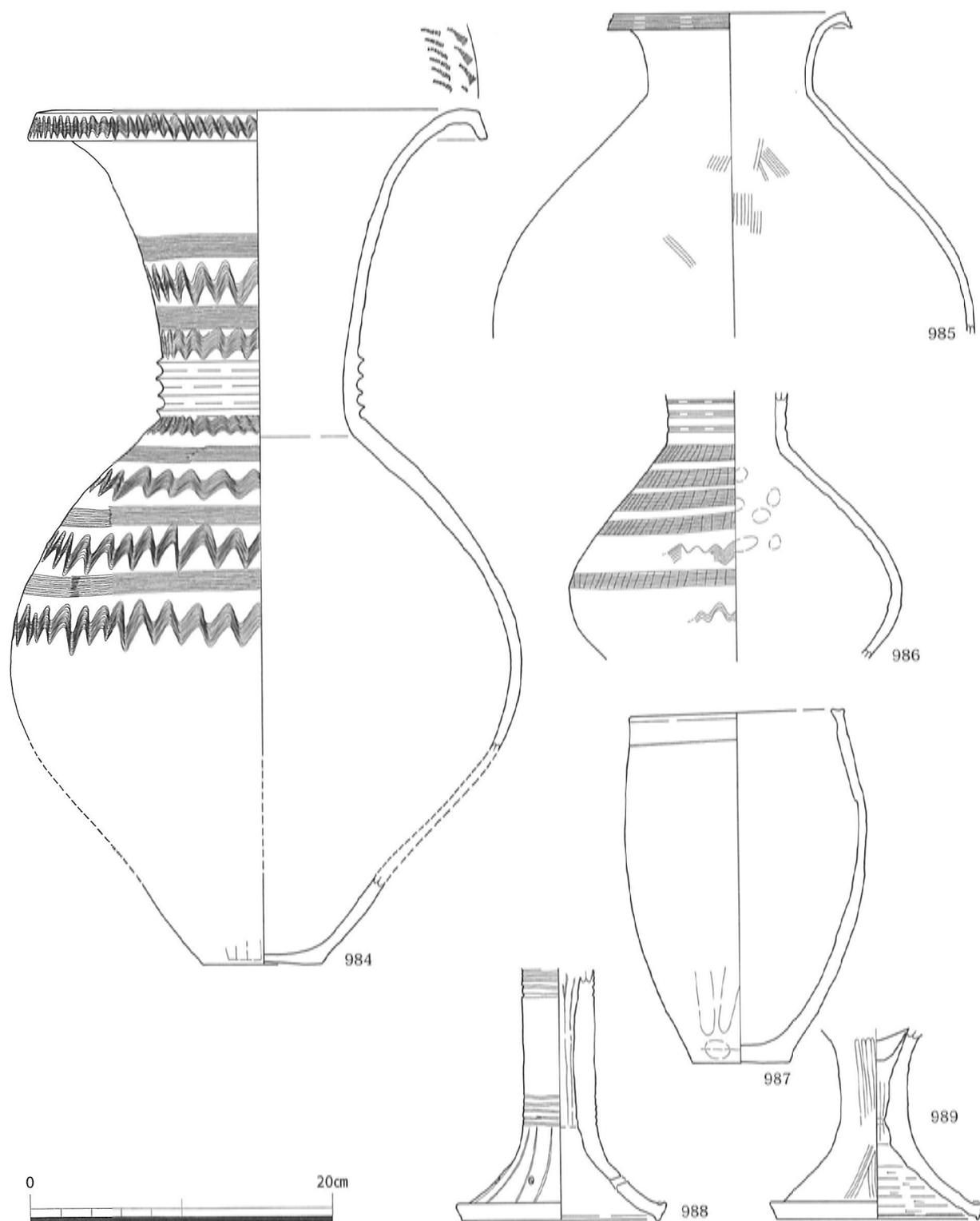


图 145 中央北区出土弥生土器 (1)

る。口縁部外面には、ヘラ描き沈線が1条巡る。底部付近の外面には、縦方向のナデ調整が施されている。988・989は、E区北半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。988は、高杯脚部である。脚柱部の上端と下端に擬凹線が巡っている。脚台部には、ヘラ描き直線を放射状に配しており、2間隔毎に円孔があげられている。端部は肥厚させており、面をなしている。内面には、絞り目が見られる。989は、高杯脚部である。杯部のつなぎ部分には、円板充填がなされている。外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。脚柱部内面には、絞り目が見られる。脚台部内面は、横方向のヘラケズリ調整が施されている。端部は肥厚させており、面をなしている。

図146-990は、G区南端部から出土したもので、後世に再埋納された混入品である。細頸壺であるが、底部を欠損している。口縁端部は、やや内湾している。口縁部外面の上半には凹線

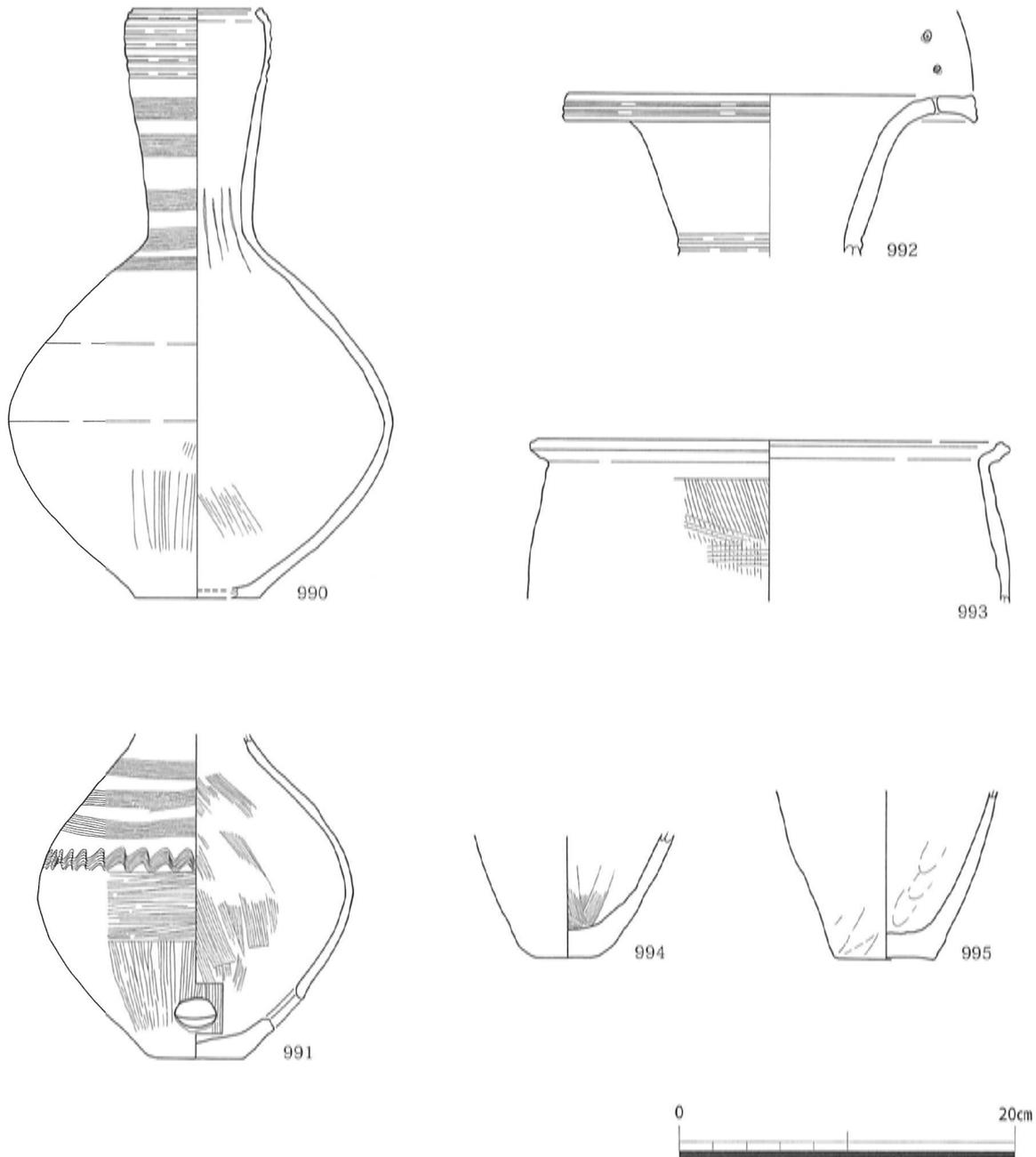


図 146 中央北区出土弥生土器（2）

が、下半から頸部にかけては直線文が巡る。体部表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。体部下半には、縦方向のヘラミガキ調整が見られる。991は、G区南端部から出土したもので、後世に再埋納された混入品である。壺であるが、体部のみ残存している。体部外面の上半には、直線文が3条、波状文が1条巡っている。下半には、縦方向のヘラミガキ調整が見られ、その後、最大径付近で横方向のヘラミガキ調整が施されている。底部付近に穿孔があげられている。内面には、縦方向のハケ調整が見られる。992は、E区南半部から出土したもので、後世の遺構から検出された混入品である。壺の口縁部から頸部である。口縁端部を肥厚させており、面をなしている。口縁端部外面に凹線が巡るほか、頸部にも凹線が巡っている。口縁部内面には、2点一組の紐孔があげられている。993～995は、E区南端部から出土したもので、後世の遺構から検出された混入品である。993は、やや大型の甕の上半部である。口縁が、くの字状にほぼ直角に外反する。口縁端部がやや上方につまみあげられている。体部外面の上半には、ハケ調整が見られる。橙色の化粧土が表面に塗布されている。994は、真蛸壺形土器の底部である。内面にヘラ状工具の調整痕が残る。995は、真蛸壺形土器の底部と考えられる。内面には、指頭圧痕が見られる。

図147-996は、E区南半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。壺であるが、底部を欠損している。やや頸部が広く、口縁部は大きく外反する。口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。口縁部外面には、直線文が2条巡っており、頸部には波状文が見られる。肩部外面には、直線文が3条巡っており、その下に波状文が見られる。波状文の下には、横方向のハケ調整が施されている。内面は、全面にわたって横方向のハケ調整が見られる。997・998は、G区南半部の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。997は、壺で、完形品ではないが、図上復元できたものである。口縁部は外反しており、口縁端部をやや肥厚させて面を形成している。口縁端部の面と、口縁部内側で波状文がわずかに認められる。体部外面の頸部から肩部にかけては、直線文が巡っており、その下に波状文が見られる。施文の前に縦方向のハケ調整が施されている。さらに、体部下半は縦方向のヘラミガキ調整が見られ、その後、最大径付近で横方向の密なヘラミガキ調整が施されている。横方向のヘラミガキ調整で、波状文が一部消されている。内面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。998は、受け口状口縁壺で、ほぼ完形品である。受け口部の屈曲は強く、口縁はやや内湾する。口縁部外面には、波状文が巡っており、その下には斜め方向の刺突文が連続している。頸部には、縦方向のハケ調整が見られる。体部外面の頸部から肩部にかけては、直線文が巡っており、その下に波状文が見られる。さらに、体部下半は縦方向のヘラミガキ調整が見られ、その後、最大径付近で横方向の密なヘラミガキ調整が施されている。997とは異なり、波状文の後に、横方向のヘラミガキ調整がおこなわれている。999は、E区南半部から出土したもので、後世の遺構から検出された混入品である。細頸壺であるが、底部を欠損している。口縁端部は内湾しておらず、ほぼ直立する。口縁部と、肩部外面には直線文が巡る。頸部には、簾状文が1条巡っている。直線文の下の最大径付近には、波状文が見られる。体部下半の表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。体部下半の内面は、底付近が縦方向のハケ調整、その上が横方向のハケ調整が施されている。外面から頸部内面まで、橙色の化粧土が薄く塗布されている。底部に穿孔が見られるが、意図的な焼成後穿孔なのか、単なる割れなのかは不明である。1000は、G区南半部の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。水差形土器であるが、口縁部を欠損している。体部上半の外面には、2条の直線文と1条の波状文が交互に巡っており、その下の最大径付近に1条の直線文が見られる。把

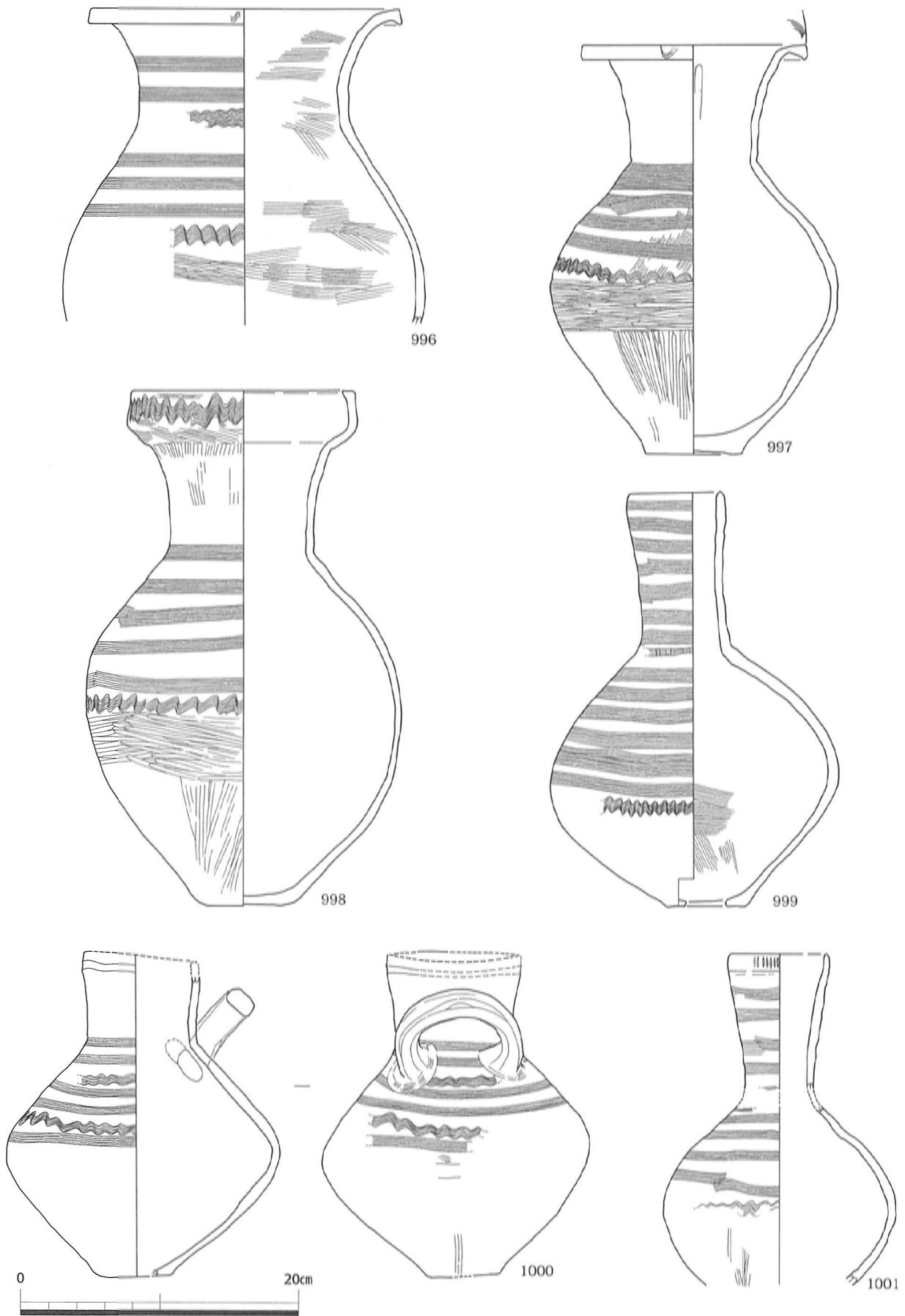


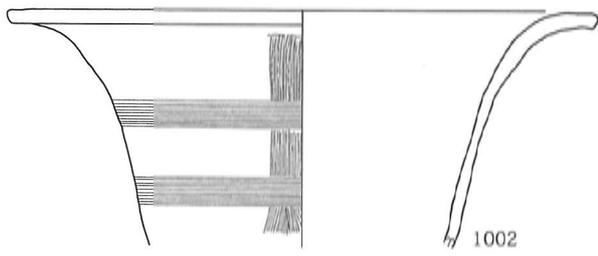
图 147 中央北区出土弥生土器 (3)

手は、施文の後、挿入法により取り付けられている。体部下半の表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。1001は、E区南半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。細頸壺であるが、底部を欠損しているほか、口縁部と体部の接合は図上復元である。口縁端部は内湾しておらず、やや広がる。口縁部外面の上端には、列点文状の縦方向の刻目が連続している。口縁部と、体部上半の外面には直線文が巡る。その下の最大径付近には、1条の波状文が見られる。体部下半の外面には、縦方向のヘラミガキ調整が施されている。内面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。

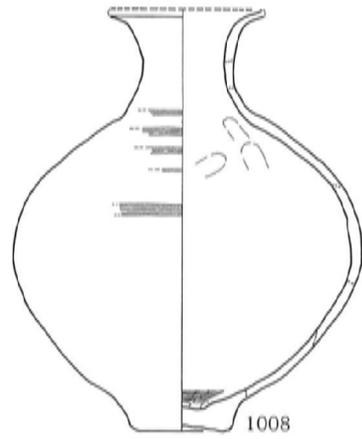
図148-1002～1004は、G区南半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。1002は、長頸壺の口縁である。口縁部は大きく外反する。外面は、縦方向のハケ調整の後、直線文が施されている。表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。1003は壺であり、口縁部を欠損している。頸部から体部上半にかけての外面には、直線文が巡る。その下の最大径付近には、1条の波状文が見られる。さらに、体部下半は縦方向のヘラミガキ調整が見られ、その後に最大径付近で横方向の密なヘラミガキ調整が施されている。内面には、指頭圧痕が見られるほか、体部下半では縦方向のハケ調整が施されている。1004は、鉢である。口縁はやや内湾気味である。口縁部を人為的に打ち欠いており、再加工している。口縁部外面の上端には、凹線が巡っている。1005は、G区南半部の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。真蛸壺形土器で、全形がわかるものである。口縁端部は肥厚させており、やや内湾している。外面には、ナデ調整が施されている。内面の底部付近では、縦方向のハケ調整が見られる。1006～1011は、G区南半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。1006は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状に外反しており、口縁端部で面を形成しているが、あまり肥厚させていない。外面に煤が付着している。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。1007は、甕の口縁部である。口縁が、くの字状にやや外反しており、口縁端部を肥厚させて面を形成している。1008は、ほぼ完形品の壺である。口縁が外反しており、頸部が体部に比べてかなり細い。体部上半の外面に、直線文が巡る。表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。内面の頸部付近には、指頭圧痕が見られるほか、底部にはヘラ状工具による調整痕が残っている。底部は厚い。外面には橙色の化粧土が塗布されている。1009は、ほぼ完形品の高杯である。口縁は、内湾している。杯部外面の下半には、縦方向のヘラミガキ調整が、その後、上半で横方向の密なヘラミガキ調整が見られる。縦方向のヘラミガキ調整が、一部、横方向のヘラミガキ調整で消されている。杯部内面には、横方向のヘラミガキ調整が施されており、橙色の化粧土が塗布されている。杯部のつなぎ部分には、円板充填がなされている。脚柱部内面には、絞り目が見られる。1010は、ほぼ完形品の高杯である。口縁端部をほぼ水平に外側に広げており、端部を肥厚させて面を形成している。表面の残存状況はあまりよくなく、調整などははっきりしない。脚柱部内面には、絞り目が見られる。脚台部の端部を肥厚させて面を形成している。1011は、高杯脚部である。杯部のつなぎ部分には、円板充填がなされている。脚柱部内面には、絞り目が見られる。脚台部の端部を肥厚させて面を形成している。

(2) 中央南区出土土器

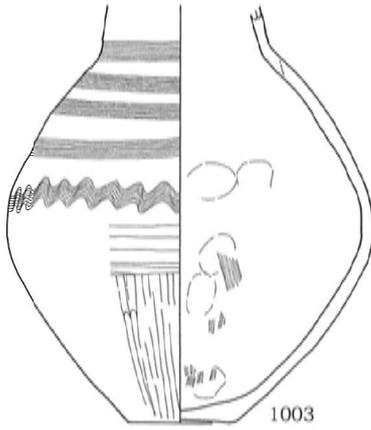
中央南区は、ほとんどが弥生集落の範囲内であることから、遺物包含層から出土した遺物もある程度多く見られる。包含層から出土した遺物に関しては、ここで扱うこととするが、復元できるものは少ない。前述したように、大溝1や3の調査では、上層の遺物包含層と大溝埋土の区別がつかなかったこともあり、包含層扱いで取り上げた遺物も多い。図化できるものを主体として、取り上げた。ここでは、中央



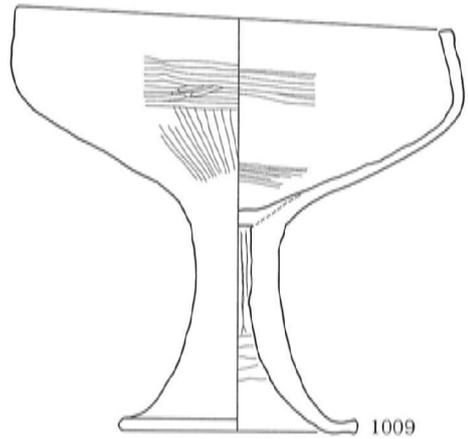
1002



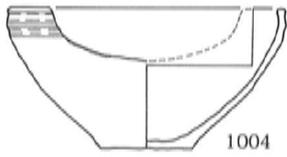
1008



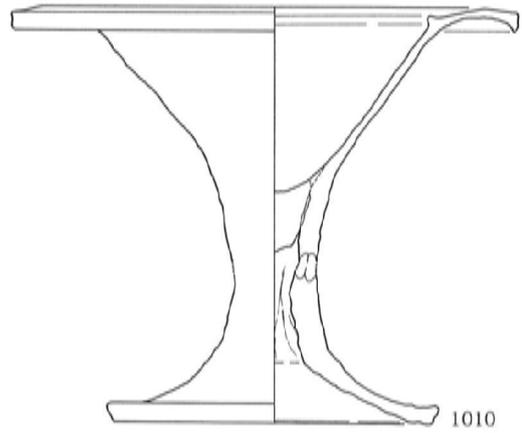
1003



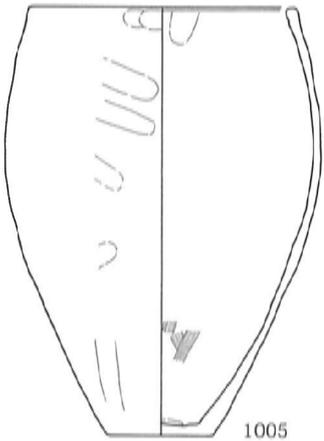
1009



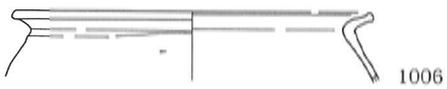
1004



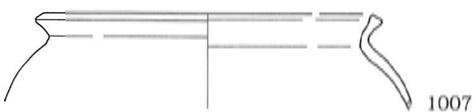
1010



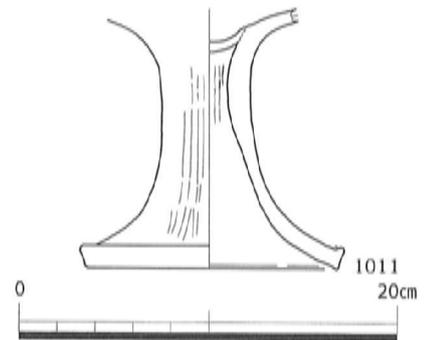
1005



1006



1007



1011



图 148 中央北区出土弥生土器 (4)

北区と同様に、出土地点ごとにまとめて報告することとする。後世の遺物包含層に含まれる混入品がほとんどであり、中央北区で見られるような、後世に再埋納されたと考えられる遺物は検出されていない。

図149-1012は、K区北半部の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。複合鉢であり、脚部以下を欠損している。口縁はやや内湾しており、口縁端部は外側に折り返して肥厚させて面を形成している。鉢部の端部分には、外面に水平方向の凹線が巡っている上に、円形浮文が連続して付けられている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。径6mmの結晶片岩を含んでいる。1013は、K区南半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。台形土器であるが、大部分を欠損している。台部上面は丁寧に調整されている。1014は、K区南半部から出土したもので、近世の遺構から検出された混入品である。把手付台付鉢の脚部である。ほぼ直立する。端部付近および中央部には、凹線がめぐる。脚部の上端には、円孔が連続して付けられている。熱を受けて赤く変色している。1015は、K区北半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。甕の口縁部で、口縁が大きく外反する。1016は、K区南半部から出土したもので、近世の遺構から検出された混入品である。大型の甕の口縁部で、口縁が、くの字状に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。1017は、K区北半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。甕の口縁部で、口縁が、くの字状に外反する。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。1018は、K区南半部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。鉢で、口縁端部が面をなしており、凹線気味にへこんでいる。外面には、斜め方向の細かいハケ調整が施されている。内面には、指頭圧痕が見られる。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。1019は、K区北半部の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。真蛸壺形土器で、直接接合はしないものの、図上で復元されたものである。ほぼ直立する形状であるが、口縁端部は内側にやや広がっており、内湾気味である。外面には、斜め方向の細かいハケ調整が施されている。内面には、指頭圧痕やナデ調整が見られる。

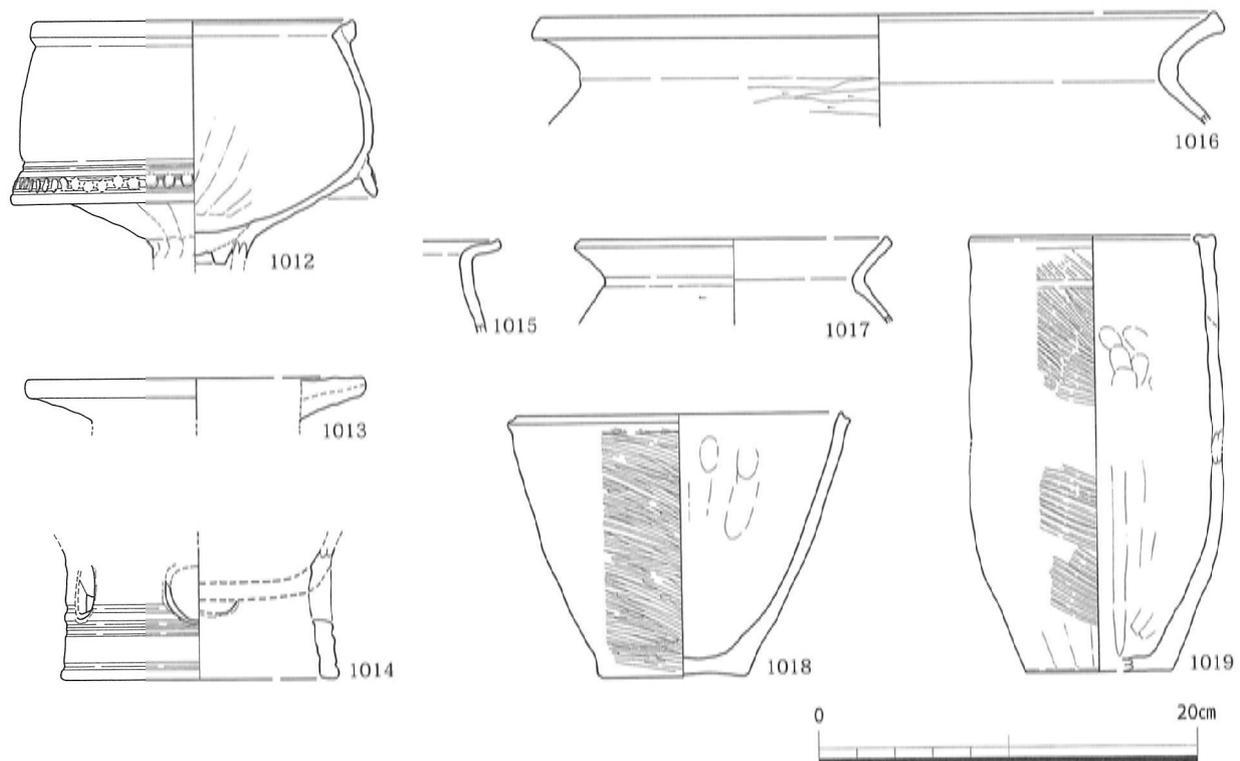


図 149 中央南区出土弥生土器 (1)

図150-1020～1022は、J区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。1020は、壺の口縁部である。口縁端部をほぼ直角に下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付けられている。この沈線は、半裁竹管を使用した可能性がある。1021は、壺の口縁部である。口縁端部を直角に下方方向に広げており、外面に凹線が巡る。凹線の上には、縦方向のヘラ描き沈線のまとまりが付けられている。この沈線は、半裁竹管を使用した可能性がある。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が綾杉状に3条施されている。表面には、角閃石を含む暗褐色土の化粧土を塗布している可能性がある。1022は、無頸壺の上半部である。口縁端部は内側にやや広がっており、内湾気味である。外面は、縦方向のハケ調整の後、直線文が連続して描かれている。内面には、縦方向のハケ調整が見られる。一部、熱を受けており、赤く変色している。外面が黒く、煤が付着したものと考えられる。1023は、I区南端部から出土したもので、近世の遺構から検出された混入品である。壺の頸部付近で、口縁部や体部下半は欠損している。頸部には、ヘラ状工具による刺突文が巡る。体部外面には、斜め方向のタタキ目が残っている。内面には、指頭圧痕が見られる。1024～1026は、J区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝1の出土品の可能性がある。1024は、

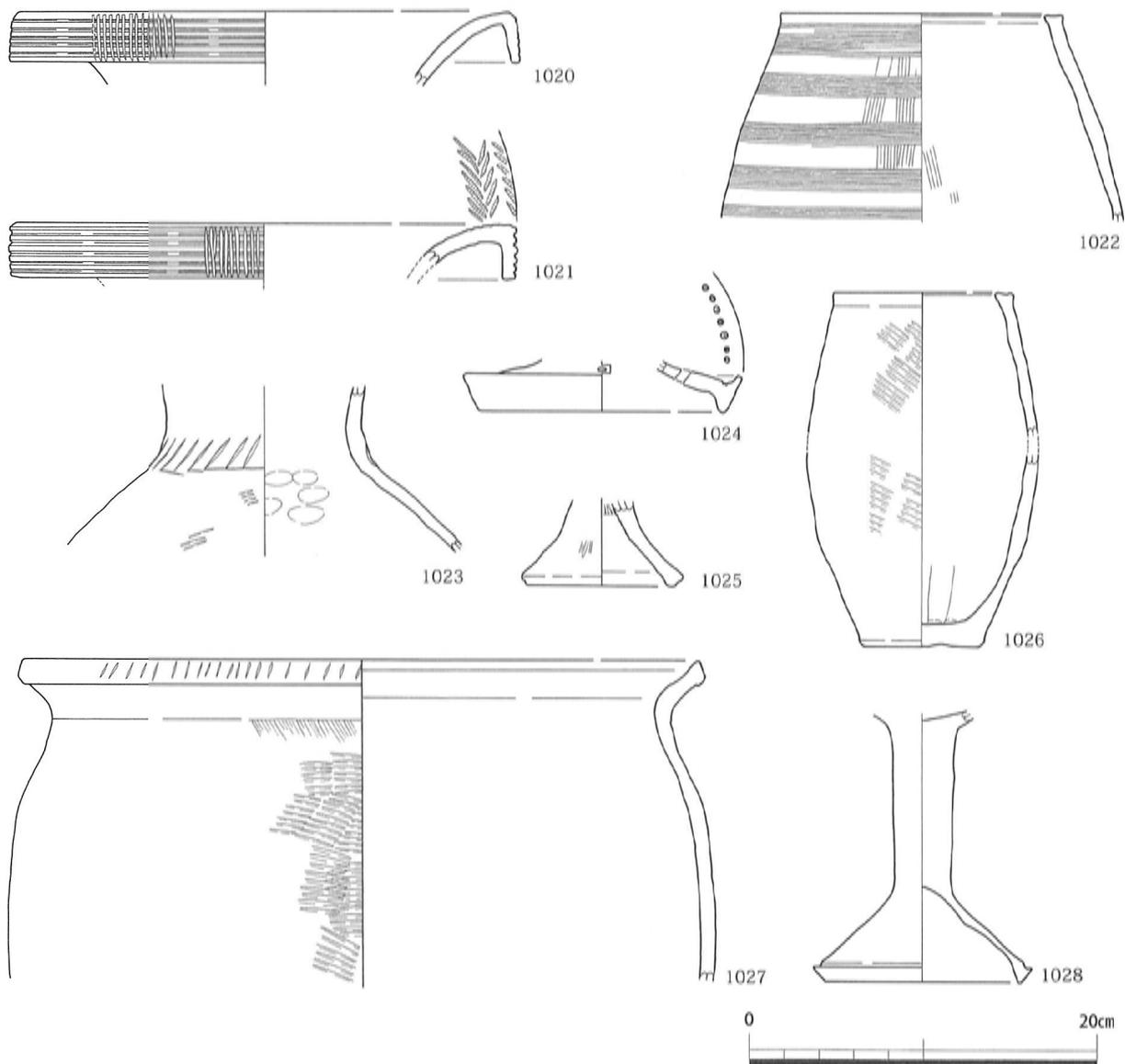


図150 中央南区出土弥生土器（2）

高杯脚台部である。端部を肥厚させており、面をなしている。端部に沿って、竹管文が巡っているほか、円孔が付けられている。一部、熱を受けており、赤く変色している。1025は、高杯脚台部である。外面に、ヘラミガキ調整が施されている。一部、熱を受けており、赤く変色している。1026は、真蛸壺形土器で、直接接合はしないものの、図上で復元されたものである。口縁端部は内側にやや広がっており、内湾する。外面には、斜め方向のタタキ目が残っている。外面に煤が付着している。1027・1028は、I区南端部から出土したもので、近世の遺構から検出された混入品である。1027は、大型甕の上半部である。口縁はやや外反する。口縁端部が面をなしており、刻目が連続して付けられている。体部外面には、横方向と斜め方向のタタキ目が残っている。1028は、高杯脚部である。端部を肥厚させており、面をなしている。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。

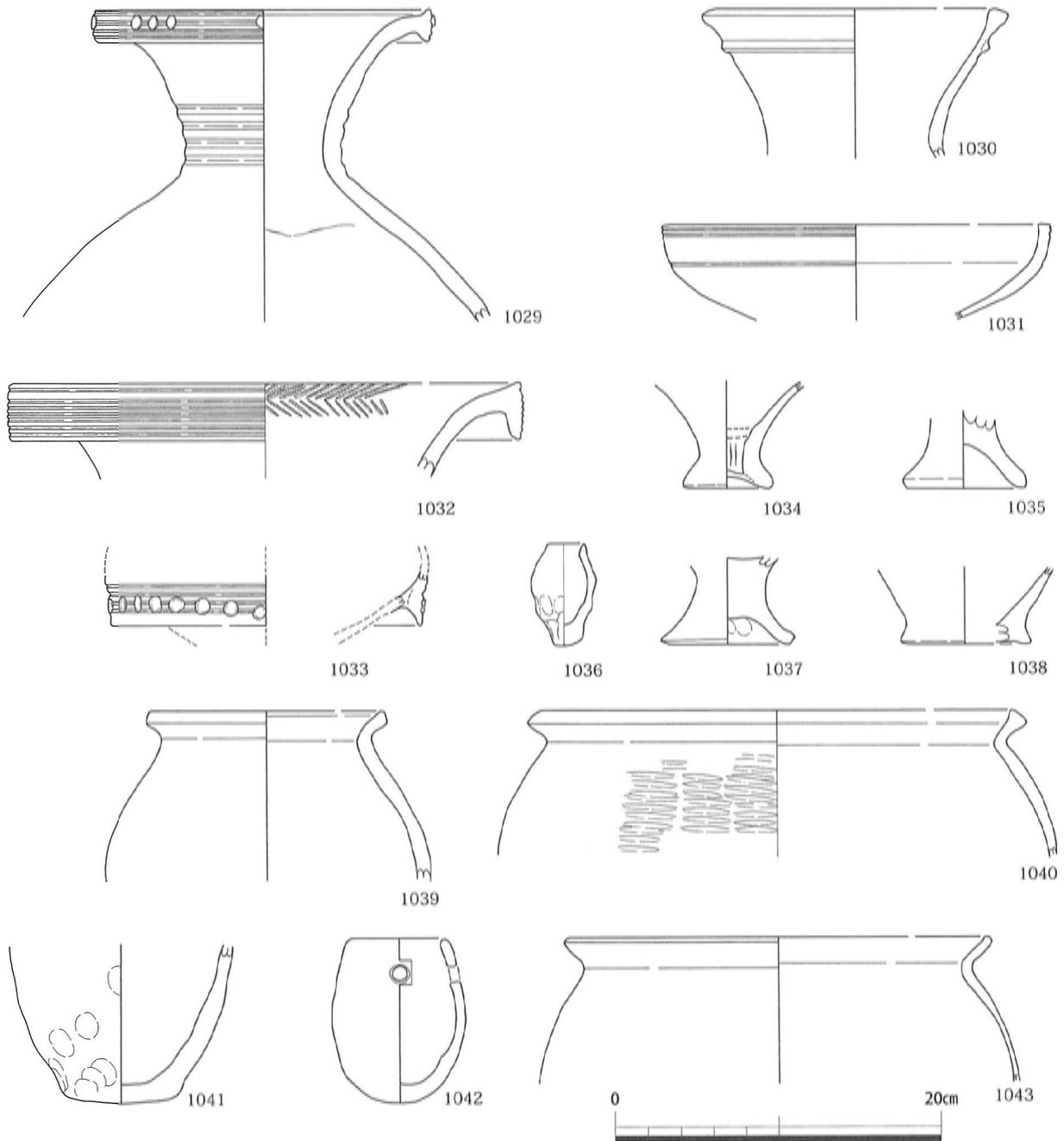


図 151 中央南区出土弥生土器 (3)

図151-1029は、P区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝3の出土品の可能性がある。壺の上半部である。口縁端部を両側に広げており、面をなしている。面には凹線が巡っており、3点1組の円形浮文が連続して付けられている。頸部は細くなっており、凹線が4条巡る。1030は、O区の遺物包含層から出土したものである。直口壺の口縁部である。口縁は、斜め上方に向かって広がり、口縁端部を肥厚させている。外面には、口縁端部からやや下がった位置に突帯が巡っている。1031・1032は、P区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝3の出土品の可能性がある。1031は、高杯杯部で、底部以下を欠損している。口縁端部を肥厚させており、やや内湾気味である。口縁部の外面の上端と下端に凹線が巡っている。1032は、壺の口縁部である。口縁端部を直角に下方向に広げており、外面に凹線が巡る。口縁部内側には、斜め方向の刺突文が綾杉状に施されている。1033は、O区の遺物包含層から出土したものである。複合鉢であり、鉢部の垂下部分のみ残存している。垂下部分には、外面に水平方向の凹線が巡っている上に円形浮文が連続して付けられている。1034・1035は、P区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝3の出土品の可能性がある。1034は、台付鉢の脚部である。台部の上下に円板充填が施されている。台部の内側には、絞り目が見られる。1035は、台付鉢の脚部である。1036・1037は、O区の遺物包含層から出土したものである。1036は、ミニチュア土器で、壺形である。手づくねでつくられており、底部が厚い。1037は、台付鉢の脚部である。鉢と台部のつなぎ部分の粘土が厚い。台部の内面には、指頭圧痕が見られる。胎土の特徴から、生駒西麓産と考えられる。1038は、P区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝3の出土品の可能性がある。甕の底部である。胎土の特徴から、紀伊産と考えられる。1039は、O区の遺物包含層から出土したものである。甕の上半部である。器壁がやや厚い。口縁端部は面をなしている。一部、熱をうけて変色している。1040は、P区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝3の出土品の可能性がある。大型甕の口縁部付近である。口縁端部は肥厚させており、面をなしている。体部外面には、横方向のタタキ調整が施されている。1041は、O区の遺物包含層から出土したものである。真蛸壺形土器の体部下半である。外面には、指頭圧痕が見られる。1042は、P区の遺物包含層から検出されたものであるが、大溝3の出土品の可能性がある。飯蛸壺である。口縁は内湾しており、口縁からやや下がったところに円孔があげられている。1043は、L区の遺物包含層から出土したものである。やや大型の甕の口縁部付近である。口縁が、くの字状に外反する。

図152は、T区北端部から出土したもので、近世の遺構から検出された混入品である。1044は、甕で、

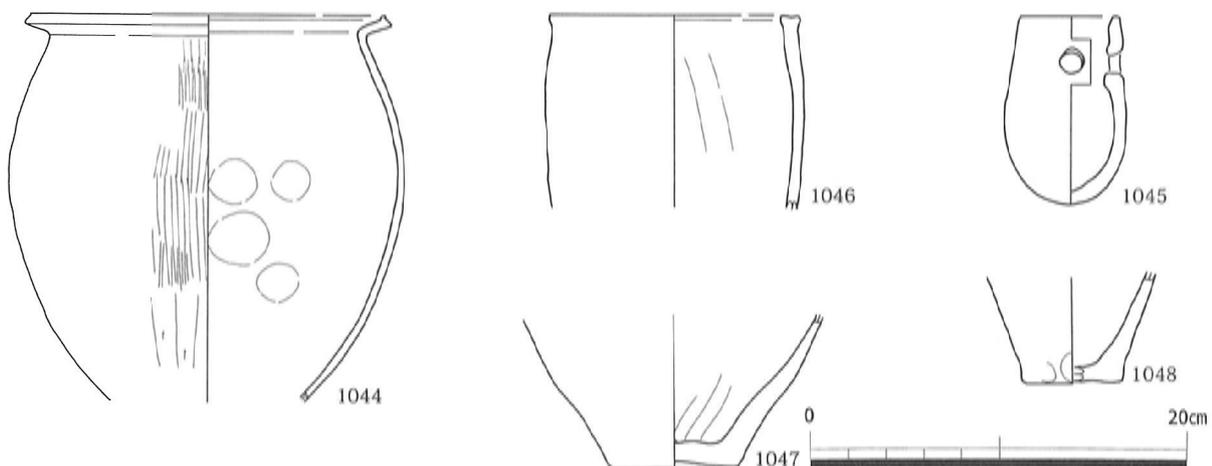


図 152 中央南区出土弥生土器 (4)

底部を欠損している。口縁部は強く外反する。体部外面には、縦方向の幅の広いハケ調整が施されている。下半には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。胎土に微角閃石が見られることから、生駒西麓産と考えられる。1045は、飯蛸壺である。口縁は内湾しており、口縁からやや下がったところに円孔があげられている。1046は、真蛸壺形土器の上半部である。口縁端部は肥厚させており、やや内湾気味である。1047は、甕の底部である。一部、熱を受けて変色している。1048は、底部で、甕か壺の判断ができないものである。胎土に微角閃石が見られることから、生駒西麓産と考えられる。

(3) 石器

遺物包含層や後世の遺構の混入品として、土器以外に石器も多く検出されている。土器のように、後世に改めて埋納されたような出土状況のものはなく、石器に関しては再埋納という意識はなかったようである。出土量に差はあるものの、ほぼ調査区全面で検出されている。中でも、弥生集落の範囲内からの出土が多い。弥生集落の範囲外では、後世の遺物包含層や遺構埋土から出土したものが多く、混入品として扱っている。打製石器に関しては、この地では産しないサヌカイト製のものがほとんどであることから、出土品として目につきやすい。これに対して、磨製石器では、緑色片岩製の石庖丁などは、この地で産しない石材であることから、判別が可能であるが、叩き石や台石などは砂岩製のものが多く、地山に多く含まれる自然石との判別が困難なものが多い。使用痕が顕著なものを主体に取り上げているが、痕跡がほとんど認められないようなものは、除外している。叩き石などは、特に加工しなくてもそのまま使用できる自然石が採集可能な立地条件であるため、仮に叩き石の未使用品というものが存在するならば、判別できない。弥生集落内からは、このような叩き石の未使用品などをまとめて保管したかたちで、土坑から出土した例はない。

打製石器は、詳細な分析をおこなっていないためはっきりしないが、二上山産のサヌカイトが主体であるといえる。ただし、香川県金山地域産と考えられるものも見られる。包含層出土の打製石器のうち、図化できるものを図153に示す。

1049は、中央北区のE区北半部の遺物包含層から出土したものである。凹基式の石鏃で、縄文時代の混入品と考えられる。側縁が鋸歯状に剥離している。小型のもので、重量は1gにも満たない。1050は、中央北区のE区南端部から出土したもので、中世の遺構から検出された混入品である。凸基Ⅱ式の石鏃で、先端部と茎部が欠損している。1051は、中央南区のL区の遺物包含層から出土したものである。スクレイパーで、縄文時代のものと考えられる。縦長の剥片であり、上辺に自然面が残る。両面に大きな剥離面があり、両側縁にエッジが見られる。1052は、中央南区のO区西端部から出土したもので、後世の遺構から検出された混入品である。有茎式の石鏃である。先端部を欠損している。1053は、中央南区のO区の遺物包含層から出土したものである。細身の有茎式の石鏃を転用した石錐である。両端部に使用痕がある。1054は、中央南区のO区の遺物包含層から出土したものである。Ⅲ類と考えられる石錐である。両端錐部に使用痕がある。1055は、中央南区のN区の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。石槍である。先端部と基部が欠損している。両側縁を一部擦り落としている。1056は、中央南区のT区北東部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。有茎式の石鏃を転用した石錐である。茎部を欠損している。1057は、中央南区のT区北東部の遺物包含層から出土したものである。有茎式の石鏃である。先端部を欠損しているほか、側縁が部分的に破損している。1058は、中央南区のT区北東部の遺物包含層から出土したものであるが、混入品である。Ⅲ類と考えられる石錐である。錐部が欠損している。1059～1061

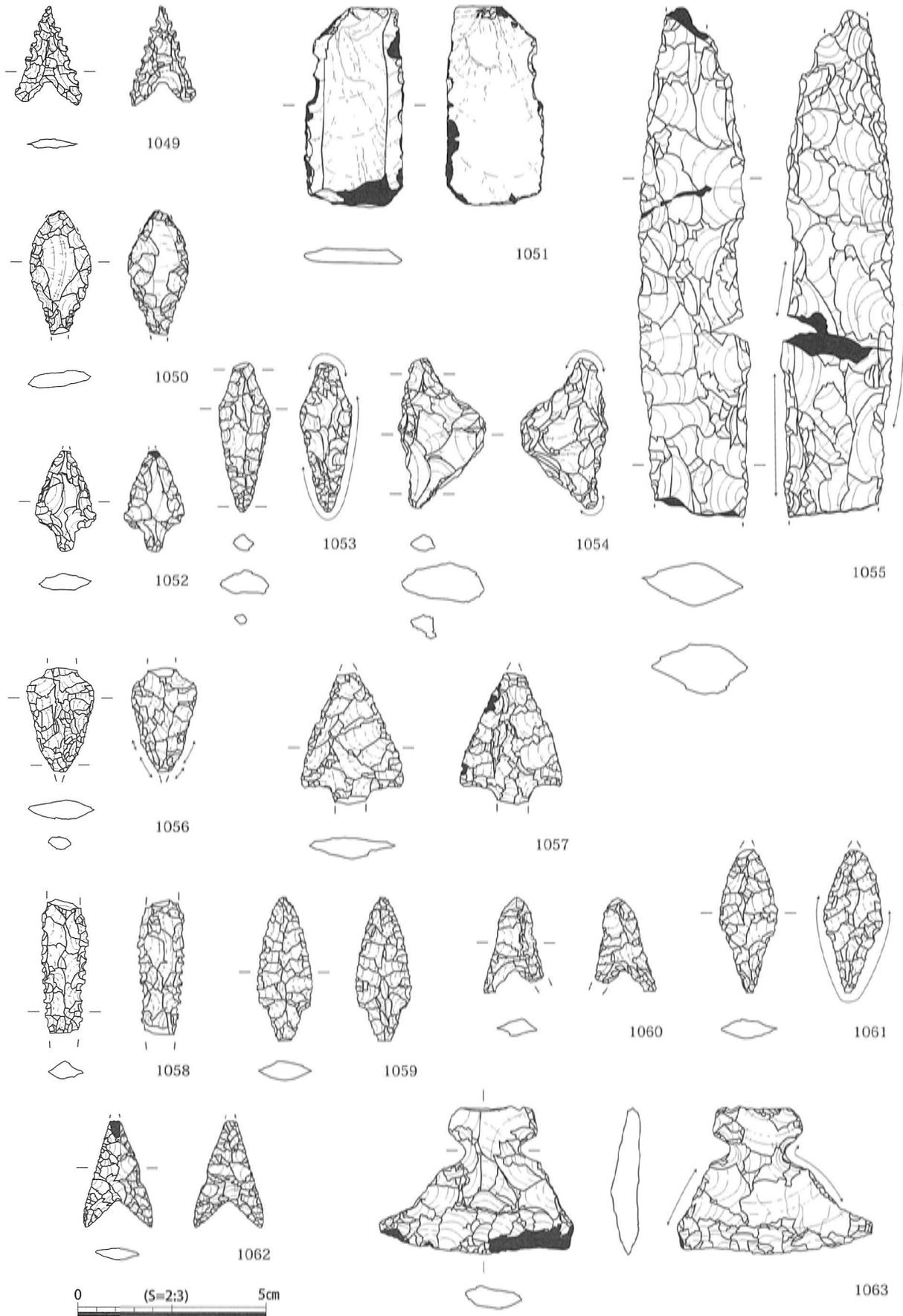


图153 包含层出土打製石器

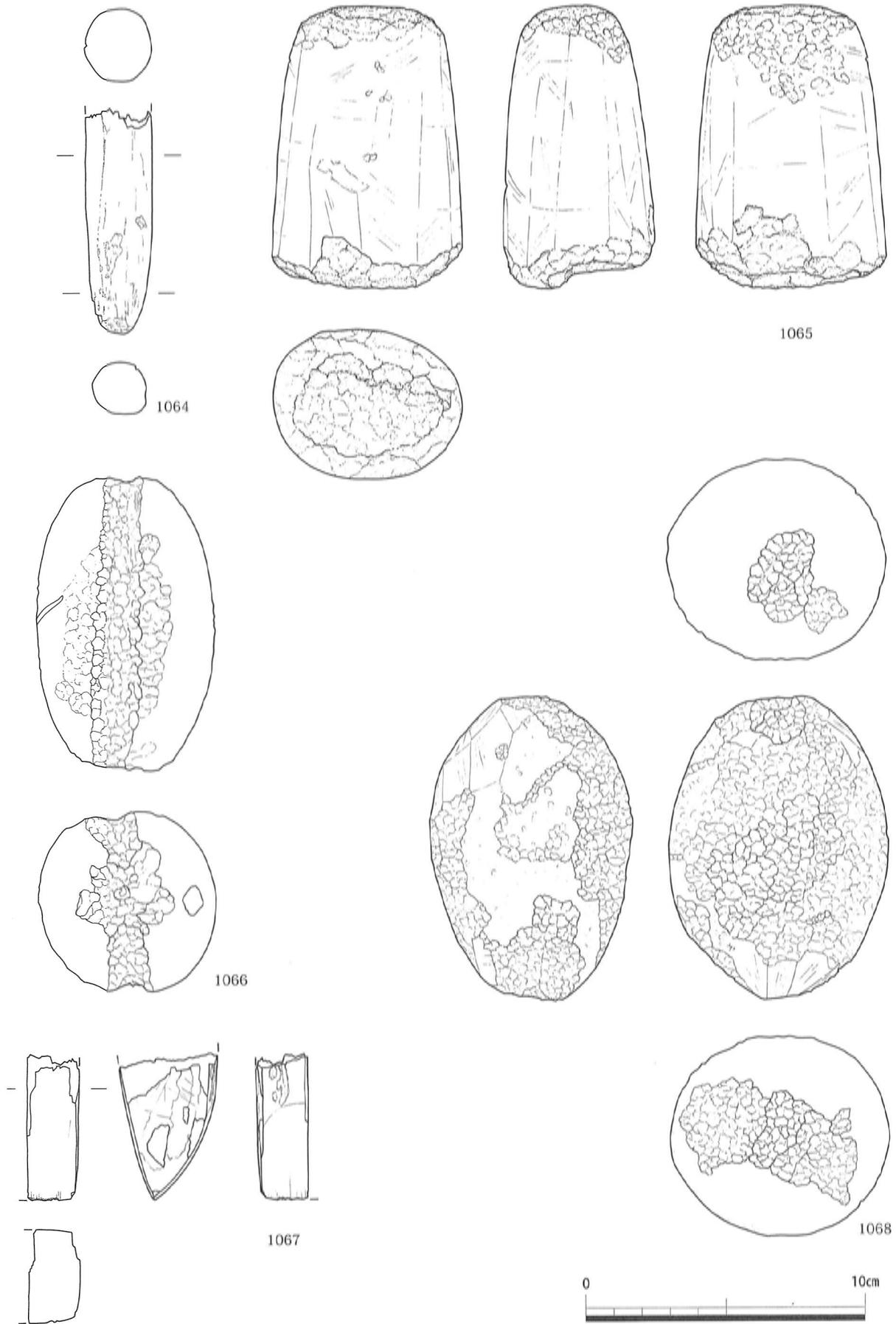


图 154 包含層出土磨製石器 (1)

は、中央南区のT区北東部の遺物包含層から出土したものである。1059は、細身の有茎式の石鏃である。ほぼ完形であり、目立った欠損は見られない。1060は、凹基式の石鏃で、縄文時代の混入品と考えられる。先端部と片方のかえり部が欠損している。小型のもので、重量は1gにも満たない。1061は、凸基Ⅱ式の石鏃である。先端が欠損している。両側縁から基部にかけてエッジが摩滅している。1062は、南区のX区の遺物包含層から出土したものである。チャート製の凹基式の石鏃で、縄文時代の混入品と考えられる。先端が欠損している。今回の調査で出土した打製石器および未成品は、すべてサヌカイト製であり、チャート製のものはこの1点のみである。1063は、南区のW区の遺物包含層から出土したものである。横型の石匙である。ほぼ完形であり、刃部の一部が欠損している。

図化できたもの以外で、完形に近いものを写真図版に示した。図版69-1437・1438は、中央北区のE区南半部の遺物包含層から出土したものである。1437は、凸基Ⅱ式の石鏃と考えられる。先端部と茎部が欠損している。両側縁が鋸歯状に剥離している。1438は、凹基無茎式の石鏃である。先端が欠損しており、表面が風化している。小型のもので、重量は1gにも満たない。図版70-1439は、中央北区のE区南半部の遺物包含層から出土したものである。I類と考えられる石錐である。錐部の使用

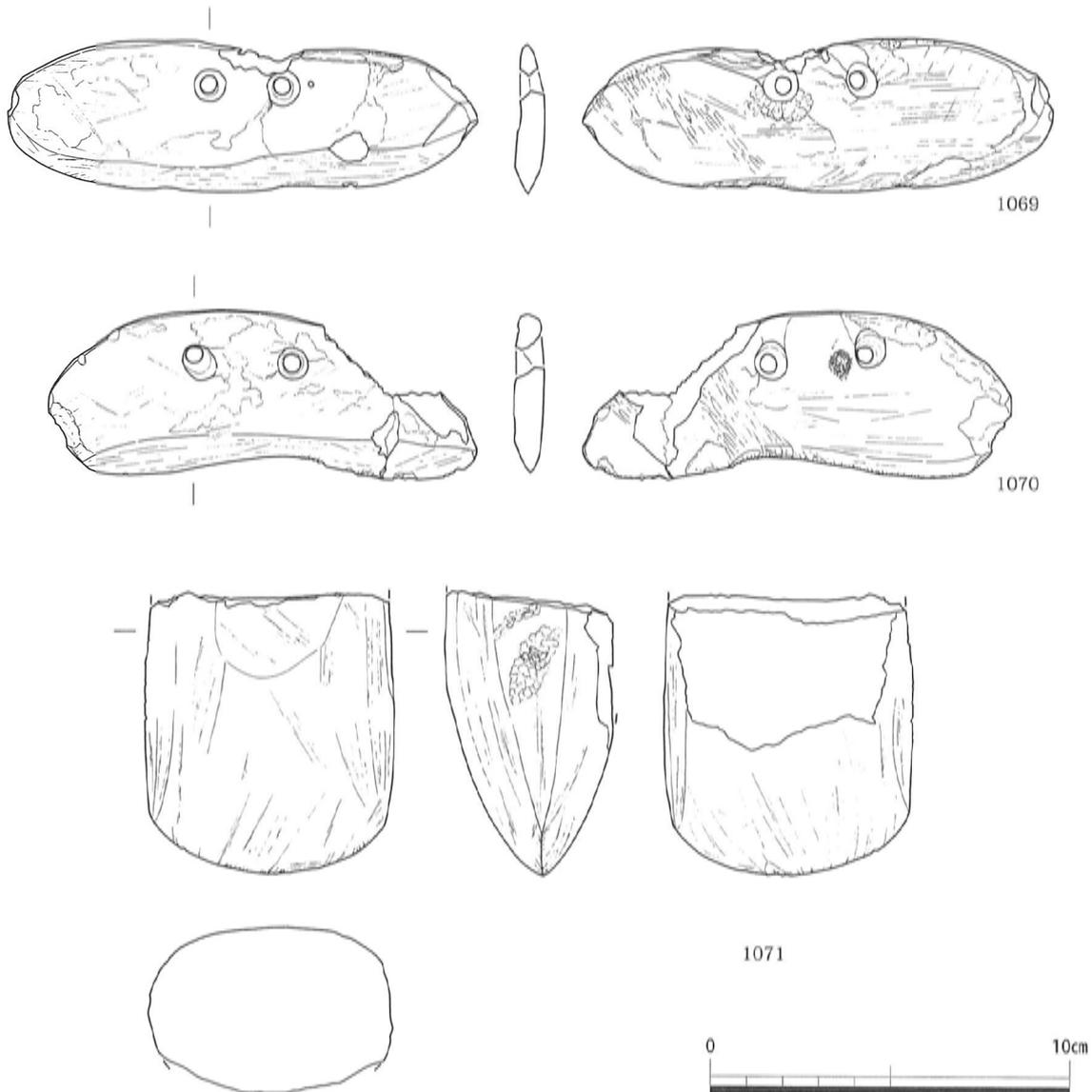


図 155 包含層出土磨製石器 (2)

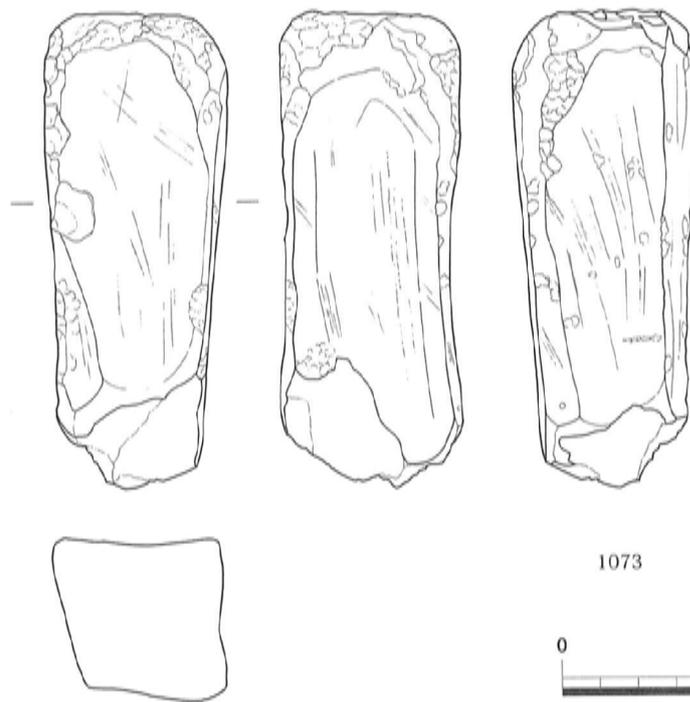


图 156 包含層出土磨製石器 (3)

痕は顕著である。金山産の可能性がある。図版71-1440は、中央南区のM区の遺物包含層から出土したものである。横型の石匙である。ほぼ完形であり、片面の中央部に自然面が残っている。図版72-1441は、中央南区のL区の遺物包含層から出土したものである。金山産と考えられるスクレイパーである。直線的な側辺に自然面が残っている。背部のエッジを擦り落としている。図版73-1442は、南区のW区の遺物包含層から出土したものである。金山産と考えられる打製石庖丁である。全体にやや風化している。

磨製石器の石材は、緑色片岩と砂岩が主体である。緑色片岩は、紀伊産であると考えられ、石庖丁製作のため、かなり多くもたらされているものと考えられる。砂岩に関しては、男里川の氾濫原であることから、特にローリングをうけた石材を容易に手にいれることができる。

包含層出土の磨製石器で、図化できるものを図154～156に示す。図154-1064は、中央北区のE区南半部の後世の遺構から検出された混入品である。緑色片岩製の叩き石である。棒状に研磨、成形されている。一方の端部は折損しており、他方の端部の叩打痕は少ないため、石棒の転用品の可能性もある。1065は、中央南区のH区北端部の後世の遺構から検出された混入品である。砂岩製の叩き石である。太型蛤刃石斧を転用したものである。刃部を欠損しており、上下両端部に叩打痕が見られる。1066は、中央南区のO区の遺物包含層から出土したものである。砂岩製の石錘である。卵形の礫を使用している。長軸方向に叩打による溝が一巡している。他にも一部叩打痕が見られる。1067は、中央南区のI区の遺物包含層から出土したものである。緑色片岩製の柱状片刃石斧である。大部分が欠損しており、刃部の片側面が残存している。刃部に使用痕が見られる。1068は、中央南区のU区の後世の遺構から検出された混入品である。砂岩製の叩き石であるが、磨石の可能性もある。卵形の礫を使用している。中央部と上下両端に叩打痕が見られるほか、一部擦った痕跡も認められる。火をうけた可能性もある。

図155-1069は、中央南区のT区の遺物包含層から出土したものである。緑色片岩製の石庖丁である。ほぼ完形品であるが、片刃であり、刃部が外湾気味である。紐孔は、片面を叩打後に穿孔しており、紐擦れ痕が認められる。1070は、中央南区のQ区の遺物包含層から出土したものである。緑色片岩製の石庖丁である。片刃であり、刃部が内湾気味である。叩打後に紐孔を穿孔しており、紐擦れ痕が認められる。1071は、中央南区のL区の遺物包含層から出土したものである。硬質砂岩製の太型蛤刃石斧である。基部を欠損している。刃部には使用痕が見られる。

図156-1072は、中央南区のQ区の遺物包含層から出土したものである。砂岩製の叩き石である。くぼみ石の可能性もある。中央部と上下両端に叩打痕が見られる。中央部には、さらに、線條の打撃痕がある。1073は、中央南区のT区北端部の後世の遺構から検出された混入品である。砂岩製の砥石である。角柱状の礫を使用している。研ぎ面は4面である。長軸方向に線條痕があり、わずかにくぼんでいる。

5. 小結

ここで簡単に弥生時代の成果を整理しておく。

男里川に対して、やや高台にあたる段丘上で、中央南区を中心とした弥生集落が検出された。おおまかな範囲としては、東西方向の広がりにははっきりしないが、南北約380mの規模を有しているものと考えられる。時期は、中期末（第Ⅳ様式）を中心としたもので、遺物の時期差はほとんどみられない。第Ⅲ様式の土器が若干みられる以外は、第Ⅴ様式の土器はほとんど出土しておらず、ほぼ時期が第Ⅳ様式に限定される集落といえることができる。

この集落には、居住域と墓域があり、両者は約100m離れている。この間では、弥生時代の遺構や遺物はほとんど検出されておらず、空閑地となっている。居住域と墓域を隔絶している意識がうかがわれる。ただ、墓域では方形周溝墓が主体であるのに対し、居住域の中から土坑墓や土器棺が若干みつまっていることから、埋葬者によって墓域に違いがあることが考えられる。

居住域は、南北約200mの規模であり、確認されたのみで竪穴住居が32棟存在している。今回の調査では、居住域の全体を明らかにしたわけではないので、さらに多くの竪穴住居が存在していることが考えられる。また、掘立柱建物は3棟復原しているが、おびただしい数のピットが密集して検出されていることから、復原は不可能であるが、相当数の建物が存在していたことが推測される。竪穴住居と掘立柱建物の分布位置が異なることから、居住域の中で建物の配置になんらかのルールが存在することが推測される。これは、竪穴住居の分布状況でもいえることで、密集する部分と点在する部分がみられる。礫が密集する地山やシルト質の地山という地面の状況による立地条件に影響されていない。礫が密集する地山で掘削しにくい場所に重複して竪穴住居がつくられていたり、シルト質の地山で掘削しやすい場所に竪穴住居がつくられていない例が多く存在する。あまり時期差のない集落であるため、もとの竪穴住居とほぼ同じ場所に建て替えている状況がうかがわれるが、あえてやや離れたシルト質の掘削しやすい場所ではなく、掘削しにくい礫が密集する地山部分につくっていることが特徴的である。

竪穴住居に関しては、統一的なものがなく、かなり多種にわたる。規模や形状は様々であり、内部構造にも違いがみられる。その中で、上部構造の復原に関わる発見があった。すべての竪穴住居で確認されたわけではないが、壁溝内から杭の痕跡が並んで検出された。また、内部の堆積状況から壁の存在をうかがわせる土層が確認された。これらのことから、確定することはむずかしいが、竪穴住居の中に壁構造を有しているものが存在していることを推測することができる。今回の調査のみでは、はっきりせず、今後の調査例を待たねばならない部分も多いが、竪穴住居の上屋構造の復原に関する研究に一つの方向性を示すものと考えられる。

墓域に関しては、ごく一部を調査したのみであるが、方形周溝墓が少なくとも2基存在することが明らかとなった。墳丘は削平されているため、本来の規模を知ることはできないが、周溝内からは供献土器と考えられる土器が出土しており、しっかりとしたものであったことが推測される。

集落に張り付くかたちで大溝1がみつまっている。幅約10mの自然流路を利用したものであり、本来の目的ははっきりしないものの、人為的に改変している部分があり、集落にとって重要な役割をもっていたことが考えられる。集落を囲むかたちではないことから、環濠とは考えられない。また、廃絶におびただしい量の弥生土器が埋められており、集落の時期を示すだけでなく、泉南地域における弥生時代中期末の土器一括資料として、重要な意味をもつものといえることができる。

第3節 古墳時代の遺構・遺物

従来、男里遺跡は弥生時代中期の遺跡として認識されており、今回の調査でもこの時期に関する多くの遺構や遺物が検出されている。弥生時代中期を中心とする遺跡という認識は誤ってはならず、調査成果によって追認できたほどである。ただ、弥生時代中期末を主体とする一大集落が営まれていたことは確認できたが、古墳時代になると急激に遺構や遺物の検出は少なくなり、集落を形成するほどのものはみつかっていない。今回の調査範囲にとどまらず、男里遺跡全体を見ても、古墳時代の遺構や遺物は極端に少ない。現在の調査成果のみでは、この動きを説明できるほどの要素はないため、明らかにすることはできない状況である。

現状では、男里遺跡にとどまらず、泉南市域においても古墳時代の遺跡は少ない。泉南市域の中では、東側で古墳群がみついているものの、男里遺跡周辺にあたる市域の西側では、ほとんど見られない。隣接する阪南市域においても、散発的に古墳や集落が検出されているのみで、周辺であまり大規模な遺跡は現状ではみつかっていない。ただし、さらに南に目を向けると、岬町には陵墓参考地である宇度墓古墳をはじめ、大型の前方後円墳である西陵古墳など多くの古墳群が見られることから、泉州南部地域が必ずしも古墳時代に空白地であったとはいえない状況である。また、海岸部には製塩遺跡が点在していることから、他地域に向けての塩の供給元としての集落や流通路が発達していたことが推測される。

現在のところ、男里遺跡の中で古墳時代の遺構や遺物がまとまって検出されている部分は、今回の調査区の北西側にあたる、双子池上池から西側にかけての部分である。この部分では、まとまったかたちでの調査はおこなわれていないが、散発的に庄内期を中心とする自然流路や遺物がみついている。具体的な集落や建物跡は検出されておらず、実態ははっきりしないが、この周辺に存在する可能性は高い

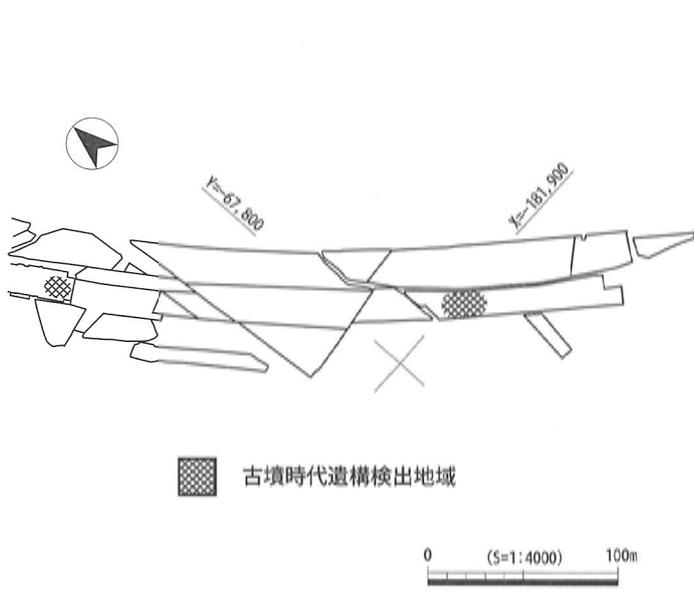


図157 古墳時代遺構分布図

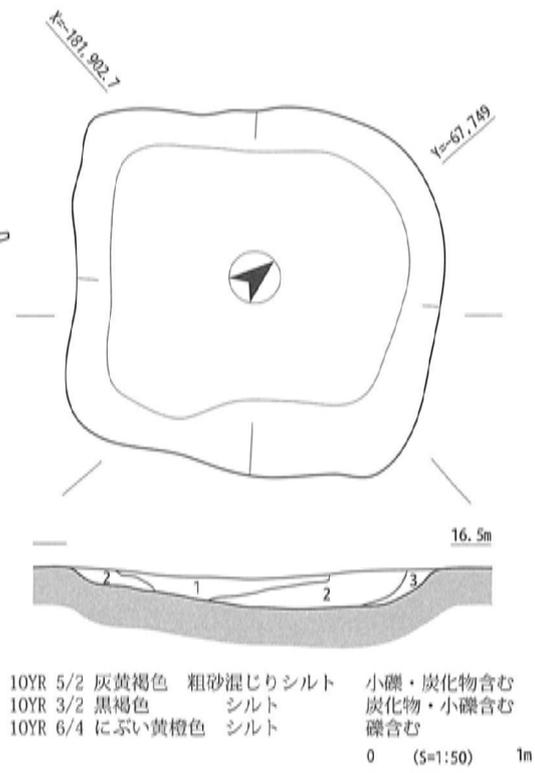


図158 土坑630032平・断面図

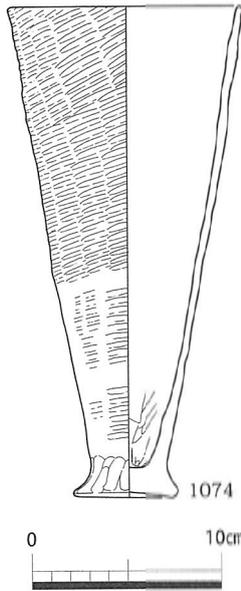


図 159 土坑 630032
出土土器

といえる。また、男里遺跡の北側に位置する天神の森遺跡では、昭和9(1934)年の室戸台風で松の木が倒れた際に、須恵器大甕が出土したという。

土坑630032 (図158、159、図版20、78)

今回の調査において、古墳時代に属する明確な遺構は、南区のX区北西端部で検出された、土坑630032のみである。周辺で同時期の遺構は検出されておらず、単独の検出であるため、存在意義がはっきりしない。人為的に掘削されており、製塩土器が検出されたものである。周辺は、後世の整地による削平が著しいことから、遺物包含層はほとんど残存しておらず、地山面まで及んでいる状況である。土坑の上部も削平をうけているものと考えられ、残存状況は良好ではない。

平面形は、ほぼ方形を呈しており、規模は、現状で一辺約2.4m、深さ約20cmを測る。埋土は、大きく2層に分けられる。上層は、にぶい黄褐色粗砂混じりシルトが主体で、小礫を含む。下層は、黒褐色シルトが主体で、炭化物と小礫を含む。南端部の底部において、径約60cmの円形の範囲に炭化物が集中する部分が検出されたが、焼土は見られず、火を受けた状況ではない。この炭化物の集中部にかかる位置で、製塩土器が横たわった状況で検出された。他に、遺物はほとんど出土

していない。周囲では、類似した土坑や建物跡などは検出されていない。さらにこの時期の製塩土器に関しては、遺物包含層からも出土しておらず、土坑出土のものが唯一である。炭化物は検出されているが、この部分で製塩作業がおこなわれていた可能性は低いものと考えられる。

製塩土器(図159-1074)は、ほぼ完形であり、未使用品と考えられる。外面にやや右上がりのタタキ調整が明瞭に残っており、器壁が非常に薄いものである。タタキ目は、上半部は密に見られるが、下半部はナデ調整により、やや消されている。脚台部は、なでつけられており、外面に縦方向のナデ調整が見られる。底部は、ほとんど平坦であり、へこんでいないため、脚台部はかなり厚くなっている。内面は、表面剥離などで調整ははっきりしない。熱を受けた状況ではなく、外面に煤も付着していない。庄内期のものと考えられる。

今回の調査では、庄内期の遺物は、ほとんど検出されておらず、遺物包含層からもみつからない。また、この時期の製塩土器も出土しておらず、製塩がこの地でおこなわれていたのかどうかは、はっきりしない状況である。立地条件としては、他の製塩遺跡に比べてやや内陸部に位置しており、海岸部とはいいがたい。泉州南部地域には、同時期の製塩遺跡は多くみつまっているが、条件面でやや可能性は低いものといえることができる。

他の調査区でも、同時期あるいは古墳時代の遺物の出土量は非常に少ない。調査区内で同時期の遺物が顕著に出土している部分はみられない。ただ、中央南区の弥生集落の調査の際に、多くのピットが検出されているが、その中で須恵器片が出土するものが数基みられる。ピットは地山面での一括検出であるため、弥生時代のものに限らず、中には古墳時代に属するピットも存在することが考えられる。多くのピットの中から、古墳時代のものを抽出することは困難であるため、具体的な建物を復元することは不可能であるが、生活の痕跡がまったくないわけではなく、小規模ながらも建物が存在していたことが推測される。限られた部分の調査であるため、はっきりしない点は多いが、弥生集落に比べるとはるかに規模は小さいものの、古墳時代の集落が営まれていたことは確かであるといえる。

第4節 古代の遺構・遺物

古墳時代の遺構・遺物があまり検出されていないことは、前節で述べたが、古代になると、再び集落が営まれるようになる。弥生集落が営まれていた部分とは立地が異なっており、ほとんど重複していない。遺構の検出部分は、やや広がっているが、掘立柱建物が多く検出された中央北区を中心として、集落がつくられていたことが確認できる。また、廃棄土坑も同時に検出されていることから、同時期の一括資料を得ることができた。この部分は、この地を東西方向に横切る道路に面しているものと考えられ、中心的な場所ということができる。一方、南区では、調査区を横切る流路が検出され、遺物が出土していることから、調査区内では建物跡はみつからないが、近接して集落がつくられていた可能性が高い。ここでは、古代の成果を、層序と掘立柱建物、地区別の状況、遺物包含層の状況に分けて述べることとする。

1. 層序

古代の中心的な集落は、主に中央北区に広がっており、やや離れた北区と中央南区の一部で、遺構が検出されているほか、南区の流路から遺物が出土している。ここでは、集落部分である中央北区における古代の堆積状況を見るために、トレンチの壁断面をあげておく。中央北区のうち、遺構の密集している部分（F区西壁・G区北壁）の断面図を採用した（図161）。

土層の大まかな傾向としては、すでに述べたように、北から南へ向かって緩やかに上がっている。中央北区においてもこの傾向は見られるが、特徴としては、調査区の北側を横切る道路付近がやや下がった地形であり、F区の中央部にかけて徐々に上がっている。F区の中央部から南側にかけては、比較的平坦な地形が続く。東側のE区北半部もF区に比べてやや上がっており、平坦な地形である。掘立柱建物や土坑群は、この平坦部を中心に展開している。北側のやや下がった部分では、遺構はほとんど検出されていない。古代の集落部分の南北方向の堆積状況を示すため、F区西壁断面図をあげておく。

F区は、調査前に耕作地であったことから、地表に約40cmの厚さで盛土が施されており、その下に旧耕作土層や床土層がみられる。整地による大規模な削平は見られないことから、遺物包含層の残存状況は良好である。基本的には、その下に2層に分かれる遺物包含層が認められる。いずれの遺物包含層も北側が厚く、南側はやや薄くなる。

上層の遺物包含層は、にぶい黄橙色砂混じりシルトを主体としており、鉄分の沈着が見られる。厚さは、10～20cmを測り、北側が厚い。中世から近世にかけての耕作土層と考えられ、部分的にはさらに土層

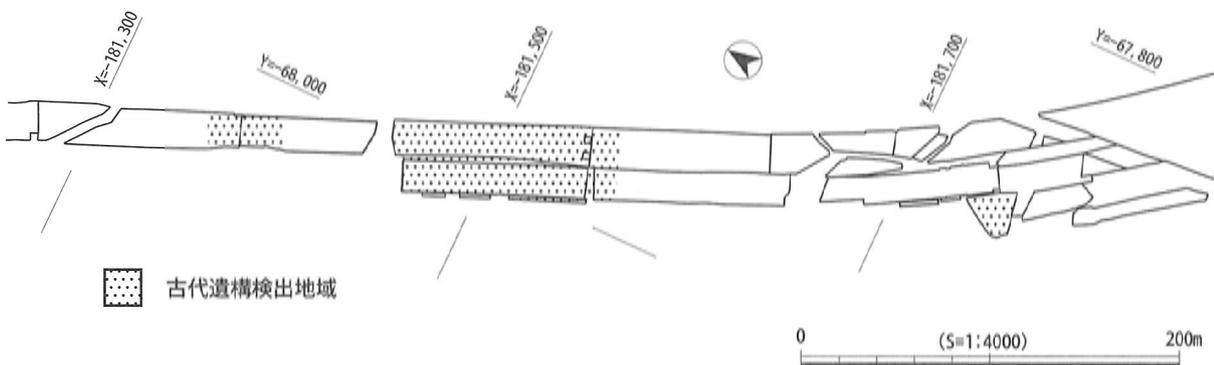


図160 古代遺構分布図

が細分できる。遺物の量は少ない。

下層の遺物包含層は、灰黄褐色粘質シルトを主体としており、砂が混じっている。7世紀末から8世紀を中心とする遺物が多く含まれている。この層の除去面が遺構検出面であり、地山面と判断した。地山面の下には、すでに述べたように、地山と判断するのがむずかしい、暗褐色土層が広がっていることから、部分的に試掘トレンチを入れて、土層の確認をおこなった。その結果、遺物は出土せず、この層の除去面において、遺構は確認されなかったことから、地山と判断した。また、部分的に灰黄褐色礫混じり粘質土を主体とする地山も見られ、地山は一定ではない。この礫層は締まっており、粘質土を主体とする地山とは対照的である。

古代の集落部分の東西方向の堆積状況を示すため、G区北壁断面図をあげておく。集落部分からやや離れているが、立地している平坦地のつづきであり、堆積状況にあまり違いが見られないことから、採用した。

ここでも、厚さ約50cmの盛土および旧耕作土層が、地表面付近に堆積していることから、遺物包含層の残存状況は比較的良好である。遺物包含層は、明確な層には分けられないが、にぶい黄褐色粘質シルトが主体の部分と褐色粘質シルトが主体の部分が認められる。いずれも、径約20cmの礫を多く含んでいる。この層の除去面が遺構検出面であり、地山面と判断した。地山は、灰黄褐色粘質シルト層であり、礫を多く含む。ただし、ここでいう遺物包含層は、中世頃のものと考えられ、整地による削平が地山面まで及んでいるものである。集落部分では、遺物包含層が残存しているが、南側では大規模な削平がおこなわれており、中央北区の南半部では、古代の遺物包含層はほとんど残存していない。

2. 掘立柱建物

中央北区の北半部で、まとまってピット群が検出されている。このピット群から掘立柱建物を復原することができた。中央南区でもピット群が密集して検出されており、弥生時代を中心とした掘立柱建物の柱穴と判断している。中央北区では、弥生時代の遺物は出土しておらず、中央南区の状況とは異なっている。また、遺物包含層や他の遺構（土坑・溝）から検出された遺物のほとんどが、7世紀末から8世紀にかけてのものであることから、この時期の掘立柱建物と考えることができる。

掘立柱建物の柱穴は、やや規模が大きく、掘方が方形のものも見られる。また、軸方向によるグループ分けもある程度可能なことから、時期による掘立柱建物群の変遷を見ることができる。方位を意識した建物が、まとまってつくられていることがわかる。掘立柱建物の分布状況は、中央北区の北半部のうちやや南寄りに偏る傾向が見られる。地形的に見ると、北側に比べてやや高い位置にあたる。検出されたピットの検討により、16棟の掘立柱建物を復原することができた。以下に詳細を述べる。

掘立柱建物33（図163、図版23）

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の建物が密集した部分から北へ約20m離れており、単独の建物である。周囲にはピットもほとんど検出されておらず、隣接した掘立柱建物は見られない。低い位置で遺構のあまり検出されていない部分であり、土坑や溝との重複関係はない。

現状で、4間（5.2m）×4間（6.0m）を確認しているが、北端部や東端部、北西辺などで柱穴が未検出の部分があることから、形状がはっきりしない部分もある。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-44°-Eである。柱間寸法は、南東側の桁行で、南から1.5m、1.5m、1.3m、（1.7m）の平均1.5m、南西側の梁行で、西から1.7m、（1.7m+1.8m）の平均1.7mを測る。柱穴掘方は、ほぼ円形を呈しており、径45～50cm、深さ10～30cmである。埋土は、暗褐色粘質シルトである。柱穴の規

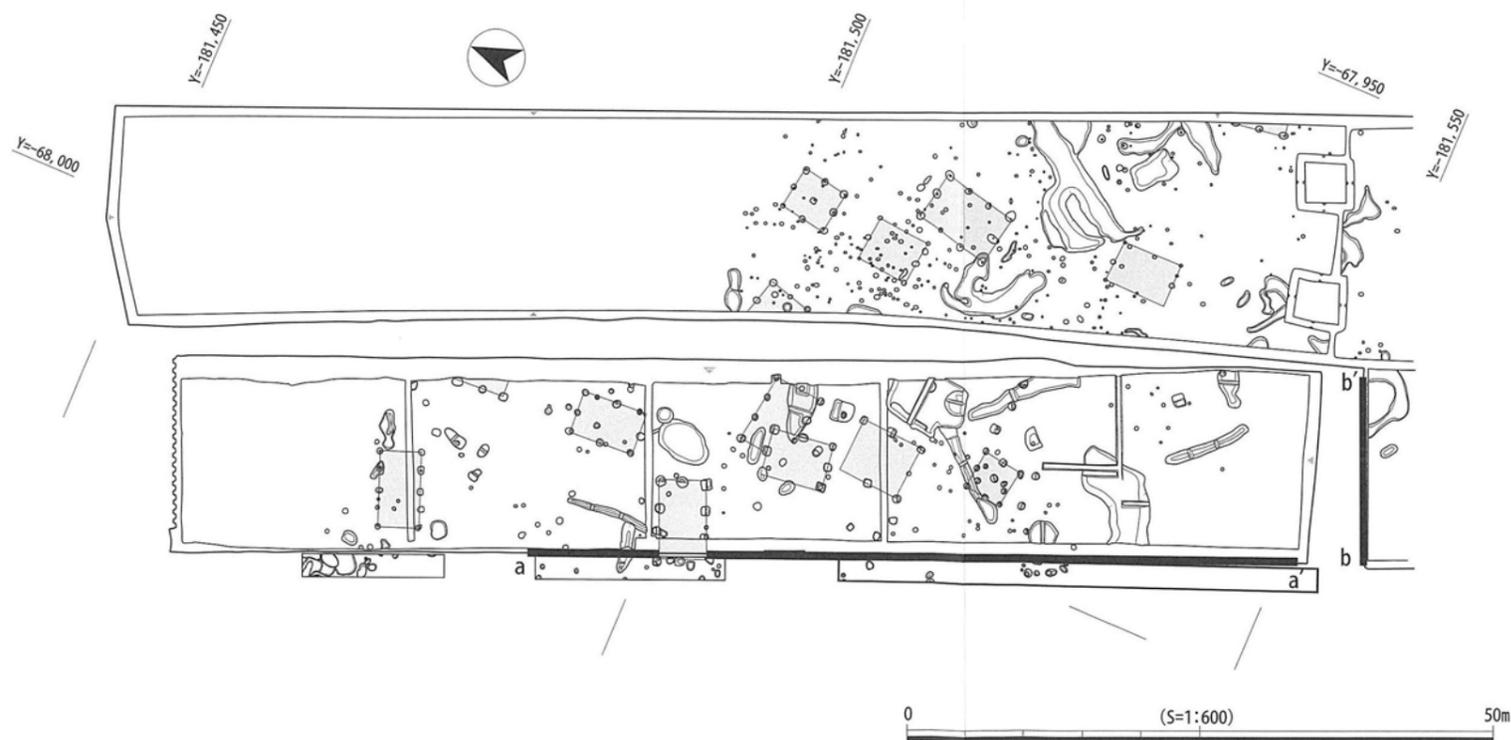
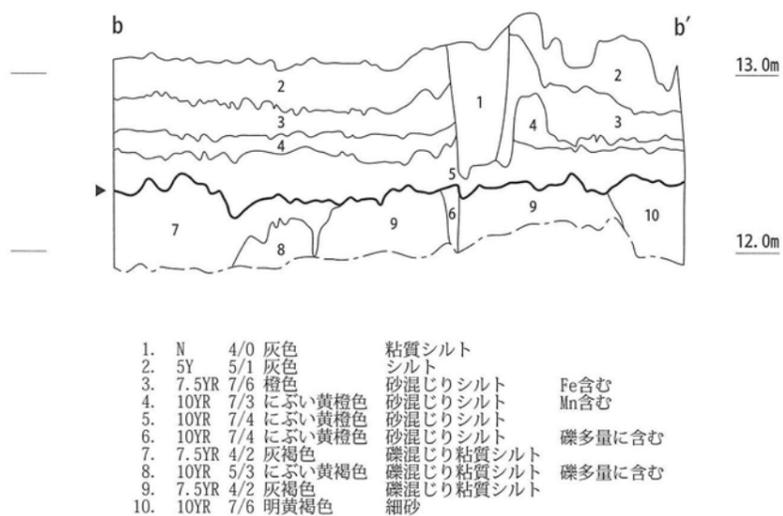
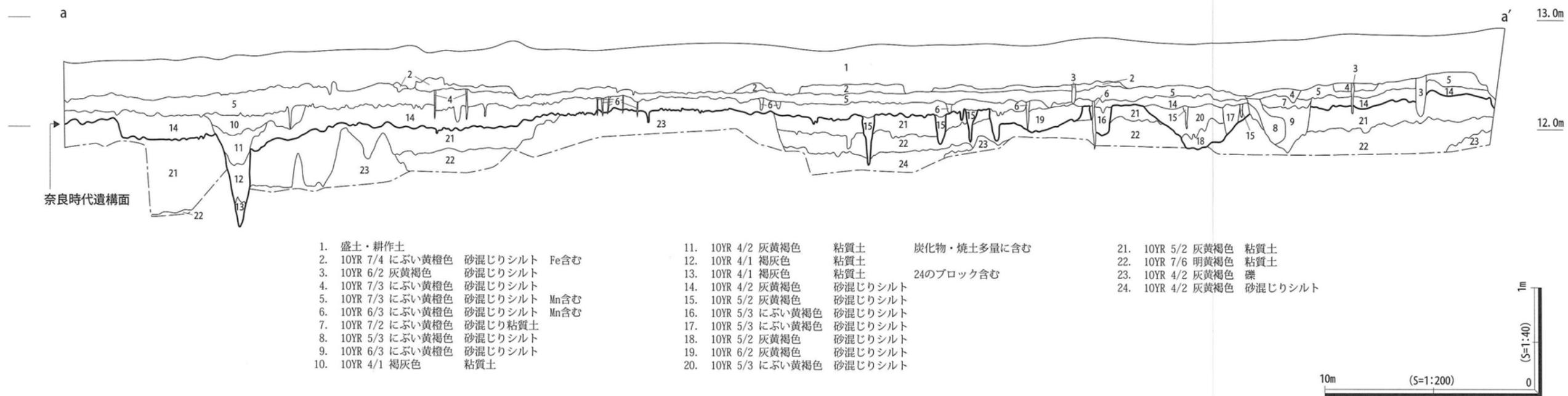


図161 古代遺構検出部分土層断面図

模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片が出土している。

掘立柱建物34 (図163、図版23)

中央北区の北西側にあたる、F区の北半部で検出された。古代集落の建物が密集した部分から北へ約10m離れており、単独の建物である。最も近接した東側の掘立柱建物35とは約7m離れている。周囲にはピットもほとんど検出されていない。やや低い位置で遺構のあまり検出されていない部分であり、土坑や溝との重複関係はない。

現状で、1間(3.6m)×4間(6.4m)を確認しているが、梁行には間に、1基柱穴が存在するものと考えられる。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-70°-Eである。柱間寸法は、南側の桁行で、西から1.6m、1.5m、1.8m、1.5mの平均1.6m、西側の梁行で、2間分(1.8m+1.8m)の平均1.8mを測る。柱穴掘方は、南辺は方形で、北辺は円形のものが多く、径(一辺)50~60cm、深さ10~40cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は少ないが、土師器片が出土している。

掘立柱建物35 (図164)

中央北区の北西側にあたる、F区の北半部で検出された。古代集落の北端に位置する、掘立柱建物36から北へ約6m離れている。西辺の柱列のみが検出されており、大部分は東側のE区とF区間の未調査部分に広がっていることから、全容は不明である。周囲にはピットもほとんど検出されていない。低い位置で遺構のあまり検出されていない部分であり、土坑や溝との重複関係はない。

現状で、3基の柱穴で構成される2間分(4.2m)を確認しているが、建物の主軸方向は不明である。検出された柱列の方向は、N-5°-Wである。柱間寸法は、南から2.0m、2.2mの平均2.1mを測る。柱穴掘方は、方形と円形のものが見られ、径(一辺)60~70cm、深さ約10cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片が出土している。

掘立柱建物36 (図164、図版23)

中央北区の北西側にあたる、F区の北半部で検出された。古代集落の北端に位置しており、掘立柱建物37から北へ約3m離れている。北側の掘立柱建物35の柱列の方向と、主軸方向がほぼ同じである。周囲では、ピットはあまり検出されておらず、掘立柱建物の重複はないものと考えられる。土坑や溝との重複関係もない。

現状で、2間(3.6m)×2間(5.4m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向

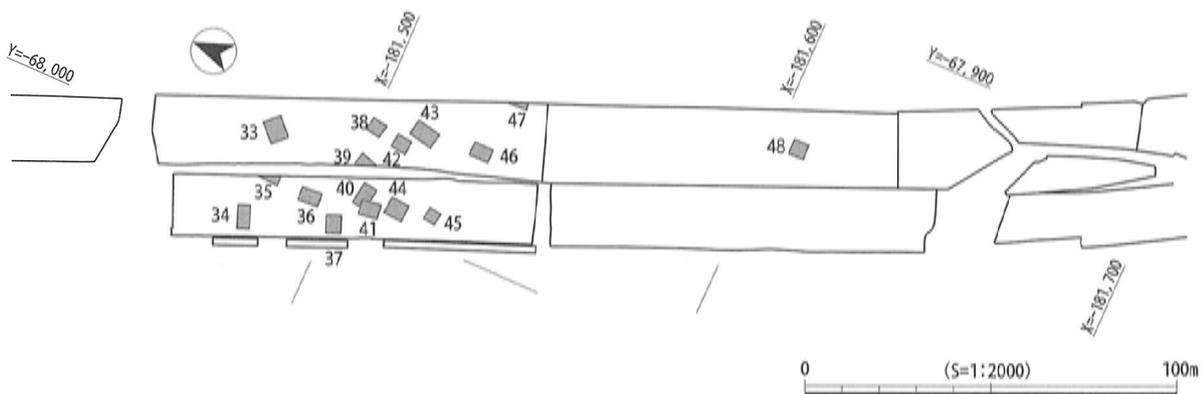


図162 古代掘立柱建物分布図

は、N-4°-Wである。柱間寸法は、西側の桁行で、北から2.7m、2.7mの平均2.7m、北側の梁行で、西から1.7m、1.9mの平均1.8mを測る。桁行の柱間間隔が広い。柱穴掘方は、ほぼ円形のものが多く、径50～60cm、深さ10～30cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片が出土している。

掘立柱建物37（図165、図版23）

中央北区の北西側にあたる、F区の北半部で検出された。古代集落の北端部に位置している。隣接する北東側の掘立柱建物36とは、主軸方向が異なるほか、柱穴掘方の状況も異なっている。周囲ではピットはあまり検出されておらず、掘立柱建物の重複はないものと考えられる。土坑や溝との重複関係もないが、北西方向に土坑910068が隣接する。

未調査部分があるが、現状で、2間（4.1m）×3間（6.4m）を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-68°-Eである。柱間寸法は、南側の桁行で、東から2.3m、2.3m、1.8mの平均2.1m、東側の梁行で、北から2.0m、2.1mの平均2.0mを測る。桁行の柱間間隔はほぼ同じである。柱穴掘方は、方形のものが多いが、東辺では円形のものも見られる。規模は、一辺（径）80～90cm、深さ20～40cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模はほぼ同じである。遺物は、土師器片や須恵器片が出土しているが、図化できるものはない。

掘立柱建物38（図165、図版23）

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。総柱の建物である。古代集落の北端部に位置しており、これより北側では近接した掘立柱建物は見つかっていない。掘立柱建物42から北へ約3m離れており、主軸方向がほぼ同じである。周囲ではピットはあまり検出されておらず、掘立柱建物の重複はないものと考えられる。土坑や溝との重複関係もない。

現状で、2間（3.7m）×2間（4.1m）を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-11°-Eである。柱間寸法は、西側の桁行で、北から2.2m、1.9mの平均2.0m、北側の梁行で、西から1.8m、1.9mの平均1.8mを測る。桁行の柱間間隔がやや広い。柱穴掘方は、ほぼ円形のものど方形のものが混在している。規模は、径（一辺）50～60cm、深さ10～40cmである。埋土は、暗褐色粘質シルトである。柱穴の規模はほぼ同じである。遺物は出土していない。

掘立柱建物39（図164、図版23）

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の北端部に位置しており、西側がE区とF区間の未調査部分に広がるため、全容は不明である。掘立柱建物38から西へ約6m離れており、主軸方向がほぼ同じである。周囲では、同規模のピットはあまり検出されておらず、掘立柱建物の重複はないものと考えられる。土坑や溝との重複関係もない。

現状で、北辺1間（3.3m）以上×東辺2間（3.6m）以上を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈するものと考えられる。北方向に向かう建物とすると、主軸方向は、N-15°-Eである。柱間寸法は、東側の桁行で、北から1.8m、1.9mの平均1.8m、北側の梁行で2.1mを測る。梁行の柱間間隔がやや広い。柱穴掘方は、ほぼ円形で、径50～60cm、深さ10～40cmである。埋土は、暗褐色シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片が出土している。

掘立柱建物40（図166、図版23）

中央北区の北西側にあたる、F区の中央部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、掘立柱建物37から南東へ約5m離れている。掘立柱建物41と重複しているが、柱穴で切り合い関係がないこ

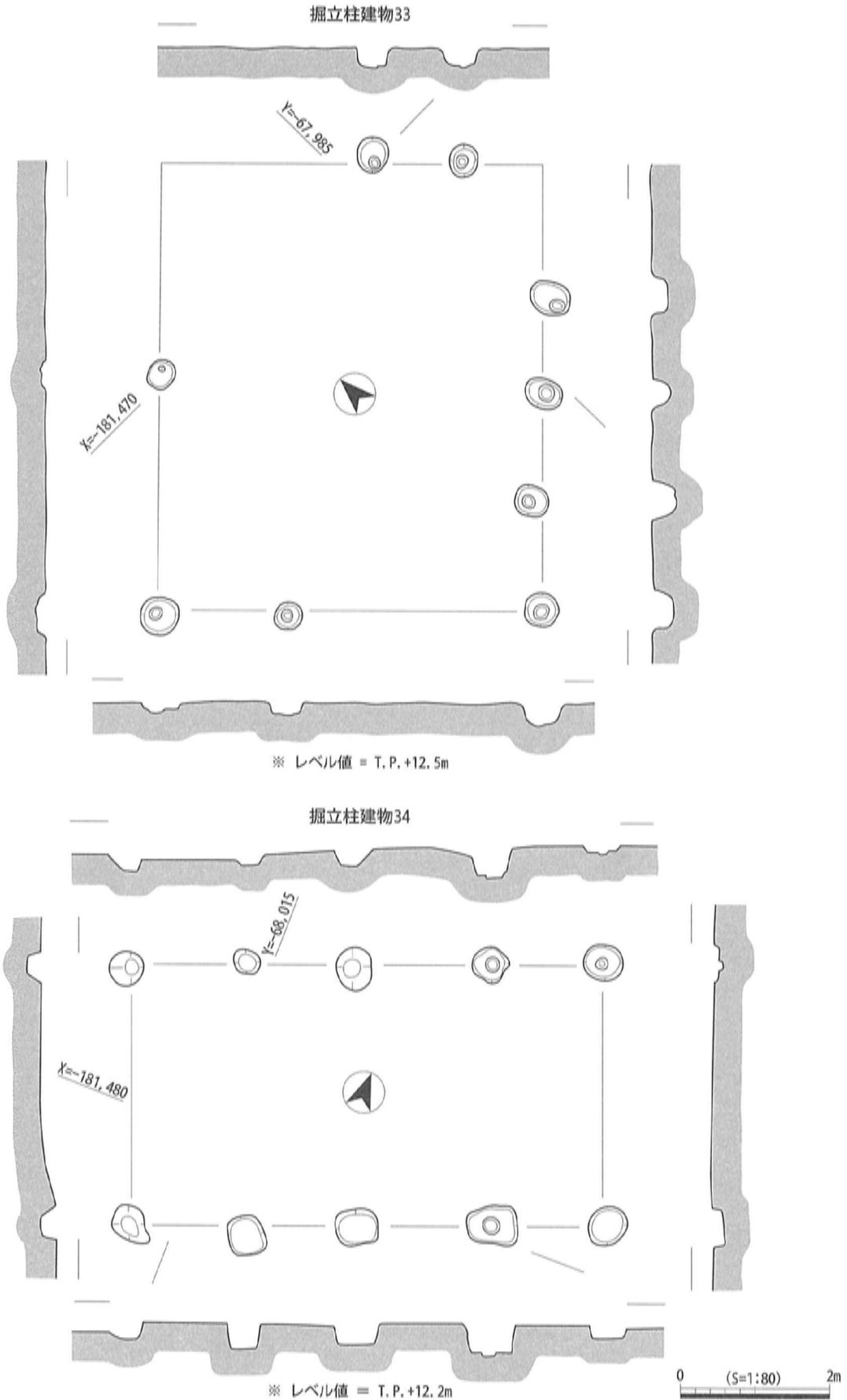


図163 掘立柱建物33、34平・断面図

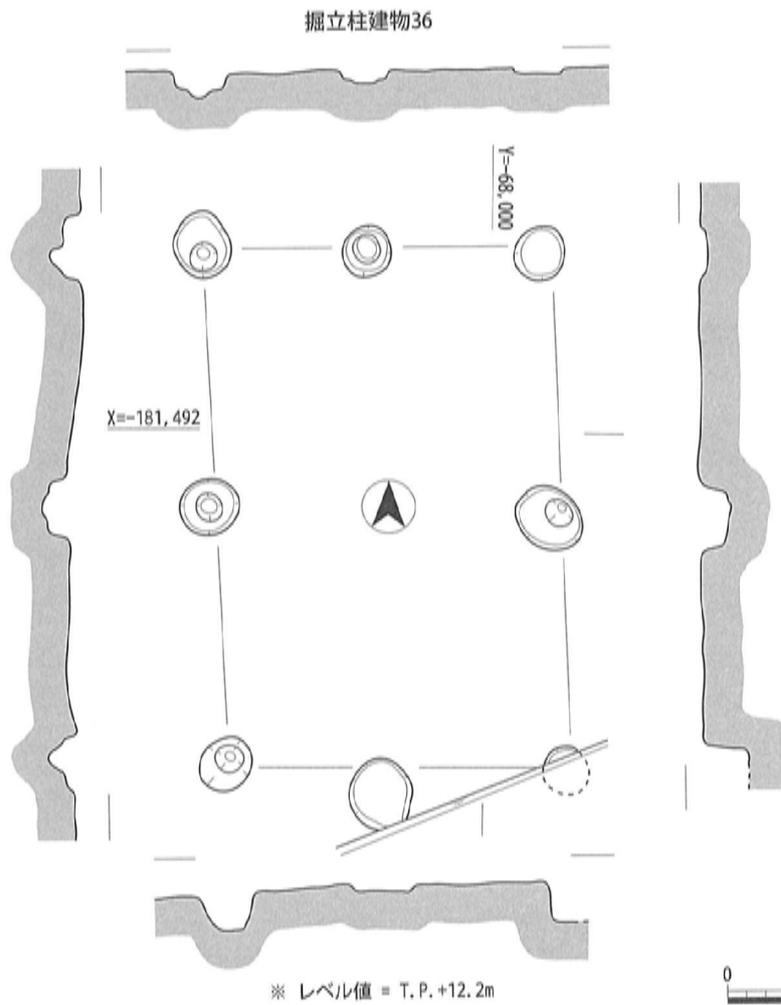
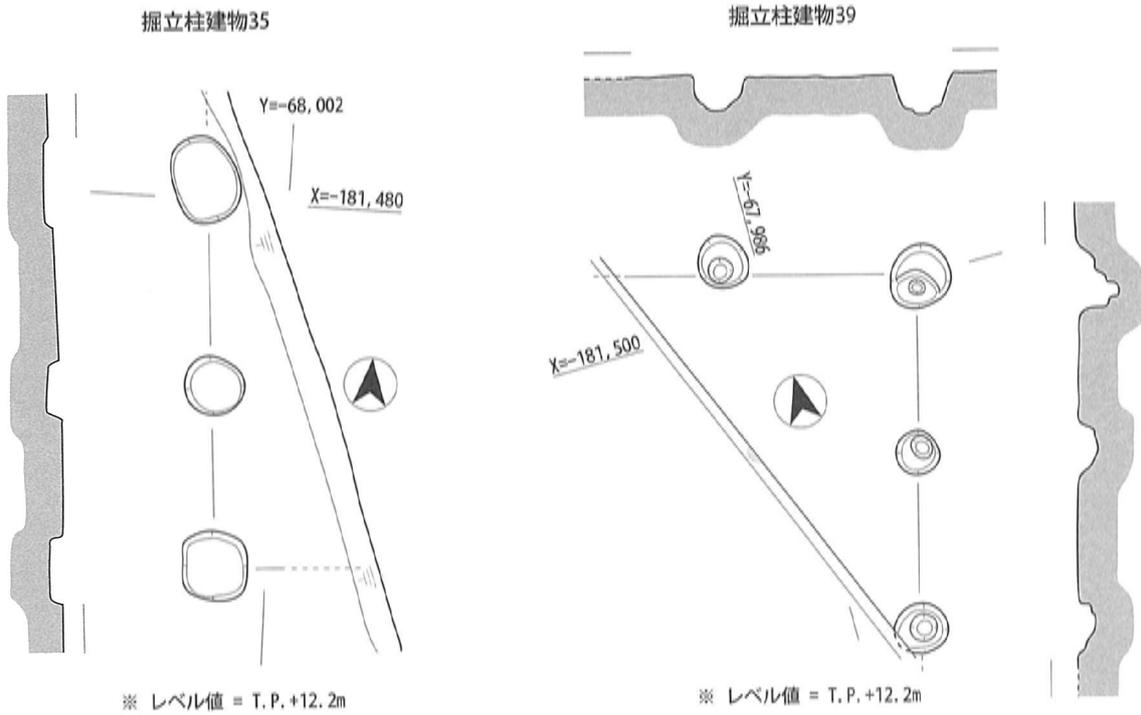
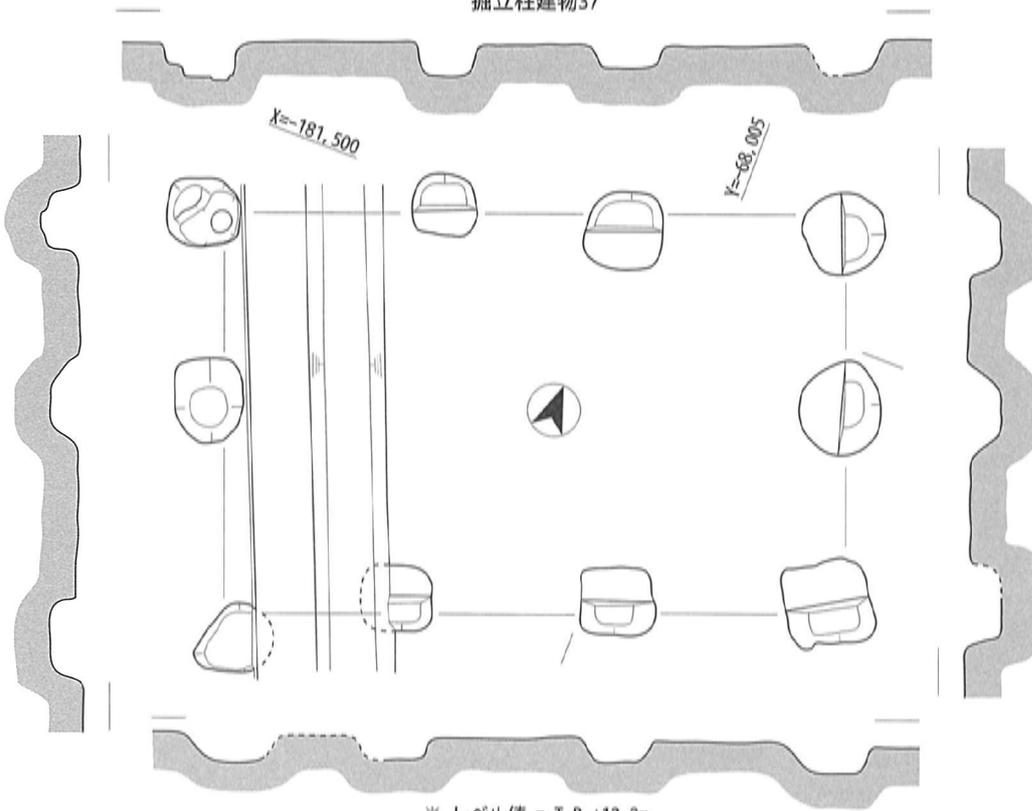


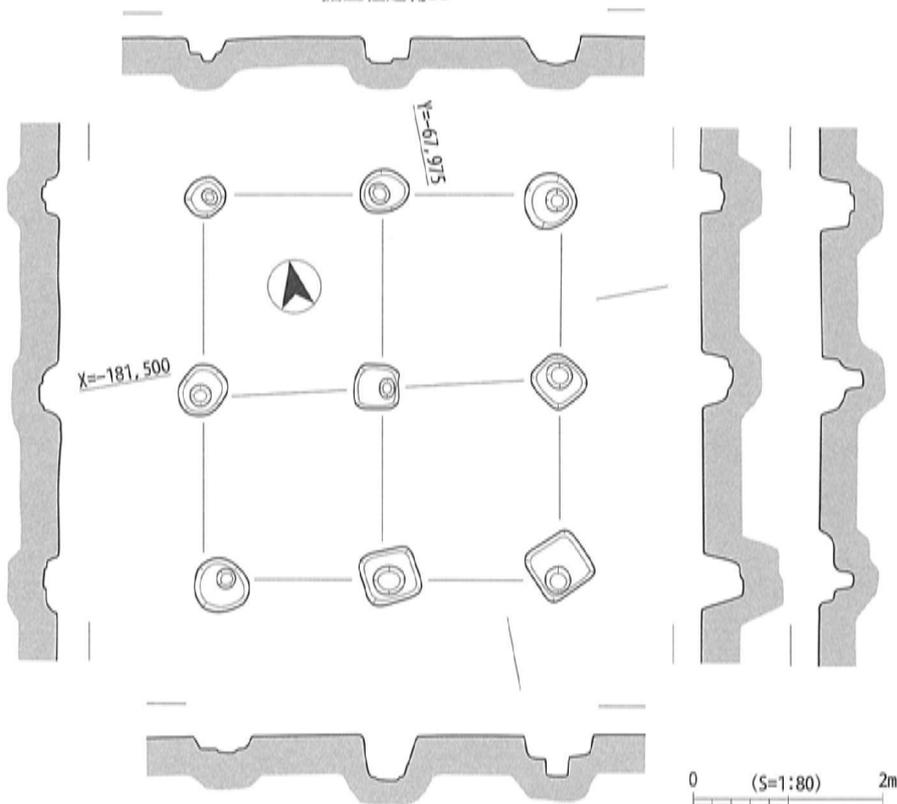
図164 掘立柱建物35、36、39平・断面図

掘立柱建物37



※ レベル値 = T. P. +12. 2m

掘立柱建物38



※ レベル値 = T. P. +12. 2m

0 (S=1:80) 2m

図165 掘立柱建物37、38平・断面図

とから、新旧関係ははっきりしない。土坑910059と重複しており、掘立柱建物40の方が新しい。

現状で、2間(4.2m)×3間(6.0m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-84°-Wである。柱間寸法は、北側の桁行で、西から2.2m、2.0m、1.8mの平均2.0m、東側の梁行で、北から2.3m、1.9mの平均2.1mを測る。柱間間隔はほとんど同じである。柱穴掘方は、ほぼ円形のものが多く、径50～60cm、深さ10～30cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片や須恵器片が出土している。

掘立柱建物41 (図166)

中央北区の北西側にあたる、F区の中央部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、掘立柱建物37から南東へ約4m離れている。北側の掘立柱建物36と主軸方向がほぼ同じである。掘立柱建物40と重複しているが、主軸方向は大きく異なる。周囲でピットが検出されていることから、他の掘立柱建物の存在も考えられるが、復原できない。

現状で、2間(4.1m)×2間(5.3m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-8°-Wである。柱間寸法は、東側の桁行で、北から2.5m、2.8mの平均2.6m、北側の梁行で、東から2.2m、1.9mの平均2.0mを測る。桁行の柱間間隔がやや広い。柱穴掘方は、ほぼ方形のものが多いが、円形のものも見られ、一辺(径)70～80cm、深さ20～30cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片や須恵器片が出土している。

掘立柱建物42 (図167、175、図版23、79)

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、掘立柱建物38から南へ約3m離れている。掘立柱建物38と主軸方向が近く、西側の柱通りがほぼ同じライン上に並ぶ。周囲でピットが検出されていることから、他の掘立柱建物との重複も考えられるが、復原できないためははっきりしない。土坑や溝との重複関係はない。

現状で、2間(3.8m)×2間(4.3m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-4°-Eである。柱間寸法は、西側の桁行で、北から2.2m、2.1mの平均2.0m、南側の梁行で、西から1.8m、2.0mの平均1.9mを測る。柱間間隔はほとんど同じである。ただ、桁行の柱通りで、部分的に柱間でピットが検出されていることから、柱の数が増えて柱間間隔が短くなる可能性もある。柱穴掘方は、ほぼ円形であり、径30～40cm、深さ10～30cmである。埋土は、暗褐色シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、北西端の柱穴であるピット240342から土師器甕が出土しており、図化している(図175-1117)。詳細は、後述する。

掘立柱建物43 (図167)

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、比較的規模の大きな建物である。掘立柱建物42の南東に隣接しており、約2m離れている。北側の掘立柱建物38と主軸方向がほぼ同じである。周囲でピットが検出されていることから、他の掘立柱建物との重複関係も考えられるが、復原できないためははっきりしない。南西端部の柱穴が、土坑240468と切り合い関係になっており、建物の方が新しい。

現状で、2間(4.5m)×3間(6.8m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-13°-Eである。柱間寸法は、西側の桁行で、北から2.1m、2.3m、2.4mの平均2.3m、南側の梁行で、西から2.3m、2.2mの平均2.2mを測る。柱間間隔はほとんど同じである。柱穴掘方は、ほぼ円形であり、径60～70cm、深さ10～40cmである。埋土は、暗褐色シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。

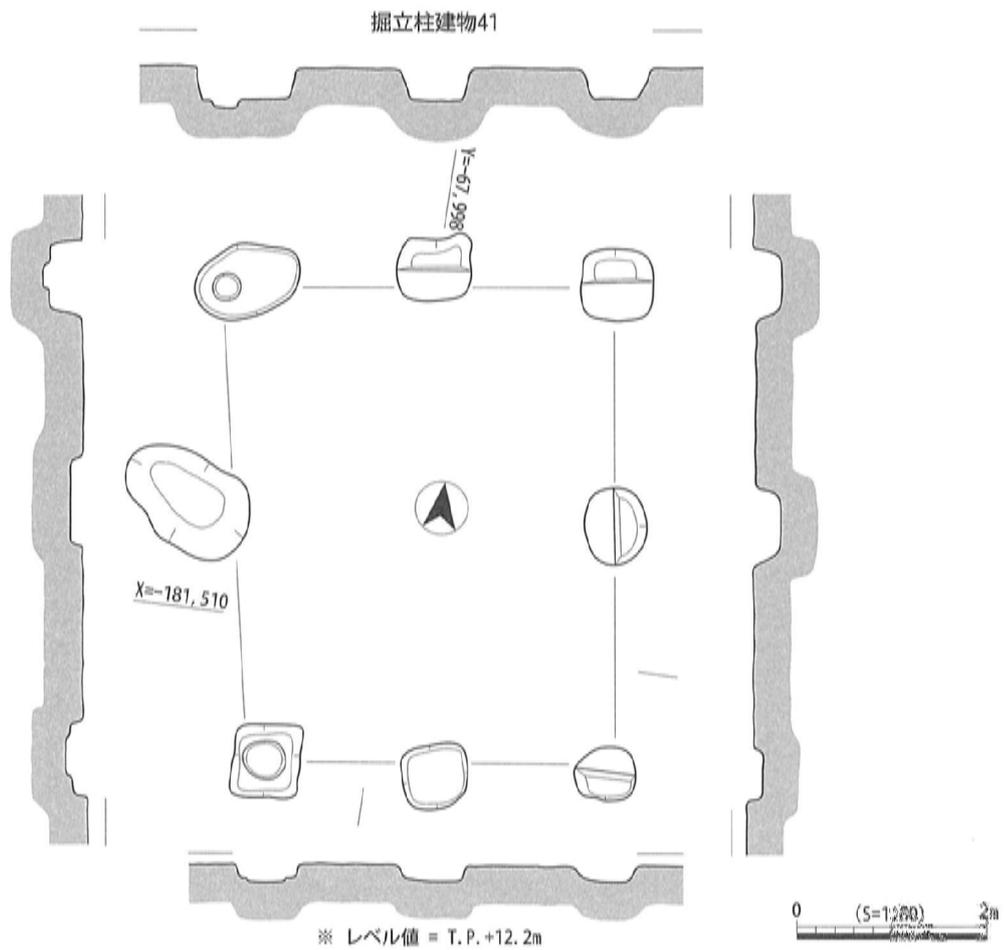
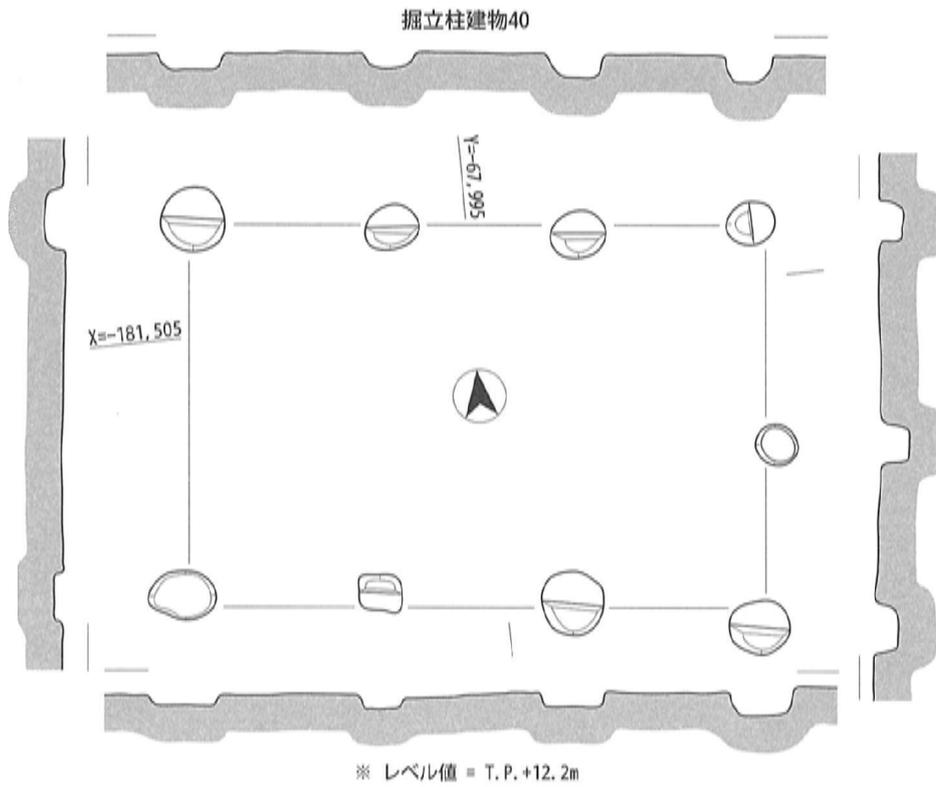
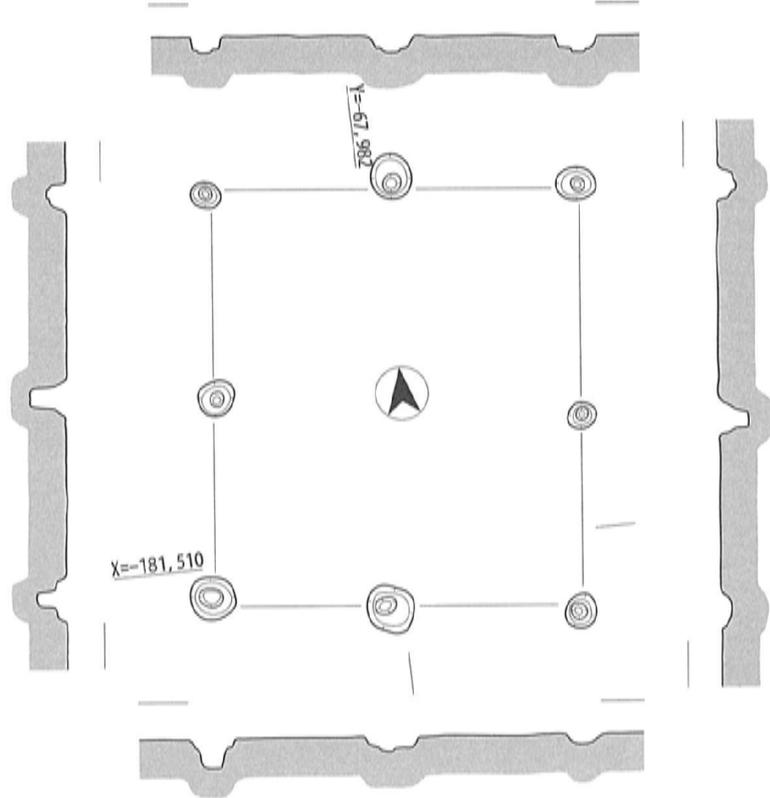


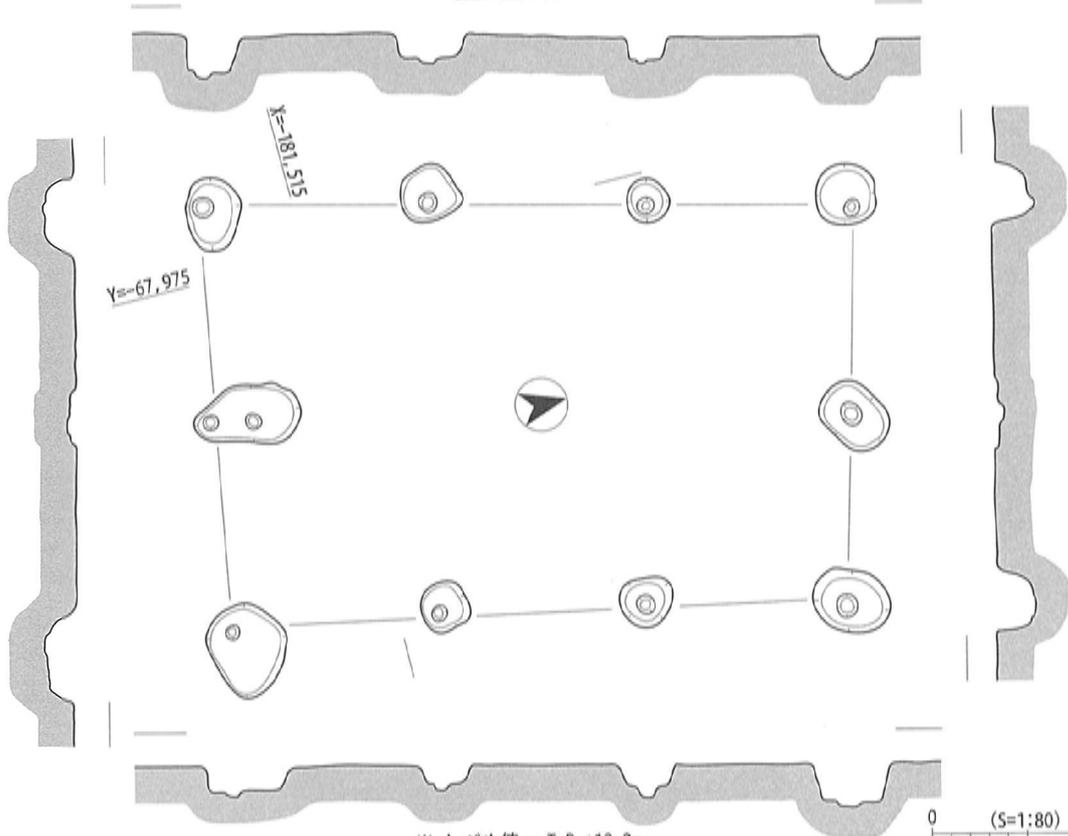
図166 掘立柱建物40、41平・断面図

掘立柱建物42



※ レベル値 = T. P. +12. 2m

掘立柱建物43

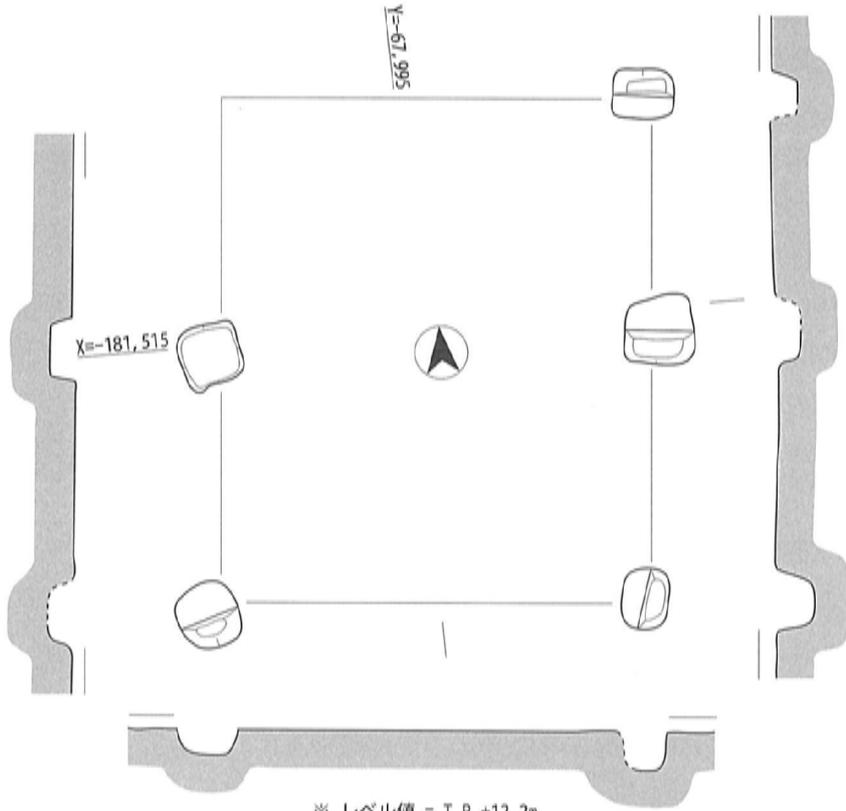


※ レベル値 = T. P. +12. 2m

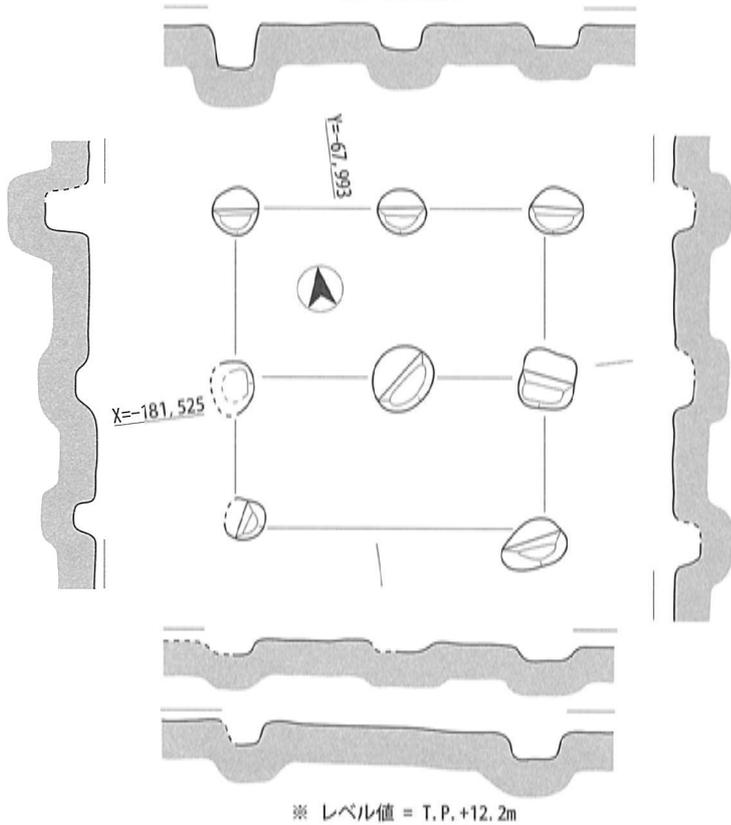


図167 掘立柱建物42、43平・断面図

掘立柱建物44



掘立柱建物45



掘立柱建物47

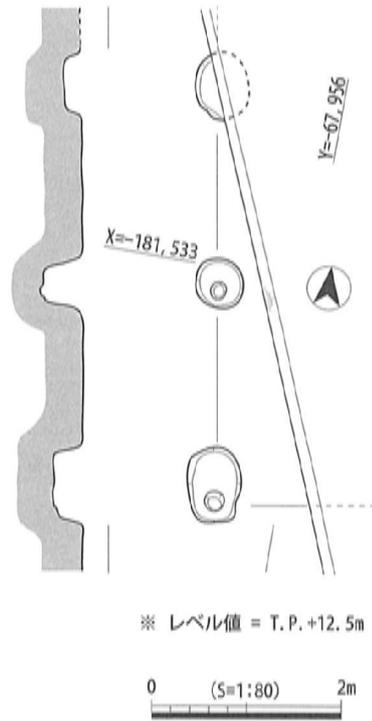


図168 掘立柱建物44、45、47平・断面図

遺物は出土していない。

掘立柱建物44 (図168、図版23)

中央北区の北西側にあたる、F区の中央部で検出された。古代集落の中央部やや南寄りに位置している。掘立柱建物41から南東に隣接しており、約1m離れている。北側の掘立柱建物40と主軸方向がほぼ直交することから、関連のあるものと考えられる。周囲ではピットはあまり検出されておらず、掘立柱建物の重複はないものと考えられる。土坑や溝との重複関係もない。

現状で、北西端部の柱穴は検出されていないが、2間(4.5m)×2間(5.4m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-5°-Eである。柱間寸法は、東側の桁行で、北から2.6m、2.8mの平均2.7m、南側の梁行で、西から2.3m、2.2mの平均2.2mを測る。桁行の柱間間隔が広い。柱穴掘方は、ほぼ方形のものが多く、円形のものも見られ、一辺(径)60~70cm、深さ20~40cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、須恵器片が出土している。

掘立柱建物45 (図168)

中央北区の北西側にあたる、F区の南半部で検出された。古代集落の南端部に位置している。掘立柱建物44から南東へ約5m離れている。掘立柱建物44と主軸方向がほぼ同じである。周囲でピットが検出されていることから、他の掘立柱建物との重複関係も考えられるが、復原できないためはっきりしない。西側の柱列が、部分的に土坑910151と切り合い関係があり、土坑の方が新しい。また、北西端の柱穴が、土坑910151に切られた溝と重複関係があり、溝の方が古い。

現状で、2間(3.3m)×2間(3.5m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向は、N-8°-Wである。柱間寸法は、東側の桁行で、北から1.8m、1.7mの平均1.7m、北側の梁行で、西から1.7m、1.6mの平均1.6mを測る。桁行の柱間間隔がやや広い。柱穴掘方は、ほぼ円形であり、径50~60cm、深さ10~40cmである。埋土は、灰黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は、土師器片が出土している。

掘立柱建物46 (図169)

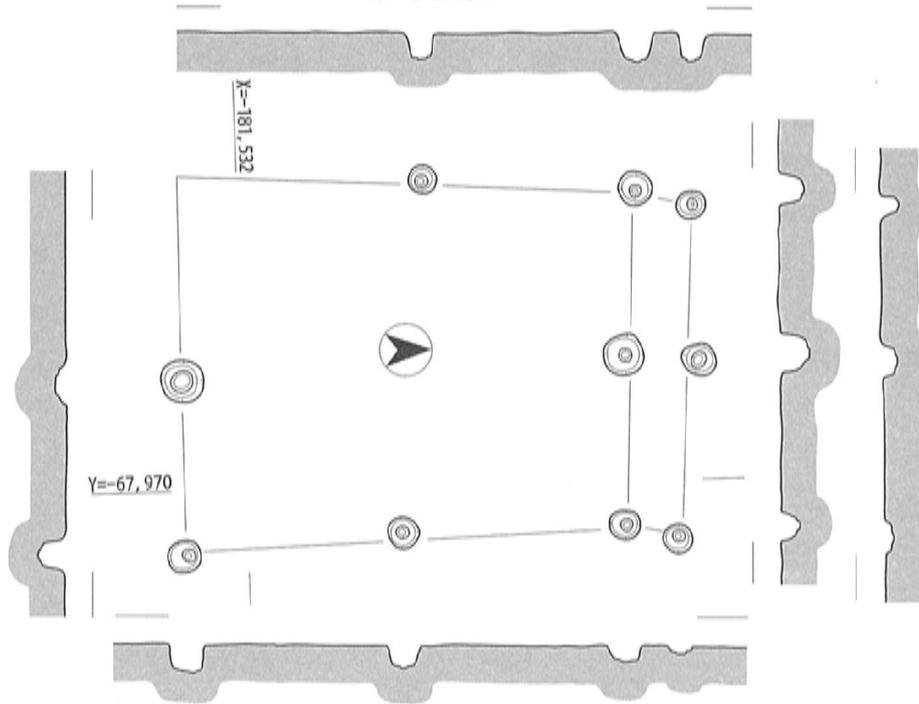
中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の南端部に位置している。北側の柱通りから約60cm離れた北側で、平行する同様の柱列が見られるため、この部分に庇がつくものと考えられる。掘立柱建物43から南東へ約10m離れている。周囲でピットが検出されていることから、他の掘立柱建物との重複も考えられるが、復原できないためはっきりしない。土坑や溝との重複関係はない。

現状で、2間(3.6m)×2間と北面庇(5.2m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向はN-1°-Wで、ほぼ方位に合っている。柱間寸法は、東側の桁行で、北から0.6m(庇部分)、2.3m、2.3mの平均2.3m、北側の梁行で、西から1.8m、1.8mの平均1.8mを測る。庇部分の梁行の柱間間隔も同じである。桁行の柱間間隔がやや広い。柱穴掘方は、ほぼ円形であり、径30~40cm、深さ10~30cmである。埋土は、褐色シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。庇部分の柱穴の規模もほぼ同じである。遺物は出土していない。

掘立柱建物47 (図168、図版23)

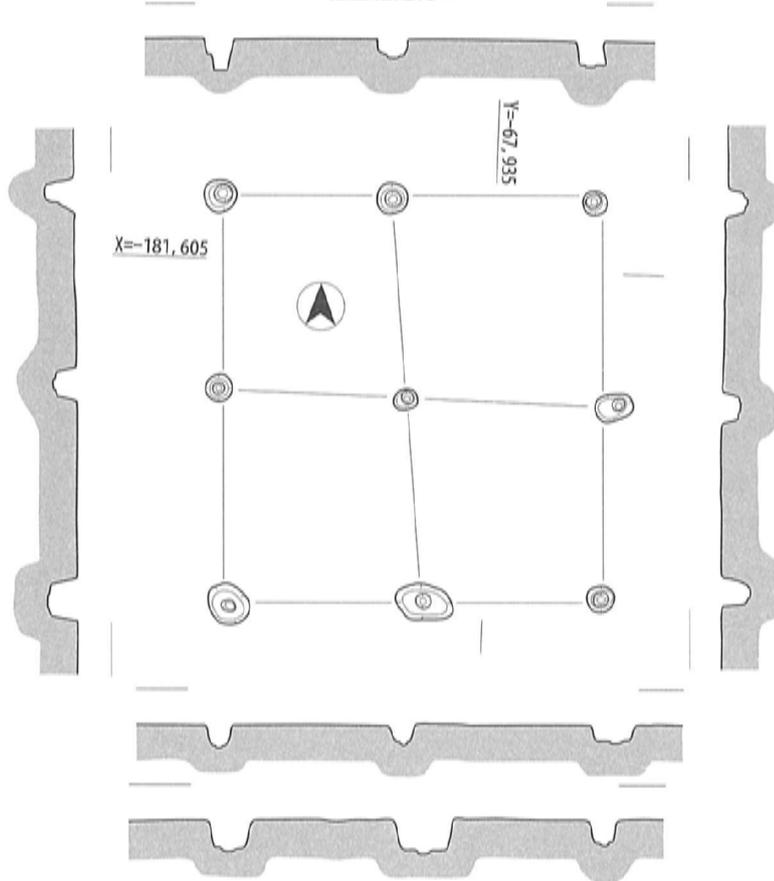
中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の南端部に位置している。掘立柱建物46から東へ約13m離れている。西辺の柱列のみが検出されており、大部分は調査区外の東側に広がっていることから、全容は不明である。周囲にはピットもほとんど検出されていない。土坑や溝との

掘立柱建物46



※ レベル値 = T. P. +12. 2m

掘立柱建物48



※ レベル値 = T. P. +12. 2m

0 (S=1:80) 2m

図169 掘立柱建物46、48平・断面図

重複関係はない。

現状で、3基の柱穴で構成される2間分(4.4m)を確認しているが、建物の主軸方向は不明である。検出された柱列の方向は、N-6°-Wである。柱間寸法は、北から2.2m、2.2mの平均2.2mを測る。柱穴掘方は、ほぼ円形であり、径60～70cm、深さ20～40cmである。埋土は、暗褐色粘質シルトが主体で、径10cm以下の礫を多く含む。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は出土していない。

掘立柱建物48(図169)

中央北区の南東側にあたる、E区の南端部で検出された。総柱の建物である。古代集落の南側に位置しているが、かなり離れており、単独で存在している。遺物包含層が削平されている部分であり、周辺で古代の遺物などは出土していない。周囲にはピットもほとんど検出されていない。土坑や溝との重複関係はない。周囲で中世の遺構や遺物が検出されているため、中世の建物の可能性もあるが、主軸方向が方位に合っていることから、古代の建物と判断した。

現状で、2間(3.9m)×2間(4.4m)を確認している。平面形は、ほぼ長方形を呈する。主軸方向はN-2°-Wで、ほぼ方位に合っている。柱間寸法は、西側の桁行で、北から2.1m、2.3mの平均2.2m、南側の梁行で、西から2.1m、1.8mの平均1.9mを測る。桁行の柱間間隔がやや広い。柱穴掘方は、ほぼ円形であり、径30～40cm、深さ20～30cmである。埋土は、黄褐色粘質シルトである。柱穴の規模は、ほぼ同じである。遺物は出土していない。

中央北区の北半部に展開する古代の集落では、以上の16棟の掘立柱建物を復原することができた。他にもピットが多く検出されていることから、さらに多くの掘立柱建物が存在したことが推測される。復原された掘立柱建物は、一部で重複関係が見られるものの、大部分は重複なく配置されており、時期幅もあまり長くないことから、この中で見られる配置により、集落内の建物の傾向を知ることができるものと考えられる。

重複関係のある掘立柱建物40と41であるが、明らかに時期差があるものといえる。明確な新旧関係ははっきりしないが、主軸方向の違いで両者が別のグループであることがわかる。掘立柱建物40は、同一の主軸方向を持つ建物は他にないが、直交する方向でみると、掘立柱建物38・39・42・43・44がほぼ同じ方向といえることができる。掘立柱建物41では、掘立柱建物35・36・45・46・47がほぼ同じ方向といえることができる。両者の違いは、10～20°であるため、明確な差といえるかどうかははっきりしないが、掘立柱建物40のグループは真北に向かって東寄りに傾くのにに対し、掘立柱建物41のグループは西寄りに傾くという違いがある。この他にも、掘立柱建物34・37のようにどちらにも属さないタイプも見られる。いずれのグループも時期決定ができないことから、新旧関係ははっきりしないが、この集落内では、少なくとも3時期の建物群の変遷があったことがわかる。

3. 北区

古代の集落の北側にあたる北区では、中央部やや南寄りのC区南端部からD区北端部にかけて、古代の遺構や遺物が検出されている。北区と中央北区を分ける現在の道路部分には、古代においても道路が存在していたものと考えられ、中央北区で検出された集落が道路の南側に展開しているものといえる。これに対して、道路の北側では集落は検出されておらず、やや離れた部分で溝やピットを主体とした遺構や遺物がみつまっている。

北区の中央部やや南寄りの南北約40mの範囲内で、溝やピットがまとまって検出されている。ピットは多数検出されたが、建物を復原することはできなかった。これらのピットからの遺物量は少ないため、時期決定は困難であるが、古代の遺物を含むものが見られることから、古代の遺構と判断した。ただし、

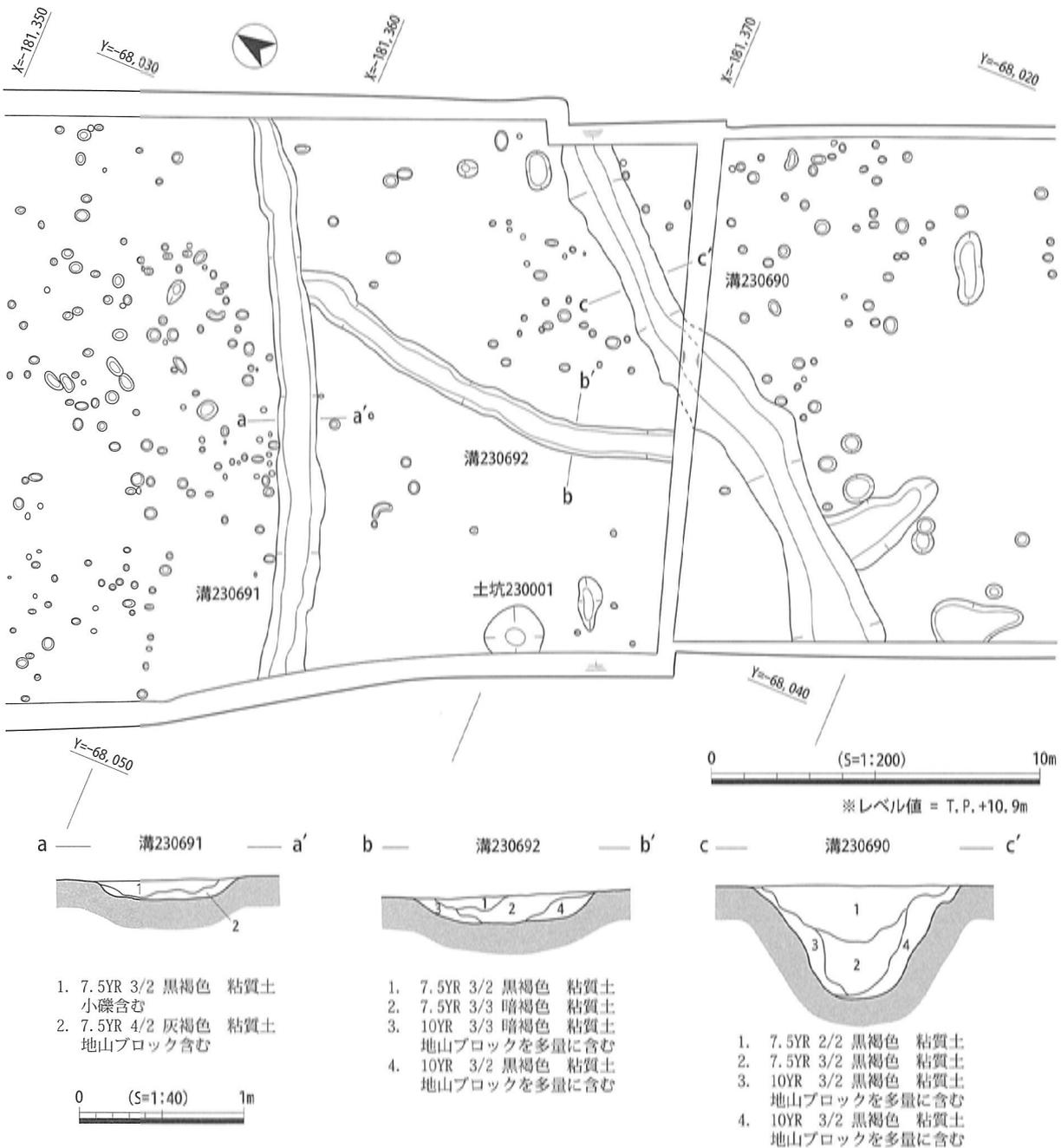


図170 北区古代遺構平・断面図

最終的には、中世後半から近世にかけて大規模な整地作業がおこなわれていることから、中世以降のピットも含まれているものと推測される。遺構検出面が地山面であることから、両者を明確に分けることは困難であった。全体に古代の遺物量は少なく、集落が営まれていたかどうかは疑わしい部分もある。北区において、古代の遺構や遺物がまとまって検出されたのは、この部分のみであり、他の部分からはほとんどみつかっていない。

遺構群の中で明確な遺構は、溝である。調査区を横切るかたちで2条の溝が検出されたほか、両者をつなぐかたちで、さらに1条の溝がみられる。以下に詳細を述べる。

溝230690 (図170)

北区の中央部やや南寄りにあたる、C区南端部からD区北端部にかけての部分で検出された。ピットがまとまって検出されている部分の南寄りに位置する。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。調査区を横切っており、南南西方向に向かってのびている。地形上から調査区の東側のやや高い部分から、西側の双子池方面に流れる流路といえる。自然流路とは考えにくく、人為的に排水施設として掘削された可能性がある。

ほぼ一直線に走っており、確認された部分で、長さ約18m、幅1.4～2.4m、深さ60～70cmを測る。埋土は、黒褐色粘質土が主体であり、下層に地山ブロックや礫を含む。部分的に灰褐色粘質土を含む。下層に粘土が多く堆積していることから、最終的には強い流れよりも滞水状態であったことが推測される。このため、排水路としてつくられた溝が、廃絶時には、その機能を失っていたといえる。遺物は、土師器や須恵器が出土しているが、破片のみであり、図化できるものはなかった。時期的には、飛鳥IV～Vの時期と考えられる。

溝230691 (図170、174、図版24)

北区の中央部やや南寄りにあたる、C区南端部で検出された。ピットがまとまって検出されている部分の北寄りに位置する。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。西側の削平が顕著である。調査区を横切っており、南西方向に向かってのびている。溝230690と同様に、西側の双子池方面に流れる流路といえる。ただし、現在残っている水路とほぼ同じ位置であることから、さらに削平をうけている部分もあり、本来の形状が改変されている可能性がある。

ほぼ一直線に走っており、確認された部分で、長さ約17m、幅0.7～1.2m、深さ10～30cmを測る。埋土は、溝230690と似ており、黒褐色粘質土が主体で、地山ブロックや礫を含む。遺物は、土師器や須恵器が出土しているが、破片のみであり、図化できるものは1点のみである。図174-1086は、須恵器杯蓋である。扁平なつまみの中央がわずかに突出している。焼成はやや不良である。平城宮Ⅱ～Ⅲの時期と考えられる。

溝230692 (図170、174、図版24)

北区の中央部やや南寄りにあたる、C区南端部で検出された。ピットがまとまって検出されている部分の中央に位置する。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。ちょうど、溝230692と230690をつなぐかたちで検出された。ただ、同時につくられたものではなく、重複関係を見ると、溝230692の方が新しい。溝230690のつなぎ部分は、調査区の境界部分であるため、はっきりしないことから、重複関係は不明である。人為的に掘削されたもので、底のレベルは北側が高く、南側は低いが、水路とは考えにくく、性格は不明である。ほぼ南に向かってまっすぐのびており、途中からやや東寄りに曲がっている。

確認された部分で、長さ約12m、幅約1.0m、深さ約10cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土が主体で、黒褐色粘質土が混じるほか、地山ブロックを含む。遺物は、土師器や須恵器が出土しているが、破片のみであり、図化できるものは1点のみである。図174-1087は、土師器鍋の口縁部付近である。口縁が広がっている。外面には、指頭圧痕が残るほか、煤が付着している。胎土は、橙色粘土に白色粘土が混入したものである。平城宮Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。

明確な古代の遺構は以上であるが、この部分で検出された中世以降の土坑230001の埋土からも、混入品ながら古代遺物が出土しており、図化できるものが1点みられる。図174-1090は、土師器高台付杯の高台部分である。回転ナデ調整により、高台部分の表面調整をおこなっている。平安京Ⅱの時期と考えられる。後世の遺構埋土からの出土品であるため、断定はできないが、この部分で古代の集落が営まれていたことを示すものといえる。

4. 中央北区

中央北区の北半部で古代集落が検出され、掘立柱建物群が復原されたことは、すでに述べたが、ここでは建物以外の遺構について述べることにする。古代集落内の遺構が主体となるが、時期を示す土器類の一括資料が出土しており、貴重な成果をあげることができたといえる。

なお、中央北区のうち東半部と西半部ではやや様相が異なっていることから、ここでは分けて記述する。東側に向かって地山面がやや高くなっていることから、東半部では、遺物包含層や遺構面について削平の影響が大きく、遺構の残存状況が良好ではない。また、比較的遺物量も少ない。東半部では、人為的に掘削された遺構が少なく、自然流路などを利用した溝が多い。

溝240278 (図171、174、図版24、78)

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の北端部に位置しており、西側がE区とF区間の未調査部分に広がるため、全容は不明である。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。掘立柱建物39の北に隣接しているが、調査区外で重複する可能性がある。土坑や溝との重複関係はない。

ほぼ東西方向にのびており、検出面で、長さ約3.5m、幅0.9～1.4m、深さ約20cmを測る。埋土は、褐色シルトである。溝状を呈しているが、検出部分の西半部が一段下がっており、ここから須恵器を主体とする多くの遺物が出土した。性格は不明であるが、最終的には、廃棄土坑になったものといえる。

図174-1075～1085が、出土遺物のうち、図化できたものである。1075～1078は、須恵器杯身である。1075は、底部へラ切り後に回転ナデ調整をおこなっている。1076は、底部へラ切り後に回転ナデ調整をおこなっている。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。1077は、高台の付くものである。底部のほとんどを欠損している。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。1078は、高台の付くものである。外面下半に筋状になった調整の境界が見られる。いずれも飛鳥Ⅲの時期と考えられる。1079～1082は、須恵器杯蓋である。1079は、内面にかえりがあるものである。焼成は不良で

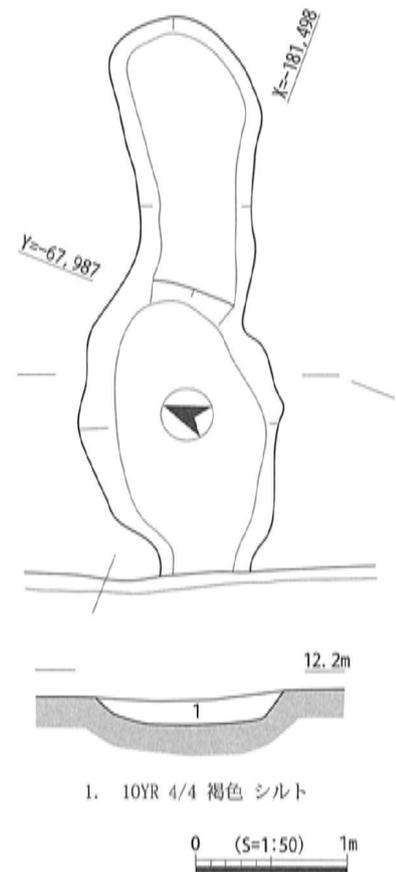


図171 溝240278平・断面図

あり、薄茶色を呈する。1080は、内面にかえりがあるものである。つまみを欠損している。天井部は回転ヘラケズリ調整が施されている。1081は、内面にかえりがあるものである。つまみを欠損している。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。1082は、端部のみであるが、内面にかえりがあるものである。いずれも飛鳥Ⅲの時期と考えられる。1083は、ほぼ完形の管状土鍾である。時期は不明であるが、他の須恵器とともに出土したものである。1084は、須恵器短頸壺の口縁部付近である。口縁はやや外反する。体部外面は、タタキ調整の後に回転ナデ調整が施されている。内面には同心円タタキが見られる。1085は、須恵器短頸壺の上半部である。口縁はほぼ直立する。体部外面は、タタキ調整の後に回転カキ目が施されている。内面には同心円タタキが見られる。いずれも飛鳥Ⅲの時期と考えられる。

ピット240458 (図172、174、図版78)

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の東端部に位置しているが、建物の復原ができなかったものである。掘立柱建物43の南東端の柱穴から、東へ4m離れている。周囲では、ピットはあまり検出されていない。特に規模が大きなピットではないが、図化できる遺物が出土している。図174-1089は、小型の須恵器短頸壺で、下半を欠損している。口縁部はほぼ直立する。焼成は良好である。飛鳥Ⅲの時期と考えられる。

ピット240342 (図167、172、175、図版23、79)

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。前述した掘立柱建物42の北西端の柱穴である。図化できる遺物が出土している。図175-1117は、土師器甕である。丸底であり、口縁端部はやや内湾している。体部外面の上半部は縦方向、下半部は横方向のハケ調整が見られる。内面は、縦方向のヘラケズリ調整の後、ナデ調整が施されている。外面に煤が付着している。平城宮Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。

ピット240402 (図172、175)

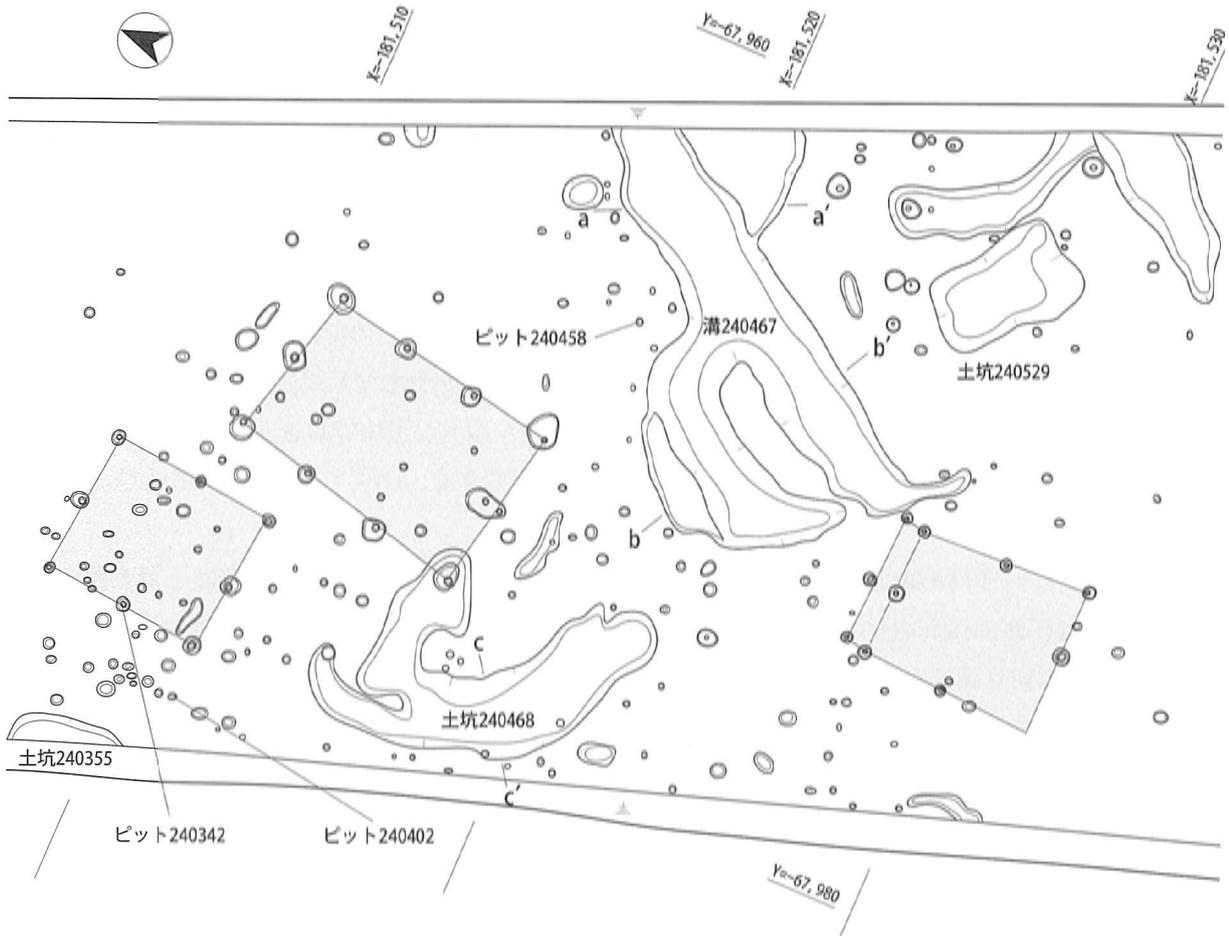
中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の中央部に位置しているが、建物の復原ができなかったものである。掘立柱建物42の南西端の柱穴から、南へ約1m離れており、近接している。周囲では、ピットは多く検出されており、掘立柱建物の柱穴といえる。特徴のあるピットではないが、図化できる遺物が出土している。図175-1115は、土師器高杯の杯部で、底から脚部を欠損している。口縁がやや広がる。外面には、粘土の継ぎ目にひびがはいっている。飛鳥Ⅱ～Ⅲの時期と考えられる。

土坑240529 (図172、174)

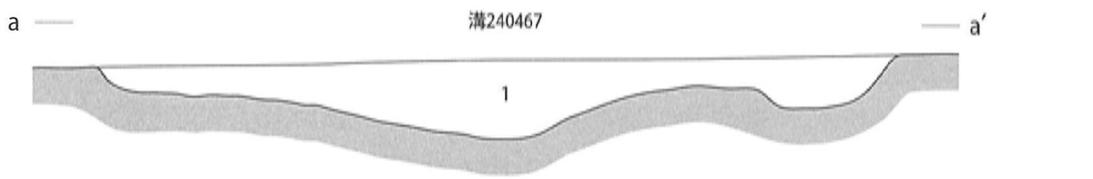
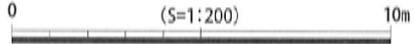
中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の南東部に位置している。周囲には不定形の溝状を呈する土坑がまとまって検出されており、そのうち東端にあたるものである。平面形は、隅丸方形を呈しており、検出面で、長辺約4.0m、短辺約2.0m、深さ約70cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土が主体である。遺物量は少ないが、図化できる遺物が出土している。図174-1088は、須恵器杯身である。外面に自然釉がかかっている。熱をうけており、口縁部に数ヶ所のひずみ割れが見られる。平城宮Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。

土坑240468 (図172、174)

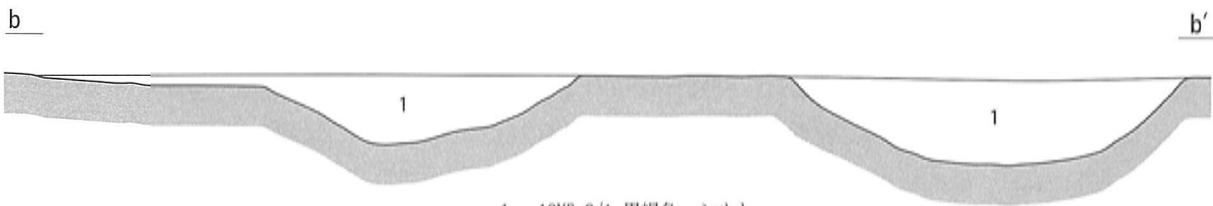
中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の中央部に位置している。不定形の溝状を呈する土坑がまとまって検出されており、そのうち西端にあたるものである。掘立柱建物43と重複関係があり、建物の方が新しい。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。



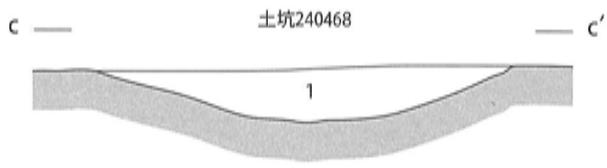
※レベル値 = T. P. +12. 1m



1. 10YR 3/1 黒褐色 シルト



1. 10YR 3/1 黒褐色 シルト



1. 10YR 3/1 黒褐色 シルト

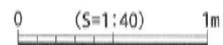


図172 中央北区古代遺構平・断面図

人為的に掘削されたものではなく、自然地形を利用したものと考えられる。平面形は、不定形の溝状を呈しており、検出面で、全長約13.5m、幅1.0～2.4m、深さ10～30cmを測る。埋土は、黒褐色シルトが主体である。遺物量は少ないが、図化できる遺物が出土している。図174-1091は、土師器高杯の脚部である。内面には、絞った筋が入っている。飛鳥Ⅱ～Ⅲの時期と考えられる。

溝240467 (図172、175、図版79)

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の南東部に位置している。不定形の溝状を呈する土坑がまとまって検出されており、そのうち中央にあたるものである。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。人為的に掘削されたものではなく、本来は自然流路であったものを利用したと考えられる。平面形は、南半部で二股に分かれている。検出面で、全長約12.5m、幅2.0～2.5m、深さ30～50cmを測る。埋土は、黒褐色シルトが主体である。性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑になったものと考えられ、遺物量は比較的多く、図化できる遺物もまとまって出土している。

図175-1094～1114が、出土遺物のうち図化できたものである。1094～1096は、須恵器杯身である。1094は、底部ヘラ切りの後にナデ調整をおこなっているが、回転ナデ調整ではない。1095は、底部に回転ヘラ切り調整がおこなわれている。底部外面に灰がかぶっている。1096は、底部ヘラ切りの後にナデ調整をおこなっている。いずれも飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1097は、須恵器杯身であるが、杯蓋の可能性もある。底部ヘラ切りの後にナデ調整をおこなっているが、回転ナデ調整ではない。飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1098～1101は、須恵器杯蓋である。1098は、内面にかえりがあるものである。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。1099は、つまみを欠損している。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。1100は、口縁部のみであるが、焼成は良好である。1101は、口縁部のみであるが、焼成は不良であり、薄茶色を呈する。いずれも飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1102は、須恵器壺の口縁部付近である。口縁はやや開く。体部外面は、タタキ調整の後に回転カキ目が施されている。内面には同心円タタキが見られる。飛鳥時代のものと考えられる。1103は、須恵器短頸壺の口縁部付近である。口縁はやや開く。体部外面は、タタキ調整の後に回転ナデ調整が施されている。内面には同心円タタキが見られる。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。飛鳥時代のものと考えられる。1104～1106は、須恵器杯身である。1104は、底部に回転ヘラ切り調整がおこなわれている。1105は、底部ヘラ切りの後にナデ調整をおこなっている。焼成は不良であり、薄茶色を呈する。1106は、焼成は不良であり、薄茶色を呈する。いずれも飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1107・1108は、須恵器高台付杯の杯身である。1107は、底部のみ残存しており、飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1108は、底部のみ残存しており、高台内は回転ヘラケズリ調整が施されている。焼成は不良であり、器壁の内面は茶色を呈する。飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1109は、土師器杯身である。飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1110は、土師器高杯の脚柱部である。脚部上を絞っている。飛鳥時代のものと考えられる。1111は、土師器皿である。飛鳥時代より新しいもので、平城宮Ⅱの時期と考えられる。1112は、いわゆる鉄鉢形の須恵器鉢である。口縁下の外面は、ケズリ調整の後に回転ナデ調整が施されている。底部には、回転ヘラケズリ調整が見られる。飛鳥～奈良時代のものと考えられる。1113・1114は、土師器甕の口縁部付近である。1113は、口縁部が強く開く。体部外面は、斜め方向のハケ目調整が施されている。1114は、口縁端部が内面に少し立ち上がる。体部外面は斜め方向、内面は横方向のハケ目調整が施されている。いずれも、平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。

土坑240001（図173、
174、図版24、78）

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落よりかなり離れた北側に位置している。掘立柱建物33の北西端の柱穴から、北西へ約6m離れている。単独で検出されており、周囲ではピットや土坑は検出されていない。土師器甕を横向きに2個組み合わせて、土器棺とした土坑墓である。この周辺では、墓となるような土坑や土器棺などは検出されていないため、集落の墓域とは考えられない。規模が小さいことから、小児棺の可能性がある。土器棺の中からは副葬品となるようなものは検出されていない。

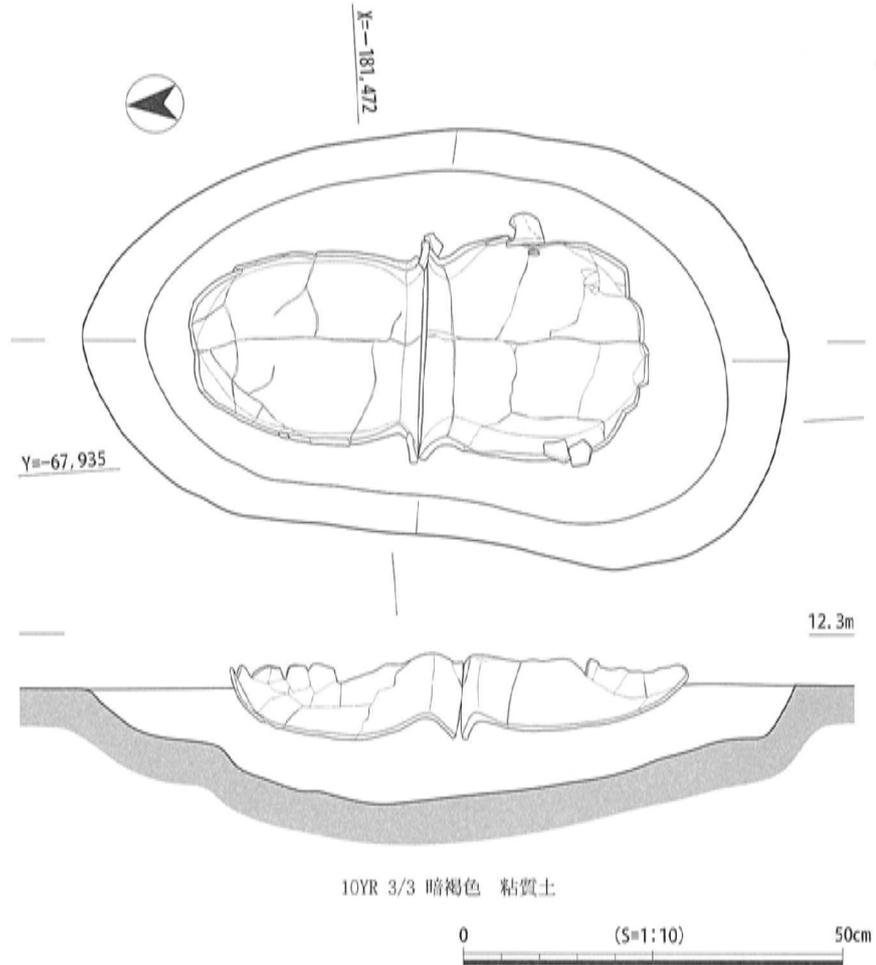


図173 土坑240001平・断面図

全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出で、土器棺の上半部は失われている。

平面形は、長楕円形を呈しており、検出面で、長径約90cm、短径約50cm、深さ約20cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土が主体である。図174-1092・1093は、土器棺に使われていた土師器甕である。1092は、やや長胴で、口縁部はやや広がる。体部外面には、縦方向のハケ調整が密に施されている。内面には、縦方向のヘラケズリ調整が見られる。1093は、1092に比べて丸みを帯びている。体部外面には、縦方向のハケ調整が密に施されている。内面には、上半部はナデ調整、下半部は縦方向のハケ調整が見られる。いずれも、飛鳥Ⅲ前後の時期と考えられる。

土坑240355（図172、175、図版79）

中央北区の北東側にあたる、E区の北半部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、西側の大部分がE区とF区の間で未調査部分に広がるため、全容は不明である。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。掘立柱建物42から西へ約3.5m離れている。ピットや土坑、溝との重複関係はない。平面形ははっきりしないが、検出された規模は、南北方向が約3.0m、東西方向が約0.6m、深さ約20cmを測る。埋土は、黒褐色粘質土が主体である。遺物量は少ないが、図化できる遺物が出土している。図175-1116は、土師器甕の焼き口裾部の破片である。ナデ調整で成形されている。小破片であるため、細かい時期決定はできなかった。

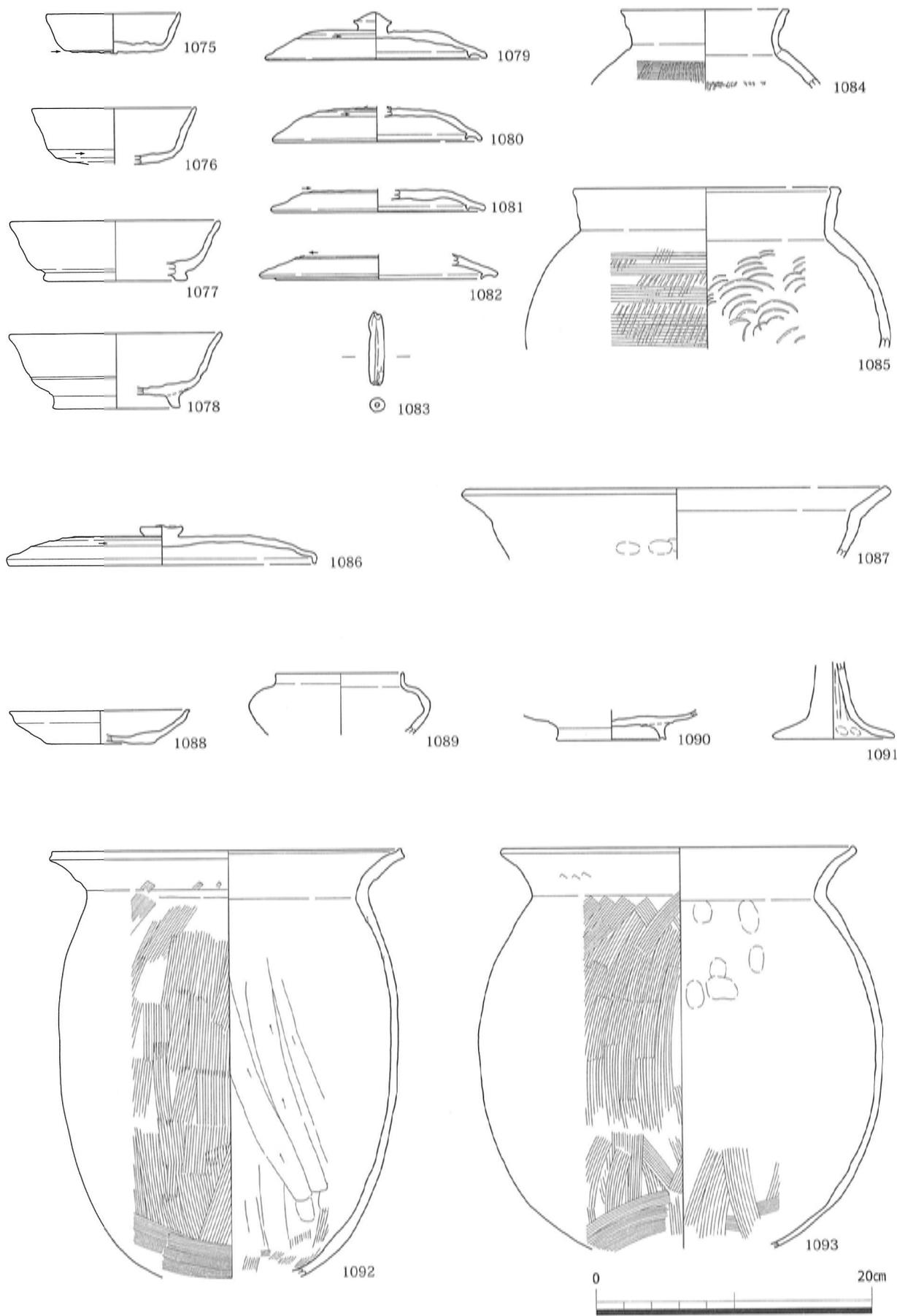


图 174 古代遺構出土土器（1）

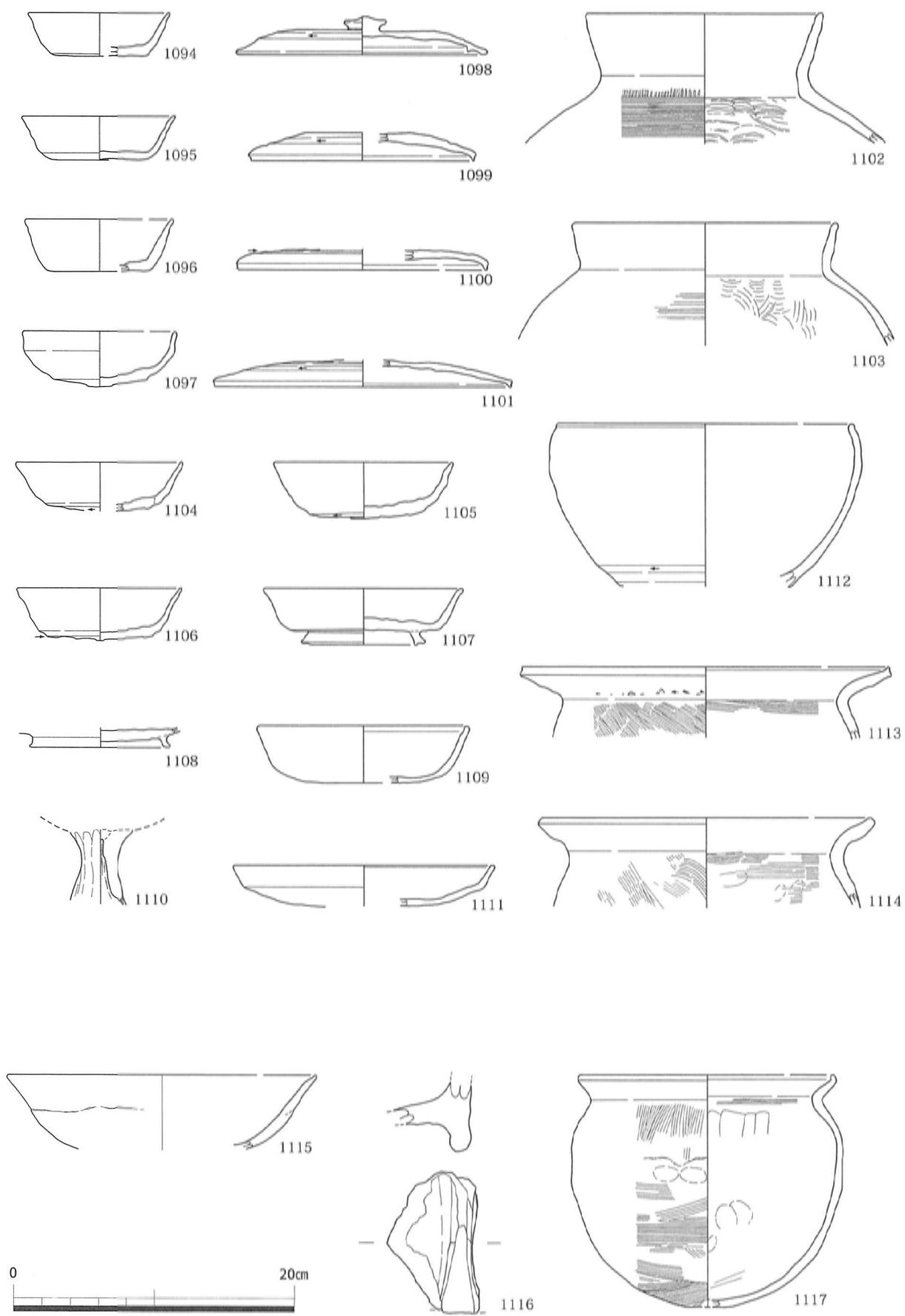


图 175 古代遺構出土土器 (2)

中央北区のうち西半部は、東側に比べて地山面がやや低いことから、遺物包含層や遺構面について削平の影響が少なく、遺構の残存状況が良好である。前述した建物の柱穴のほか、土坑や溝が検出され、多くの一括遺物が出土した。東半部と異なり、人為的に掘削された遺構が多く、自然流路などを利用した遺構は少ない。ただし、西半部のうち南半部に関しては、遺構の広がりは見られない。

古代集落の内部で、廃棄土坑が検出されている。建物と重複するものもあるが、同時に存在したものと考えられ、建物との位置関係を意識した配置となっている。以下、主要な遺構について述べる。

土坑910151 (図176、図版80)

中央北区の北西側にあたる、F区の南半部で検出された。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。古代集落の南端部に位置している。掘立柱建物45と重複関係があり、土坑の方が新しい。また、土坑910151が切っている溝より掘立柱建物45が新しいことから、重複関係の中では、土坑910151が最も新しい遺構ということになる。周囲では、ピットが検出されているため、他の掘立柱建物が存在した可能性があり、それと関連する遺構ということもできる。ただし、建物の復原ができないことから、現状では、単独につくられた土坑と考えられる。

平面形は、やや不整形の楕円形を呈している。検出面で、長径約2.5m、短径約1.3m、深さ20～30cmを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土が主体である。遺物が多く出土しており、一気に埋められた状況である。性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑になったものと考えられる。

出土遺物のうち、図化できたものを図176に示す。1118は、完形品の須恵器杯蓋である。今回の調査で、完形品が出土する例はあまりない。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。1119・1120は、須恵器杯身

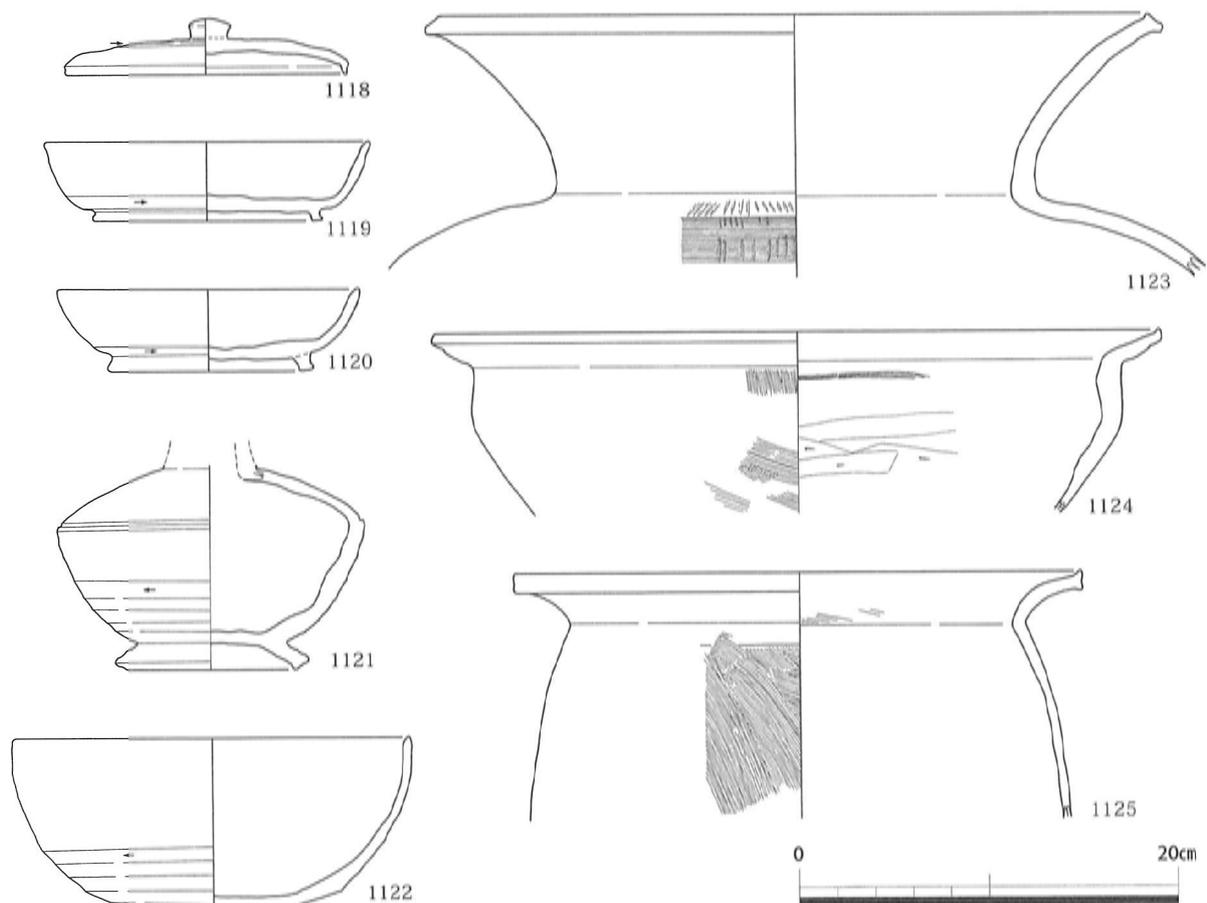


図176 土坑910151出土土器

で、高台が付くものである。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。1119と1120は、法量がほぼ同じであり、同じ規格でつくられたものといえる。1121は、須恵器壺で、高台が付くものである。頸部より上を欠損している。肩部と高台部の一部に、灰がかぶっている。溶着痕が見られる。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。1122は、須恵器鉢である。やや焼成が不良であり、生焼けの状態である。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。1123は、比較的大型の須恵器甕の口縁部である。口縁は大きく開く。体部外面は、タタキ調整の後に回転カキ目が施されている。細かい時期決定はできないが、奈良時代のものといえる。1124は、土師器鍋の上半部である。底部付近を欠損している。外面には、上半は縦方向、下半は横方向のハケ調整がみられる。内面には、横方向のヘラケズリ調整が施されている。平城宮Ⅲ～Ⅴの時期と考えられ、他の遺物より若干新しい。1125は、土師器甕の上半部である。口縁部は、強く外反する。体部外面には、斜め方向のハケ調整がみられる。平城宮Ⅰ～Ⅲの時期と考えられる。この他に図化できなかったが、図版80-1446の土師器皿が見られる。内面の口縁部から体部にかけては放射暗文、見込みには螺旋状暗文が認められる。内面と断面は黒色を帯びている。平城宮Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。

1124の土師器鍋や1446の土師器皿の時期がやや新しいが、おおむね平城宮Ⅰ～Ⅲの時期の遺物が主体であるといえることができる。

土坑910001 (図177～179、図版24、81)

中央北区の北西側にあたる、F区の北半部で検出された。古代集落の北端部に位置しており、掘立柱建物36から南へ約1.5m離れている。また、掘立柱建物37から東へ約1.5m離れている。掘立柱建物36と37は、主軸方向が異なるため、同時に存在した建物かどうかははっきりしないが、いずれの建物にも近接しており、重複関係がない。このため、土坑910001とこれらの建物は、同時に存在した可能性があり、関連のある施設といえることができる。さらに土坑の南側には掘立柱建物40、東側には掘立柱建物39が、やや離れてつくられており、土坑910001を取り囲むかたちで建物が配置されている。この配置にどのような意味があるのかは不明であるが、集落の中心部分に近い位置で、遺物が多く出土した土坑が建物と重複せずに存在していることは、特徴的といえる。他の土坑や溝との重複関係もない。

全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。古代の遺物包含層はみつかっておらず、中世の遺物包含層除去面で検出されている。このため、中世の整地により、古代の遺物包含層が削平されていることがわかる。

平面形は、南北方向がやや長い楕円形を呈している。検出面で、長径約4.8m、短径約3.2m、深さ約40cmを測る。底部は平坦である。埋土は、灰黄褐色粘質土が主体で、焼土や炭化物を多く含む。遺物が多く出土しており、一気に埋められた状況である。埋土の中に、非常に薄手で、細かい土師器の破片が多量に含まれており、部分的には層を形成している状況であった。破片のため、形を復元することはできなかったが、やや大きめの破片の復元により、かろうじてこれらが、製塩土器の破片であることがわかった。このため、製塩土器も多く廃棄されていることがわかる。さらに窯壁が溶着したものや、変形した須恵器などがみられることから、付近に須恵器窯が存在することが推測される。ただし、地形的には、調査地付近で須恵器窯などの立地に合う場所は特定できない。特に特徴がみられないことから、土坑の性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑になったものと考えられる。

出土遺物のうち図化できたものを図178・179に示す。須恵器を図178、土師器を図179に分けている。全体の傾向として、須恵器の方が比較的出土量が多い。図178-1126～1128は、須恵器杯身であ

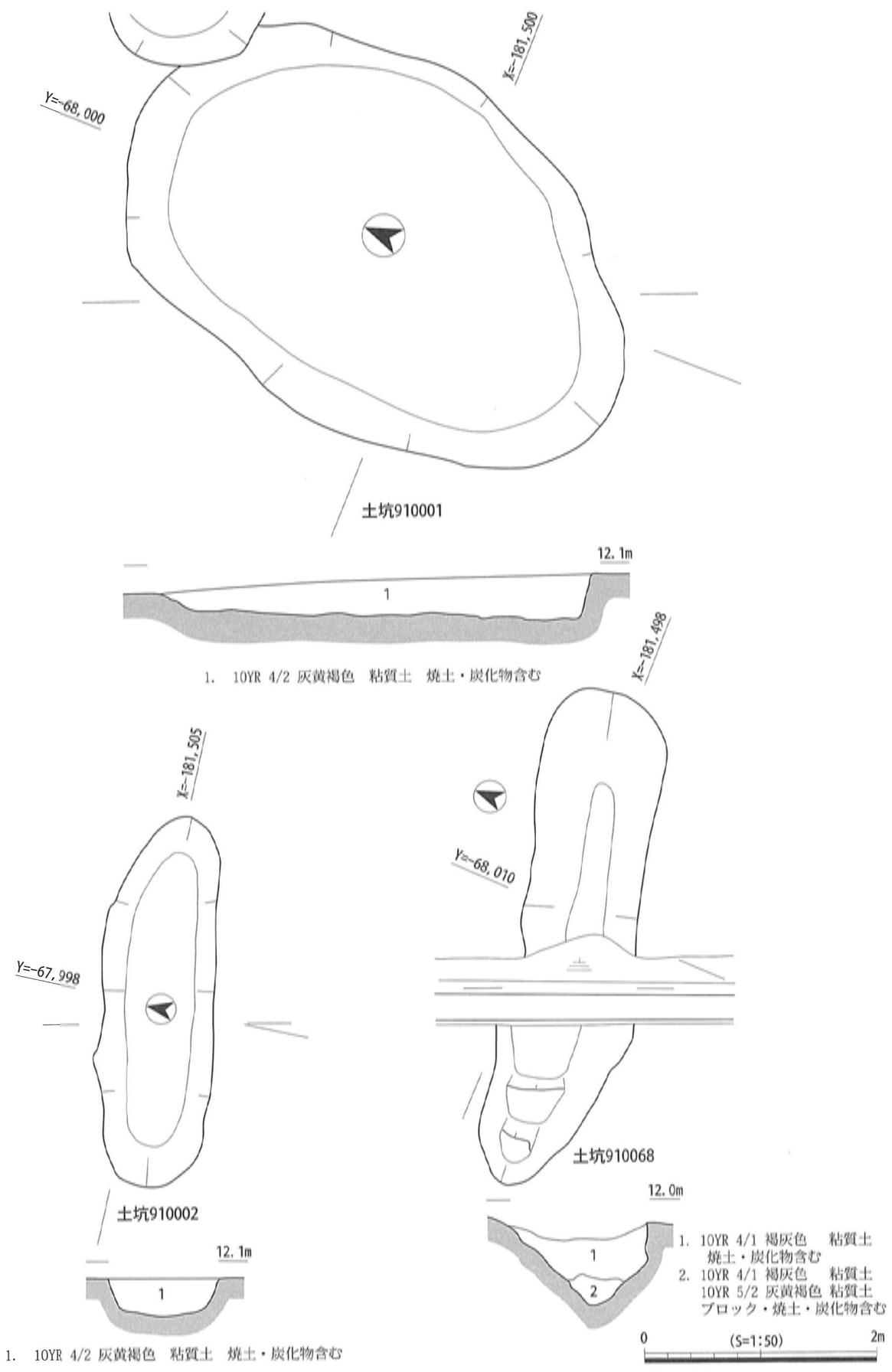


图177 土坑平・断面图

る。1126は完形品で、たちあがりを持つものである。1127は、ほぼ完形品で、たちあがりを持たないものである。体部外面の半分に灰をかぶっている。1128は、ほぼ完形品で、たちあがりを持たないものである。いずれも飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1129は、須恵器杯身で、高台が付くものである。体部外面の一部に灰をかぶっている。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1130～1132は、須恵器杯身である。1130は、たちあがりを持つものである。底部外面に、ヘラ記号と考えられる「|」が見られる。1131は、たちあがりを持たないものである。やや焼成が不良であり、生焼けの状態である。1132は、ほぼ完形品で、たちあがりを持たないものである。いずれも飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1133は、須恵器高杯の脚部である。小型品である。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1134は、須恵器高杯の蓋である。ほぼ完形品で、かえりを持つものである。外面の一部に灰をかぶっている。溶着痕が2ヶ所見られる。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1135は、須恵器高杯の杯部であり、脚部以下を欠損している。焼成時の口縁部の歪みが大きい。脚部の欠損部では、破損部分を打ち欠いており、再加工している。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1136は、須恵器高杯の杯部であり、脚台部以下を欠損している。底部の外面の一部に灰をかぶっている。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1137は、須恵器高杯の脚部であり、杯部を欠損している。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。

1138は、須恵器横瓶である。口縁部は、回転ナデ調整でつくられている。頸部の一部に灰がかぶっている。体部外面は、格子目タタキの後に回転カキ目が施されている。体部内面には、同心円タタキが見られる。体部外面の一部に灰がかぶっている。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1139～1143は、須恵器平瓶である。1139は、やや大型品であり、口縁部が大きく開く。底部を欠損している。天井部上面には、把手にかわる、粘土を丸めて扁平にしたボタン状のものを貼付している。頸部内面と体部上半に自然釉が付着している。体部に溶着痕が認められる。1140は、口縁部がほぼ直立している。底部を欠損している。天井部はやや丸みを帯びているが、把手などはつけられていない。1141は、口縁部を欠損している。頸部内面と体部上半に自然釉が付着している。天井部はやや丸みを帯びているが、把手などはつけられていない。1142は、やや扁平な形状をしている。頸部から口縁部を欠損している。頸部内面と体部上半に灰をかぶっている。1143は、やや小型品で、天井部は丸みを帯びている。頸部から口縁部を欠損している。体部にわずかに灰をかぶっている。いずれも、飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。1144は、やや大型の須恵器壺の上半部である。口縁端部はやや内湾する。口縁端部外面には、ヘラ状工具による刺突文が連続して付けられている。口縁部外面の中央部には、細い突帯がつけられており、その上にはヘラ状工具による刺突文が綾杉状に巡っている。さらに、細い突帯の下には波状文が巡る。体部外面は、タタキ調整の後に回転カキ目が施されている。体部内面には、同心円タタキが見られる。時期ははっきりしないが、飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。

図179-1145・1146は、土師器甕の上半部である。1145は、口縁があまり広がっていないものである。体部外面には、縦方向のハケ調整が施されている。外面に煤が付着している。1146は、口縁が強く外反しているものである。口縁端部は、面をなしている。体部外面には、縦方向のハケ調整が施されている。いずれも、飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1147・1148は、土師器把手付甕の上半部で、底部は欠損している。いずれも口縁端部は、面をなしている。法量がほぼ同じであり、同じ規格でつくられたものといえる。1147は、1148に比べて、口縁部の外反はやや弱い。体部外面には、縦方向のハケ調整がみられる。これに対し、体部内面では、横方向と斜め方向のハケ調整がみられる。把手が横に広がる。1148は、体部外面に、縦方向の細かいハケ調整が施されている。把手は、やや上向きにつけられている。

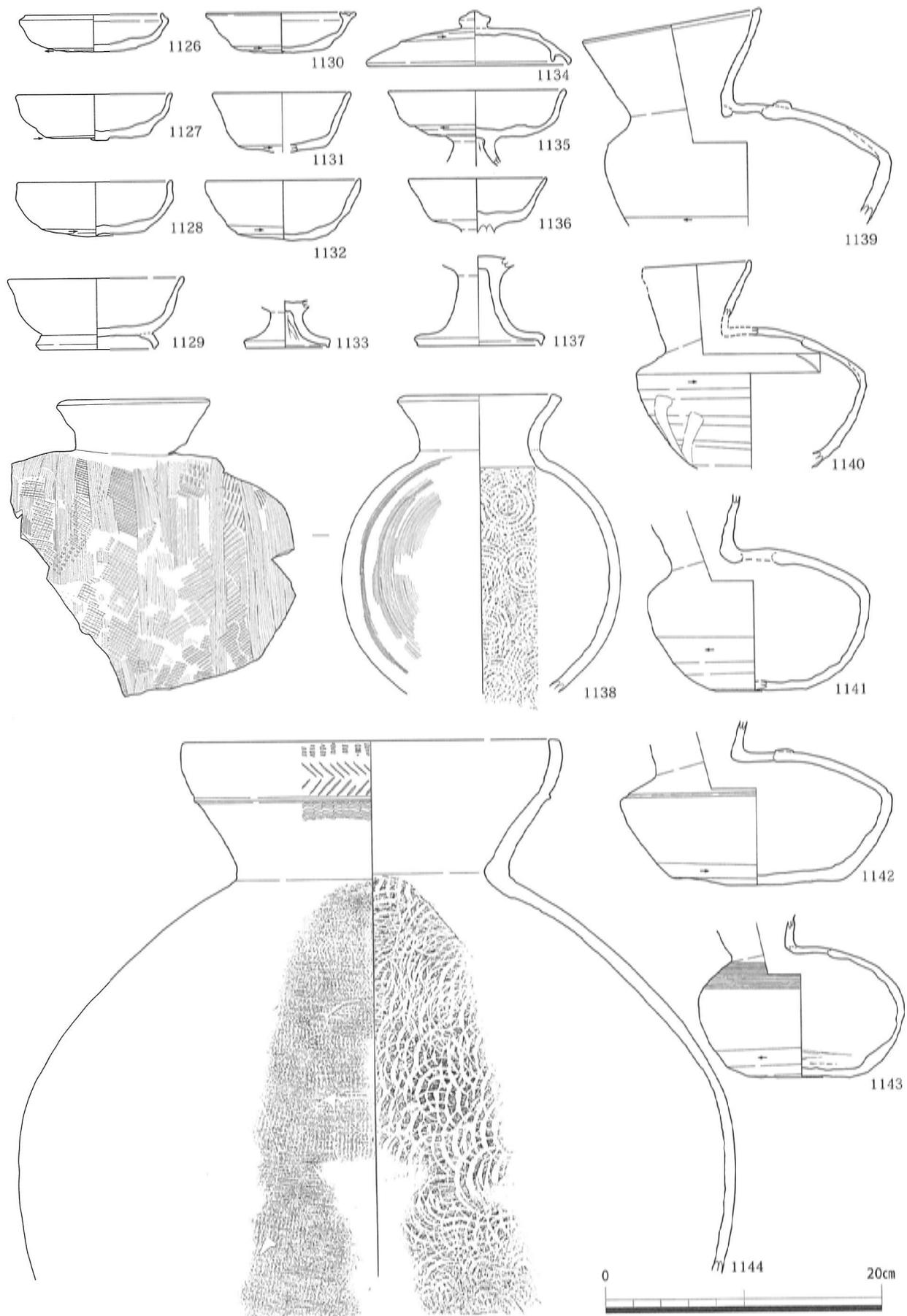


图 178 土坑 910001 出土土器 (1)

いずれも、飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1149～1151は、土師器杯身である。1149は、やや小型品で、内面に放射暗文が認められる。橙色を呈しており、化粧土を塗布している。1150は、内面に放射暗文が見られる。橙色を呈しており、化粧土を塗布している。1151は、やや器高が高いもので、内面にヘラミガキ調整が見られる。いずれも、飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1152は、土師器鉢である。外面の上半部は、横方向のヘラミガキ調整が施されており、下半部は指頭圧痕が見られる。内面には、螺旋状暗文と放射暗文が認められる。橙色を呈しており、化粧土を塗布している。飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。

時期不明のものや新しい時期のものも少し含まれているが、おおむね飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期の遺物が主体

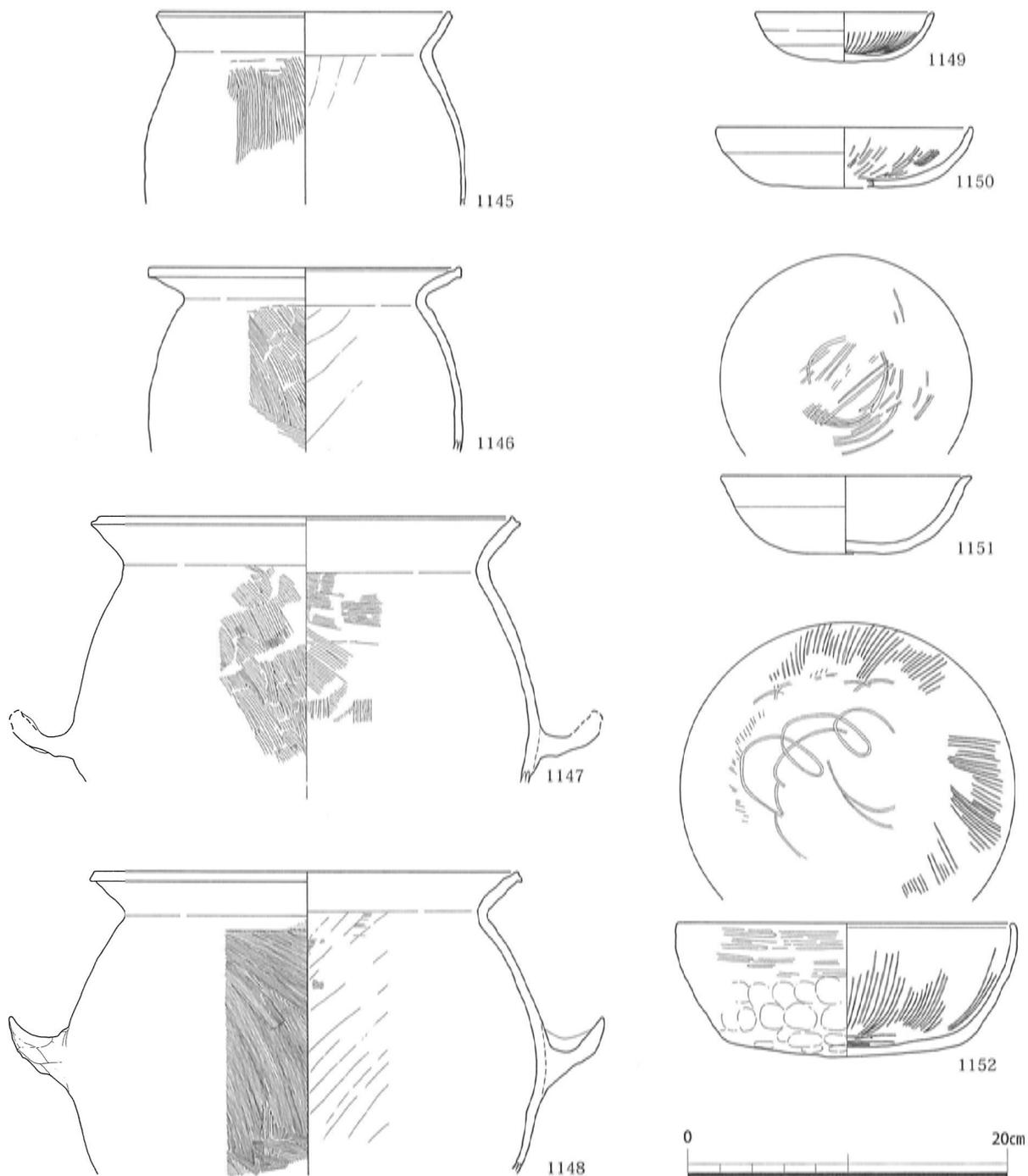


図 179 土坑 910001 出土土器 (2)

ということが出来る。このため、土坑910151より古い時期の一括遺物であり、古代集落の存続時期をこの時期を中心とした時期と考えることができる。

土坑910002 (図177、180、図版24、82)

中央北区の北西側にあたる、F区の中央部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、掘立柱建物41の北側に隣接している。北側の柱通りに平行してつくられていることから、なんらかの関係がある可能性が考えられる。また、掘立柱建物40と重複関係があるが、柱穴で切り合い関係がないことから、新旧関係ははっきりしない。

平面形は、東西方向が長い長楕円形を呈しており、検出面で、長径約3.2m、短径約0.9m、深さ約30cmを測る。底部は、ほぼ平坦である。埋土は、灰黄褐色粘質土が主体で、焼土や炭化物を多く含む。遺物が多く出土しており、一気に埋められた状況である。土坑910001と似た状況である。ここでも埋土の中に、製塩土器と考えられる、非常に薄手で細かい土師器の碎片が、層を成して堆積している状況が見られた。ただし、層状に見えるのは、埋土の単位であり、自然堆積ではない。特に特徴がみられないことから、本来の土坑の性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑になったものと考えられる。

出土遺物のうち、図化できたものを図180に示す。全体の傾向として、土坑910001と同様に、須恵器の方が比較的出土量が多い。図180-1153は須恵器杯蓋で、つまみ部を欠損している。内面にかえりのあるものである。外面に灰をかぶっている。飛鳥Ⅲの時期と考えられる。1154は、須恵器杯身で、高台の付くものである。やや小型品である。飛鳥Ⅲの時期と考えられる。1155は、ほぼ完形の須恵器杯身で、高台の付くものである。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。包含層出土品と接合したことから、混入品の可能性もある。1156は、土師器甕の上半部である。口縁部がやや外反するものである。体部外面には、縦方向のヘラケズリ調整が施されている。外面に煤が付着する。細かい時期ははっきりしないが、飛鳥時代のものと考えられる。1157は、土師器甕の上半部である。口縁部が強く外反するものである。口縁端部は、面をなしている。体部外面には、縦方向の細かいハケ調整が施されている。平城宮Ⅰ～Ⅲの時期と考えられる。1158は、土師器甕の上半部である。体部の中央部で、凹線が2条巡っている。細かい時期ははっきりしないが、古代のものである。

やや時期差が認められるが、遺物包含層からの混入品も見られることから、平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えることができる。土坑910001と類似するが、やや新しい時期のものといえる。

土坑910059 (図180、図版82)

中央北区の北西側にあたる、F区の中央部で検出された。古代集落の中央部に位置しており、掘立柱建物40と重複関係があり、掘立柱建物40の方が新しい。溝状を呈しており、東側はE区とF区の間で未調査部分に広がっていることから、全容は不明である。検出面で、長さ約5.0m、幅約2.4m、深さ約20cmを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土が主体である。土坑の性格は不明である。遺物量は少なく、図化できたものは2点である。図180-1159は、須恵器杯蓋である。内面にかえりのあるものである。1160は、須恵器杯身である。やや小型品である。いずれも、飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。

土坑910068 (図177、180、図版24、82)

中央北区の北西側にあたる、F区の中央部で検出された。古代集落の北端部に位置している。溝状を呈しており、東西方向にのびる。東端部で溝と重複しているが、新旧関係ははっきりしない。同一の溝の可能性もある。検出面で、長さ約4.2m、幅約0.8m、深さ約70cmを測る。西方向に向かって下がっている。埋土は、褐灰色粘質土が主体で、焼土や炭化物を多く含む。一気に埋められた状況で、土坑

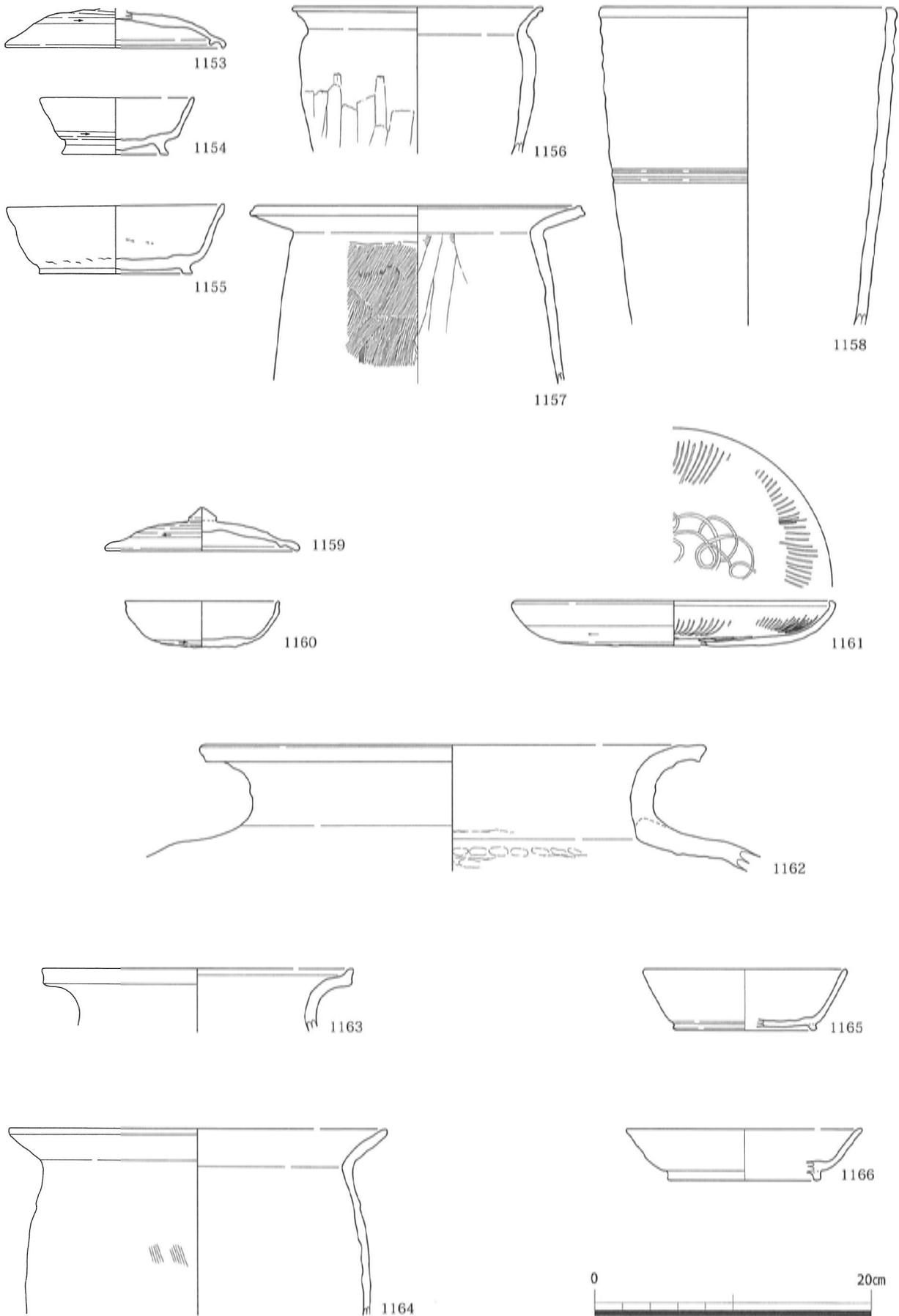


图 180 古代遺構出土土器 (3)

910001や910002と似ている。ここでも埋土の中に、製塩土器と考えられる、非常に薄手で細かい土師器の碎片が、層を成して堆積している状況が見られた。土坑の性格は不明であるが、最終的には廃棄土坑として埋められている。遺物量は少なく、図化できたものは1点である。図180-1161は土師器皿で、内面には螺旋状暗文と放射暗文が認められる。橙色を呈しており、化粧土を塗布している。飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。

このほかに、古代集落から離れた中央北区の南東側にあたるE区南半部でも、出土量はわずかであるが、古代の遺物が見られる。図化できたものは2点である。図180-1162は、ピット250323から出土したもので、須恵器壺の口縁部である。口縁部の内面と肩部外面に自然釉がかかっている。時期ははっきりしないが、古代のものである。遺物量が少ないため、混入品の可能性もある。1164は、土坑250339から出土したもので、土師器甕の上半部である。口縁が広がっている。体部外面には、縦方向のハケ調整が見られる。平城宮Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。

これらの出土地点は近接しており、後述するが、E区南半部は中世の遺構が展開する部分にあたる。いずれも出土遺物は少なく、削平をうけているため、詳細ははっきりしない。これらの遺構からは、古代の遺物が検出されているが、出土状況を見ると、古代の遺構というよりは、混入品と考える方が妥当であると考えられる。古代の遺構が存在した可能性は否定できないが、この部分から出土した遺物として紹介するのみとする。

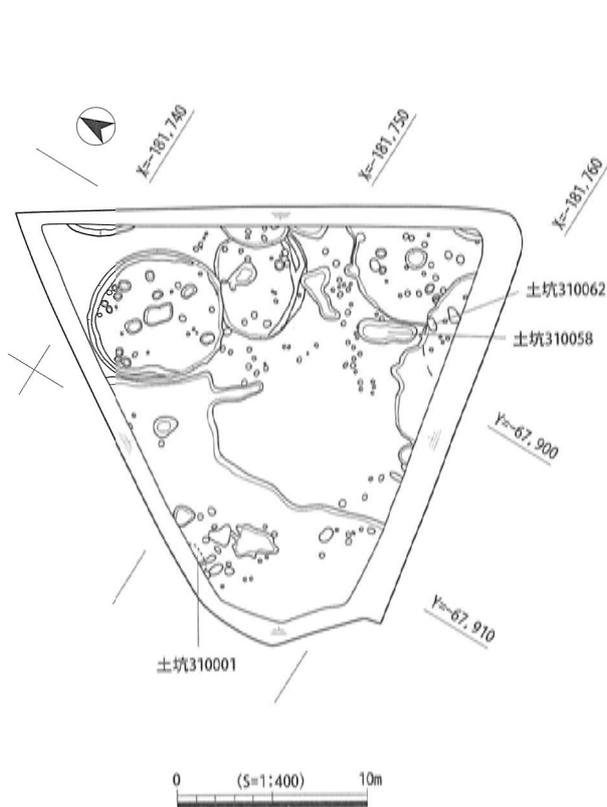


図181 O区古代遺構分布図

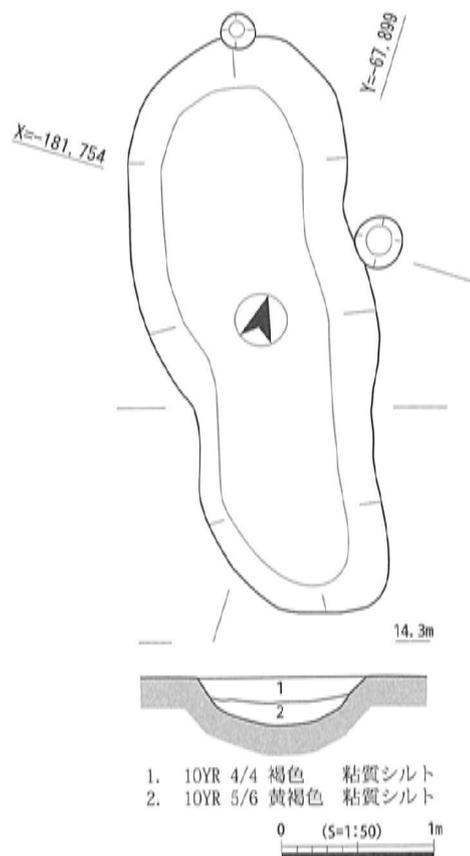


図182 土坑310058平・断面図

5. 中央南区・南区

弥生集落が展開する中央南区では、古代の遺構や遺物はほとんど検出されていない。中世以降の整地により、遺物包含層も失われており、前述したように、中世の遺物包含層除去面が地山面であり、弥生時代の遺構面となっている。地山面において、古代の遺構が検出されないことから、削平により失われたわけではなく、本来、古代の遺構はこの部分では存在していなかったものといえる。

その中で、中央南区の中央西側にあたるO区において、わずかに古代の遺構が検出されている。

土坑310001 (図180、181、図版24)

中央南区のO区の西端部で検出された。弥生時代の大溝1の流路上に位置しており、廃絶時に人為的に埋められた部分の上層で、奈良時代の須恵器が多く出土した。平面形は不定形であり、廃棄土坑と考えられる。新たに掘削されたものというよりは、大溝1を埋めた後のくぼんだ部分を利用したものと考えられる。形を復元することはできなかったが、大型の須恵器甕の破片がまとまって廃棄された状態で検出されている。この須恵器とともに出土したのが、図180-1163の須恵器壺の口縁部である。口縁端部が、やや上方に向かってつまみあげられている。飛鳥Vの時期と考えられる。

土坑310062 (図180、181、図版82)

中央南区のO区の南東端部で検出された。竪穴住居17と重複している。平面形は楕円形を呈しており、長径約80cm、短径約40cm、深さ約10cmを測る。小型の土坑で、性格は不明である。遺物量は少ないが、図180-1165の須恵器高台付杯身が出土している。平城宮IV～Vの時期と考えられる。

土坑310058 (図180、182)

中央南区のO区の南東端部で検出された。土坑310062の北西に隣接する。平面形は、長楕円形を呈しており、長径約3.0m、短径約1.2m、深さ約20cmを測る。埋土は、褐色粘質シルトが主体である。遺物量は少ないが、図180-1166の須恵器高台付杯身が出土している。平城宮III～IVの時期と考えられる。

一方、南区では調査区を横切る大溝から、古代の遺物が出土している。遺構面からは古代の遺構は検出されておらず、遺物包含層からも目立った遺物は出土していない。調査区内では、建物跡などの生活の痕跡はみつからないが、大溝内から遺物が出土していることから、近接した部分に存在した可能性は考えられる。

大溝5 (図183、184、図版83)

南区の北端部にあたる、V区の北西端部とX区の北西端部で検出された。調査区を横切るかたちであり、ほぼ南北方向にのびている。ただし、V区の北西端部では、現在の水路の切り替えなどもあって、はっきりとは検出できなかった。現在でもこの付近に水路がつくられており、耕作地の境界にもなっていることから、本来は自然流路が流れていたものといえる。現在では、T区とV区を分ける位置に水路が流れており、やや屈曲しているが、大溝5は、これより西側にずれており、ほぼまっすぐにのびている。水路は、南から北へ流れている。

確認された部分で、長さ約45m、幅3～6m、深さ約70cmを測る。全体に上部は削平されているため、底部付近のみの検出である。底部は平坦である。自然流路を利用しており、肩部付近を人為的に成形したものと考えられる。X区の北西端部で二股に分かれているが、西側が本流であり、南北方向にのびている上、規模も大きい。東側は、北北東へのびているが、確認された部分で、長さ約10m、幅約2m、深さ約60cmを測り、断面はV字状を呈する。ただし、北側にあたるV地区では、検出されていないこと

から、全容ははっきりしない。

埋土は、大きく3層に分かれる。上層は、黒褐色シルトが主体で粗砂を多く含む。中・下層は、にぶい黄褐色シルトが主体である。中層に礫、下層に細砂が含まれている。下層に細砂が混じっており、粘土が含まれていないことから、当初は流水状態であったことがわかる。北側では、暗褐色粘土層が見られる部分もあるため、よどんだ状況の時期もあったことが推測される。埋土は自然堆積であり、人為的に埋められた状況は見られない。

遺物量は少ないが、かたちを復元できるものが比較的多い。図化できたものを図184に示す。1167は、須恵器杯身である。底部を欠損する。焼きが甘く、全体に白っぽい。飛鳥IV～Vの時期と考えられる。1168は、須恵器高台付杯身の底部高台部分である。平城宮V～VIの時期と考えられる。1169は、ほぼ完形の土師器杯身である。平城宮Vの時期と考えられる。1170～1172は、内黒の黒色土器碗である。1170は、内面の見込みに平行ヘラミガキ、上半に横方向のナデ調整が見られる。口縁部は、強い横ナデ調整が施されている。外面は、平滑ナデ調整で成形されている。1171は、内面の見込みに平行ヘラ

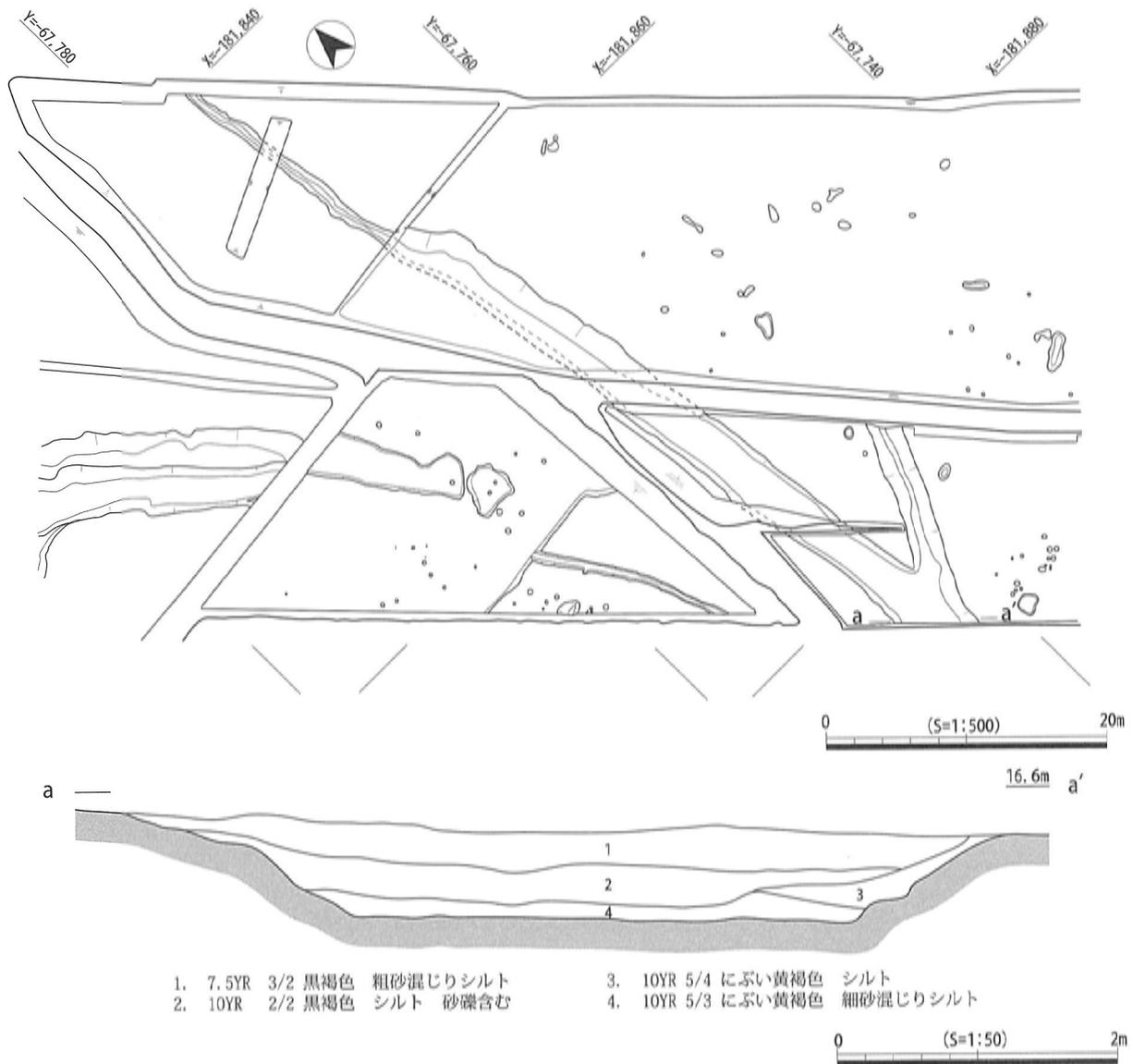


図183 大溝5平・断面図

ミガキ、上半に横方向のヘラミガキ調整が見られる。口縁部は、強い横ナデ調整が施されている。外面は、横ナデなどの平滑な調整がなされている。高台内は、ナデ調整で成形されている。1172は、内面の上半に横方向のヘラミガキ調整が見られる。外面には、指頭圧痕が見られる。いずれも、平安時代のものと考えられる。1173は、土師器高杯の脚柱部である。杯部と脚台部は欠損する。面取りは12面である。平城宮Vの時期と考えられる。1174～1176は、土師器甕の口縁部である。1174は、やや小型品である。1175は、口縁がやや広がる。体部外面に縦方向の粗いハケ調整が見られる。1176は、口縁端部がややつまみあげられている。体部外面に斜め方向の粗いハケ調整が見られる。いずれも平城宮V～VIの時期と考えられる。1177は、土師器甕の上半部である。口縁が強く開いている。体部外面には、縦方向の粗いハケ調整が施されている。内面には、横方向の粗いハケ調整が見られる。熱を受けているため、赤く変色している。平安時代のものと考えられる。

遺物の時期差が認められるが、新しいもので平安時代の黒色土器などが見られることから、この時期まで存続していたものと考えられる。特に、黒色土器はあまり摩滅をうけておらず、完形に近いものも見られることから、あまり遠くからもたらされたものとはいえない。このため、整地などにより動いてきたものではなく、ほぼ原位置を保ったものといえることができる。

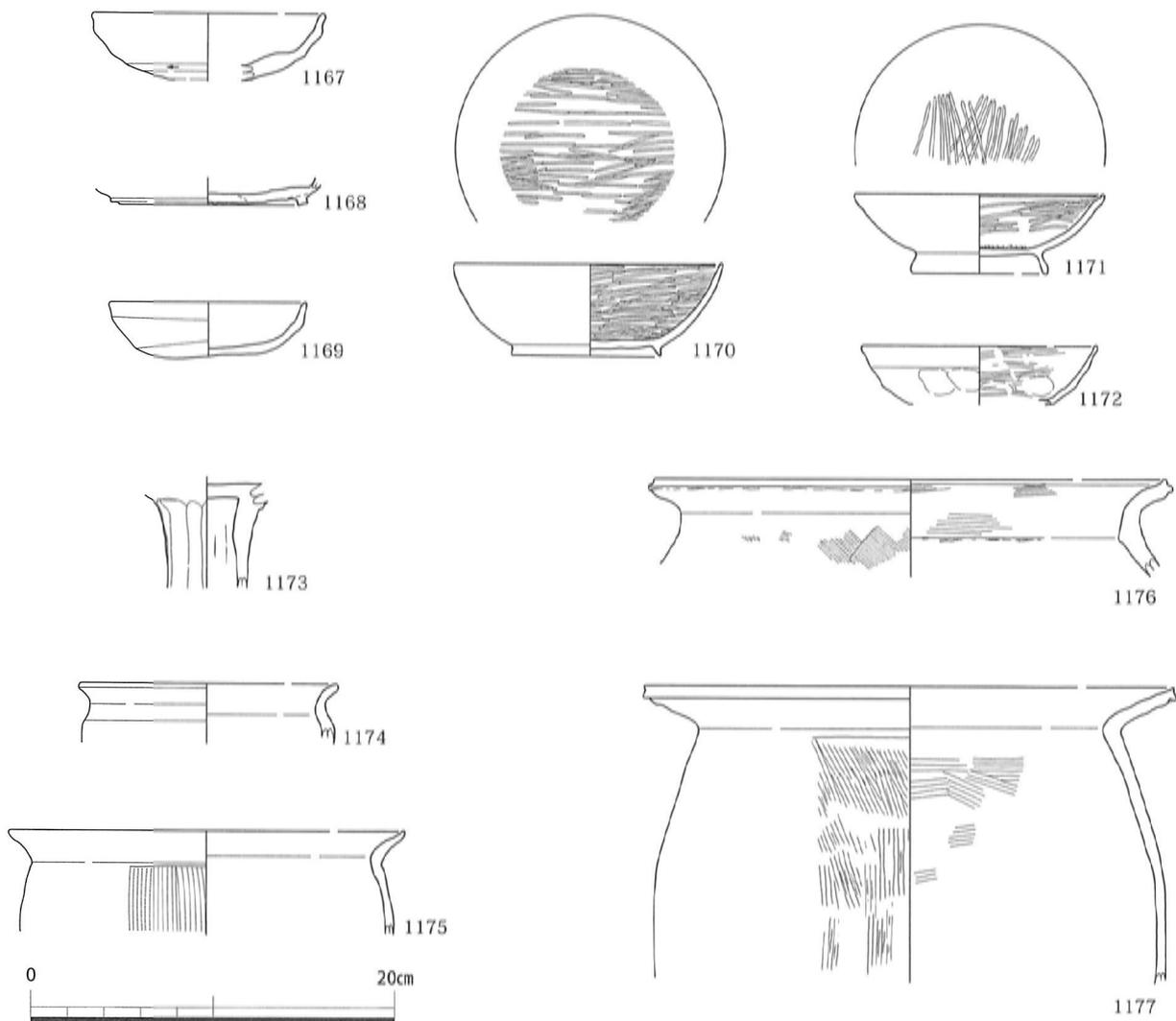


図 184 大溝5出土土器

6. 包含層出土遺物

古代の集落および周辺の遺構については、前項までで述べた。ここでは、集落部分の遺物包含層出土遺物を中心に、周辺の遺物包含層出土遺物や後世の遺構から出土した混入品について扱うこととする。

遺物包含層出土遺物は、完形品やそれに近いものはほとんどなく、破片の状態のものが多い。基本的には、集落部分である、中央北区のF区やE区北半部からの出土量が多い。E区では北半部に限らず、南半部でも比較的多く出土している。この地区のみで、出土量の大部分を占めており、集落が営まれていたことを裏付けているものといえる。逆に考えると、この部分以外では、集落や建物などはつくられていなかったということが出来る。以下、出土地点毎に図化できた遺物について述べる。

図185は中央北区の北西部のF区から出土したものである。いずれも遺物包含層から検出されており、古代集落に伴うものと考えられる。1178～1180は、須恵器杯身である。1178は、遺物包含層上層から出土したものであるが、ほぼ完形品で、あまり摩滅していない。1179は、遺物包含層下層から出土したものであるが、完形品である。1180は、遺物包含層下層から出土したものである。これらの須恵器杯身は、平城宮Ⅱ～Ⅲの時期と考えられる。1181は、緑釉陶器杯である。やや小型品で、底部外面に糸切り痕を残し、円盤状高台になるものである。外面に薄く施釉が認められる。平安Ⅰの時期と考えられる。1182は、土師器台付皿である。平城宮Ⅰの時期と考えられる。1183は、小型の須恵器平瓶であり、口縁部を一部欠損するのみである。外面に灰をかぶっている。平城宮Ⅴの時期と考えられる。1184は、須恵器こね鉢の底部である。生焼けであり、全体に白っぽい。底部外面には、文様はみられない。平城宮Ⅳの時期と考えられる。1185は、須恵器甕の口縁部である。生焼けであり、全体に白っぽい。口縁部内面に、ヘラ記号と考えられる、左下がりの線刻がつけられている。平城宮Ⅳの時期と考えられる。1186は、須恵器甕の上半部である。口縁部がややゆがんでいる。口縁部内面に、ヘラ記号と考えられる、右下がりの線刻がつけられている。平城宮Ⅳの時期と考えられる。同様のヘラ記号がつけられていることから、両者は同じ窯で焼かれた可能性がある。1187・1188は、土師器竈である。1187は、焚き口の底部分である。1188は、前面焚き口の右側裾部である。外面はハケ調整が施されており、内面には指頭圧痕が多く見られる。いずれも古代のものであるが、同一個体かどうかは、はっきりしない。また、図版84-1447は、須恵器平瓶の下半部である。底部外面全体に、窯体片が溶着しているほか、側面にも他の個体の溶着が見られる。上からの自然釉が流れた状況で残っている。飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられる。製品として使われたものとは考えにくいことから、近い部分に須恵器窯があり、そこからもたらされた可能性が高い。1448は、土師器真蛸壺の把手部である。釣鐘形を呈するものである。円筒状の一端をつまんで把手部を作っている。詳細な時期ははっきりしないが、古代のものである。

これらの遺物は、時期差が若干あるものの、おおむね平城宮Ⅲ～Ⅳの時期におさまるものということが出来る。集落内の土坑910001や土坑910002が、飛鳥Ⅲ～Ⅴの時期と考えられることから、遺物包含層の時期がやや新しくなり、古代集落の中で2時期のまとまりが存在することがわかる。

中央北区の北東部のE区北半部で検出されたもののうち、下層の遺物包含層からの出土品を図186・187に示す。図186-1189は、須恵器杯身である。飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1190は、須恵器高台付杯身である。飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1191は、須恵器高台付杯身である。外面に薄く灰がかぶっている。平城宮Ⅰ～Ⅱの時期と考えられる。1193は、須恵器高台付杯身である。飛鳥Ⅲ～Ⅳの時期と考えられる。1194は、須恵器高台付杯身である。飛鳥Ⅳ～Ⅴの時期と考えられる。1195・1196は、須恵器杯蓋である。1195は、外面に灰がかぶっている。口縁端部に溶